

聖書の基本 聖書の重要な教理 第4部 A

キリスト論 イエス・キリストの研究

(ichthys.com でオンラインでも入手可能)

ロバート・D・ルギンビル博士著

受肉された神の言葉、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストのユニークな御姿と御業。

万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子(イエス・キリスト)にあって造られたからである。これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。(コロサイ1章16-17節)

内容

I. イエス・キリストというお方	3
1. イエス・キリストは真に神です:	3
2. イエス・キリストは真の人間:	14
3. イエス・キリストは真に唯一無二です:	30
4. イエス・キリストの名前は、その完全な人格と完全な御業を反映しています:	36
5. イエス・キリストの生涯	56
II. イエス・キリストの救いの御業	215
1. 救い主の必要性 :	215
2. イエス・キリストの身代わりの死:	217
3. 無制限の贖罪:	219
4. キリストの血:	224
5. キリストの霊的な死 :	228
6. 償い:	248
7. 贖い:	253
8. 義認 :	258
9. 和解 :	263
10. 救いをもたらしたキリストの御業の要約 :	267

はじめに：神の言葉はその詳細のすべてにおいても、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストという生ける神の言葉についてですから、この種の研究は、必然的に完全なものにはなり得ません。聖書と、その縦糸と横糸を貫く完全に統一した基本的真理のタペストリーをよりよく理解すればするほど、イエス・キリストが聖書の理由であり、聖書のすべては神の言葉であるイエス・キリストについてであるという、この一つの本質的真理がより鮮明になります([ヨハネ 1 章 1-14 節](#))。ですから、この研究の目的は、私たちの救い主、その唯一無二のお方、そして私たちに代わってなされた救いの御業に関する聖書の主要なテーマを説明することに限定されなければなりません。イエスは真理であり、道であり、命であり([ヨハネ 14 章 6 節](#))、聖書全体の証言の基本的な本質は、イエスについての神の啓示であり、イエスがどのようなお方であり、私たちのためにご自分のいのちそのものを捧げてくださったことなのです([黙示録 19 章 10 節](#))。すべてのものは、私たちの主イエス・キリストによって、また彼のために造られました([コロサイ 1 章 15-18 節](#))。主は、被造物の歴史のすべてに対する神の計画全体の礎石なのです([エペソ 3 章 11 節](#))¹。神に立ち返る全人類の救いと、(人間を支配していた)悪魔に対する勝利は、私たちのために主がご自身を犠牲にしてくださったことによって勝ち取られたものであり、他のいかなる方法でも勝ち取ることはできませんでした([コロサイ 2 章 14-15 節](#))。

ですから、イエスは私たちの究極の希望であり([コロサイ 1 章 27 節](#))、最高の愛であり([ピリピ 1 章 21 節](#))、信仰の唯一の対象なのです([使徒行伝 4 章 12 節](#))。イエス・キリストは私たちのいのちです([コロサイ 3 章 4 節](#))。この方においてのみ、私たちは来るべき復活と永遠のいのちに完全に与ることができるのです([第一ペテロ 1 章 3-4 節](#)、[テトス 3 章 6-7 節](#)参照)。イエスがおられなかったら、私たちは全人類とともに失われていたことでしょう。イエスがいなければ、人類の歴史も、私たちの人生も、本質的に目的もなく無意味なものになってしまいますが、イエスにあって、私たちは永遠のいのちと大きな報いを待ち望んでいるのです([黙示録 22 章 12 節](#))。イエスなしでは、この世は辛く、冷たく、苦しい場所ですが、イエスにあって、私たちは無限の喜びを分かち合います。なぜなら、イエスの花嫁である教会の親密な永遠の一員として、私たちはイエスのために存在し([ローマ 8 章 8-39 節](#); [エペソ 1 章 9-10 節](#); [第一コリント 8 章 6 節](#); [第二コリント 5 章 14-15 節](#); [ガラテヤ 2 章 20 節](#); [コロサイ 1 章 17-20 節](#); [ヘブル 12 章 2 節](#)参照)、永遠にイエスと共にあるからです([ヨハネ 14 章 3 節](#))。私達の肉の誕生の性質は、墮落した全人類と同じく、怒りの子らの死に値するものでしたが、イエス・

¹ パート 5、『サタンの反乱:裁き、回復、そして置き換え』II.1、「人類の歴史における中心的な人物」参照。

キリストの犠牲によって、私たちは罪から贖われ、地上のあらゆる表現や理解を超える輝かしく、素晴らしい永遠を、主人と共に待ち望んでいるのです(黙示録 21-22 章; [ヨハネ 14 章 1-3 節](#)参照)。私たちは神の敵であり、神に認めてもらえるようなものは何もなく、神に捧げるものも何もありませんでした。神は十字架上で私たちにすべてを捧げてくださいました。(ローマ 5 章 8-10 節)。私たちに代わって犠牲となられた、私たちの主であり救い主であられるイエス・キリストという、言葉では言い表せないほど素晴らしい賜物について、神に感謝します([第二コリント 9 章 15 節](#))！

I. イエス・キリストというお方

1. イエス・キリストは真に神です：

私たちの主は、私たちの身代わりとなって死ぬために、真の人間になる必要があったので、その結果、主の真正で衰えることのない神性が、時には虚偽的に、また異端的に否定されることもありましたが、しかし、このような一部の人々の信仰の欠如は、イエスが神であると同時に、人であるという事実を変えるものではありません。キリストの神性を否定する、あらゆる異端や異端者に対する究極の反論手段は、いつものように聖書です。そうでないと考える人々の意見にかかわらず、聖書はキリストの神性を声高に宣言しており、キリストの神性を否定することは、事実上、聖書と矛盾することであることを、公平な観察者は認めざるを得ないからです：

a. 神として、イエスは明確に神と呼ばれています([イザヤ 40 章 3 節](#); [ローマ 1 章 4 節](#); [マタイ 22 章 41-46 節](#), [28 章 19 節](#); [ルカ 1 章 35 節](#), [5 章 20-21 節](#); [ヨハネ 1 章 1-18 節](#), [5 章 18 節](#); [第二コリント 13 章 14 節](#); [コロサイ 1 章 15-20 節](#), [2 章 9 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#)参照)：

ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる。(イザヤ書 9 章 6 節)

「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。(マタイ 23 章 1 節)

(3) 実際、わたしの兄弟、肉による同族のためなら、わたしのこの身がのろわれて、キリストから離されてもいとわれない。(4) 彼らはイスラエル人であ

って、子たる身分を授けられることも、[シキナの]栄光も、もろもろの契約も、律法を授けられることも、[神殿の]礼拝も、数々の約束も彼らのもの、(5)また父祖たちも彼らのものであり、肉によれば[子孫に関する限り]キリストもまた彼らから出られたのである。万物の上にいます神は、永遠にほむべきかな、アアメン。(ローマ 9 章 3-5 節)

(5)キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。(6)キリストは、神のかたちであられたが、[彼がすでに持っておられた]神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、(7)かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、(8)おのれを低くして、死に至るまで、しかも[私たち皆のために]十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ 2 章 5-8 節)

祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現を待ち望むようにと、教えている。(テトス 2 章 13 節)

御子については、[父はこう言われる、]「神よ、あなたの御座は、世々限りなく続き、あなたの支配のつえは、公平のつえである。(ヘブル 1 章 8 節)

イエス・キリストの僕また使徒であるシメオン・ペテロから、わたしたちの神と救主イエス・キリストとの義によって、わたしたちと同じ尊い信仰を授かった人々へ。(第二ペテロ 1 章 1 節)

さらに、神の子がきて、真実なかたを知る知力をわたしたちに授けて下さったことも、知っている。そして、わたしたちは、真実なかたにおり、[神の]御子イエス・キリストにおるのである。このかたは真実な神であり、永遠のいのちである。(第一ヨハネ 5 章 20 節)

わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである。(黙示録 22 章 13 節)([黙示録 22 章 16 節](#)参照)

b. イエスは神として礼拝されています²(参照:[ゼカリヤ 14 章 16-17 節](#); [マタイ 2 章 2](#)

² 上記の新約聖書の節におけるギリシヤ語の「礼拝」は、動詞プロシキネーオ (προσκύνηω)であり、引用されたすべての箇所において、([使徒行伝 10 章 25-26 節](#)、[黙](#)

[節](#), [2 章 11 節](#), [14 章 33 節](#), [28 章 9 節](#), [28 章 17 節](#); [イザヤ 6 章 3 節](#)と[ヨハネ 12 章 41 節](#)を比較, [ヨハネ 20 章 28 節](#); [ヘブル 1 章 6 節](#); [コロサイ 1 章 13-16 節](#)と[黙示録 14 章 7 節](#)を比較):

(50)それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。(51)祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた。〕(52)彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜びをもってエルサレムに帰り、(ルカ 24 章 50-52 章)

すると彼は、「主よ、信じます」と言って、イエスを拝した。(ヨハネ 9 章 38 節)

(9)それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。(10)それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、(11)また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。(ピリピ 2 章 9-11 節)

(11)さらに見ていると、御座と生き物と長老たちとのまわりに、多くの御使たちの声が上がるのを聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍もあって、(12)大声で叫んでいた、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」。(13)またわたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたもの、そして、それらの中にあるすべてのものの言う声を聞いた、「御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」。(14)四つの生き物はアメンと唱え、長老たちはひれ伏して礼拝した。(黙示録 5 章 11-14 節)

c. 創造主であるのでイエスは神です。神が世界を創造されたからです³([ヘブル 1 章](#)

[示録 19 章 10 節](#), [22 章 8-9 節](#)からも明らかのように)英語で「worship(礼拝)」が神に対してのみ使用される「礼拝」という同様の意味を持っています。

³ イエス・キリストは、明らかにされた三位一体の一位格であり、それゆえに常に「神の顔」でした([ヨハネ 12 章 38-41 節](#)の文脈において、[イザヤ書 6 章 1-13 節](#)と[ヨハネ 12 章 41 節](#)を比較してください

[2 節](#), [1 章 10 節](#); 創世記 1-2 章参照):

すべてのものは、これ(すなわち、「みことば」、イエス・キリスト)**によってできた。**できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。(ヨハネ 1 章 3 節)

彼は世にいた。そして、**世は彼によってできた**のであるが、世は彼を知らずにいた。(ヨハネ 1 章 10 節)

(15)御子(すなわち、イエス・キリスト;[13 節](#)参照)は、見えない神のかたちで⁴あって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。(16)**万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。**これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。(17)彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。(コロサイ 1 章 15-17 節) ([ヘブル 1 章 3 節](#)参照)

わたしたちには、父(すなわち、創造の設計者としての父)なる唯一の神のみがいますのである。万物はこの神から出て[生まれ]、わたしたちもこの神に帰する。また、唯一の主イエス・キリスト(すなわち、創造の代理人としての御子)のみがいますのである。**万物はこの主により**[生まれ]、わたしたちもこの主によって[今生きて]いる。(第一コリント 8 章 6 節)⁵

い)。これらの課題については、このシリーズの第 1 部「神学」で詳しく取り上げています。イエスが旧約聖書に登場したことについては、「聖書の基本:第 1 部:神学」の第 II 章「神の御人格:三位一体」をご覧ください。また、啓示された三位一体のメンバーとしてのイエスの役割については、「聖書の基本:第 1 部:神学」の第 II.C 章「旧約聖書における三位一体」をご覧ください。

⁴ ここで「かたち」と訳されているギリシヤ語の eikon(εἰκών)が、厳密な正確さを表現していることは、同じ書の別の箇所で使用されていることから明らかです。「律法はきたるべき良いことの影をやどすにすぎず、そのものの真のかたち(eikon / εἰκών)をそなえているものではない」:[ヘブル 10 章 1 節](#)

⁵ 旧約聖書では、創造の計画と結果という区分がしばしば曖昧でしたが、新約聖書では明確に区別されています。ヘブル人への手紙の著者が、[詩篇第 102 篇 25-27 節](#)を引用して、私たちの主イエスに当てはめた箇所である[ヘブル人への手紙 1 章 10-12 節](#)を比較してください([ヘブル 1:8 参照](#))。さらに詳しくは、『聖書の基本:第 1 部:神学』の第 II.B.3 項「神の計画における三位一体の役割」をご覧ください。

d. 三位一体の一位格として、イエスは御父と御霊と対等であり、共に永遠です(ヨハネ 5 章 18 節, 17 章 5 節) :

イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、**父**(の名＝父なるお方)と**子**(の名＝子なるお方)と**聖霊**との名(＝聖霊なるお方)によって(eis＝の中に入る)、彼らに[御霊の]バプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。(マタイ 28 章 18-20 節前半)

わたしと父とは一つである」。(ヨハネ 10 章 30 節)

父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。(ヨハネ 17 章 5 節)

霊の賜物は種々あるが、**御霊**は同じである。務は種々あるが、**主**(すなわち、イエス・キリスト)は同じである。働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる**神**は、同じである。(1 コリント人 12 章 4-6 節)

主イエス・キリストの恵みと、(「父」なる)**神**の愛と、**聖霊**の交わりとが、あなたがた一同と共にあるように。(第二コリント 13 章 14 節)

からだは一つ、**御霊**も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。**主**(すなわち、イエス・キリスト)は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの**父なる神**は一つである。(エペソ書 4 章 4-6 節)

イエス・キリストの使徒ペテロから、Pont、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤおよびビテニヤに離散し寄留している人たち、すなわち、**イエス・キリスト**に従い、かつ、その血のそそぎを受けるために、**父なる神**の予知されたところによって選ばれ、**御霊**のきよめにあずかっている人たちへ。恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。(第一ペテロ 1 章 1-2 節)

(4)ヨハネから[小]アジヤにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、やが

てきたるべきかた(すなわち、御父)から、また、その御座の前にある**七つの霊**(すなわち、聖霊)から、(5)また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者、地上の諸王の支配者である**イエス・キリスト**から、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。(黙示録 1 章 4-5 節前半)

e. イエスは神のひとり子であり、この称号は聖書で使われているように、イエスの神性を明らかに示しています(ルカ 9 章 35 節、ヘブル 5 章 5 節、第一ヨハネ 1 章 3 節; 5 章 20 節; 第二ヨハネ 1 章 3 節参照):

イエスはバプテスマをお受けになると、すぐに水から上がられ、見よ、天が開いて、神の御霊が鳩のように下って来て、イエスを照らされるのをご覧になりました。そして、見よ、天から声がして、「これは、**わたしの愛する子**、わたしの心にかなう者である」。(マタイ 3 章 16-17 節)

彼(ペテロが)がまだ話し終えないうちに、たちまち、輝く雲が彼らをおおい、そして雲の中から声がした、「これはわたしの**愛する子**、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。(マタイ 17 章 5 節)([第二ペテロ 1 章 16-21 節](#)参照)

神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいる**ひとり子なる神だけが**、神をあらわしたのである。(ヨハネ 1 章 18 節)

(16) 神は**そのひとり子**を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それ[その目的]は御子を信じる者がひとりも[永遠に]滅びないで、[代わりに]永遠の命を得るためである。(17)神が**御子を世につかわされたのは**、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。(18)彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。**神のひとり子**の名(すなわち、このお方)を信じることをしないからである。(ヨハネ 3 章 16-18 節)

なぜなら、わたしたち、すなわち、わたしとシルワノ(すなわち、シラス)とテモテとが、あなたがたに宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「しかり」となると同時に「否」となったのではない。そうではなく、「しかり」がイエスにおいて実現されたのである。なぜなら、神の約束はことごとく、彼(すなわち、イエス・キリスト)において「しかり」となったからである。だから、わたしたちは、彼によって「アメン」と唱えて、神に栄光を帰するのである。

(第二コリント 1 章 19-20 節)

(4)しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。(5)それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。(6)このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。(ガラテヤ書 2 章 7 節ヤ 4 章 4-6 節)

(5) いったい、神は御使たちのだれに対して、「あなたこそは、わたくしの子。きょう、わたくしはあなたを生んだ」(詩篇 2 篇 7 節)と言い、さらにまた、「わたくしは彼の父となり、彼はわたくしの子となるであろう」(サムエル下 7 章 14 節)と言われたことがあるか。(6)さらにまた、神は、その長子を世界に導き入れるに当って、「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである」(詩篇 97 篇 7 節後半)と言われた。(7)また、御使たちについては、「神は、御使たちを風とし、ご自分に仕える者たちを炎とされる」(詩篇 104 篇 4 節)と言われているが、(8)御子については、「**神よ**、あなたの御座は、世々限りなく続き、あなたの支配のつえは、公平のつえである。(9)あなたは義を愛し、不法を憎まれた。それゆえに、神、あなたの神は、喜びのあぶらを、あなたの友に注ぐよりも多く、あなたに注がれた」(詩篇 45 篇 6-7 節)と言い、(10)さらに、「主よ、あなたは初めに、地の基をおすえになった。もろもろの天も、み手のわざである。(11)これらのものは滅びてしまうが、あなたは、いつまでもいますかたである。すべてのものは衣のように古び、(12)それらをあなたは、外套のように巻かれる。これらのものは、衣のように変わるが、あなたは、いつも変ることがなく、あなたのよわいは、尽きることがない」(詩篇 102 篇 25-27 節)とも言われている。(13)神は、御使たちのだれに対して、「あなたの敵を、あなたの足台とするときまでは、わたくしの右に座していなさい」(詩篇 110 篇 1 節)と言われたことがあるか。(ヘブル 1 章 5-13 節)

神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。(第一ヨハネ 4 章 9-10 節)

テアテラにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『燃える炎のよう

な目と光り輝くしんちゅうのような足とを持った神の子が、次のように言われる。(黙示録 2 章 18 節)

f. イエスは父なる神と一つです:

わたしと父とは一つである。(ヨハネ 10 章 30 節)

(20)わたしは彼らのためばかりではなく、彼らの言葉を聞いてわたしを信じている人々のためにも、お願いいたします。(21)父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにさせるためであり、それによって、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります。(22)わたしは、あなたからいただいた栄光を彼らにも与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。(ヨハネ 17 章 20-22 節)

g. 神として、イエスは時が始まる前、つまり世界が創造される前から、父と「顔と顔を合わせて会う」関係にありました。ただ私たちに救うためだけに父のもとを離れ、この世界に入られたのでした (ヨハネ 6 章 62 節; ヨハネ 17 章 24 節):

初めに言[イエス・キリスト]があった。言は神[父]と共に(相互関係、すなわち、「顔と顔を合わせた」相互補完性 reciprocity が)あった。言は神であった。この言は**初めに**(すなわち、天地創造の初め以前から)神と共にあった(すなわち、「顔と顔を合わせて」いました)。(ヨハネ 1 章 1-2 節)

そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。(ヨハネ 1 章 14 節)

神を見た者はまだひとりもいない。ただ父のふところにいる(すなわち、永遠の過去から天にいる)ひとり子なる神だけが、神をあらわしたのである。(ヨハネ 1 章 18 節)

(27)父ご自身があなたがたを愛しておいでになるからである。それは、あなたがたがわたしを愛したため、また、わたしが神のみもとからきたこ

とを信じたためである。(28)わたしは父から出てこの世にきたが、またこの世を去って、父のみもとに行くのである」。(ヨハネ 16 章 27-28 節)

(1)これらのことを語り終えると、イエスは天を見あげて言われた、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。(2)あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。(3)永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。(4)わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。(5)父よ、**世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、**今み前にわたしを輝かせて下さい。(ヨハネ 17 章 1-5 節)

(1)初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言[イエス・キリスト]について—(2)このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れたものである—(第一ヨハネ 1 章 1-2 節)

h. 神として、イエスは神の属性を主張し、共有し、示しておられます ([マタイ 28 章 18 節](#); [ヨハネ 1 章 48 節](#), [10 章 31-39 節](#)):

イエスは彼らに言われた、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない。(ヨハネ 6 章 35 節)

わたしは、彼らに永遠の命を与える。だから、彼らはいつまでも滅びることがなく、また、彼らをわたしの手から奪い去る者はない。(ヨハネ 10 章 28 節)

イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。(ヨハネ 11 章 25-26 節)

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)

- i. 神として、イエスは、「神の正確な姿」(コロサイ 1 章 15 節; [第二コリント 4 章 4 節](#) 参照)と描写されています:

御子[イエス]は神[御父の]の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。(ヘブル 1 章 3 節前半)

- j. 神として、イエスは永遠です:

しかしベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである。(ミカ 5 章 2 節)

イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも[幾時代の終りまでも] 変わることがない。(ヘブル 13 章 8 節)

- k. 神の言葉そのものであり、父からのメッセージと真理の体現者であるイエスは、神です(申命記 18 章 18 節; [ヨハネ 8 章 55 節](#), [14 章 10 節](#), [14 章 24 節](#)):

草は枯れ、花はしぼむ。しかし、われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない。(イザヤ 40 章 8 節)

初めに、言があった。(ヨハネ 1 章 1 節前半)

「だれが主の思いを知って、彼を教えることができようか」。しかし、わたしたちはキリストの思いを持っている(すなわち、聖霊がキリストの思いそのものである聖書の言葉を明らかにしてくださる)。(第一コリント 2 章 16 節) ([12-13 節](#)参照)

「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を[主の光で]照

して下さったのである。(第二コリント 4 章 6 節)

(1) 神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、(2) この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。(3) 御子は[まさに]神の[御父の]栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる…(ヘブル 1 章 1-3 節前半)

1. 神が世を裁くという預言に従って、神であるイエスが裁き主であり、すべての裁きはイエスに委ねられています:

(13) わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者(すなわち、御父)のもとに來ると、その前に導かれた。(14) 彼に主権と光榮と国とを賜い、諸民、諸族、諸國語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることがなく、その国は滅びることがない。(ダニエル 7 章 13-14 節)

イエスは彼らに近づいてきて言われた、「わたしは、天においても地においても、いっさいの權威を授けられた。(マタイ 28 章 18 節)

(22) 父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。(23) それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。(ヨハネ 5 章 22-23 節前半) (参照 [ヨハネ 5 章 27 節](#))

そして、これらのこと[この [ローマ 2 章 11-15 節](#) のさばきは]は、わたしの福音によれば、神がキリスト・イエスによって人々の隠れた事がらをさばかれるその日に、明らかにされるであろう。(ローマ 2 章 16 節)

断じてそうではない[神は不義な方ではない]。もしそうであつたら、神はこの世を、どうさばかれるだろうか。(ローマ 3 章 6 節)

(10) それなのに、あなたは、なぜ兄弟をさばくのか。あなたは、なぜ兄弟を輕んじるのか。わたしたちはみな、神のさばきの座の前に立つのである。(11) すなわち、「主が言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしに対してかがみ、すべての舌は、神にさんびをささげるであろう」[[イザ](#)

[ヤ 45 章 23 節](#)]と書いてある。(12)だから、わたしたちひとりびとりは、神に対して自分の言いひらきをすべきである。(ローマ 14 章 10-12 節)

なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。(第二コリント 5 章 10 節)

(9)それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。(10)それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、(11)また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。(ヒリピ 2 章 9-11 節)

以上のことを踏まえた上で、誰が何と言おうとも、聖書がこの問題について全く明瞭でないと主張するのは不誠実です。聖書は、他のいかなる誤った解釈にもかかわらず、イエス・キリストの神性を明確に宣言しています。実際、聖書はほとんど全ての言葉において、イエス・キリストの神性を宣言していると言っても過言ではありません。そして、その証言を無視したり、軽んじたりすることによってのみ、異なる結論に至ることができるのです。したがって、イエス・キリストは救われる者と滅びる者とを分かつ大きな境界線なのです([マタイ 10 章 32 節](#)～； [第一ヨハネ 2 章 22 節](#))。「主イエス」を告白しない限り、すなわち必然的に神性と人性、その全人格と十字架上の業を認めることがない限り、救いはあり得ません([ローマ 10 章 9 節](#))。イエスは真の人間ですが、単なる人間ではありません。「キリストのうちに、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています」([コロサイ 2 章 9 節](#))。究極的には、聖書を信じる人であれば誰もが、イエスが神であることを疑うことはできません。なぜなら、私たちは主ご自身からこのことを教えられているからです。

(57)そこでユダヤ人たちはイエスに言った、「あなたはまだ五十にもならないのに、アブラハムを見たのか」。(58)イエスは彼らに言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。アブラハムの生れる前からわたしは、いるのである」。(出エジプト 3 章 14 節参照)。(ヨハネ 8 章 57-58 節) (参照：[ルカ 22 章 70 節](#)； [ヨハネ 8 章 24 節](#)， [8 章 28 節](#))

2. イエス・キリストは真の人間：

おそらく、宇宙の歴史における最も深い驚異で、各時代を超えた比類なき栄光、またそれに匹敵する唯一の出来事で、神が人間の姿となってこの世に現れ、私たちの罪のために十字架上で死なれたという事柄の中でも、そもそも父なる神の贖罪のご計画を達成するために必要な第一歩だった、イエスが真の人間性を身にまとわれたことこそが最大の不思議でしょう。「知られているように、知る」([第一コリント 13 章 12 節](#))ようになるまでは、私たちの有限で限られた現在の状態では、主イエスが真の人間となられたことの驚異と栄光、その恵みと慈しみ、その犠牲と苦しみについて、理解することすら不可能です。

キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられた[すでに神性を持っておられた]が、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、[私たち皆のために]死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ 2 章 5-8 節)

この世に生きる私たちには、その深みと、私たちを思うがゆえに神が何を犠牲にされたかを本当に理解したり、本当に感謝したりすることはできません。しかし、神が人となられたというこの輝かしい出来事の真実と現実を、信仰を持って喜んで受け入れ、神が人となられたという事実に対して、畏敬の念を抱くことを怠ってはなりません。なぜなら、神である私たちの主イエス・キリストが、神性に加えて、本物の、生きた、息づく人間となられたという事実は、宇宙の**すべて**を永遠に変えたからです。というのも、受肉によって、イエスは今やまったく唯一無二の御方として、衰えることのない神性を永遠に人類と結びつけられたからです。この真理の意味するところは、途方もなく、驚くべきものです。神の超越的な偉大さを考え、それと比較するとあまりにも哀れなほどにちっぽけで儚い物理的な宇宙と対比してみると、神が今や、唯一の御子という御方において、この物質宇宙と不可逆的に結びついたという知らせは、息を呑むほどの驚異です。その意味するところのすべてを現時点で理解することは不可能ですが、少なくとも、神の御子を救い主として信じてきた私たちは、神がご自身の喜びにおいて、私たちが今住んでいる宇宙よりも一兆倍大きく、一兆倍複雑な宇宙を、努力を少しも必要とせずに一兆回も構築することができたかもしれないにもかかわらず、実際には今、神は御子を通して、もはや撤回することの出来ない形で、**私たち**に自らを捧げてくださったことを、深く感謝すべきです。これは、私たち一人一人が謙虚な気持ちになり、畏敬の念を抱くことを決して怠ってはならない真理であり、ひれ伏して賛美と感謝を捧げるべきものです。イエスは神であられるだけでなく、あらゆる点で私たちと全く同じ存在となられ

ましたが、ただ罪を犯されなかったという点においてのみ、私たちと異なるので、私たちは、実験台でも、付け足しでも、そのような多くの進化のひとつでもなく、むしろ、常に神の不変の目的の一部であったことが確信できるのです。なぜなら、唯一無二の神の御子である主が、圧倒的で畏敬の念を抱かせる、変わることのない方法で、私たちと共に、そして私たちのために運命を共にしてくださっているからです。

a. キリストが真の人間性を帯びることは、私たちに救いを与えるために必要でした：あらゆる議論をこえて、神のご計画におけるすべてのものは、最終的にイエス・キリストに帰結します。神のご計画におけるものは何であれ、キリストと、私たちの救いのためにキリストが十字架上で払われた犠牲的な働きから、切り離すことはできません。そのため、これが救いについての良い知らせであり、彼の恵み深い犠牲への信仰に基づいたイエスとの永遠の関係である福音(例えば、[マタイ 10 章 38 節](#), [16 章 24 節](#); [第一コリント 1 章 17 節](#); [ガラテヤ 6 章 14 節](#); [エペソ 2 章 16 節](#); [コロサイ 2 章 14 節](#))の包括的な例えとして「キリストの十字架」が用いられる理由です。簡単に言えば、「イエスがすべて」であると信じる私たちにとって、イエスという存在は彼の十字架上の死と密接に、切り離すことのできない関係にあるのです。

(15)御子[イエス・キリスト]は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。(16)万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。(17)彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。(18)そして自らは、そのからだなる教会のかしらである。彼は初めの者であり、死人の中から[よみがえられて]最初に生れたかたである。それは、ご自身がすべてのことにおいて第一の者となるためである。(19)神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、(20)そして、その十字架の血によって平和をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである。(コロサイ 1 章 15-20 節)

神としての永遠の能力におけるイエスのすばらしさと栄光を過小評価することはできませんし、私たちの現在の限界ではおぼろげにしか理解できませんが、聖句は、イエスが私たちのために、永遠の救いを成し遂げるために真の人間性を身につけなければならなかったという事実について、非常に明確です。神は苦しむことも、死ぬことも、罪のためのいけにえになることも、罪を贖うことも、その完全な聖性において、罪と直接接触することもできません。私たちの罪の担い手となる役割を果たすことができるのは、

人間、それも完全な人間だけなのです。罪深い人間である私たちは、神が私たちに代わって介入してくださなければ、「来たるべき怒り」と、最後の審判が必然的にもたらす永遠の刑罰に直面する運命にありました。しかし、福音の言葉では言い尽くせない良い知らせは、イエスが私たちのためにこの裁きを受け、十字架上で私たちの罪のすべてをご自身の体で背負ってくださったということです。私たちのためにこのことを成し遂げるにあたり、イエスは人間でなければならず、それも完全な人間、つまり、十字架上で世の罪を負う、本物の人間の肉体に宿った本物の人間の霊でなければなりません(ヨハネ 2 章 21 節; [ローマ 7 章 4 節](#); [第一コリント 11 章 27 節](#); [マタイ 27 章 50 節](#); [ルカ 23 章 46 節](#); [ヨハネ 19 章 30-42 節](#) 参照):

またパンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「これは、あなたがたのために与える**わたしのからだ**である。わたしを記念するため、このように行いなさい」。(ルカ 22 章 19 節)([マタイ 26 章 26 節](#); [マルコ 14 章 22 節](#); [ヨハネ 6 章 51-59 節](#); [第一コリント 11 章 23-25 節](#))

わたしたちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかることではないか。わたしたちがさくパン、それは**キリストのからだ**にあずかることではないか。パンが一つであるから、わたしたちは多くいても、一つのからだなのである。みんなの者が一つのパンを共にいただくからである。(第一コリント 10 章 16-17 節)

キリストはわたしたち[ユダヤ人と異邦人]の平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、**ご自分の肉**によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて[この]平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と[人との間を]和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。(エペソ 2 章 14-16 節)

あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で神に敵対していた。しかし今では、御子はその**肉のからだにより**、その死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである。(コロサイ 1 章 21-22 節)

キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、**かたちをとって宿**

っており、(コロサイ 2 章 9 節)

このように、子たち(すなわち、13 節の子たち)は**血と肉**とに共にあずかっているのです、イエスもまた同様に(処女で生まれたので罪がないという点だけが同じではありません)、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、**ご自分の死によって滅ぼし**、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。(ヘブル 2 章 14-15 節)

彼[イエス]は、ほかの[人間の]大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげる必要はない。なぜなら、[イエスは]**自分をささげて**、一度だけ、それをされたからである。(ヘブル 7 章 27 節)

(5)それだから、キリストがこの世にこられた[すなわち、生まれた]とき、次のように言われた、「あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、**からだを備えて下さった**。(6)あなたは燔祭や罪祭を好まれなかった。(7)その(主の誕生の)時、わたし(神性を持たれるキリスト)は言った、『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました(すなわち、生まれました)』」。(8)ここで、初めに、「あなたは、いけにえとささげ物と燔祭と罪祭と(すなわち、律法に従ってささげられるもの)を望まれず、好まれもしなかった」とあり、(9)[しかし]次に、「見よ、わたしは御旨を行うためにまいりました」とある。すなわち、彼[父なる神]は、[従って]後のものを立てるために、初めのもの[契約]を廃止されたのである。(10)この御旨に基きただ一度**イエス・キリストのからだ**がささげられたことによって、わたしたちはきよめられたのである。(ヘブル 10 章 5-10 節)

b. キリストが真の人間性を帯びることは、悪魔に勝利するために必要でした:

罪を犯す者は、悪魔から出た者である。悪魔は初めから罪を犯しているからである。神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまう**ため**である。(第一ヨハネ 3 章 8 節)

十字架と王冠は不可分の関係にあります。メシヤの冠を得るために、イエスは十字架を耐え忍ばなければなりません。そして、その冠は十字架を基に勝ち得たも

のでした。

そして、[十字架によって、神は、悪霊の]もろもろの支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。(コロサイ 2 章 15 節)([ローマ 16 章 20 節](#); [ヘブル 2 章 14 節](#); [第一ヨハネ 3 章 8 節](#) b 参照)

私たちのために、真の人間の肉体をもってカルバリの丘で犠牲的な死を遂げられた私たちの主は、それによって、悪魔を打ち負かし、取り除くために必要な基盤を形成されました。そして、(それに伴う私たちへのすべての栄光と共に)その究極的な勝利は、十字架上の勝利の理由の重要な一部です。

このように、子たちは**血と肉**とに共にあずかっているのです、イエスもまた同様に(すなわち、処女で生まれたので罪がないという点だけが同じではありませんが)、それらをそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解放放つためである。(ヘブル 2 章 14-15 節)

新しい天と新しい地の永遠が始まるために、悪を神の宇宙から取り除くために、悪は十字架で打ち負かされなければなりません。そして、イエスが私たちの罪を贖ってくださったことによってのみ、この祝福された勝利が勝ち取られ、神と神の憐れみに立ち返ることを望む人々との間に、和解がもたらされたのです。

神は、御旨によって、御子[キリスト]のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、そして、その十字架の血によって平和をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである。(コロサイ 1 章 19-20 節)

サタンの反逆は、人類の創造を必要とする一連の出来事を引き起こし、アダムを通しての私たち全体の墮落によって、最後のアダムが私たちの身代わりとなって死ぬ必要性をも生み出しました。真の人間としてのみ、イエスは十字架の勝利を勝ち取ることができたのです。主イエス・キリストが栄光のうちに再臨されるとき、悪魔に対する究極の勝利の結果として、真の人間として永遠に支配されるのです。([黙示録 11 章 15 節](#); [ヘブル 10 章 11-13 節](#) 参照)

彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるか

ら、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」。(黙示録 17 章 14 節)

キリストのからだである私たちが、キリストの勝利と、その勝利から生じる賜物と報いに与るのは、主が勝利され、黄泉の国へ下られ、その後、復活され、完全に真正な人間の肉体をもって御父の御前に昇られた結果なのです。

(7)しかし、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。(8)そこで、こう言われている、「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き(すなわち、十字架以前の信者を天国に連れて行かれた)、人々に賜物を分け与えた」。(9)さて「上った」と言う[言葉の表現がある]以上、また地下の低い底にも降りてこられた(すなわち、黄泉の国、そこから十字架以前の信者を天に導き入れられた)わけではないか。(10)降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちる(十字架で勝ち取られた勝利を完成する;[詩篇 110 篇 1 節](#)参照)ために、もろもろの天の上(すなわち、父の住まいの場所である第三の天)にまで上られたかたなのである。(エペソ 4 章 7-10 節)

悪魔とその天使たちが気づいていたかどうかは疑問ですが、主の受肉の瞬間から、救いは確実なものとなり、サタンは敗北は確実なものとなりました。サタンは、肉体を持つことの快楽を知りたいという欲望によって、天使の三分の一を墮落させました⁶。しかしイエスは、官能的な体験のためではなく、この世の悲しみを計り知れないほど経験した後、私たちを救うために、私たちのために十字架上で苦しみ、死んでくださいました([イザヤ 52 章 13 節](#)～53 章 12 節)。これこそ、私たちの救いと敵の失脚がかかっている偉大な勝利であり、私たちの主が肉体を持って地上に来られる必要があった理由です。

七十二人が喜んで帰ってきて言った、「主よ、あなたの名によっていただきますと、悪霊までがわたしたちに服従します」。彼らに言われた、「わたしはサタンが電光のように天から落ちるのを見た」。(ルカ 10 章 17-18 節)

平和の神は、サタンをすみやかにあなたがたの足の下に踏み砕くであろう。(ローマ 16 章 20 節 a)

⁶ 『サタンの反乱第一部: サタンの反乱と墮落』IV3.b「悪魔の革命的な政略」をご覧ください。

[父なる]神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった。(コロサイ 1 章 13 節)

(31)今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。(32)そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」。(ヨハネ12章31-32節)([ヨハネ 16章11節](#))

(21)それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこななければならない。(22)アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。(23)ただ、各自はそれぞれの順序に従わねばならない。最初はキリスト(復活の順番の最初の人となる方)、次に、主の来臨に際してキリストに属する者たち(すなわち、再臨の際のすべての信者)、(24)それから終末となって[人類史の終わりー千年王国時代の信者の復活]、その時に、キリストはすべての君たち、すべての権威と権力とを打ち滅ぼして、国を父なる神に渡されるのである。(25)なぜなら、キリストはあらゆる敵(すなわち、敵対する人間と天使の支配)をその足もとに置く時までは、支配を続けることになっているからである。(第一コリント 15 章 21-25 節) ([詩篇 110 篇 1 節](#)参照)

c. キリストが真の人間性を帯びることは、神の与えておられた約束と預言を成就するために必要でした： 私たちに対するすべての神の約束の成就に関しても、私たちの主は真の人間性を帯びることが必要でした。 私たちに対する神の約束はすべて、イエス・キリストにおける究極的な救いの約束にかかっているからです。

わたしは言う、キリストは神の真実を明らかにするために、割礼のある者の僕となられた。それは父祖たちの受けた**約束**(すなわち、契約)**を保証すると共に**、異邦人もあわれみ(すなわち、イエスによる救いの提供)を受けて神をあがめるようになるためである…(ローマ 15 章 8-9 節 b)

なぜなら、神の約束はことごとく、**彼[イエス・キリスト]において「しかり」となったからである**。だから、わたしたちは、彼によって「アメン」と唱えて(すなわち、キリストにおいて批准された主の約束に対する私たちの信仰によって)、神に栄光を帰するのである。(第二コリント 1 章 20 節)

神の約束は豊か/多数であり、決して失敗することはありません([ヨシュア 21 章 45 節](#); [ローマ 9 章 6 節](#); [テトス 1 章 2 節](#); [ヘブル 13 章 5-6 節](#))。神の約束はすべて、イエスが私たちのためにしてくださったことに基づいています。あらゆる種類の恵みは、十字架の上でのキリストの御業の結果なのです([ローマ 3 章 24 節](#), [5 章 15-21 節](#); [エペソ 2 章 5-8 節](#); [テトス 3 章 7 節](#); [ヨハネ 1 章 16-17 節](#)参照)。もしここで神の御言葉の約束のすべてを述べようとしたら、時間がいくらあっても足りません([ヨハネ 21 章 25 節](#); [ヘブル 11 章 32 節](#)～参照)。なぜなら、聖書のどのページにも約束があるからです。ここで私たちに関係するのは、神であると同時に人でなければならない、しかし、真の人でなければならないというみ言葉の約束、予告、預言が、私たちの主の受肉とどのように関係しているかということです。こうした条件を必要とする、三つの特定の約束の領域に焦点を当ててみましょう： 1) モーセよりも偉大な預言者であり、その言葉は救いに導く完全なものであるという約束を果たすこと、2) 罪を清める犠牲を象徴する以上のことは、すべてのどの祭司にもできなかったのもので、これまでの大祭司よりも偉大な祭司の約束を果たすこと。3) 永遠に統治する王としての約束を果たすこと、ダビデの子孫がダビデよりも偉大になり、ダビデの主ともなること。真の神でありながら、真の人間性を身にまとい、この世に来られたイエス・キリストによってのみ、これらの約束は完全に実現します。それぞれは、神の救済計画における三つの重要な側面を表しています。すなわち、預言によって告げられ、祭司の犠牲によって実現し、メシヤの到来によってその祝福がすべて実現するというものです。

1) イエスは来るべき預言者の約束を成就し、神の、救いの預言的啓示のメッセージすべてを御自身のうちに体現されます(イエスは**その**預言者です)：

(15) あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようなひとりの預言者(すなわち、主イエス・キリスト)をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない。(16) これはあなたが集会の日にホレブ(=シナイ)であなたの神、主に求めたことである。すなわちあなたは『わたしが死ぬことのないようにわたしの神、主の声を二度とわたしに聞かせないでください。またこの大いなる火を二度と見させないでください』と言った。(17) 主はわたしに言われた、『彼らが言ったことは正しい。(18) わたしは彼らの同胞のうちから、おまえのようなひとりの預言者を彼らのために起して、わたしの言葉をその口に授けよう。彼はわたしが命じることを、ことごとく彼らに告げるであろう。(19) 彼がわたしの名によって、わたしの言葉を語るのに、もしこれに聞き従わない者があるならば、わたしはそれを罰するであろう(すなわち、救いを拒ん

だ責任を負わせる)。(申命記 18 章 15-19 節)

このピリポがナタナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちが(も)しるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。(ヨハネ 1 章 45 節)

もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであろう。モーセは、わたしについて書いたのである。しかし、モーセの書いたものを信じないならば、どうしてわたしの言葉を信じるだろうか」。(ヨハネ 5 章 46-47 節)

人々はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った。(ヨハネ 6 章 14 節)([マタイ 21 章 11 節](#); [ヨハネ 7 章 40 節](#)参照)

(19)だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。(20)それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして下さるためである。(21)このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかねばならなかった。(22)モーセは言った、『主なる神は、わたしをお立てになったように、あなたがたの兄弟の中から、ひとりの預言者をお立てになるであろう。(使徒行伝 3 章 19 節-22 節 b)(使徒行伝 7 章 37 節参照)

預言者たちは神の言葉を語りましたが、イエスは神の言葉であり、聖書に預言されているこの約束と他のすべての神の約束の成就者です。

2) イエスは、「よりすぐれたいけにえ」の必要性を教え、宣べ伝えたすべての預言と儀式とともに、来るべき大祭司の約束を成就されました(イエスはメルキゼデクの位にある大祭司です)：

…(私たちの)罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、(すなわち、幕の向こう側の)座につかれたのである。(ヘブル 1 章 3 節)

そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となって、民

の罪をあがなうために(すなわち、ご自分の犠牲によって)、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。(ヘブル 2 章 17 節)

さて、わたしたちには、もろもろの天をとおって(すなわち、幕の向こうに)行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する(イエスへの)信仰をかたく守ろうではないか。(ヘブル 4 章 14 節)

(19)この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする[希望の]錨であり、かつ「幕(すなわち、天)の内(すなわち、天の聖所)」にはいり行かせるものである。(20)その幕の内に、イエスは、永遠にメルキゼデクに等しい大祭司として、わたしたちのためにさきがけとなって、はいられたのである。(ヘブル 6 章 19-20 節)

(23)かつ、死ということがあるために、務を続けることができないので、[必然的に]多くの人々が祭司に立てられるのである。(24)しかし彼(イエス・キリスト)は、永遠にいますかたであるので、変らない祭司の務を持ちつづけておられるのである。(25)そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである。(26)このように、聖にして、悪も汚れもなく、罪人とは区別され、かつ、もろもろの天よりも高くされて[神の御前に]いる大祭司こそ、わたしたちにとってふさわしいかたである。(27)彼[イエス]は、ほかの[人間の]大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげる必要はない。なぜなら、[イエスは]自分をささげて、一度だけ、それをされたからである。(ヘブル 7 章 23-27 節)

(1)以上述べたことの要点は、このような[驚くべき]大祭司がわたしたちのためにおられ、天にあって大能者の御座の右に[実際に]座し、(2)人間によらず主によって設けられた真の幕屋なる聖所で仕えておられる、ということである。(3)おおよそ、大祭司が立てられるのは、供え物やいけにえをささげるためにほかならない。したがって、この大祭司もまた、何かささぐべき物を持っておられねばならない。(4)そこで、もし彼が地上におられ[仕えてい]たなら、[モーセの]律法にしたがって供え物をささげる祭司たちが、現にいるのだから、彼は祭司ではあり得なかったであろう。(5)彼らは、天にある聖所のひな型と影とに仕えている者にすぎない。それについては、モーセが幕屋を建てようとしたとき、御告げを受け、「山(=シナイ)で示された型どおりに、注意してそのいっさいを作りなさい」と言われたのであ

る。(ヘブル 8 章 1-5 節)

しかしキリストがすでに現れた祝福の[真の]大祭司として[天に]こられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋[の幕]をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血(すなわち、御自身の死)によって、一度だけ[天の]聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。(ヘブル 9 章 11-12 節)

(23)このように(すなわち、動物の血がわたしたちを罪からきよめることができないように)、天にあるもののひな型は、これらの[地上の]ものできよめられる必要があるが、天にあるものは、これらより更にすぐれたいけにえで、きよめられねばならない。(24)ところが、キリストは、ほんとうのものの模型にすぎない、手で造った聖所にはいらなくて、上なる天にはいり、今やわたしたちのために神のみまえに出て下さったのである。(ヘブル 9 章 23-24 節)

祭司は神に奉仕しますが、メルキゼデクの位の大祭司の約束を成就し、究極の犠牲の供物として自らを捧げることができるのは、人間性をもったイエス・キリストだけです。

3) イエスは、王の約束とメシヤ王国のすべての預言を成就されます(イエスこそ王です):

また前のように、わたしがわたしの民イスラエルの上にさばきづかさを立てた日からこのかたのように、悪人が重ねてこれを悩ますことはない。わたしはあなたのもろもろの敵を打ち退けて、あなたに安息を与えるであろう。主はまた「あなたのために家を造る」と仰せられる。あなたが日が満ちて、先祖たちと共に眠る時、わたしはあなたの身から出る子を、あなたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう。(サムエル下 7 章 11-12 節)

(12)彼に言いなさい、『万軍の主は、こう仰せられる、見よ、その名を枝(すなわち、メシヤ:[イザヤ 4 章 2 節](#), [11 章 1 節](#), [53 章 2 節](#); [ゼカリヤ 3 章 8 節](#))という人がある。彼は自分の場所で成長して、主の宮を建てる。(13)すなわち彼は主の宮を建て、王としての光栄を帯び、その位に座して治める。その位のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間に平和の一致がある』。(ゼカリヤ 6 章 12-13 節)

イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方(私たちの住んでいる所)でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。(マタイ 2 章 1-2 節)

(37)いよいよオリブ山の下り道あたりに近づかれると、大ぜいの弟子たちはみな喜んで、彼らが見たすべての力あるみわざについて、声高らかに神をさんびして言いはじめた、(38)「主の御名によってきたる王に、祝福あれ…」。(ルカ 19 章 37-38 節 b) ([ヨハネ 12 章 13 節](#)参照)

ナタナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。(ヨハネ 1 章 49 節)

そこでピラトはイエスに言った、「それでは、あなたは王なのだな」。イエスは答えられた、「あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」。(ヨハネ 8 章 37 節)

彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」。(黙示録 17 章 14 節)

その着物にも、そのももにも、「王の王、主の主」という名がしるされていた。(黙示録 19 章 16 節)

王は神の代わりに統治しますが、神が栄光のうちに再臨される時、神の御子だけが、全世界を統治する神の摂政となる資格があるのです。

d. キリストが真の人間性を帯びることは、私たちの仲介者となるために必要でした:

神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。彼は、すべての人のあがないとしてご自身をささげられたが…(第一テモテ 2 章 5-6 節 a)

仲たがいしている二人の間に、第三者が介入して紛争を調停するという考え方は、私たちの誰もが共感できるものです。その意味で、聖書における仲介者キリストの概念は、和解の教義と密接に結びついています。キリストが仲介者となり、神と罪深い人間を隔てる敵意の障壁を取り除くのです([エペソ 2 章 14-18 節](#); [コロサイ 2 章 14 節](#)参照)。しかし、私たちの主が仲介されることには、ほとんどの人間関係の紛争の解決とは大きく異なる三つの点があります。まず第一に、神と人間は対等な関係ではなく、さらに言えば、この「争い」においては人間が完全に悪であり、したがって解決に求められる満足は、あくまで神にのみ捧げられるべきものです。(つまり、私たちには神に文句を言う根拠が全くないのです: [ヨブ記 9 章 33 節](#))。王と罪を犯した臣民との仲介者となる役割は、父である王と被造物である臣民の両者と同等である者でなければ務まりません。和解の使命を帯びた使者として遣わされることができるのは、御子(受肉した御子)だけです([マタイ 21 章 33-40 節](#))。第二に、解決を必要とする問題は人類の普遍的な罪深さであり、さらに、罪のために欠陥のある人類には、罪の負債を少しでも返済する方法がまったくありません。そのため、和解が実現するならば、仲介者自身が、被害者に償いをしなければなりません。私たちの主は、私たちの罪のために十字架上で裁かれた際に、私たちの代わりにこの償いを済ませてくださったのです。したがって、第三に、この「身代金」の支払いを果たすために、イエスは真の人間とならなければなりません。なぜなら、真の人間、しかも罪のない完璧な人間だけが、全人類の罪の代価を支払うことができるからです。十字架上で私たちのために成し遂げられたその御業によって、イエスは仲介者としての役割を果たし、すべての人間に和解の道を開きました。その和解の道は、血潮によってそれを可能にくださったお方への信仰によって受け入れられるものです。([ルカ 2 章 14 節](#); [ヨハネ 14 章 27 節](#); [ローマ 5 章 10 節](#); [エペソ 2 章 12-14 節](#), [2 章 17 節](#); [コロサイ 1 章 20 節](#)参照; [ローマ 5 章 1 節](#)も参照)⁷。

e. キリストが真の人間性を身につけられたことは、聖書によって証明されています: それに反する異端にもかかわらず、聖句を信じるなら、私たちは主の真の人間性を疑う余地はありません。それは、私たち皆が持っているのと同じように(主の場合は罪とは

⁷ 最初の契約の仲介者であるモーセ(新しい「よりすぐれた」契約の仲介者であるキリストとは対照的: [ガラテヤ 3 章 19-20 節](#); [ヘブル 8 章 6 節](#), [9 章 15 節](#), [12 章 24 節](#))は、仲介者の役割について、非常に参考になる予型的な描写を提供しています。モーセは、神に私たちのために懇願する一方で([出エジプト 32 章 11-14 節](#))、私たちに対して、神と和解するよう強く戒めています([出エジプト 32 章 19-20 節](#))。

無関係ですが)、真に人間的な体([ヘブル 10 章 5-10 節](#))と霊([マタイ 27 章 50 節](#); [マルコ 2 章 8 節](#), [8 章 12 節](#); [ルカ 23 章 46 節](#); [ヨハネ 11 章 33 節](#), [13 章 21 節](#), [19 章 30 節](#))を持っているからです。

キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしくして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、[私たち皆のために]死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ 2 章 5-8 節)

1) これは、神が肉体をもってお生まれになったことを示しています:

(22)すべてこれらのことが起ったのは、主が預言者[イザヤ]によって言われたことの成就するためである。すなわち、(23)「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。(マタイ 1 章 22-23 節)

そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。(ヨハネ 1 章 14 節)

(10)御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。(11)きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。(ルカ 2 章 10-11 節)

(3)御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、(4)聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである。(ローマ 1 章 3-4 節)

いったい、神は御使たちのだれに対して、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ」と言い…(ヘブル 1 章 5 節 a)

2) このことは、主の生涯と死に関する通常の人間的経験によって示されていま

す:

そして、四十日四十夜、断食をし、そののち**空腹になられた**。(マタイ 4 章 2 節)

ところがイエス自身は、舐の方でまくらをして、**眠っておられた**。(マルコ 4 章 38 節 a)

また人の子がきて**食べたり飲んだりしていると**…(ルカ 7 章 34 節)

それ[**イエスのからだ**]を[十字架から]取りおろして[ヨセフは]亜麻布に包み、まだだれも葬ったことのない、岩を掘って造った墓に納めた。(ルカ 23 章 53 節)

そこにヤコブの井戸があった。イエスは旅の**疲れを覚えて**、そのまま、この井戸のそばにすわっておられた…(ヨハネ 4 章 6 節 a)

イエスは**涙を流された**。(ヨハネ 11 章 35 節)

(33)しかし、彼ら[兵士たち]がイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。(34)しかし、ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ**血と水**(すなわち、「血清」とが流れ出た。(ヨハネ 19 章 33-34 節)

3) これは復活の時にも示されています:

わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には**肉や骨**はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。(ルカ 24 章 39 節)

イエスは私たちの罪のために、十字架上で死なれるために本当の人間となられたという意味で、真に人間であるだけでなく、この世で私たちが経験していることを正確に理解しておられます。御自身、最悪の事態を耐え抜かれ、その苦しみの杯をすべて飲み干されたからです ([イザヤ 53 章 3 節](#))、ただ罪は犯されませんでした:

この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。[\[ただ\]](#)罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。(ヘブル 4 章 15 節)

(7)[\[わたしたちの大祭司である\]](#)キリストは、その肉の生活の時(すなわち、復活される前、地上におられた時)には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれたのである。(8)彼は[\[唯一、ただひとりの神の\]](#)御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び(すなわち、人間が神に対して従順であることがどれだけ大変かを学び)、(9)そして、全き者とされた(すなわち、ご自分の歩みを完全に終えた)ので、彼に従順であるすべての人(すなわち、信じる者達)に対して、永遠の救の源となり、(ヘブル 5 章 7-9 節)

3. イエス・キリストは真に唯一無二です:

[\[神は\]](#)この(すなわち、[第一節](#)の「いろいろな時の」)終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。(ヘブル 1 章 2 節)

ここには私たちの親愛なる主の独自性が、あますところなく示されています。彼は神のひとり子であり、この称号は彼のユニークな人格の人間的な面と神的な面のすべてを同時に包含しています。そして、十字架での勝利の結果、サタンとの戦いに勝利し([コロサイ 2 章 15 節](#); [黙示録 5 章 5 節](#))、花嫁である教会を獲得し([エペソ 5 章 25 節](#))、全人類のために永遠の贖いを勝ち取り([ヘブル 9 章 12 節](#))、その結果、人間としてのイエスは万物の相続者となりました。そして、神としてのイエス・キリストは、神が宇宙、空間、時間の創造を実現するためにお遣わしになった唯一のお方です。したがって、神が人となったイエス・キリストは、この創造物であれ、それを超越するものであれ、すべてを結びつける唯一無二の存在なのです。

(19)神は、御旨によって、御子[\[キリスト\]](#)のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、(20)そして、その十字架の血によって平和をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである。(コロサイ 1 章 19-20 節)

イエスは、物質世界と非物質世界、すべてを結びつける唯一無二の「架け橋」です。父なる神が、この役割のためにご自身の愛する御子を差し出され、また、主がそれを受け入れて、比類なく言葉に尽くしがたい犠牲を払われたことの恵みを、十分に理解し、感謝することはほとんど不可能です。イエスは、神性を損なうことなく保持しながら、同時に永遠に真の人間となられ、すべての人々への慈悲深い救済を成し遂げるために、十字架上で命を注ぎ出されたことによって、ご自分の神性を永遠に救われた人類と結びつけることができたのです(第二ペテロ 1 章 4 節)。このすべての人々への慈悲深い救済を成し遂げるために、十字架上で命を注ぎ出されたのです。このように、天地創造の前にあったもの、天地創造が意味するもの(神の恵みの中で、イエスの犠牲により必然的に伴う事柄により)、そして今、時代を超えて永続するものの根本的な変容は、イエス・キリストという唯一無二の人格と御業に完全に結びついているのです。そして彼によって、神は永遠に、時間が終わり、永遠が始まるその最も祝福された日に、救われた人々と住まれるのです(黙示録 21 章 3 節)。

キリストにこそ、満ちみちているいっさいの神の徳が、かたちをとって宿っており、(コロサイ 2 章 9 節)

ここでは、神性と人間性がまったく独特な形で融合されています。イエス・キリストは受肉以来、真に人間です(ヒリピ 2 章 6-11 節)。また、イエス・キリストは真に神でもあります(ギリシヤ語:コロサイ 2 章 2 節)。私たちの主が私たちの罪から私たちを救うことができたのは、肉体を持っていたからに他なりません。なぜなら、神が私たちの罪のために死ぬことができたのは、この方法だけだったからです。これが福音の奥義(コロサイ 2 章 2 節)であり、罪深い人間を救うための神のご計画と力(ローマ 1 章 16 節)なのです。それゆえ、イエスは神のご計画そのものであり、神が成し遂げようと意図されたすべてのものの礎石なのです(マタイ 21 章 42 節; エペソ 2 章 20 節; 第一ペテロ 2 章 6-7 節参照; ローマ 5 章 6 節, 8 章 29-30 節, 第一コリント 8 章 6 節; コロサイ 1 章 17-20 節; ヘブル 9 章 26 節も参照)。

[神は]…あらゆる知恵と悟りとをわたしたちに賜わり、御旨の奥義を、**自らあらかじめ[キリストにあって]定められた計画に従って**、わたしたちに示して下さったのである。それは、時の満ちるに及んで実現されるご計画にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、**キリストにあって一つに帰せしめよう**とされたのである。(エペソ 1 章 8 節 b-10 節)

諸々の時代は私たちの主イエス・キリストのために、また彼を通して設計されたので

すから([コロサイ 1 章 16-17 節](#))、聖書が、彼の死を通して私たちに救ってくださった方の、この独特さを反映していない箇所はほとんどありません。このように神のご計画において、私たちの主の独自性が不可欠であるあらゆる側面を包括的に説明することはできませんが、その独自性が重要ないくつかの顕著な分野の例を、ここで挙げることはふさわしいでしょう：

a. その独自性は、イエスが神であり人であることによつてのみ長子であり、すなわち、支配権、祭司職、二重の分け前という特権を得ることができる存在であるという事実によつて表れています([ローマ 8 章 29 節](#); [コロサイ 1 章 18 節](#); [ヘブル 1 章 6 節](#); [黙示録 1 章 5 節](#); 下記 I.5.f.4.c 参照)：

御子は、見えない神のかたちであつて、すべての造られたものに先だつて生れたかたである。(コロサイ書 1 章 15 節)

イエスは神のひとり子ですから([ヨハネ 1 章 14 節](#), [1 章 18 節](#), [3 章 16 節](#), [3 章 18 節](#); [第一ヨハネ 4 章 9 節](#))、イエスの長子という地位は、生まれた順番を意味するのではなく、長子に与えられる特権、すなわち、統治権([ダニエル 7 章 13-14 節](#); [マタイ 22 章 41-45 節](#), [28 章 18 節](#); [コロサイ 1 章 18 節](#); [ヘブル 2 章 10 節](#), [3 章 1-6 節](#); [黙示録 2 章 27 節](#))、祭司職([ヘブル 5 章 6 節](#), [7 章 13-14 節](#))、二倍の相続分([黙示録 19 章 9 節](#))を意味します。彼の祭司職とメシヤの立場と同じように、イエスの「長子」としての地位は、我々すべてのためにご自分を十字架上で犠牲にしたことによつて得た特権です。イエスは「死者の中から生まれた長子」([コロサイ 1 章 18 節](#); [黙示録 1 章 5 節](#))であり、私たちのために死なれたことが、長子の地位のすべての権利と特権を受ける基礎となっていることを示しています(この特権が実績に基づいたものである事を明らかにしています：[創世記 49 章 4 節](#); [ヘブル 12 章 16 節](#)参照。)

わたしはまた彼をわがういごとし、地の王たちのうちの最も高い者とする。(詩篇 89 篇 27 節)

私たちはイエスの支配権と祭司職、つまり長子としての地位の最初の二つの恩恵について前述しました(そして、イエスの教会である私たちが、イエスの「長子」としての地位を共有することによつて、これらの恩恵をすべて共有していることを考えると、それは驚くべきことです：[ヘブル 12 章 23 節](#))。三つ目の恩恵としての長子の二倍の相続分については、主の場合、これは主の最も大切な所有物である花嫁(すなわち、再臨前のすべての信者から成る教会：[黙示録 21 章 9 節](#)参照; [エペソ 5 章 22-33 節](#); [黙示録 19 章 7-8 節](#), [21 章 2 節](#), [22 章 17 節](#)も参照)、そして「花嫁の友」(すなわち、同数

の千年王国時代の信者たち:[詩篇 45 篇 14-15 節](#); [黙示録 19 章 9 節](#))です。私たちの主の独自性は、メシヤだけが到達できる前例のない世界の支配において、このように明瞭に明らかです([マタイ 22 章 41-45 節](#); [ヘブル 3 章 1-6 節](#); [黙示録 1 章 5-7 節](#), [5 章 4-5 節](#), [11 章 15 節](#))。神の御子だけが捧げることのできる犠牲を必要とする「メルキゼデクの位階に従った」永遠の祭司職([ヘブル 7 章 26 節](#); [ヘブル 2 章 15-17 節](#)参照)、そして、花嫁とその友人たちの成就と所有において、神の御子だけが成し遂げることのできるのです([ローマ 8 章 29 節](#); [ヘブル 2 章 13 節](#))。

b. その独自性は、イエスが神であり人であることによつてのみ、私たちの罪を負う者、十字架上で私たちの罪の罰を受ける者となることができたという事実によつて表れていきます([マタイ 16 章 21 節](#), [17 章 12 節](#), [マルコ 8 章 31 節](#), [9 章 12 節](#); [ルカ 9 章 22 節](#), [17 章 25 節](#), [22 章 15 節](#), [24 章 26 節](#), [24 章 46 節](#); [使徒行伝 1 章 3 節](#), [3 章 18 節](#), [17 章 3 節](#), [26 章 23 節](#); [ローマ 8 章 17 節](#); [第二コリント 1 章 5 節](#); [ヒリピ 3 章 10 節](#); [第一ペテロ 4 章 1 節](#)):

わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか。(詩篇 22 篇 1 節

a)

(3)彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。(4)まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。(5)しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの(すべての)不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲しめをうけて、われわれに平安(神との平和)を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。(イザヤ 53 章 3-5 節)

(9)ただ、「しばらくの[短い]間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、**死の苦しみのゆえに**、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、**すべての人のために死を味わわれるため**であった。(10)なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君[私たちの主イエス・キリスト]を、**苦難をとおして全うされたのは**、彼にふさわしいことであったからである。(ヘブル 2 章 9-10 節)

主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。(ヘブル 2 章 18 節)

この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。(ヘブル 4 章 15 節)

(7)[わたしたちの大祭司である]キリストは、その肉の生活の時(すなわち、復活の前に地上におられたとき)には、激しい叫びと涙とをもって、ご自分を死から救う力のあるかたに、祈と願いとをささげ、そして、その深い信仰のゆえに聞きいれられたのである。(8)彼は[神の唯一の]御子であられたにもかかわらず、さまざまな苦しみによって[神への]従順(すなわち、人間が[神への]従順になるには何が必要か)を学び、(9)そして、全き者とされた(すなわち、ご自分の歩みを完全に終えた)ので、彼に従順であるすべての人(すなわち、信者)に対して、永遠の救の源となり、(ヘブル 5 章 7-9 節)

だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難(すなわち、十字架上の死)を受けられたのである。(ヘブル 13 章 12 節)

あなたがたは、実に、そうするように(キリストの苦しみを分かち合うように)と召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。(第一ペテロ 2 章 21-23 節)

むしろ、キリストの苦しみに[本当に]あずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである。(第一ペテロ 4 章 13 節)

c. その独自性は、イエスが神であり人であることによるのみ、父の使命の義務を果たすメシヤとなることができたという事実によって表れています:

その(すなわち、イエス・キリストの誕生の)時わたしは言った、「見よ、わたしはまいります(すなわち、生まれた)。書の巻に、わたしのためにしるされ

ています。(詩篇 40 篇 7 節)

イエスは、父なる神が世を救うために世に遣わされた方です([ルカ 2 章 25-35 節](#); [ヨハネ 3 章 16 節](#), [3 章 34 節](#), [7 章 18 節](#), [7 章 28-31 節](#), [17 章 18 節](#); [ローマ 8 章 3 節](#); [ヘブル 3 章 1 節](#); [第一ヨハネ 4 章 9-10 節](#); [創世記 49 章 10 節](#); [イザヤ 8 章 6 節](#); [ゼカリヤ 2 章 9 節](#), [2 章 11 節](#), [4 章 9 節](#), [6 章 15 節](#)参照)、メシヤ(ヘブル語:メシヤック(המשיח))はこの世に来られ、罪の身代わり(十字架:[イザヤ 52 章 13 節](#) - 53 章 12 節)として死ぬことによって世を罪から救い出し、完全な義(王冠:詩篇 2 篇; 45 篇; 72 篇; 110 篇)の上に君臨することによって悪から救い出すと預言された方です。ギリシヤ語で「キリスト」(クリストス Χρῖστος)と訳されるヘブル語のメシヤという称号は、「油注がれた者」を意味し、その人が特別な役職に正式に任命されたことを油注ぎによって示す、ヘブル人の習慣を反映しています(サムエルによるサウルへの油注ぎ:[サムエル上 10 章 1 節](#); ダビデへの油注ぎ:[サムエル上 16 章 13 節](#); モーセによるアロンへの油注ぎ:[出エジプト 28 章 41 節](#))。これらすべての場合において、この油注ぎは象徴的なものであり、聖霊の油注ぎによる神の力を表しています([民数記 11 章 17-29 節](#); [サムエル上 10 章 6 節](#), [10 章 9-10 節](#), [11 章 6 節](#), [16 章 13 節](#))。イエスは象徴的に油を注がれたことはありませんでしたが、象徴的に私たちの罪で「油を注がれた」のです(イエスのユニークな水のバプテスマの背後にある意味:[マルコ 10 章 38-39 節](#); [ルカ 12 章 50 節](#)を参照下さい)。その後、イエスは直ちに、油注がれた者としてのユニークな地位によって、生まれながらに持っていた聖霊の油注ぎを示す、特別で劇的な象徴(すなわち、聖霊が鳩の形でイエスの上に降りる)を受けました。

彼の油注がれた者としての地位は、その並外れた油注ぎ([マタイ 3 章 16 節](#); [マルコ 1 章 10 節](#); [ルカ 3 章 22 節](#); [ヨハネ 1 章 32 節](#)参照)という点でも、また、地上の使命の遂行における御父の喜びを示すという意味でもユニークです。(マタイ 3 章 17 節; [マルコ 1 章 11 節](#); [ルカ 3 章 22 節](#); [マタイ 17 章 5 節](#); [マルコ 9 章 7 節](#); [ルカ 9 章 35 節](#); [ヨハネ 12 章 28 節](#)参照)。それは、1) (神でもあり、人でもある)神人だけが人類を贖う罪の担い手になることができ、2) 神人だけが贖われた人類を永遠に支配する御父の摂政になることができ、3) 神人だけが大神父として御父と罪深い人類の間を仲介することができるからです。このように私たちの主は、長子として生まれた権利によって支配者であり、贖い主であり、仲介者であり、私たちの罪の担い手となることによって、ご自身の支配権を私たちと共有する権利を獲得され、メシヤとしての地位における御父の使命の成就において、時に応じた役割を果たされ(十字架で私たちを贖われ)、現在も果たされ(私たちのために仲介され)、再臨の時に果たされる(世界を支配される)のです。

4. イエス・キリストの名前は、その完全な人格と完全な御業を反映しています：

a. 三つの主要な名前: 「主イエス・キリスト」:

1) 主: この主要な名前は、ギリシヤ語のキリオス(κυριος)で、しばしば「テトラグラマトン」と呼ばれるもの、すなわち、[出エジプト記 3 章 13-15 節](#)で説明されているように、発音記号無しの四子音ヘブル語名「主」(YHWH: יהוה)を翻訳したものです⁸。したがって、この称号は明らかにイエスが神であることを表しています([マタイ 22 章 41-46 節](#); [ヨハネ 20 章 28 節](#); [詩篇 110 篇 1 節](#)参照)。

2) イエス: この主要な名前は、「主は救われる」を意味し、「ヨシュア」(יהושע)と発音されているヘブル語の名前を他の文字で書き直したもので、ヨセフとマリアが「主はご自分の民をその罪から救われるから」([マタイ 1 章 21 節](#); [ルカ 1 章 31 節](#))と命名するようにと指示された名前です。ですから、この名前は、私たちの主が全世界の罪のために死んで、十字架上で成し遂げられた御業を明らかに表しています。神だけが私たちの罪を赦すことができ、完全な人間だけが罪のために死ぬことができたからです([マタイ 9 章 2-6 節](#); [マルコ 2 章 9-10 節](#); [ルカ 5 章 20-24 節](#); [7 章 48-49 節](#)参照)。

3) キリスト: この主要な名前はギリシヤ語のクリストス(Χριστος)で、ヘブル語の「メシヤ」または「油注がれた者」(メシヤハ: משיח)を訳したものです。このように、これは預言を成就し、救いを成し遂げる唯一無二の存在として、父なる神から授けられた特別な使命を指しています。したがってこの称号は、神と人間の両方の性質を持つ唯一無二の存在、神人、神の御子であるイエスを象徴するものであり、この世を救うために世に遣わされた存在であることを意味します。([ヨハネ 3 章 16 節](#); [第一ヨハネ 4 章 9-10 節](#); [マタイ 3 章 16-17 節](#); [使徒行伝 4 章 27 節](#); [ヘブル 1 章 8-9 節](#)参照)。

b. 他の名前: このリストは完全であるとは言えません。そのような試みを行うには、それ自体が別の研究を必要とし、しかもそれは長期間にわたるものになるでしょう。例えば、イエスは神であるため、旧約聖書に登場する神のさまざまな名称、称号、独特な表現(例えば、エル El、エロヒーム Elohiym、ヤハ Yah、エル・エリオン El `Elyon、エル・ロイ El Ro`i、エル・シャダイ El Shaddai、エホバ・ニッシ Jehovah-nissi、その他)をすべて考

⁸ この名称に関するより詳しい説明は、このシリーズの[第 1 部「神学:神の研究」の脚注#1](#)をご覧ください。

慮する必要があります。また、イエスと、その到来する千年間の統治についてのみ言及しているメシヤに関する箇所も考慮する必要があります。:

ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる。(イザヤ 9 章 6 節)

新約聖書においても、イエスは三位一体の顕現された位格であり、すべての聖句の中心であるため、イエスに関する無数の記述を見つけることができます。「名前」または「称号」の狭義には当てはまらずとも、確実に総合的な研究に含まれるに値するものでしょう。(例えば、[ヘブル 3 章 1 節](#)で「私たちの信仰の使者」と呼ばれ、[ヘブル 2 章 10 節](#)では「彼らの救いの君」と呼ばれ、[ヘブル 12 章 2 節](#)では「私たちの信仰の導き手であり完成者」と呼ばれています)それに加え、黙示録の七つの教会に宛てた宣言で、ご自分を表すために使われた様々な描写があります:

エペソにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『右の手に七つの星(すなわち教会)を持つ者、七つの金の燭台の間を歩く者が、次のように言われる。(黙示録 2 章 1 節)

スミルナにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『初めであり、終りである者、死んだことはあるが生き返った者が、次のように言われる。(黙示録 2 章 8 節)

ペルガモにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『鋭いもろ刃のつるぎを持っているかたが、次のように言われる。(黙示録 2 章 12 節)

テアテラにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『燃える炎のような目と光り輝くしんちゅうのような足とを持った神の子が、次のように言われる。(黙示録 2 章 18 節)

サルデスにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『神の七つの霊と七つの星とを持つかたが、次のように言われる。わたしはあなたのわざを知っている。すなわち、あなたは、生きているというのは名だけで、実は死んでいる。(黙示録 3 章 1 節)

ヒラデルヒヤにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『聖なる者、

まことなる者、ダビデのかぎを持つ者、開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者が、次のように言われる。
(黙示録3章7節)

ラオデキヤにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『アメンたる者、忠実な、まことの証人、神に造られたものの根源であるかたが、次のように言われる。(黙示録 3 章 14 節)

これらの名前と称号の多くは、この研究の他の箇所でも取り上げていることに加え、このような呼称の多くは一度か二度しか出てこないか、あるいは他の箇所でも説明される教義的原則を表すものであり、いずれにせよ、それらが出てくる特定の節の解説に委ねるのが最善であるため、以下のリストでは、私たちの主のより一般的な名前と称号のいくつかに限定します。この除外と包含の基準は、必然的に主観的なものとならざるを得ないため、不適切と思われるすべての省略のケースについて、読者のご寛容をお願いします。

1) とりなす者: イエスは私たちのために、十字架の死を通して尊い命を捧げ、私たちを買い取られたお方として、私たちに代わって弁護し、恵みの御座の前で御父にとりなす権利を得られました([ローマ 8 章 34 節](#); [第一ヨハネ 2 章 1 節](#); [ヘブル 7 章 25 節](#); [ヨブ 16 章 19 節](#); [ヨハネ 14 章 13-14 節](#); [第一テモテ 2 章 5 節](#)参照)。

私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちに、御父の前で(わたしたちのために)とりなして下さる方、義なるイエス・キリストがおられます。(新改訳IV第一ヨハネ 2 章 1 節)

2) アルファでありオメガである方: [黙示録 22 章 13 節](#)で主に対して使われているこの称号は、父に対しても使われています([黙示録 1 章 8 節](#), [21 章 6 節](#))。父と子は「一つ」なのでこの事実は矛盾しません([ヨハネ 10 章 30 節](#))。ギリシヤ語のアルファベットの最初と最後の文字であるアルファとオメガという名前は、イエスが「初めであり、終りであり」([黙示録 1 章 17 節](#))、宇宙の端から端まで、永遠の端から端まで、すべてのものを構成するお方であるという事実を強調しています([コロサイ 1 章 16-19 節](#), [2 章 3 節](#), [2 章 9 節](#))。

3) 主の腕: 三位一体の第二位格であるイエスは、神のご計画を直接、個人的に実行されるお方です([ルカ 1 章 51 節](#)): 宇宙を造られた方であり([エレミヤ 27 章](#)

5 節, 32 章 17 節, 詩篇 8 篇 3 節参照)、自ら人間としてこの世に来られ、私たちの罪のために身代わりとなって死なれることによって、私たちを永遠の呪いから救ってくださった方です(53 章の文脈ではイザヤ 53 章 1 節; ヨハネ 12 章 37-38 節参照)。また、再臨の時には、御父がこの方を通して地上を直接支配するようになります(詩篇 98 篇 1 節; イザヤ 30 章 30 節, 40 章 10 節, 51 章 5 節, 51 章 9 節, 52 章 10 節, 59 章 16-20 節, 63 章 5-6 節参照; イザヤ 48 章 14-15 節; エゼキエル 20 章 33-34 節も参照)。御父が御自分の計画を実行する道具として、「主の腕」という称号は非常に描写的で適切です(詩篇 89 篇 13 節)。さらに、三位一体の目的と行動が、三つの位格が一つの本質を共有するものとして、いかに表裏一体であるかを示しています。特に、イスラエルの民のエジプトからの贖いにおいて明らかなです。私たちの死からの贖いを象徴的に示す出来事でもある、イスラエルの民のエジプトからの贖いにおいて、特に明らかなです。(申命記 7 章 19 節, 9 章 29 節; 列王記下 17 章 36 節; 詩篇 89 篇 10 節, 詩篇 136 篇 10-15 節; エレミヤ 32 章 21 節; 使徒行伝 13 章 17 節; 詩篇 44 篇 3 節参照)。

(11)…彼ら(=イスラエルの民)を、御自分の群れの牧者たちとともに[紅]海から導き上った方[御父]は、どこにおられるのか。その中に主の聖なる御霊を置いた方[御父]は、どこにおられるのか。(12) その輝かしい御腕(イエス・キリスト(ヘブル 11 章 27 節参照))を[彼らと共に]モーセの右に進ませ… (イザヤ 63 章 11 節 b-12 節 a)

4) 枝: これは本質的にメシヤ的な称号であり、私たちの主を、義をもって世を治めるよう定められた約束のダビデの子孫(イザヤ 53 章 2 節; エレミヤ 23 章 5 節, 33 章 15 節; ゼカリヤ 3 章 8 節, 6 章 12 節参照; エゼキエル 17 章 22 節-; ローマ 1 章 3 節; 黙示録 5 章 5 節も参照)であることを示すものです。初降臨では、主はこの称号を持つ者として評価されませんでした(イザヤ 11 章 1 節)、再臨において栄光に包まれることになります(イザヤ 4 章 2 節)⁹。この称号は主にメシヤ的なものであるため、

⁹ 神の家族の概念を一般的に説明するのに、植物の例え話の類似した用法を比較してみましょう。イスラエルはその根(ローマ 11 章 13-24 節)であり、私たちはイエス様と有機的に結ばれた枝であり、真のぶどうの木です。(ヨハネ 15 章 1-8 節、「ブドウの木」を参照)。「ナザレ人」という用語(マタイ 2 章 23 節)は、おそらく(ナザレというイエスの家族の居住地を超えて)主に予言的な意味で用いられていると考えられます。これは、ヘブル語で「ネツツァール netser(נֶצֶר)」という「若枝」を意味する言葉に由来しており、イザヤ書 11 章 1 節後半で用いられていることに基づいています。イザヤ書 11 章 1 節は、主が育ったこと(すなわち、主がほとんど知られぬままになされた成長)を、芽が伸びていく自然な過程になぞらえて表現しています。イスラエル民族は、メシヤが直接、栄光の炎とともに来られることを期待していましたが、福音書から分かるように、イエスが実際に来られた様は想定外でした。それが、イエスが正当に評価されなかった理由の一つです。

その仮庵の祭りで暗示されているように、¹⁰主の初降臨の時の最後のエルサレム入城(詩篇 118 篇 25-27 節; [マタイ 21 章 8-9 節](#); [マルコ 11 章 8-10 節](#); [ヨハネ 12 章 13 節](#); [ルカ 19 章 37-38 節](#)参照)と、[黙示録 7 章 9 節](#)の棕櫚の枝を手にした殉教者たちから、勝利したメシヤの象徴として棕櫚の枝が用いられていると理解すべきでしょう。最後に、この称号が、幕屋や神殿の聖所を照らした七つの枝を持つ燭台「メノラ」の象徴と結びついていると理解することも重要です。イエスは世の光であり、いのちそのものです([ヨハネ 1 章 4 節](#), [ヨハネ 14 章 6 節](#))。メノラは来たるべきメシヤと最初の生命の木とを結びつけるものですから、この「枝」という称号にも、光と生命の象徴が反映されていると考えるのが妥当でしょう。¹¹

5) 花婿: イエスは最後のアダムであり、私たち教会はいわばイエスの「エバ」です([第一コリント 15 章 45 節](#); [第二コリント 11 章 2-3 節](#); [ローマ 5 章 14 節](#)参照)。イエスは私たちのために死なれ、その血によって私たちを死から贖い、私たちの罪のために十字架上で死なれるという、犠牲的な御業を成し遂げられました([第一コリント 15 章 3 節](#); [第二コリント 5 章 21 節](#); [第一ペテロ 2 章 24 節](#))。この独特な方法で買い取られて([第一ペテロ 1 章 18-19 節](#))、私たちは永遠に主に属し、主の再臨の時には永遠に主の花嫁として主に「嫁ぐ」ことになるのです([マタイ 9 章 15 節](#), [25 章 1-13 節](#); [マルコ 2 章 19 節](#); [ルカ 5 章 34 節](#); [ヨハネ 3 章 29 節](#); [第二コリント 11 章 2-3 節](#); [エペソ 1 章 22-23 節](#), [5 章 22-33 節](#); [黙示録 21 章 2-4 節](#), [21 章 9 節](#)~, [22 章 17 節](#); [第一コリント 15 章 23 節](#); [詩篇 45 篇 9-17 節](#)参照)。

わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣(この上等な素材は、主の聖なる者たち(信者たち)の正しい行いを表しています)を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」。それから、御使はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」。またわたしに言った、「これらは、神の真実の言葉である」。(黙示録 19 章 7-9 節)

6) 建築者: 三位一体のそれぞれ担う役割において、父は創造の設計者で

¹⁰ 仮庵祭の象徴については、[『サタンの反乱』第 5 部 II.8.c.III.7「仮庵の祭」](#)、および[「来たる艱難期」第 2 部 B.I.2.b「金の燭台」](#)参照

¹¹ 燭台(メノラ)の象徴については、「サタン」第一部 II.5.b「幕屋の図解」、および「来たる艱難期」第二部 B.I.2.b「金の燭台」を参照。

あり、私たちの主イエス・キリストは、すべてのものに存在をもたらす創造主であり建築者です。また、すべてのものはキリストのうちに存続しています([コロサイ 1 章 16-17 節](#); [ヨハネ 1 章 3 節](#); 上記セクション I.1.c 参照)。ヘブル人への手紙では、私たちがイエス・キリストの建てられている教会という建物であるとあります。

(3)おおよそ、家を作る者が家そのものよりもさらに尊ばれるように、彼[イエス・キリスト]は、モーセ以上に、大いなる光栄を受けるにふさわしい者とされたのである。(4)家はすべて、だれかによって造られるものであるが、すべてのもの(すなわち、被造物)を造られたかたは、神である。(5)さて、モーセは、後に語るべき事について[真理を]あかしをするために、仕える者として、神の家の全体に対して忠実であったが、(6)キリストは御子として、神の家を治めるのに忠実であられたのである。もしわたしたちが、望みの確信と誇とを最後までしっかりと持ち続けるなら、わたしたちは神の家なのである。(ヘブル 3 章 3-6 節)

7) 長子: [前記 I.3.a 参照].

8) 神の賜物: この名前はほとんど説明する必要がありません。父なる神が、私たちが望む永遠の命の代わりに、私たちの身代わりとなって死なれる愛する御子という計り知れない賜物を与えてくださらなければ、私たちは裁きを受けるしかありませんでした。そのためイエスは、私たちの身代わりとなって裁かれるために、御自身を捧げることにご同意されたのです([ガラテヤ 1 章 4 節](#); [エペソ 5 章 2 節](#), [5 章 25 節](#); [第一テモテ 2 章 6 節](#); [テトス 2 章 14 節](#); [ローマ 3 章 24 節](#), [6 章 23 節](#); [エペソ 4 章 7 節](#) 参照)。私たちが永遠の命を持つことができるのは、神からの輝かしい賜物のおかげです。

言いつくせない賜物のゆえに、神に感謝する。(第二コリント 9 章 15 節)

(15)しかし、[後者であるキリストの]**恵みの賜物**は[前者であるアダムの]罪過の場合とは異なっている。すなわち、もしひとりの[アダムの]罪過のために多くの人が死んだとすれば、まして、神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる**賜物**とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずではないか。(16)かつ、この**賜物**は、ひとりの犯した罪の結果[もたらされた普遍的な死]とは異なっている。なぜなら、さばきの場合は、ひとりの罪過から、[普遍的に]罪に定めることになったが、**恵み**の場合には、多くの人の罪過から、義とする結果になるからである。(17)もし、ひとりの罪過によっ

て、そのひとりをとおして(すなわち、アダムの罪を子孫に受け継がせることによって)死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを[義認によって]受けている者たちは、ひとりのイエス・キリスト[の犠牲]をとおし、[永遠の]いのちにあって、さらに力強く支配するはずではないか。(ローマ 5 章 15-17 節)

あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、(キリストを信じる)信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である。決して行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである。(エペソ 2 章 8-9 節)

9) 教会というからだの頭: 教会は新約聖書でしばしば「キリストのからだ」と呼ばれ([第一コリント 12 章 12 節](#)など)、私たちの主イエスはその「頭」です([第一コリント 11 章 3 節](#), [12 章 21 節](#); [エペソ 4 章 15-16 節](#); [5 章 22-33 節](#); [コロサイ 1 章 18 節](#), [2 章 10 節](#), [2 章 19 節](#))。この名前は、イエスが愛する人々は、頭が体と密接につながっているのと同じように、彼にとっても近い関係にあるという、その親密な繋がりを強調しています。

(22)そして、[父なる神は]万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた。(23)この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない。(エペソ 1 章 22-23 節)

10) メルキゼデクに等しい大祭司: [上記 I .2.c.2 節参照]。

11) 神の聖者: この称号は悪霊によってさえ用いられ([マルコ 1 章 24 節](#); [ルカ 4 章 34 節](#))、キリストが御父によって唯一特別に聖別され([詩篇 16 篇 10 節](#); [イザヤ 5 章 19 節](#)と[イザヤ 6 章 1 節](#)を[ヨハネ 12 章 41 節](#)と比較)、御父への信仰によって世を救うため、御父によって世に遣わされた([ルカ 1 章 35 節](#); [使徒行伝 4 章 27 節](#); [第一ヨハネ 4 章 9-10 節](#); [黙示録 3 章 7 節](#)参照)方であることを示します。

(67)そこでイエスは十二弟子に言われた、「あなたがたも去ろうとするのか」。(68)シモン・ペテロが答えた、「主よ、わたしたちは、だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。(69)わたしたちは、あなたが神の聖者であることを信じ、また知っています」。(ヨハネ 6 章 67-69)

節)

12) インマヌエル:「神は私たちと共におられる」という意味のこの名前は、イエスが、イザヤの預言の、あらゆる意味で「私たちと共におられる神」であるメシヤの処女降誕の成就である事を示しています。(イザヤ 7 章 14 節参照; イザヤ 8 章 8 節も参照):

(22) すべてこれらのことが起ったのは、主が預言者[イザヤ]によって言われたことの成就するためである。すなわち、(23)「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。(マタイ 1 章 22-23 節)

13) さばき主 十字架上の犠牲と勝利が待ち望まれ(ルカ 10 章 22 節; ヨハネ 3 章 35 節, 17 章 2 節参照; マタイ 9 章 6 節; マルコ 2 章 10 節; ルカ 5 章 24 節も参照)、その犠牲と勝利の結果として(エペソ 1 章 22-23 節; ヒリピ 2 章 8-11 節)、すべての権威はイエス・キリストに委ねられました(マタイ 28 章 18 節; ダニエル 7 章 13-14 節; 第一コリント 15 章 27 節参照)。それゆえ、イエス・キリストは、時においても永遠においても、教会の「裁き主」であり(ローマ 14 章 10-12 節; 第二テモテ 4 章 8 節; ヤコブ 4 章 12 節参照; 黙示録 2 章 5-6 節, 3 章 1-3 節, 3 章 19-20 節)、最後の審判においては、救われた者、救われていない者を問わず、全人類の「裁き主」なのです(使徒行伝 10 章 42 節; ローマ 2 章 16 節; 第二テモテ 4 章 1 節; 第一ペテロ 4 章 5 節)。

兄弟たちよ。互に不平を言い合ってはならない。さばきを受けるかも知れないから。見よ、さばき主[イエス・キリスト]が、すでに戸口に立っておられる(すなわち、イエス・キリストの再臨と私たちの最後の審判が間近に迫っています)。(ヤコブ 5 章 9 節)

なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。(第二コリント 5 章 10 節)

14) 王の王、主の主: 「アルファであり、オメガである者」の場合と同様に、黙示録 19 章 16 節で私たちの主にしるされているこの称号は、父に対しても使われます(第一テモテ 6 章 14-16 節)。この称号の変化した形は聖書の中で頻繁に見られます

(例えば、[申命記 10 章 17 節](#)；[詩篇 136 篇 2-3 節](#)；[ダニエル 2 章 47 節](#)；[黙示録 17 章 14 節](#))。この称号は、主が「鉄の杖」をもって世界を支配するために戻って来られるとき、私たちの主の権威がすべての人間と天使の権威を凌駕することを強調するものです([詩篇 2 篇 9 節](#)；[黙示録 2 章 27 節](#)，[12 章 5 節](#)，[19 章 15 節](#)；[詩篇 2 篇 1-12 節](#)，[110 篇 1-2 節](#)；[ピリピ 2 章 9-11 節](#)参照)。

15) 神の小羊：「神の小羊」という称号は、旧約聖書の罪に関するいけにえ(これらはすべて私たちの主の十字架上の死を語っています)を思い起こさせ、私たちの罪のための唯一の完全な身代わりであり、いけにえであるイエス、「世の罪を」([ヨハネ 1 章 29 節](#))取り除いた「傷のない小羊」([第一ペテロ 1 章 19 節](#)；[イザヤ 53 章 7 節](#)参照)に注意を促します。もちろん、イエスはご自分の命を捧げられたのであって、文字通り血を捧げられたわけではありません([ヘブル 8 章 3 節](#)参照：「捧げるもの」)。「キリストの血」はイエスの犠牲の象徴であり、「神の小羊」は暗闇の中で、私たちの罪のために十字架上で裁かれたイエスの犠牲を象徴する称号です([第二コリント 5 章 21 節](#)；[第一ペテロ 2 章 24 節](#))。この称号は黙示録に顕著に現れていますが、それは主が私たちに代わって犠牲の死を遂げることによって、世界を支配する権利を勝ち取られたからです([黙示録 5 章 6 節](#)，[5 章 8 節](#)，[5 章 12-13 節](#)，[6 章 16 節](#)，[7 章 9-10 節](#)，[7 章 14 節](#)，[12 章 11 節](#)，[13 章 8 節](#)，[14 章 1 節](#)，[14 章 4 節](#)，[14 章 10 節](#)，[15 章 3 節](#)，[17 章 14 節](#)，[19 章 7 節](#)，[19 章 9 節](#)，[21 章 9 節](#)，[21 章 14 節](#)，[21 章 22-23 節](#)，[21 章 27 節](#)，[22 章 1 節](#)，[22 章 3 節](#))。

16) 最後のアダム：最初のアダムを通して罪が世に入りましたが、最後のアダムを通して、救いの恵みが彼を信じるすべての人に与えられました([ローマ 5 章 12-14 節](#)；[第一コリント 15 章 21-22 節](#)；[創世記 3 章 15 節](#)；[ガラテヤ 3 章 19 節](#)参照)。イエスは、永遠の命を求めて彼に信頼を置くすべての人にとって、「命を与える霊」だからです([第一コリント 15 章 45 節](#))。このように、「最後のアダム」という名前は、私たちの主の確かな人間性に注意を喚起するだけでなく、私たちに代るご自身の犠牲的な死を通して、アダムが墮落して以来、人類を苦しめてきた普遍的な問題、すなわち、罪とその結果としての死の問題を解決されたという事実にも注意を喚起します。最後のアダムを信じる信仰によってのみ、私たちは永遠に生きることができ、霊的な死と肉体的な死に続く、永遠の死という人類が共通して引き継いでいるものを避けることができるのです。¹² 最後のアダムであるイエス・キリストが、最初のアダムと私たちその子孫にかけられた呪いを取り去り、私たちが再びエデンに、この世のエデンではなく、彼と永遠

¹² [『聖書の基礎 3A:人間論』の第 6 章「最後のアダム」](#)参照。(英文”Last Adam”)

に住む新エルサレムに、入ることを可能にしてくださった方です。

17) いのち 創造主であり救い主であるイエス・キリストは、いのちを与える方であり、私たちに永遠のいのちを与える唯一の方です。イエス・キリストはいのちそのものであり、今私たちが享受しているいのち、そしてキリストと一体となることで永遠に享受するいのちの源なのです([ヨハネ 5 章 26 節](#), [ヨハネ 6 章 33-35 節](#), [ヨハネ 6 章 48 節](#), [ヨハネ 6 章 51 節](#), [使徒行伝 3 章 15 節](#); [ローマ 5 章 10 節](#), [8 章 2 節](#); [第二コリント 4 章 10-11 節](#); [第一ヨハネ 5 章 11 節](#)参照; [申命記 30 章 20 節 b](#); [詩篇 36 章 9 節](#); [エレミヤ 10 章 10 節](#); [第一テサロニケ 1 章 9 節](#))。イエスは私たちのために御自身を死に渡されたので、私たちはイエス・キリストにあるいのちの福音に従うことによって、御霊によって新しく生まれ、イエスのうちに永遠のいのちを得ているのです([マタイ 19 章 28 節](#); [ヨハネ 1 章 13 節](#), [3 章 3-8 節](#); [第一コリント 4 章 15 節](#); [ガラテヤ 4 章 29 節](#); [テトス 3 章 5 節](#); [ヘブル 12 章 9 節](#); [ヤコブ 1 章 18 節](#); [第一ペテロ 1 章 3 節](#), [1 章 23 節](#); [第一ヨハネ 2 章 29 節](#), [3 章 9 節](#), [4 章 7 節](#), [5 章 1 節](#), [5 章 4 節](#), [5 章 18 節](#))。

(3) すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。(4)この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。(ヨハネ 1 章 3-4 節)

(25) イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。(26)また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。(ヨハネ 11 章 25-26 節 a)

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。(ヨハネ 14 章 6 節 a)

あなたがたはすでに死んだものであって、あなたがたの[永遠の]いのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである。わたしたちの[永遠の]いのちなるキリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に(すなわち、新しい永遠のいのちとともに)栄光のうちに現れるであろう。(コロサイ 3 章 3-4 節)

初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言[イエス・キリスト]について—— こ

のいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れたものである——（第一ヨハネ 1 章 1-2 節）

さらに、神の子がきて、真実なかたを知る知力をわたしたちに授けて下さったことも、知っている。そして、わたしたちは、真実なかたにおり、御子イエス・キリストにおるのである。このかた（すなわち、イエス・キリスト）は真実な神であり、永遠のいのちである。（第一ヨハネ 5 章 20 節）

「恐れるな。わたしは初めであり、終りであり、また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉とのかぎを持っている。（黙示録 1 章 17 節 b-18 節）

18) 光： 神であるイエスは光です（[第一ヨハネ 1 章 5 節](#)参照；[ヤコブ 1 章 17 節](#)；[黙示録 22 章 5 節](#)も参照）。光は、いのち、聖さ、真理を、私たち人間が簡単かつ徹底的に共感できる方法で表すので、聖書のシンボルとして非常に重要です（参照：[ヨハネ 3 章 19-21 節](#)）。悪魔が反逆したとき、それまで神の創造にはまったく関わりのなかった闇が生まれました。死、悪、真理の不在を象徴する闇とは対照的に、イエスは光であり（[マタイ 4 章 16 節](#)；[ルカ 2 章 32 節](#)；[使徒行伝 26 章 13 節](#)；[第一ヨハネ 2 章 8 節](#)；[黙示録 21 章 23 節](#)）、聖なる方であり（[マルコ 1 章 24 節](#)；[ルカ 1 章 35 節](#)、[4 章 34 節](#)；[ヨハネ 6 章 69 節](#)；[使徒行伝 4 章 27 節](#)；[黙示録 3 章 7 節](#)；[ヨハネ 12 章 40-41 節](#)と[イザヤ 6 章 1-10 節](#)を比較）、真理そのものであり、命そのものです（[ヨハネ 8 章 12 節](#)、[9 章 5 節](#)、[12 章 46 節](#)）。

この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。（ヨハネ 1 章 4-5 節）

真の光であるイエス（[ヨハネ 1 章 9 節](#)）において、「光の子」（[ヨハネ 12 章 36 節](#)；[エペソ 5 章 8 節](#)参照；[ルカ 16 章 8 節](#)；[マタイ 5 章 14 節](#)も参照）として、私たちは光の国に入り、暗闇の国から脱出します（[コロサイ 1 章 12-13 節](#)；[使徒行伝 26 章 18 節](#)参照）、私たちを永遠のいのちの光に安全に導くために暗闇の世界に來られた方の、いのちを与える真理を信じたのです（[第一ペテロ 2 章 9 節](#)；[使徒行伝 26 章 23 節](#)参照）。

「わたしは世の光である。わたしに従って来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう。」（ヨハネ 8 章 12 節 b）

わたしは光としてこの世にきた。それは、わたしを信じる者が、やみのうちにとどまらないようになるためである。(ヨハネ 12 章 46 節)

19) 万軍の主：「アルファでありオメガである方」や「王の王、主の主」と同様に、「万軍の主」もまた、父と子の両方に適用される呼称です。この称号が明らかに御父を表しているように見える時もあれば(イザヤ 9 章 7 節; ゼカリヤ 6 章 12-13 節)、御父の目に見える代表者としての主イエス・キリストを指している時もあります(ゼカリヤ 2 章 8-9 節)。例えば、ヨハネ 12 章 41 節では、「聖なる、聖なる、聖なる」と叫ぶセラピムに囲まれた主のイザヤの幻を、ヨハネはイエスであると特定しています(イザヤ 6 章 1-13 節)。教会の頭であると同時に(エペソ 1 章 22 節, 4 章 15 節; コロサイ 1 章 18 節)、主イエス・キリストはすべての天使の頭(創造主)でもあります(エペソ 1 章 21 節; コロサイ 1 章 15-20 節, 2 章 10 節; ヘブル 1 章 1-4 節)、この称号は、天使の軍隊の総司令官としての主の地位を強調しています(「万軍」はヘブル語ツァバ tsabḥah, צָבָא の訳で、「軍隊」の意; 詩篇 84 篇 3 節; イザヤ 6 章 5 節; アモス 5 章 14-16 節; ゼカリヤ 1 章 3-17 節参照)。

…わたしは主がその玉座にすわり、天の万軍がそのかたわらに、右左に立っているのを見たが、(列王記上 22 章 19 節)

20) 仲保者：[前述 I .2.d 参照]。

21) メシヤ：[前述 I .3.c 節参照]。

22) 奥義：イエス・キリストは、すべての人類史の要であり、すべての人類の運命を握る存在ですが、その全貌は、イエス・キリストの初降臨以前には隠されており(第一ペテロ 1 章 10-12 節参照)、十字架以前は「奥義」でしたが、十字架後に明らかにされました(エペソ 1 章 9-10 節, 3 章 9-10 節; コロサイ 1 章 26-27 節)。旧約聖書には、来たるべきメシヤの予言が頻繁に記されていますが、メシヤの正確な性質(すなわち、メシヤは人間であり、神であるということ)と、メシヤの来臨の正確な方法(すなわち、メシヤは二度来られるということ、最初は罪を償うしもべとして、二度目は悪を根絶する王として)は、イエスが肉体をもって来られるまで、謎に包まれていました。罪に対する神の解決の奥義、そして聖書が語る他のすべての奥義(特に教会の奥義：エペソ 3 章 1-11 節, 5 章 25-32 節)は、私たちの贖いのために十字架上で私たちのために死なれ、私たちの義認のために三日目に復活されたイエス・キリストの御顔の中に、すべて明らかにされています(ローマ 4 章 25 節参照)。

(1)わたしが、あなたがたとラオデキヤにいる人たちのため、また、直接にはまだ会ったことのない人々のために、どんなに苦闘しているか、わかってもらいたい。(2)それは彼らが、心を励まされ、愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義なるキリストを知る(エピグノーシス、「信仰によって現実のものとされた知識」)に至るためである。(3)キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている。(コロサイ 2 章 1-3 節)

23) 預言者 [前述 I .2.c.1 節参照]。

24) 岩: イエスはすべての被造物の基礎であり、宇宙の創始者であり、私たちの救いの土台です。「岩」という名前に内在する堅固さと信頼性という具体的な特質は明らかであり、私たちの主は、永遠のための確かな土台を築くことができる唯一無二の岩です([マタイ 7 章 24-27 節](#); [ルカ 6 章 47-49 節](#))。この特別な称号と比喻が、聖書の中で一般的に神に、そして頻繁にイエスについて用いられていることは、その重要性を際立たせています([出エジプト 17 章 6 節](#); [民数記 20 章 8 節](#); [申命記 32 章 4-37 節](#); [サムエル記上 2 章 2 節](#); [サムエル記下 23 章 3 節](#); [詩篇 18 篇 2 節](#), [18 篇 46 節](#), [19 篇 14 節](#), [144 篇 1 節](#); [イザヤ 8 章 14 節](#), [17 章 10 節](#), [44 章 8 節](#), [51 章 1 節](#); [マタイ 7 章 24 節](#); [ハバクク 1 章 12 節](#)参照)。私たちは、すべてがイエス・キリストを基としているという事を理解しなければなりません。イエス・キリストは教会の土台となる岩であり([マタイ 16 章 18 節](#))¹³、私たち個人にとっても、イエス・キリストは私たちの存在、私たちの信仰、私たちのすべての希望の礎なのです。

家造りらの捨てた石は隅のかしら石となった。(詩篇 118 篇 22 節)

(44)それらの王たちの世(すなわち、終わりの時代)に、天の神は一つの国を立てられます。これはいつまでも滅びることがなく、その主権は他の民にわたされず、かえってこれらのもろもろの国を打ち破って滅ぼすでしょう。そしてこの[王]国は立って永遠に至るのです。(45)一つの石が人手によらずに山から切り出され、その[生ける]石が鉄と、青銅と、粘土と、銀と、金と[からなる像]を打ち砕いたのを、あなたが見られたのはこの事です。大いなる神がこの後[の将来](すなわち、キリストが反キリストの王国を砕くとき)に

¹³ ペテロシリーズ#2「苦難の使徒、ペテロ」参照。

起るべきことを、王に知らされたのです。(ダニエル 2 章 44-45 節 a)

そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロ[小さな岩石] (ペトラス *petr-os*)である。そして、わたしはこの岩[巨大な岩](ペトラ *petr-a* すなわち、キリスト御自身)の上にわたしの教会を建てよう。黄泉(すなわち、悪魔の王国)の力(防御の要塞となる門)もそれに打ち勝つことは[でき]ない。(マタイ 16 章 18 節)(ダニエル 2 章 44-45 節参照)

「見よ、わたしはシオンに、つまずきの石、さまたげの岩を置く。それにより頼む者は、失望に終わることがない」と書いてあるとおりである。(ローマ 9 章 33 節) ([イザヤ 28 章 16 節](#); [イザヤ 8 章 13-15 節](#)も参照)

なぜなら、(救いと霊的成長と実を結ぶために)すでにすえられている土台以外の[いかなる]ものを[も]すえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。(第一コリント 3 章 11 節)

(出エジプト世代は)みな同じ霊の飲み物(すなわち、神から与えられた水)を飲んだ。すなわち、彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない。(第一コリント 10 章 4 節)

主は、人には捨てられたが、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。(第一ペテロ 2 章 4 節)

25) 救い主: ギリシヤ語で「救い主」は「ショティール soter」(σωτηρ, 参照.救済学<英語でソテリオロジー Soteriology>)という言葉で、語源は「安全」を意味し、ラテン語でその言葉に相当する形容詞は「salvus」(英語で「サルベーション salvation(救い)」)です。動作主名詞「救い主」の本質的な意味は、「安全にする者／救済する者」です。このギリシヤ語(例えば、[ルカ 2 章 11 節](#); [ヨハネ 4 章 42 節](#); [テトス 3 章 6 節](#)など)は、ヘブル語の旧約聖書で「救世主」という意味の英語「Savior」が使われている箇所(例えば、[詩篇 106 篇 21 節](#); [イザヤ 60 章 16 節](#), [63 章 8 節](#); [ホセア 13 章 4 節](#)など)で、モシヤ moshia'(ヤシャ yasha', משיחのヒフィル形分詞)という言葉が訳すために用いられているものです。つまり、英語では全く異なる言葉です<日本語もそうです>が、ヘブル語の「イエス」(yasha', משיחのヒフィル形からの音訳)と「救世主」という言葉は、その語源はほぼ同じであるということです。なぜなら「イエス」はヘブル語で「彼が救う」を意味しますが、旧約聖書の英語訳で「救い主」と訳されるヘブル語の分詞(ギリシヤ語では soter、ギリシヤ語新約聖書では σωτηρ <ショティール>と

表記され、「救い主」とも訳される)は、「救う者」を意味するからです。主な違いは、「イエス」が預言者的な名前であるのに対し、「救い主」は救う力を直接的に主のものとなしている点です。イエスは、火の池、すなわち永遠の死と断罪から私たちを救い出してくださった方であり、また、イエスを信じるすべての人に永遠の命への門を開いてくださいました。イエスによって、私たちは罪とその永遠の刑罰から救われ、犠牲的な生涯と贖いの死によって死から救い出されました。これほど大きな救いのわざと、これほど偉大な救い主は、まさに想像を絶するものです。

26) 神のしもべ： 私たちの主のこの称号は、神が私たちに抱いておられる愛の高さ、深さ、広さを示しています。栄光を持たない純粋な人間としてこの世に生まれ、この世の涙を飲み干し、私たちの代わりに苦しみを受け、私たちが死なずに主と共に永遠に生きることができるように、十字架上で私たちのために死なれた、屈辱を受け入れられる主の姿に焦点を当てているからです([イザヤ 49 章 3-11 節](#), [52 章 13 節-53 章 12 節](#); [ローマ 15 章 8-9 節](#))。

キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも[私たち皆のための]十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ 2 章 5-8 節)

(1)わたしの支持するわがしもべ、わたしの喜ぶわが選び人を見よ。わたしはわが霊を彼に与えた。彼はもろもろの国びとに道をしめす。(2)彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声をちまたに聞えさせず、(3)また傷ついた葦を折ることなく(すなわち、心の弱い者を憐れんでくださる)、ほのぐらい灯心を消すことなく(すなわち、信仰の弱い者を励ましてくださる)、真実をもって道をしめす。(4)彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する。海沿いの国々はその教を待ち望む。(5)天を創造してこれをのべ、地とそれに生ずるものをひらき、その上の民に息を与え、その中を歩む者に霊を与えられる主なる神はこう言われる、(6)「主なるわたしは正義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手をとり、あなたを守った。わたしはあなたを民の契約とし、もろもろの国びとの光として与え、(7)盲人の目を開き、囚人を地下の獄屋から出し、暗きに座する者を獄屋から出させる(すなわち、肉体的、霊的な贖い)。(イザヤ 42 章 1-7 節)

27) 良き羊飼い: 私たちは皆、迷える羊のような存在です(詩篇 119 篇 176 節; 第一ペテロ 2 章 25 節)。しかし、私たちの神は、私たちを慈しみ、私たちを導くために任命された良き羊飼いを通して、私たちを御自身のもとに連れ戻そうとしてくださったのです。私たちを守り導く羊飼いの姿の描写は、聖書全体にわたって繰り返さされており、主が私たちを慈しみ深く守り、養ってくださり、いつでも慰め、見守り(創世記 48 章 15 節; 詩篇 28 篇 9 節, 80 篇 1 節; 伝道の書 12 章 11 節; エレミヤ 31 章 10 節, 49 章 19 節, 50 章 44 節; エゼキエル 34 章 23 節, 37 章 24 節; ゼカリヤ 13 章 7 節; マタイ 2 章 6 節, 25 章 32 節, 26 章 31 節; マルコ 14 章 27 節; ヨハネ 10 章 2-16 節; 第一ペテロ 5 章 2-4 節)、さらには、私たちのために命を捨てるほどに私たちを愛してくださる存在であることを伝えています(ヨハネ 10 章 11 節)。

しかし彼の弓はなお強く、彼の腕は素早い。これはヤコブの全能者の手により、イスラエルの岩なる牧者の名により、(創世記 49 章 24 節)

主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。(詩篇 23 篇 1 節)

見よ、主なる神は大能をもってこられ、その腕は世を治める。見よ、その報いは主と共にあり、そのはたらきの報いは、そのみ前にある。主は牧者のようにその群れを養い、そのかいなかいなに小羊をいただき、そのふところに入れて携えゆき、乳を飲ませているものをやさしく導かれる。(イザヤ 40 章 10-11 節)

(2)しかしベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである。(3)それゆえ、産婦の産みおとす時(すなわち、主の母マリア:初降臨)まで、主は彼らを渡しおかれる。その後その兄弟たちの残れる者はイスラエルの子らのもとに帰る(すなわち再臨におけるユダヤ人の悔い改め)。(4)彼(=メシヤ)は主の力により、その神、主の名の威光により、立ってその群れを養い、彼らを安らかにおらせる。今、彼は大いなる者となって、地の果にまで及ぶからである。(5)これは平和である。(ミカ 5 章 2 節-5 節 a)

わたしはよい羊飼である。よい羊飼は、羊のために命を捨てる。(ヨハネ 10 章 11 節)

(20) 永遠の契約の血による羊の大牧者、わたしたちの主イエスを、死人の中から引き上げられた平和の神が、(21) イエス・キリストによって、みこころにかなうことをわたしたちにしてお下され、あなたがたが御旨を行うために、すべての良きものを備えて下さるようにこい願う。栄光が、世々限りなく神にあるように、アメン。(ヘブル 13 章 20-21 節)

あなたがたは、羊のようにさ迷っていたが、今は、たましいの牧者であり監督であるかたのもとに、たち帰ったのである。(第一ペテロ 2 章 25 節)

御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとお下さるであろう」。(黙示録 7 章 17 節)

28) ダビデの子: イエスは、人間の母を通しての直系の子孫として、文字通りの「ダビデの子」であり(ルカの系図:[ルカ 3 章 23-38 節](#))、義理の父ヨセフを通しての直系の子孫として、法的な相続人でもあります(マタイの系図:[マタイ 1 章 1-17 節](#))。イエスはまた、預言者ダビデの「偉大な子」であり、主がダビデに約束された「ダビデの契約」([詩篇 89 篇 13-37 節](#))の究極的な成就をもたらす約束された来たるべき王、メシヤでもあります。「ダビデの子」という立場において、イエスはダビデの「子孫」([ローマ 1 章 3 節](#))であり、ユダ族の「獅子」であり、「ダビデの根」です([黙示録 5 章 5 節](#))

…主はまた「あなたのために家を造る」と仰せられる。あなたが日が満ちて、先祖たちと共に眠る時、わたしはあなたの身から出る子を、あなたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう。彼はわたしの名のために家を建てる。わたしは長くその国の位を堅くしよう。(サムエル記下 7 章 11-13 節)

29) 神の子: この称号は、私たちの主の神性を示しています。(前述セクション I.1.2「イエスは唯一の神の子である」を参照)「神の子」という称号はまた、三位一体の目に見える存在として、罪深い人類を救い、贖うために世に遣わされた唯一の存在として、また、信じるすべての人々に永遠の命と来るべき永遠の王国をもたらす十字架の勝利を勝ち得た存在として、イエスが人類史上に果たした唯一無二の役割をも表現

しています¹⁴。

30) 人の子： この称号は、[創世記 3 章 15 節](#)と原福音書、すなわち、悪魔の頭を打ち砕く子孫が現れるという預言における福音の最初の約束を思い起こさせます。イエスはその子孫であり([ガラテヤ 3 章 16-19 節](#); 参照.[ルカ 1 章 55 節](#); [使徒行伝 3 章 25 節](#); [ローマ 4 章 13-18 節](#))、「最後のアダム」([ローマ 5 章 12-14 節](#); [第一コリント 15 章 21-22 節](#), [15 章 45 節](#); 参照.[ガラテヤ 3 章 19 節](#))であり、この称号は、肉体をもってアダムの血筋を受け継ぐ、完全で純粋な人間性([マルコ 8 章 31 節](#); [ヨハネ 5 章 27 節](#))を明確に示しているのです。私たちが考察している「人の子」という具体的な名前は、キリストがその子孫であり、(他のすべての人間とは対照的な)唯一無二の「子」であることを示しています。ですから、この称号は(主がご自身にこの称号を用いられた時([ヨハネ 9 章 35-38 節](#))、主の同時代の人々はそのをはっきり認識したように)明らかにメシヤの預言なのです。

(13)わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者(すなわち、み父)のもとに来ると、その前に導かれた。(14)彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることがなく、その国は滅びることがない。(ダニエル 7 章 13-14 節)

そして子は人の子であるから、[父なる神は]子に[世に対して]さばきを行う権威をお与えになった。(ヨハネ 5 章 27 節)

31) 真理： イエスは真理を語られるだけでなく、真理であります：

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)

この聖句が明らかにしているように、イエスは知るに値する唯一の真の真理であり([ヘブル 13 章 8 節](#)参照)、真に真実なものはすべて、その核心において、究極的すべてを包括する真理であるイエスに、根本的に従属するものなのです。このような理

¹⁴ 三位一体の教義と「神の子」としての私たちの主の特別な役割については、それぞれ「神学：神について」のセクション II「神の御人格：三位一体」とセクション II.B.3.b.2「神の子」で詳しく説明されています< 翻訳中 >。

由から、イエス・キリストとその言葉は、いたるところで、また頻繁に、真理という言葉で表現されています([マタイ 14 章 33 節](#), [27 章 54 節](#); [マルコ 15 章 39 節](#); [ルカ 4 章 25 節](#), [12 章 44 節](#), [21 章 3 節](#); [ヨハネ 1 章 17 節](#), [4 章 42 節](#), [6 章 14 節](#), [6 章 32 節](#), [6 章 55 節](#), [7 章 40 節](#), [8 章 16 節](#), [8 章 40 節](#), [8 章 45 節](#), [15 章 1 節](#), [16 章 7 節](#), [18 章 37 節](#); [第一ヨハネ 2 章 8 節](#), [5 章 20 節](#); [黙示録 3 章 7 節](#), [3 章 14 節](#), [19 章 11 節](#)):

すべての人を照す**まこと**の光があつて、世にきた。(ヨハネ 1 章 9 節)

そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であつて、めぐみと**まこと**とに満ちていた。(ヨハネ 1 章 14 節)

律法はモーセをとおして与えられ、めぐみと**まこと**とは、イエス・キリストをとおしてきたのである。(ヨハネ 1 章 17 節)

32) ぶどうの木: このとても描写的なイメージは、私たちが最初にイエスに信仰を置いた時点から、私たちの愛する主イエスとの基本的なつながりについて教えています([詩篇 80 篇 8-11 節](#)参照)。私たちが信仰のうちに歩み続ける限り、私たちは主のうちに生き、主も私たちのうちに生きておられます。

(1)わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。(2)わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。(3)あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている。(4)わたしにつながっていなさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながってしよう。枝がぶどうの木につながってなければ、自分だけでは[真の]実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながってなければ実を結ぶことができない。(5)わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。(6)人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。(ヨハネ 15 章 1-6 節)

33) 道： イエスは神に至る唯一の「道」です。 実際、イエスこそ道なのです：

イエスは彼に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節)

聖書では、救いを道をたどって進む事に例えることがよくあります([詩篇 84 篇 5-7 節](#), [118 篇 19-27 節](#), [119 篇 176 節](#); [マタイ 7 章 13-14 節](#), [21 章 32 節](#), [22 章 16 節](#); [マルコ 12 章 14 節](#); [ルカ 13 章 24-25 節](#); [ヨハネ 14 章 4 節](#); [使徒行伝 9 章 2 節](#), [19 章 9 節](#), [19 章 23 節](#), [22 章 4 節](#), [24 章 22 節](#))。しかし、これら多くの移動の比喩の共通点は福音です。イエス・キリストを通してのみ、私たちは神に近づくことができます([エペソ 2 章 14-18 節](#), [4 章 7-10 節](#); [コロサイ 2 章 13-15 節](#); [ヘブル 9 章 24 節](#))。イエス・キリストは、真に神の羊である者たちが入る門です([ヨハネ 10 章 7-9 節](#))。彼は死ではなく、永遠の命へと導く唯一の真の扉です([黙示録 3 章 21 節](#), [4 章 1 節](#))。彼を通して、彼にあって、彼が行かれたところについて行くことによってのみ([ヘブル 6 章 19-20 節](#); 参照 [ヘブル 2 章 10 節](#)[ギリシヤ語]; [12 章 2 節](#))、私たちも天の聖なる所に入り、永遠に父と子と御霊との交わりを得ることができるのです([マタイ 27 章 51 節](#); [ルカ 23 章 43 節](#); [ヘブル 10 章 19-20 節](#))。

34) 神の言葉： イエス・キリストは神の生きた言葉です：

初めに言[イエス・キリスト]があった。言と神[父]との間には互恵性(共神性)があった。言は神であった。(英文直訳 ヨハネ 1 章 1 節)

このことが意味するのは、イエスと御父の間にも、イエスと「神の言葉」の間にも、まったく矛盾や不一致がないということです。なぜなら、イエスは真理、神のことばの体現者であり、神の書かれた言葉の中に表れている真理だからです。このため、信者に対する御霊の働きは、御霊が「わたしのものを取って、あなたがたに知らせ」([ヨハネ 16 章 15 節](#))と私たちの主は表現しており、またパウロによって、まさに「キリストの心」([第一コリント 2 章 16 節](#))と表現されています。イエスを知ることは神の言葉を知ることであり、神の言葉を知るとはイエス・キリストを知ることなのです([ヨハネ 5 章 39 節](#); 参照 [ヨハネ 1 章 1-14 節](#); [ヘブル 1 章 1-4 節](#); [第一ヨハネ 1 章 1-4 節](#); [黙示録 1 章 2 節](#))。私たちが「知られているように、私たちも知るようになる」([第一コリント 13 章 12 節](#))その祝福された日が来ることで、神をほめたたえましょう。

彼は血染めの衣をまとい、その名は「神の言」と呼ばれた。(黙示録 19 章

5. イエス・キリストの生涯

a. 序論:

イエスは神であり、三位一体の共同対等者、共同永遠、共同実在者です。また、イエスは神の言葉であり、キリストの心であり、聖書という完成された正典に含まれ、聖霊の働きを通して私たちに啓示された、この世での私たちのための神の啓示のすべてです([第一コリント 2 章 16 節](#))。したがって、このセクションの冒頭で指摘しておくべきことは、「キリストの生涯」において、私たちが主に考察していくのはイエス・キリストの神性ではなく、旧約聖書で予示され、新約聖書で真の人間としての受肉という形で現実となったキリストの人間性です。聖書の中で、救い主の生涯に注目する以上に重要なテーマはありません。なぜなら、信仰と救い主への忠実な従順を通してのみ、私たちは永遠の命の約束を実現できるからです。そして、イエスの生涯は、その特性は多数ありますが、すべてのキリスト教徒にとって究極のお手本です([マタイ 8 章 22 節](#), [9 章 9 節](#), [10 章 38 節](#), [11 章 29 節](#), [16 章 24 節](#), [19 章 21 節](#); [マルコ 1 章 17 節](#); [ルカ 9 章 23 節](#); [ヨハネ 1 章 43 節](#), [13 章 15 節](#), [21 章 19-22 節](#); [エペソ 4 章 15 節](#); [ピリピ 2 章 5 節](#); [ヘブル 6 章 20 節](#); [第一ペテロ 2 章 21-25 節](#); [黙示録 14 章 4 節](#))。イエスは、神の御心に完全に、そして確実に従った、完全な人間であり、そのようにして、私たちの罪を十字架上で負う資格を得ました。

すなわち、ひとりの人(アダム)の不従順によって、多くの人が罪人とされたと同じように、ひとり(イエス・キリスト)の従順によって、多くの人が義人とされる(すなわち、神の義を授かる)のである。(ローマ 5 章 19 節)

b. 旧約聖書におけるイエス・キリストの登場:

イエス・キリストは、三位一体のうちの顕現されたお方です。それゆえ、受肉以降、肉体において出現されたお方であるように、受肉以前にも、神の人格と存在を信者に顕現されたお方なのです([ヘブル 1 章 1-2 節](#)参照)。旧約聖書における神の顕現はしばしば「神現/神の顕現(セオファニス Theophanies)」と呼ばれますが、イエスによるものであることが明確に示される旧約聖書の啓示は「キリスト顕現(クリストファニス Christophanies)」と呼ばれます。三位一体について現在私たちが知っていることの多

くは、さまざまな理由から、旧約聖書の時代には意図的に覆い隠されていました¹⁵。しかし、次の箇所が示すように、旧約聖書における神の多くの出現は、一見したところ父なる神であるかのように思われますが、実際には父なる神を代表するイエス・キリストであったのです。

(37) このように多くのしるしを彼らの前でなしたが、彼らはイエスを信じなかった。(38) それは、預言者イザヤの次の言葉が成就するためである、「主よ、わたしたちの説くところを、だれが信じたでしょうか。また、主のみ腕はだれに示されたでしょうか」。(39) こういうわけで、彼らは信じる事ができなかった。イザヤはまた、こうも言った、(40) 「神は彼らの目をくらまし、心をかたくなになさった。それは、彼らが目で見ず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないためである」。(41) イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光(すなわち、[イザヤ書 6 章 1-3 節](#)の「聖なる、聖なる、聖なる」)を見たからであって、イエスのことを語ったのである。(すなわち、この二番目の引用は[イザヤ書 6 章 10 節](#)からのものであるため、[イザヤ書 6 章 1-10 節](#))。 (ヨハネ 12 章 37-41 節)

おそらく最も一般的なキリストの顕現は、「主の天使」の出現であり、この場合、「天使」という言葉は天使そのものではなく、キリストの顕現を表現するために用いられています。¹⁶ これは、例えば、[出エジプト記 14 章 19 節](#)では天使が「神の天使」と呼ばれていたり、[士師記 2 章 1-5 節](#)では天使が「わたしの契約」について語っていたり、[ゼカリヤ書 1 章 20 節](#)ではゼカリヤと対話していた主の天使が「主」と描写されていたりします。それと別のことが記されていない限り、創世記第 3 章でエデンの園でアダムとエバに語りかけた「主なる神」のように、旧約聖書における神の顕現は、キリストの顕現、すなわち、父なる神の代理人であり、三位一体の顕現された位格である、私たちの主イエス・キリストの顕現であると理解すべきです。¹⁷ イエスは常に世界の救い主であり、神の救済計画において、旧約聖書にも新約聖書においても同様に彼が中心にあることが重要でした。これは主が真の人間性を帯び、肉体として現れる前は、救いについての多くの詳細が隠されていたにしても、そうです([ルカ 24 章 25-27 節](#); [使徒行伝 2 章 23 節](#)、

¹⁵ 聖書の基礎: 第 1 部: 神学、第 II.C 項「旧約聖書における三位一体」を参照。

¹⁶ ギリシヤ語でもヘブル語でも、私たちが「天使」と訳す言葉は「使者」を意味し、英語から想像されるような「天使のような生き物」という厳密な意味合いを必ずしも持っているわけではありません。

¹⁷ 詳しくは、「聖書の基礎: 第 1 部: 神学」のセクション II.C、3、「旧約聖書におけるキリストの出現」をご覧ください。

[3 章 18 節](#), [7 章 52 節](#), [17 章 3 節](#), [26 章 23 節](#); [エペソ 3 章 5 節](#), [3 章 9 節](#); [第一ペテロ 1 章 11 節](#), [1 章 20 節](#); 参照. [ローマ 3 章 25-26 節](#)).

c. 旧約聖書にある予型:

上記で論じた旧約聖書における顕現に加えて、主の到来、主の受肉、そして主が私たちのために十字架上で成し遂げられたみ業は、旧約聖書の時代にさまざまな方法で予示されていました。実際、イエスは常に預言の中心であり([黙示録 19 章 10 節](#))、まさに神の言葉としての神のメッセージ([ヨハネ 1 章 1-3 節](#))でした。

神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、[このお方]御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、[このお方]御子によって、もろもろの世界を造られた。御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、[このお方の]その力ある言葉をもって万物を保っておられる。(ヘブル 1 章 1-3 節 a)

救世主とその二度のご降臨について教えたり、予示している特定の聖句や預言(下記セクション I.5.d を参照)に加えて、救世主の到来とキリストの受難は、いわゆる「予型論」によっても教えられています。すなわちそれは、特別な人物の生涯において時折起こる、イエスという人物と行いの象徴的な表れ／表現(例えば、[ダビデとソロモンの王権はキリストの千年統治に象徴的に当てはまること](#)、参照:[ゼカリヤ 3 章 8-10 節](#))や、モーセの律法の祭儀用具や慣習の背後にある象徴に見られ、特に犠牲が関係する箇所(これらは常に、私たちの罪のために主が十字架上で死なれたことと関連している)に多く見られます。¹⁸ この二種類の類型論が共に現れる例として、イサクの犠牲があります。イサクはキリストを表し、あるいは「キリストの予型」であり、私たちの罪のために犠牲にされました(イサクは、祭壇の上で血を流して死を迎えようとしたことは、キリストが私たちの罪のために死に、私たちの代わりに十字架上で裁かれたことを象徴し、キリストの霊的な死を意味します)。

(6) アブラハムは燔祭のたきぎを取って、その子イサクに負わせ、手に火と刃物とを執って、ふたり一緒[モリヤ山(すなわち、後のエルサレム)に]に

¹⁸ 『サタンの反乱』シリーズ第 1 部 II.5.b 項「幕屋の図解」、『来たる艱難期』シリーズ第 2 部 I 項「天の神殿の型としての地上の幕屋と神殿」参照。

行った。(7)やがてイサクは父アブラハムに言った、「父よ」。彼は答えた、「子よ、わたしはここにいます」。イサクは言った、「火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」。(8)アブラハムは言った、「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」。こうしてふたりは一緒に行った。(創世記 22 章 6-8 節)

この箇所の後半では、アブラハムは主の天使、すなわち受肉前のイエス・キリストによって、実際にイサクを犠牲に捧げることを止められます。しかし、この節に描かれている、たった一人の息子を犠牲にしようとする父親のドラマチックで感動的な物語は、神が唯一の愛する御子を、私たちのために死に渡されたという犠牲について、犠牲がどのようなものであったのかを少し理解させてくれます。それはとても恐ろしいことであると同時に驚くべきことであり、主の他のすべての子供たちの救いを確保するために、絶対不可欠なことでなければ考えることさえできないことです。

(17)信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。(18)この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。(19)彼(アブラハムは)は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである(すなわち、イサクは死んでも同然でしたが、神はイエス・キリストの予型である小羊という身代わりを通して救い出されたのです)。(ヘブル 11 章 17-19 節)

ヘブル人への手紙にあるように、その後の出来事ではイサクの犠牲を止められた後、主はイサクの身代わりとしてアブラハムに犠牲となる雄羊を用意されました([創世記 22 章 13-14 節](#))。ここに、神の小羊であるイエスがイサクの身代わりとして(そして全人類の罪を贖うために)、犠牲となるという非常に明確な描写があります。この理由から、「主の山(すなわち、私たちの主が私たちのために死なれた未来のエルサレムと同じ場所であるモリヤ山)で、神は備えてくださる」とあるのです([創世記 22 章 14 節](#))。すなわち、血を流す動物は、キリストが私たちの罪のために裁かれ、死なれたことを表しているという本質的な象徴化が、聖書におけるすべての動物の犠牲、義人アベルの犠牲(創世記 4 章、ヘブル 11 章)から、イエスが私たちのために十字架上で成し遂げられたみ業を記念する千年王国における犠牲(例えば、エゼキエル書 40-48 章)までの背景にあります([士師記 13 章 19-20 節](#)参照)。義人アベルの犠牲(創世記 4 章、ヘブル 11 章)から、イエスが私たちのために十字架上で成し遂げられた業を記念する千年王国における犠牲(例えば、エゼキエル書 40-48 章)までです。旧約聖書には、その

研究を完成するにはさらに数冊の追加の書物が必要となるほど、多くの予型が含まれています。新約聖書の中で予型として言及されているいくつかの顕著な例を挙げると...

園のいのちの木は、私たちにいのちを与えるためにカルバリの木で死なれた私たちの主の姿であり([ローマ 11 章 11-24 節](#)参照)、ノアの箱舟は私たちが救われるキリストの象徴であり([第一ペテロ 3 章 18-22 節](#)参照)、クジラの中のヨナは主の復活の象徴です([マタイ 12 章 39-41 節](#)参照)、メルキゼデクはすでに見たようにキリストの予型です([ヘブル 7 章 11-17 節](#)参照)。そして、これらの他に、幕屋、その家具、いけにえ、律法の他のすべての側面に関連する膨大な類型に限らず、あらゆる面に及びます([ローマ 15 章 4 節](#); [ローマ 10 章 6-7 節](#); [第一コリント 9 章 9-10 節](#); [第一テモテ 5 章 18 節](#) 参照)¹⁹。

d. 旧約聖書の預言:

私たちの主が肉体をとって来られることに関する旧約聖書の預言の大部分は、主のメシヤであることに焦点を当てており、したがって、少なくとも主の再臨が含まれていると言ってよいでしょう。このため、イエス・キリストの初降臨と再降臨は、神から与えられた言葉を書いた靈感を受けた著者らにとっても、謎に包まれた課題でした。²⁰

この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。(第一ペテロ 1 章 10-12 節)

¹⁹ 預言的予型論全般については、『来たる艱難期』の第 1 部 IV.1.d 項「旧約預言における予型論と順序」をご覧ください。特に幕屋とその備品の類型論については、『サタンの反乱』の第 1 部 II.5.b 項「幕屋の図解」、および『来たる艱難期』の第 2B 部、第 I 項「天の神殿の型としての地上の幕屋と神殿」を参照してください。

²⁰ 例えば、イザヤ書 42 章では、1-9 節は主に第一の降臨に関係し(それだけに限定されるものではありませんが)、10-17 節は第二の降臨に焦点を当て、二つの降臨は継ぎ目なく結びついています。

私たちの主が世界支配の王冠を受けるために来られる前に、十字架上で死ぬために来られるということと関連があるのは、私たちの代わりに死ぬことができるように、主が真の人間になられたという事実と必要性です。真の人間性を帯びることは、世界を支配する神のメシヤの栄光の出現には理論上必要ないと主張できるかもしれませんが、私たちの主は、私たちの罪を背負う人間の体がなければ、私たちの罪のために死ぬことはできませんでした。(第一ペテロ 2 章 24 節, 4 章 1 節; 第二コリント 5 章 21 節; ヘブル 9 章 26-28 節参照)。これこそ、多くのユダヤ人にとっての「つまずき」であり、多くの異邦人にとっては永遠の妨げとなる「おろかなもの」なのです(第一コリント 1 章 23 節; マタイ 21 章 42 節 参照.詩篇 118 篇 22-23 節)。しかし、メシヤが真の神であると同時に(再臨においてははっきりと見られる)真の人間であるという事実については、主ご自身がはっきりと述べておられます:

パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。

すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。(詩篇 110 篇 1 節)

イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。(マタイ 22 章 41-46 節)

もしメシヤが文字通りダビデの「子」であるならば、メシヤは人間でなければならず、一方、イエスが引用した詩篇 110 篇 1 節でダビデがメシヤを「主」と呼んでいるように、メシヤが「主」であるならば、メシヤは神でなければなりません。私たちの主のユニークな性質である神性と人間性の両方の要素は、人類を贖い、宇宙に永遠の平和を回復するという神の計画を達成するために不可欠です。メシヤが世界を支配するためには、メシヤが前もって罪の問題を取り除くこと、すなわち、悪魔を取り除き、私たちの贖いと救いの道を開く十字架上の死に対する勝利が必要だからです。メシヤが苦難を受けることは、もちろん、メシヤが真の人間性を持っているという事実なしには不可能なことです。が、それは、旧約聖書に示されており、例として、イザヤ書の 52-53 章により疑問の余地なく確実にされています(この抜粋で十分でしょう:)

(4) まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。(5)しかし[事実]彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲しめを受けて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。(6)われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。(7)彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。(8)彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。(9)彼は暴虐を行わず、その口には偽りがなかったけれども、その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者と共にあった。(10)しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、主は彼を悩まされた。彼が自分を、とがの供え物となすとき、その子孫を見ることができ、その命をながくすることができる。かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。(11)彼は自分の魂の苦しみにより[解放され、再び]光を見て満足する(すなわち、復活する)。義なるわがしもべはその知識によって、多くの人(すなわち、信者たち)を義とし、また彼らの不義を負う。(12)それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。(イザヤ 53 章 4-12 節)

実際、福音のメッセージ全体と、キリストが世の罪のために苦しまなければならない必要性は、たとえそのメッセージが十字架以前には消極的に受け取られ、十分に理解されていなかったとしても、旧約聖書全体を通してさまざまな形で教えられていました。私たちの主イエスご自身が、エマオへの道で弟子たちにまさにこの点を述べておられます(参照:[ルカ 24 章 25-27 節](#); [使徒行伝 2 章 23 節](#), [3 章 18 節](#), [7 章 52 節](#), [10 章 37 節](#), [17 章 3 節](#), [26 章 23 節](#); [エペソ 3 章 5 節](#), [3 章 9 節](#); [第一ペテロ 1 章 11 節](#), [1 章 20 節](#)):

(25)そこでイエスが言われた、「ああ、愚かで心のにぶいため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。(26)キリストは必ず、これらの苦難を[まず]受けて、[それから]その栄光に入るはずではなかったの

か」。(27)こう言って、モーセやすべての預言者からはじめて、**聖書全体**にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた。(ルカ 24 章 25-27 節)

説明のために、メシヤの到来を預言しているより有名な箇所を以下にいくつか挙げますが、すべてを網羅するためには、旧約聖書の予型論と同じくらい膨大な別の研究が必要です(参照:[ヨハネ 21 章 25 節](#))。

1) 預言された受肉:

…ヤコブから一つの星が出、イスラエルから一本の[治める者の]つえが起り…(民数記 24 章 17 節 b) ([マタイ 2 章 1-13 節](#); 参照:[創世記 49 章 8-12 節](#); [申命記 33 章 7 節](#); [ルカ 1 章 78 節](#); [黙示録 12 章 5 節](#))

(6) あなたはいけにえと供え物とを喜ばれない。あなたはわたしの耳を開かれた<英直訳: 耳に穴をあけた-原語は「掘る」の意>(すなわち、「わたしにからだを与え、自発的なしもべとしてのしるしをつけ」、[出エジプト 21 章 5-6 節](#); [申命記 15 章 16-17 節](#)参照)。あなたは燔祭と罪祭とを求められない。(7) [しかし]その時わたしは言った、「見よ、わたしは[この世に(すなわち真のいけにえとして)]まいります。書の巻に、わたしのためにしるされています。(8) わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と。(詩篇 40 篇 6-8 節) (参照:[ヘブル 10 章 5-10 節](#))

それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエル(すなわち、「神はわれらと共におられる」)となえられる。(イザヤ 7 章 14 節)([マタイ 1 章 23 節](#))

(6) ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。まつりごとはその肩にあり、その名は、「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる。(7) そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、ダビデの位に座して、その国を治め、今より後、とこしえに公平と正義とをもってこれを立て、これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされるのである。(イザヤ 9 章 6-7 節)

しかしベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである。(ミカ 5 章 2 節)

2) 預言された主の苦しみ:

わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」。(十字架を意味する「彼のかかとを砕く」)(創世記 3 章 15 節)

(12) 多くの雄牛[彼らは多くの雄牛のように]はわたしを取り巻き、バシャンの強い雄牛はわたしを囲み、(13)かき裂き、ほえたけるししののように、わたしにむかって口を開く。(14)わたしは水のように注ぎ出され、わたしの骨はことごとくはずれ、わたしの心臓は、ろうのように、胸のうちで溶けた。(15)わたしの力は陶器の破片のようにかわき、わたしの舌はあごにつく。あなたは(1-2 節参照)わたしを死のちに伏させられる。(16)まことに、犬は[彼らは、犬のように]わたしをめぐり、[この]悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。(17)わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。(18)彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする。(詩篇 22 篇 12-18 節)

彼らはわたしの食物に毒を入れ、わたしのかわいた時に酢を飲ませました。(詩篇 69 篇 21 節)([マタイ 27 章 34 節](#), [27 章 48 節](#); [マルコ 15 章 23 節](#), [15 章 36 節](#); [ルカ 23 章 36 節](#); [ヨハネ 19 章 29 節](#))

イスラエルのあがない主、イスラエルの聖者なる主は、人に侮られる者、民に忌みきらわれる者、つかさたちのしもべにむかってこう言われる、「もろもろの王は見て、立ちあがり、もろもろの君は立って、(あなたを)拝する。これは真実なる主、イスラエルの聖者が、あなたを選ばれたゆえである」。(イザヤ 49 章 7 節)

今あなたは壁でとりまかれている。敵はわれわれを攻め囲み、つえをもってイスラエルのつかさのほおを撃つ。(ミカ 5 章 1 節) ([ルカ 22 章 63 節](#); [ヨハネ 18 章 22 節](#))

3) 復活の預言：

あなたはわたし(のいのち)を陰府(シェオール)に捨ておかれず、あなたの聖者に墓を見させられないからである。(詩篇 16 篇 10 節)

主は、ふつかの(すなわち、教会時代<二千年>の後)後、わたしたちを生かし、三日目(すなわち、千年王国)にわたしたちを立たせられる。わたしたちはみ前で(すなわち、三日目の復活においてこの預言を体現するメシヤとともに)生きる。(ホセア 6 章 2 節) (参照：[ルカ 24 章 46 節](#)；[第一コリント 15 章 4 節](#))

4) 再臨の預言：

(1) なにゆえ、もろもろの[地上の]国びとは騒ぎたち、もろもろの民はむなしい事をたくらむのか。(2) 地のもろもろの王は立ち構え、もろもろのつかさはともに、はかり、主とその油そそがれた者にと逆らって言う、「われらは彼らのかせをこわし、彼らのきずなを解き捨てるであろう」と。(詩篇 2 篇 1-3 節)

「わたしはわが王を聖なる山シオンに立てた」と。(詩篇 2 篇 6 節)

主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。(詩篇 110 篇 1 節)

主は言われる、「あなたがわがしもべとなって、ヤコブのもろもろの部族をおこし、イスラエルのうちの残った者を帰らせることは、いとも軽い事である。わたしはあなたを、もろもろの国びとの光となして、わが救を[わが救い器として]地の果にまでいたらせよう」と。(イザヤ 49 章 6 節)

その日、その時になるならば、わたしはダビデのために一つの正しい枝を生じさせよう。彼は公平と正義を地に行う。(エレミヤ 33 章 15 節)

主はこう仰せられる、『わたしはシオンに帰って、エルサレムの中に住む。エルサレムは忠信な町となえられ、万軍の主の山は聖なる山と、となえ

られる』。(ゼカリヤ 8 章 3 節)

シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなたの王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る。(ゼカリヤ 9 章 9 節)

主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる。(ゼカリヤ 14 章 9 節)

旧約聖書における主の出現を、主の御姿と御業について語られている至る箇所にある予型論と、主のメシヤであること、受肉、受難、復活、再臨についての具体的な預言と組み合わせると、イエス・キリストが聖書の最初から聖書の真のメッセージであったことがはっきりとわかります。

このピリポがナタナエルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。(ヨハネ 1 章 45 節)

(24) 信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、(25) 罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、(26) **キリストのゆえに** 受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。(ヘブル 11 章 24-26 節)

e. 位格的結合 (Hypostatic Union) と ケノーシス Kenosis: イエス・キリストはその誕生の時点から、常に真の神で **ありながら** 真の人間にも **なられました**。キリストが今、神性と人間性という両方の性質を、その質も量も低下させることなく持っておられ、しかも一つの絶対的に唯一無二のお方であるという事実を正しく正統的に表現する場合、それを神学ではしばしば「位格的結合 (英: hypostatic Union)」と呼びます。この(少し理解するのに難しい)語句の初めの単語(hypostatic)は [ヘブル 1 章 3 節](#) から来ており、その節では、人間性と神性という二つの性質からなる主は、「(父の) 栄光の(まさに) 輝き、その **本質** の真の姿」と表現されています。この節の「本質」はギリシヤ語の「ヒューポスタシス hypostasis」で、形容詞「ヒューポスタテック hypostatic」の語源となっています。イエスは神の「栄光の輝き」ですから、イエスは神であり、父と御霊が共有する同一の本質を持っています。しかし、真の人間として、イエスはその本質の「真の **かたち**」(ギリ

シヤ語の文字、 $\chi \alpha \rho \alpha \kappa \tau \eta \rho$)であり、このことは、私たちの主の人間性がその神の本質の完全な鏡、または表現であることを意味します(ギリシヤ語の文字は、例えば鑄造された硬貨の正確な刻印、または印章を意味します)。このように[ヘブル 1 章 3 節](#)は、キリストの神性とキリストの人間性の間には、イエス・キリストが人間性と神性という二つの性質を持っているにもかかわらず、イエス・キリストという分け隔てない一つの人格の中に、人格の裂け目が全くない完全な調和と完全性があると教えているのです。幾分、専門的ですが、この解説は重要です。というのも、この複雑な真理の様々な部分を受け入れなかったために、過去も現在も(そして間違いなく将来も)²¹、多くの致命的な異端が生まれているからです。しかし、この概念を人間が理解するのは難しいことは言うまでもありません。というのも、私たちは神の神性とその本当の意味を、完全に理解することはできないからです(ましてや、キリストというお方における二つの性質の組み合わせのすばらしさは、一般論としてしか理解することはできません)²²。しかし、ここで私たちが最初に少なくとも理解すべきことは、とても個人的で不可逆的な方法でご自分を人類に捧げたことによって、私たちが計り知れないほど、主にとって特別な存在であるということの最も明確で説得力のある証拠を、与えてくださったという驚くべき真理です。

受肉以来、イエスの神性、人間性、そして二つの性質を併せ持つユニークな事実は、栄光を受けた今、比較的容易に理解できるかもしれません(例えば、[黙示録 1 章 12-20 節](#)でヨハネに現れたイエスの描写をご覧ください)が、イエスの最初の降臨の間、この二つの性質が共存していた方法について、聖書が述べていることを考察する必要があります。復活以降、主の神性と人間性が制限されたり、区分されたり、分離されたりすることはありますが、主は初降臨の間、私たちと同じように苦しまなければなりませんでした(地上の生活のあらゆる面だけでなく、特に十字架上で私たちの罪のために裁かれたとき、私たちの苦しみをはるかに超える苦しみを通らなければなりませんでした)。この神性による、神の人間性への関与における自己制限は、神学ではケノーシス(kenosis)として知られています²³。これは、パウロがピリピ人への手紙で、私たちの主の犠牲的な生涯について論じた際に用いたギリシヤ語です。:

(5)キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。(6)キリストは、神のかたちであられたが、神と

²¹ 聖書の基礎:第1部:神学、II.A「三位一体の定義:神の本質は一つ、御格は三つ」の「三位一体とは何か」の項目で、過去のさまざまな異端についての議論を参照してください。

²² 神の本質については、このシリーズのパート1である「神学」のI「神の本質:性質と特徴」で取り上げています。

²³ あるいは、「キリストの屈辱」とも呼ばれます。

等しくあることを固守すべき事とは思わず、(7)かえって、おのれを**むなしく**
して僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、
(8)おのれを低くして、[私たち皆のために]死に至るまで、しかも十字架の死
に至るまで従順であられた。(ピリピ 2 章 5-8 節)

上記で「むなしくして」と訳されている単語は、ギリシヤ語の動詞ケノー(κ ε ν ό ω)、
「虚しくする」であり、神学用語のケノーシスは、これに由来しています。次の聖句が
明らかにしているように、この喪失状態は、私たちのために主が十字架上で犠牲の死
を遂げるまでに、私たちのために大きな屈辱を伴うものでした。明らかに、イエスが生
涯を通して受けた、その多岐にわたる 30 年間の準備期間を経て高まる苦しみや虐待、
「罪人らのこのような反抗を耐え忍び」([ヘブル 12 章 3 節](#)、[ユダ 1 章 15 節](#)参照)、私た
ちのために十字架にかけられるに至るまで耐え抜いた苦しみ、そして十字架上の闇の
中で、私たちのために負われた罪のための死は、イエスが自らに課す人間性ゆえの自
己制限なしには、その神性とは相容れないものでした。この状態は伝統的にはケノー
シスと呼ばれています。

上記の序文からわかるように、ケノーシスとは本質的に、イエスが御父のみこころに
従って、初降臨の期間、人間として生きられるにあたって自ら、御自分の神性を使うこ
とを自発的に控えた一連の「基本的な規則」のことです([ヨハネ 4 章 34 節](#)；[5 章 30 節](#)、
[6 章 38 節](#))。

1) キリストのケノーシスが必要であった理由： 完全な義であられる神は、人
類の罪が適切に贖われない限り、神として罪を許すことができませんでした。そして、
完全な人間だけが罪の代価を支払うことができ、その支払いを、神の完全な正義に受
け入れられることができるのです。イエスはその唯一無二の完全ないけにえ、「きずも、
しみもない小羊」([第一ペテロ 1 章 19 節](#))であり、これは旧約聖書のいけにえを象徴す
るもので、傷のある動物は主の供え物として受け入れられませんでした([出エジプト 29
章 1 節](#)；[申命記 17 章 1 節](#)；[マラキ 1 章 6-14 節](#)など)。この例えでは、傷のない動物
の体は、イエスが私たちのために完全であり、完璧な身代わりであり、あらゆる点で私
たちの罪の担い手となる資格があったという事実を表しています。この完全性の側面
は、私たち皆と違って、イエスには罪の性質がなく、また、私たち皆とは違って、イエス
は個人的な罪を一度も犯されなかったという事実にあります(これについては後ほど詳
しく述べます)。しかし、主は肉体の完全性を保つことに加えて、人間の霊の完全性も
示し、保つことが求められ、それには肉体的に誕生した瞬間からその死の瞬間まで、
彼の自由意志の行使において完全な誠実さが求められました。

リーダーシップの原則というものがあります。それは、指揮官は部下に対して、自分

がその部下の立場で行いうる以上のことを求めてはならない、というものです。この原則が、私たちの救いの「隊長」である主イエス([ヘブル 2 章 10 節](#))ほど完璧に、また忠実に実行されたことはありません。主イエスは、私たちの想像をはるかに超える無私の犠牲の完璧な生涯を送っただけでなく、さらに驚くべきことに、私たちの罪深い失敗のすべてのために、十字架上で死なれました。しかし、ケノーシスがなければ、人間的な自由意志を持つ私たちの主が、彼が耐えなければならなかった極限の想像を絶するような試練(彼はそのすべてを受け入れ、完璧な形で合格しました)に対面することは不可能だったでしょう。なぜなら、神性の助けがあれば、それらはまったく試練にはならなかったからです。また、ケノーシスがなければ、主が十字架上で死ぬことはまったく不可能でした。なぜなら、神は死ぬことができないので、主は肉体的に死ぬことができませんし、そして、(神は罪と接触することができないため)神が罪と接触することができないために、罪のために死ぬことはできないからです。要するに、ケノーシスがなければ、そもそも受肉の意味はほとんどなかったでしょう。私たちのための受け入れられる身代わりとなるためには、主は「単に」罪を犯さないようにする以上のことをしなければなりません。主は私たちと同じように、この世で人間として自由意志を行使しなければなりません。それを完全に完璧な方法で行う必要がありました。そして、生涯を通してそうしてこられた主は、私たちのために十字架にかかり、私たちのために苦しみ、死ななければなりませんでしたが、すべては、同じ、純粹に人間的な自由意志からでした。

ですから、この種の神学的な解説では、主の罪のない生涯に集中するのが一般的ですが、御父に求められたすべての実際に正しい行いを実行することによる、御父に対する完璧な日々の応答が、悪い行いを「単に」避けるよりもはるかに大きな努力を必要とするものであったことは間違いありません。これは紛れもなく、人間が夢にも思えないほどに難しい自由意思の行使についても言えることです。つまり、私たちのために十字架にかかれ、私たちのために死に至らんとされた主の従順な意志です。この犠牲は、イエスが一步一步引き受けることに同意しなければならなかったものであり、一步一步挑戦された決断であり、宇宙の歴史の中で他のどんな出来事とも比べることができない、比類なく祝福された不思議なのです。実際、(現在、私たちがこのことをどの程度理解しているかは別として)私たちの罪に対する神の裁きを私たちの主が自由意志で受け入れられたことは、歴史であり、他のすべてが依存する礎となる出来事なのです。簡単に言えば、私たちの主は、ある目的のために、すなわち、御父の救いの御計画を実行するために、真の人間性を帯びられたのです。その御計画の実行は、イエスが神のしもべとしてご自身へりくだることなしには不可能であったので、ケノーシス、すなわち、世界が創造される前から持つておられた栄光([ヨハネ 10 章 30 節](#))を失って、へりくだりながら生きる一時的な状態は、私たちが救われるためには不可欠だったの

です([イザヤ 49 章 7 節](#), 52 章-53 章; [ルカ 22 章 27 節](#); [第二コリント 8 章 9 節](#); [ピリピ 2 章 5-11 節](#))。

それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである」。(マタイ 20 章 28 節)

あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられた(すなわち、神であった)のに、あなたがたのために貧しくなられた(すなわち、人間的であり、ケノーシスの束縛を受けておられた)。それは、あなたがたが、彼の貧しさ(すなわち、私たち皆のために十字架上で謙遜に生き、死なれたこと)によって富む者になる(すなわち、永遠の命を得る)ためである。(第二コリント 8 章 9 節)

律法が[罪深い人間の]肉により無力になっているためになし得なかった事(すなわち、罪の問題を解決すること)を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の様で罪の[償いの]ためにつかわし、肉において[すべての]罪を罰せられたのである。(ローマ 8 章 3 節)

私たちの主が受肉され、ケノーシスという完全な屈辱の中でこの世を歩まれたことの重要な結末の一つは、人間であることがどのようなことであるのか、この世で神の御心を行うために何が必要であるかを、主が個人的に経験されたことです。

(10)なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかた[父なる神]が、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君[わたしたちの主イエス・キリスト]を、苦難をとおして全うされたのは、彼[父なる神]にふさわしいことであったからである。(11)実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかた[父]から出ている。それゆえに主[キリスト]は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。(12)すなわち、「わたしは、御名をわたしの兄弟たちに告げ知らせ、教会の中で、あなたをほめ歌おう」と言い、(13)また、「わたしは、彼(すなわち父)により頼む」、また、「見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子ら(すなわち、神によってキリストに与えられた信者たち: 13 節)とは」と言われた。(14)このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているの、イエス[キリスト]もまた同様に、それら[共通の要素]をそなえておられる。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、(15)死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つため

である。(16)確かに、彼は天使たちを助けることはしないで、アブラハムの子孫(すなわち、信じる人類)を助けられた。(17)そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司(すなわち、仲立ち)となって、民の罪をあがなう(すなわち、「おおう」)ために、**あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった**。(18)主ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練の中にある者たちを助けることができるのである。

この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。(ヘブル 4 章 15 節)

もちろん、イエスは御自身が神であり、御自分の人間性において、御父の御心を御自分の生涯のあらゆる点において完全に全うされました(例えば、[イザヤ 42 章 1 節](#); [ヨハネ 10 章 30 節](#))。そして、彼が受けた「テスト」は、十字架の試練や私たちのための死に至るまで、私たちの想像を遥かに超える、あらゆる方法と側面において強烈なものであったことも決して忘れてはなりません(このような試練は、私たちが耐えるよう要求されることは決してありません)。しかし、イエスは召されたすべてのことにおいて、御父のみこころに完璧に応えて、完璧にそれを行いました。イエスの地上での人生は、私たちが行うべきことの見本でもありました。つまり、個人的な計画や願望、弱さよりも、常に御父のみこころ、御父のご計画を優先させるのです。もちろん、主が神性の助けなしに、人間性から完全な人間的意志を行使して成し遂げられたことを、私たちが真似することはできませんが(私たちが理解することさえできない誘惑の領域です)、私たちはできる限り主を模倣することができますし、模倣すべきです。

2) ケノーシスの期間中のキリストの神性の役割: マタイによるイエスの逮捕の記述の中に、私たちの主がその神性の使用を自発的に制限された性質について、多くを明らかにする箇所があります。ペテロが誤った熱心さのあまり、イエスを逮捕しに来た者の一人を剣で打った後、マタイは主が「それとも、私が父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今使わしていただくことができないと、あなたは思うのか」と言われたと伝えています。[\(マタイ 26 章 53 節\)](#)。神でありながら、このような極端な状況においても、主は御父に敬意を示し、御父の計画を遂行するために、謙遜で従順な態度を保っておられます。イエスは実際にこの仮定の要請をされたわけではありませんが(ペテロや他の弟子たちのためにのみ発言されています)、しかし、イエスの言葉の強調された性質から、神の御子として、御父と同格、同位、同体であることを全く疑っておられなかったことがはっきりとわかります。この驚くべき脱出の可能性について、私たちの完全な主が絶対的な確信を持っておられることを考えると、初降臨の期間中、イエスの人

間性とその人類のために神性を最大限に活用することの間に立っていた唯一のものは、常に、イエスが遣わされた計画と使命に応じる、イエスの人間的自由意志の正しい行使だけであったことを、私たちは確認することができます。ですから、私たちがケノーシスと呼んでいる二つの性質の間の「障壁」は、神性によって「上から」押し付けられたものではないことを、私たちはさらに見分けることができるのです。この事実は、ケノーシスの制約に違反することなく、主がご自分の生涯を成功裏に全うされたことを、いっそう驚くべきものにしています(私たちの誰が、もし似たような「力」を持っていたとしたら、それを使うことを控えることを現実的に期待できるでしょうか)。イエスはご自分が神であることを十分に知っておられましたが、上述した原則に反して、ご自分の人間性のためにご自分の神性に「アクセス」することはなさなかったのです。それゆえ、私たちのために主が通過された屈辱は、罪からの完全な分離や、私たちによく知られているあらゆる方法での人間的自由意志の完全な行使を、はるかに超えるものでした。また、神性を**日ごと、瞬間ごと、試練ごと**に、自発的に使用することを控えるという完璧な自制心も必要でした。

イエスの神的本質から見るとケノーシスとは、栄光を受けるまでイエスが人間になることで、物質的な存在となり、その物質的な人間性において、全能を使うことを避けたことを意味します。人間となることによって、イエスはご自身を時間に従属させ、その人間性において、全知の力の使用を避けられました。そして人間になることによって、イエスはご自身を有限の空間に限定され、その人間性においてご自身の偏在性を避けられたのです。このようにして生きられた人間的生活の代償と困難は、適切に評価することはおろか、ほんの少しも理解するのは難しいでしょう。私たちに対するイエスの愛に、限界はないと言え十分でしょう。イエスの地上での 33 年間の生涯において、このような制約が、どのような意味を持ったかについては、どのような境界の中で働いていたかを示すのに有益な、二つの例に限って述べることにしましょう。

砂漠での誘惑で、サタンは主に石をパンに変えるよう命じました([マタイ 4 章 3 節](#))。イエスは 40 日間断食したばかりで、非常に空腹でした([マタイ 4 章 2 節](#))。文脈からすると、聖霊に導かれた断食と試練([マタイ 4 章 1 節](#))は終わったか、あるいは終わる寸前であったかと思われます。さらに、食べることはどのような場合でも正当なことであり、このような長く困難な断食の終わりには、より一層必要なことです。そして、イエスは悪魔が提案したことを行うために、ご自分の神性を呼び起こすことができたのです。しかし、私たちはここでの主の言動から、そうすることが間違いであったことを知っています。なぜなら、このような異常にストレスのかかる試練の状況下であっても、ご自分の人間性のためにご自分の神性を用いることは、明らかに許可されていなかったからです。このような場合すべてにおいて、私たちの主は、あなたや私が間違いなく屈服したであ

ろう点をはるかに超えて耐え忍ばれました。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによって生きるのです」([マタイ 4 章 4 節](#))。言い換えれば、父なる神の御心は、私たちの主にとって最も重要であり、主は守るよう課せられた制限に、決して違反しませんでした。ただ、十字架に至る試練を受ける以前でも、主が耐え忍び苦しまれたことは、主がご自分が神であることを知りながら、その神性を利用することを控えるという重圧を計算外にしても、私たちの理解をはるかに超えていることでしょう。

ケノーシスによって課された境界を示す第二の出来事は、[ルカによる福音書 4 章 16 ~30 節](#)の、故国ナザレの人々によって拒絶されたエピソードです。主が人々の不信仰を叱責されと([ルカ 4 章 23-27 節](#))、彼らは激怒し、主をつき落として殺そうと、町の崖まで引っばって行きました([ルカ 4 章 29 節](#))。しかし、イエスは「彼らのまん中を通り抜けられて、去って行かれた」([ルカ 4 章 30 節](#))のです。これは確かに超自然的な力の使用を意味し、この状況とマタイ 4 章の状況との区別は、これ以上ないほど明確です。一つ目の場面では、主はご自分の立場を楽にすることもできましたが、絶対的にそうする必要はない状態でした。しかしこの(二つ目の場面の)場面では、もし主が群衆に崖から投げ落とされるのを許されたなら、メシヤの死に方に関する預言は否定されることになり、私たちの永遠の救いも否定されることになります。

初降臨を通じて、この原理を見ることができます。つまり、主は御父の救いの計画を推進するために、御父の御心に従ってのみ、彼に与えられた力と賜物を用いられました(例えば、聖書の成就による奇跡、癒し、死者のよみがえりなど)。しかし、ご自身の不都合、必要、疲労、労苦、私達のための十字架の暗闇、を含む人生のあらゆる苦しみまで、それらを和らげる可能性があるときには、いかなる形であれ、その神性の使用を控えられました。このように私たちの主は、他の人々のためと弟子たちへのしるしのために水をぶどう酒に変えることは許されますが、ご自身のために石をパンに変えることは許されません。主は他の人へのしるしとして、また御父のご計画を進めるために(必要な働きと祈りによって遅れて、弟子たちに追いつかれますが)、水の上を歩かれますが、それでも「歩く」のです。預言を成就させるために、神殿にあるとてつもなく重いテーブルを超人的な力でひっくり返すことができるのに、ゲッセマネでご自分を逮捕しに来た人々には何の防御もなさいません。適切な時に生け贄に捧げられる命を維持するために、群衆をかき分けて姿を消すことはできますが、十字架を避けようとはなさらないのです。

3) ケノーシスと十字架: 私たちの主イエス・キリストは「罪人を救うために世に来られた」([第一テモテ 1 章 15 節](#))のであり、十字架上で私たちのために死ぬことに

よって私たちが救うというこの最重要の目的は、父なる神の神聖な意志に応える、主の人間としての自由意志による最も重要な行為でした。

(5) それだから、キリストがこの世にこられたとき(すなわち、お生まれになられたとき)、次のように言われた、「あなた(父)は、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えて下さった。(6) あなたは燔祭や罪祭を好まなかった。(7) その時(すなわち、御降誕の時)、わたし(神なるイエス・キリスト)は言った、『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました』。(8) ここで、初めに、「あなたは、いけにえとささげ物と燔祭と罪祭と(すなわち、律法に従ってささげられるもの)を望まれず、好まれもしなかった」とあり、(9) 次に、「見よ、わたしは御旨を行うためにまいりました」とある。すなわち、彼は、後のものを立てるために、初めのもの[契約]を廃止されたのである。(10) この**[自由な]御旨**[私たちの罪のために死なれたイエスの行為]に基きただ一度イエス・キリストのからだがささげられたことによって、わたしたちはきよめられたのである。(ヘブル 10 章 5-10 節)

私たちの主が、最初の降臨の間に人間性からなされた一つ一つの決断は、父なる神に完璧に応えるものでしたが、私たちの代わりに十字架にかかり、私たちの罪のために死ぬという主のご意志がなければ、私たちはまだ失われたままでしょう。この決断の難しさと、その決断で私たちの主が担うことになった信じられないほどの重荷は、イエスのためというよりむしろ**私たちのために**発せられ、記録された(この事実は、正統派キリスト教界でもしばしばあまり理解されていません)イエスの二つの言葉からわかります(この事実は、正統派キリスト教界でもしばしばあまり理解されていません)。それは、1) 裏切られた夜のゲッセマネの園での祈りと、2) 息をひきとられた直前の[詩篇 22 篇 1 節](#)の引用です。

ゲッセマネでイエスは、「十字架の杯」が「**御心ならば**」取り去られるように祈りました([マタイ 26 章 39 節](#); [マルコ 14 章 35-36 節](#); [ルカ 22 章 41-42 節](#); [ヨハネ 12 章 27 節](#))。さて、主は御父のみこころが何であるかをよく知っておられ、主がこの世に来られたのは「まさにこの時と目的のため」であったのです([ヨハネ 12 章 27 節](#))。それゆえこの祈りは、主の側に疑いや考え直しがあつたことを示すものでは決してなく、世の罪のために十字架上で死なれるという御父の御心を予期し、それを実行に移されたことがどれほど莫大なことであつたかを、**私たちが**少なくともうわべだけでも理解できるように、完全に**私たちのために**祈られ、記録されたのです。

第二に、御自分の血によって、つまり十字架上で暗闇の中で私たちの罪を負うことによって、私たちの永遠の贖いを成し遂げられたとき、主は「わが神、わが神、なにゆえわたしをお捨てになったのですか」([詩篇 22 篇 1 節](#))と言われました。これは混乱や落胆を表す言葉では**ありません**！それは、私たちが永遠の命を得るために、人間である主がご自分の自由意志で、**私たちの罪のために**見捨てられ、闇の中で裁かれるために、自ら進んでご自分を捧げられたことを**私たちが知るために、私たちの益のために**御自分の人間の霊を諦められる直前に、[詩篇 22 篇 1 節](#)を引用されていたのです。私たちの主は、私たちが永遠の命を得るために、ご自分が愛に満ちた父から見捨てられ、裁かれなければならなかった理由をよく知っておられたからです。それは**私たちが永遠の命を得るため**です。

ですから、私たちの罪のために苦しみを受ける直前と直後の主のこの二つの発言は、誤解されがちですが実際には、私たちに代わってご自身を犠牲にするという、主の義なるわざを通して私たちが救われるために、イエスが御父と私たちの意志に完全に応えて、ご自身の純粋に人間的な自由意志でなさったことを、明確かつ意図的に宣言しているのです。

このことから私たちの主の人間的自由意志は、私たちの自由意志とまったく同じであったことがわかります。ただし、御父の意志への完璧な応答の中でのその行使は完璧でした。ここでのケノーシスの主題について言えば、イエスの人間性においての意志は、イエスの神性の意志と御父の意志と完全に一致していましたが、イエスは人間性において、その完全な生涯を通して、あらゆる段階でこのような完全な決断を下さなければならなかったのです。御自身の人間性において、この完全に正しい決断は、しばしば「非の打ちどころのなさ」(「罪を犯すことができない」)と呼ばれます。しかし、この言葉には二つの欠点があります： 1) はるかに重要で肯定的なこと(すなわち、どんなに困難であっても、一日一日、一刻一刻、必要なことをすべてやり続ける必要性—十字架にかかることの困難さに照らせば、罪を避けることは比べものにならないでしょう—)よりも、否定的なこと(すなわち、罪を犯さないこと)を強調していること、そして、2) 私たちの主は、そうすることを選んだとしても、悪い決断を下すことはできなかったという誤解を招くような意味あい： 私たちの主が成功されたのは、主が神であったので、決して疑いの余地がなかったことは確かですが、それにもかかわらず、主の人間的自由意志が私たちの自由意志と何ら異なっていたとか、その人間的自由意志からの良い一連の決断は、極端に困難なものではなかったと示唆するのは間違いです。実際、御自身の人間性があらゆる点で本物であったからこそ、御自身の苦しみも完全に本物でしたし、私たちと同じように試練を受け、誘惑されたからこそ、私たちが今まさに通過している坩堝を実際に経験した者として(しかも罪もなく、十字架に至るまで、私たちの

想像を超えるほどのものを)、私たちと完全に共感することができるのです：

おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。(ピリピ 2 章 8 節)

(8b)「万物を彼に服従させて下さった」という以上、服従しないものは、何ひとつ残されていないはずである。しかし、今もなお万物が彼に服従している事実を、わたしたちは見ていない。(9)ただ、「しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。(10)なぜなら、[父なる神が、]万物の帰すべきかた、万物を造られたかたが、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君を、苦難をとおして全うされたのは、彼にふさわしいことであつたからである。(ヘブル 2 章 8 節 b-10 節)

この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。(ヘブル 4 章 15 節)

f. 受肉と処女懐胎：

1) 受肉の性質：私たちの主が、本来の神性を失わない存在でありながら、真の人間性を身にまとい、真の人間になることを「受肉」と呼びます。ラテン語で「受肉」とは「肉」を意味する「caro/carnis」に基づく言葉です(イエスは「肉」をもってこの世に来られたからです)。私たちがすでに指摘したように、神である私たちの主が、このようにご自身を私たちと永遠に結ばれたこと、それ自体が、特にその出来事が必然的にもたらしたもの、すなわち、私たちの罪のために死なれることによって、ご自身の使命と御父のみこころを果たされたことは、途方もない出来事でした。受肉した時点から、イエスは神であると同時に人であり、唯一無二の神であり人であり、神性と真の人間性が永遠に一つの完全なお方として存在するのです。聖書はこの期間を「時代の結合」< 英文で「conjunction of the Ages」>と呼んでいます([ヘブル 9 章 26 節](#); [ローマ 5 章 6 節](#); [ガラテヤ 4 章 4 節](#); [第一テモテ 2 章 6 節](#); [テトス 1 章 3 節](#); [ヘブル 1 章 1-2 節](#); [第一ペテロ 1 章 20 節](#)参照)。そして、イエスの肉体的な誕生は、ユダヤ人の時代の延長を意味する一方([マタイ 11 章 12 節](#); [マルコ 1 章 15 節](#); [ルカ 12 章 49 節](#)-参照)、イ

エスの死、復活、昇天は教会時代の開始を告げるものです([使徒行伝 1 章 4-5 節](#); [マタイ 27 章 51 節](#); [マルコ 7 章 27 節](#); [ヨハネ 2 章 4 節](#), [7 章 8 節](#); [ヘブル 9 章 10 節](#)参照)²⁴。

2) イエスの肉体の受胎と処女懐胎の事実: イエスの受胎と懐胎は、世界の歴史の中で全くユニークなものでした。アダムとエバは神によって直接造られましたが、イエスは聖霊の導きによって受胎し、処女から生まれた唯一の人間です。主の受肉のこれらの側面は、それぞれを個別に考慮する必要があります。そして、この課題に直接言及した最初の予言が、人間としてこの世に誕生した主の二つの側面を述べていることは重要です:

それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエル(すなわち、「神はわれらと共におられる」)となえられる。(イザヤ 7 章 14 節)

「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。(マタイ 1 章 23 節)

神の関与がなければ、処女懐胎はもちろん不可能です。それゆえ、マリヤはこの点について天使に質問しても叱られませんでした([ルカ 1 章 34 節](#))、ゼカリヤは叱られたのです(ゼカリヤの場合、奇跡は前例があっただけでなく、通常の人間の理解能力の範囲内であったからです:[ルカ 1 章 18-20 節](#)と[創世記 18 章 10-14 節](#)を比較してください)。それ以前にもそれ以後にも、他のどのような人間とも違って、私たちの主の人間としての肉体の誕生は、いかなる被造物、いかなる人間、いかなる天使の代理でもなく、創造主ご自身、特に聖霊によってもたらされたのです。

イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。(マタイ 1 章 18 節)

「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。(マタイ 1 章 20 節 b)

²⁴ 『サタンの反乱』第五部『裁き、回復、そして置き換え』の II.9.a.i「キリストの誕生」の箇所参照。

御使が答えて言った、「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうでしょう。それゆえに、生れ出る子は聖なるものであり、神の子となえられるでしょう。(ルカ 1 章 35 節)

これら三つの引用文のすべてから明らかなように、私たちの主の人間としての肉体の受胎は超自然的なものでしたが、すべての人間の場合と同様に、主の人間としての生涯の始まり、つまり、主のユニークな場合において、受肉の始まりを示すのは、受胎よりもむしろ主の誕生なのです²⁵。

そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。(ヨハネ 1 章 14 節)

ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた。(イザヤ 9 章 6 節 a)

(9)しかし、あなたはわたしを生れさせ、母のふところにわたしを安らかに守られた方です。(10)わたしは生れた時から、あなたにゆだねられました。母の胎を出てからこのかた、あなたはわたしの神でいらせられました。(詩篇 22 篇 9-10 節)

それだから、キリストがこの世にこられたとき(すなわち、誕生のとき)、次のように言われた、「あなた(父)は、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えて下さった。(ヘブル 10 章 5 節)

その時(すなわち、御降誕の時)、わたし(神性なるイエス・キリスト)は言った、『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました(すなわち、生まれた)』。(ヘブル 10 章 7 節)

(6)あなたは、いけにえや供え物を喜ばれず、わたしの耳に穴をあけ(すなわち、「わたしにからだを与え、自発的なしもべとしてのしるしをつけ」、[出エジプト 21 章 5-6 節](#); [申命記 15 章 16-17 節](#)参照)、燔祭や供え物を求めませんでした。あなたは焼き尽くす供え物や罪の供え物を求めませんでした。

²⁵ 人間の霊は誕生時に授けられるので、この点において、神は「いのちを与える御霊」となるのです([第一コリント 15 章 45 節](#))。聖書の基礎 3A: 人間論、第 II.3.c 項「人間の霊は誕生時に神によって植え付けられる」を参照してください。

(7) [しかし]わたしは言った、見よ、わたしは[この世に(すなわち真のいけにえとして)]来たと。(8)わたしの神、あなたの喜ばれることをするのは、わたしの喜びです。あなたの掟がわたしの心の奥にあるからです。(英文直訳 詩篇 40 篇 6-8 節) (参照:[ヘブル 10 章 5-10 節](#))

3) 処女懐胎の必要性: 上記の預言の成就の必要性に加えて、上記の引用(特に[ルカ 1 章 35 節](#))にある処女懐胎とそれに続く処女降誕が、神が人となるため、私たちの永遠の主イエス・キリストが本物の人間の体を持ち、私たち皆が持っている肉と血を分かち合うための唯一の方法であったことは言うまでもありません。イエス・キリストがこの世に来られることが、私たちが救われるために絶対に必要なことでしたから、これが確かにイエス・キリストの受胎と誕生が、このような奇跡的な方法で行われなければならない第一の理由です。しかし、それと同じくらい重要な二次的な理由もあります。この理由も、それ自体がイエスが処女から生まれたことを必要とさせるものです。それは、純粋で罪のないイエス・キリストだけが、私たちの罪を負い、十字架上で罪を贖う資格があるということです([第二コリント 5 章 21 節](#); [第一ペテロ 2 章 22-24 節](#); [ヘブル 2 章 14-18 節](#), [4 章 15 節](#), [7 章 26 節](#); [第一ヨハネ 3 章 5 節](#); [イザヤ 53 章 9 節](#) 参照)。人間の父親がいなければ(ヘブル 1-2 章; 参照.[ヨハネ 19 章 34-35 節](#); [第一ヨハネ 5 章 6-8 節](#))、アダム血筋を通して罪の性質が受け継がれるという潜在的な問題を避けることができ、その結果避けられたのです。実際、罪の性質はアダムから男系を通して普遍的に受け継がれるので、処女降誕は、私たちの主が真に完全に人間であると同時に、罪の性質を持たずに生まれることができる唯一の方法でした。というのも、イエスの母マリアは類まれな霊性を持った女性²⁶であったにもかかわらず、人間であったため、私たち皆と同じように罪の性質を持っていたからです²⁷。意識的に罪を犯すことによって「罪を世にもたらした」のはアダムでした。エバも罪を犯しましたが、それは無知であったからです。こうして「死が全人類に広がる」原因を作ったのはアダムであって、エバではないので、罪の性質は女系ではなく男系を通して受け継がれます:

²⁶ これは、自ら進んでこの責務を引き受けた彼女の意欲から明らかであり、ルカによる福音書 1 章 46 節から 55 節(マニフィカトとしても知られる)で彼女が賛美を歌っていることにも反映されています。この賛美はハンナの歌(サムエル記上 2 章 1 節から 10 節)を想起させるものであり、あらゆる時代や場所において非常に稀な、すぐれた霊的成熟さと神との深い関係を物語っています。

²⁷ この問題については、『聖書の基本 3B: 原罪論』のセクション I.2.3「イエス・キリストの処女降誕」で詳しく説明されています。ルカによる福音書 1:28 で「恵みに満ちた」と訳されることがある称号は、完全な分詞であり、「恵みを受けた」と訳するのがより適切です。この称号は、同様にマリアの並外れた霊性を示すものではありませんが(また、彼女がまもなく受けることになる並外れた名誉を指し示すものではありません)、彼女が罪のない存在であったり、罪の性質を持たないことを示すものではありません。

このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように(すなわち、アダムのその罪の性質を肉体的に受け継いだ結果、普遍的な霊的死が生じた)、こうして、すべての人が罪を犯したので、(明らかに)死が全人類にはいり込んだのである。(ローマ 5 章 12 節)

このように、処女からお生まれになったイエスは、アダムの子孫のように罪の性質を受け継がれることはありませんでした。

4) キリストの誕生:

a) 預言されたキリストの誕生: キリストの歴史的な誕生が旧約聖書の中で広範囲に預言されていたことは、すでに見ました(上記 I.5.d.1 節)。

それゆえ、主はみずから一つのしるしをあなたがたに与えられる。見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。(イザヤ 7 章 14 節)([マタイ 1 章 23 節](#))

b) キリストの誕生日: そもそも、[ルカ 3 章 1 節](#)から、ヨハネが「テベリオの第十五皇紀に」(すなわち、紀元 28 年 8 月 19 日から紀元 29 年 8 月 18 日まで)洗礼を授け始めたことが分かっています²⁸。ルカは、イエスが公生涯の開始時に「およそ 30 歳」であったと述べており([ルカ 3 章 23 節](#))、ヨハネがバプテスマを授け始めた時よりも後の出来事であると述べているので、キリストの誕生が紀元前 1-2 年頃であることは疑う余地がありません。さらにこのフレーズは、キリストがまだ 30 歳の誕生日を迎えていなかったものの、もうすぐ 30 歳になる、つまり、29 歳で、その同じ年に 30 歳になる予定であったことを意味していると解釈するのが最も適切です(特に、ルカが正確さを求めていることを考えると、間違いなくそう解釈するしかありません:[ルカ 3 章 23 節](#)のヨハネ

²⁸ 皇帝テベリウスの生涯は比較的詳細に記録されており、この日付は確かに彼の単独統治の 15 年目を表しています。それより早い日付(26/27 年)を支持する人々は、古代の他の文化における同様の共同統治の即位の日付に基づいて、アウグストゥスとティベリウスの「共同統治」の期間から日付を始めるべきだと主張するだけです。アウグストゥスとティベリウスがお互いに敵対していたこと、ティベリウスの即位(タキトゥスが詳細に記録している)に今もなお影を落としていること、そしてユリウス・クラウディウス朝の共同統治の年代に関する他に類を見ない考え方から、西暦 28 年/29 年という年代に留めるのが最善であると思われます。

の宣教の正確な年代を参照)²⁹。したがって、12 月をキリストの誕生月とするならば、キリストは紀元前 2 年に生まれたこととなります(ローマ教皇ヨハネ 1 世の命により、ディオニシオス・エクシグウスが紀元 525 年頃に制定したキリスト中心の暦では、キリストは紀元前 1 年に生まれたことになっています)³⁰。この研究では、キリストの誕生に関連する年代的な詳細や議論をすべて詳述することは不可能ですが、紀元前 2 年という日付は、福音書の中で唯一明確な二つの年代的言及(すなわち、[ルカ 3 章 1 節](#)と[ルカ 3 章 23 節](#))に基づいているだけでなく、三つの重要な要素からも推奨されています。まず、ヨハネによる福音書の年代に関する詳細な記述で示されているように、キリストの宣教期間を三年間とすることが可能になります。³¹ 第二に、十字架刑の日付を西暦 33 年とすることが可能であり、これは独自に導き出された日付の中で最も可能性の高いものです。³² そして第三に、それはルカが言及した普遍的な国勢調査([ルカ 2 章 1-3 節](#))と最も正確に一致しています。

国勢調査に関して、ここで明らかにしなければならない二つの最初の点は、[ルカ 2 章 1-3 節](#)に記されている普遍的な国勢調査はキリニウスの国勢調査ではないということです。そして、二つ目に、ルカは実際にはこれら二つを同一視していないということです。紀元 6 年から 11 年までローマのシリア総督であったキリニウスは、紀元 6 年から 7 年まで国勢調査を行ったことは確立されています。(ヨセフス著『*B.J.*』2.118; 2.433; 7.253; 『*A.J.*』18.4-10; 18.23-25; 20.102 を参照)。³³ それゆえ、英語版の聖書では、

²⁹ これは重要なことです。なぜなら、30 歳は神への奉仕に必要な成熟と一般的に関連付けられている年齢だからです(民数記 4:3、23、30、35、39、43、47; [歴代誌第上 23 章 3 節](#)参照)。ちなみに、[ルカ 1 章 26 節](#)から明らかのように、ヨハネはイエスより 6 か月年上であり、従って、彼がその務めを始めたときも「およそ(まだ達してはいない)30 歳」でした。

³⁰ 紀元前 1 年ではなく紀元前 2 年が用いられるのは、ヘロデの死の前にキリストの誕生を置く必要があるからです([マタイ 2 章 1-19 節](#)参照)。ヘロデの死が紀元前 2 年であるという日付は多くの人々にとって受け入れがたいものですが、ヘロデの死がそれ以前であったとする唯一の情報源は、やや趣味的な歴史家であるフラウィウス・ヨセフスであることに留意することが重要です。さらに、この点に関するヨセフスの記述は、いずれにしても誤って解釈されている可能性が十分にあります。ヘロデ大王の治世の年代」という論文で、紀元前 1 年 1 月をヘロデの死の時期として提案している W.E. Filmer 著『*Journal of Theological Studies* 17』(1966 年)283-298 ページを参照してください。この日付であれば、キリストが紀元前 12 月 2 日に誕生し、[マタイ 2 章 1-9 節](#)の出来事が起こり、ヘロデが直後に死亡したという可能性に十分な余裕があります。

³¹ 『[サタンの反乱](#)』の第 5 部、II.9.a.iii「キリストの十字架刑」の、ヨハネとイエスの各時代の比較年表を参照。＜邦訳印刷本では、432 頁＞

³² 『[サタンの反乱](#)』第五部 II.9.a.iii、「キリストの磔刑」をご覧ください。＜邦訳印刷本では、430 頁＞

³³ キリニウスの国勢調査については、特に E. Schürer 著『イエス・キリストの時代におけるユダヤ民族の歴史』(エジンバラ、1973 年)第 1 巻、399-427 ページを参照してください。Schürer の結論は

ルカのギリシヤ語訳がどうしても誤訳になり、この二つの別個の国勢調査が同一であるかのように見えるのは残念なことです。正しく訳すと、[ルカ 2 章 2 節](#)は「これはキリニウスがシリアを統治する**前**に行われた国勢調査である」と述べています³⁴。

ルカにとって、キリスト誕生の時に行われた国勢調査と、後にキリニウスが行った国勢調査との区別を指摘することは重要でした。というのも、キリニウスの国勢調査の方が 7 年も後に行われ、また武力抵抗を引き起こしたという点でも注目されたため、ルカの読者はキリニウスの国勢調査と [2 章 2 節](#)に記されている、以前の国勢調査とを容易に混同してしまったからです(皮肉なことに、現代の解釈者たちはほとんど例外なく、この混同を避けることができませんでした)。ローマ帝国は軍事力だけでなく、官僚組織でも成功を収めていました。当然のことながら、正確な国勢調査のデータ(特に課税に関するもの)は、その行政・財政運営に不可欠なものでした³⁵。アウグストゥスは、その最も栄誉ある業績の概説書である “res gestae” の中で、国勢調査に関する仕事にかなりの紙面を割いています(CIL v.3, in loc., para.8)。世俗の歴史家たちは、上記のアウグストゥスの発言から、帝国全体の定期的な国勢調査が行われていたと推定することについて(私の見解では、不当に)懐疑的です。実際、アウグストゥスが紀元前 9/8 に行ったローマ市民の国勢調査は、同時期にローマ帝国のエジプトで行われた国勢調査の証拠と類似しています。³⁶ このエジプトの国勢調査サイクルは、主にパピルス文書から知られています。パピルスは一般的に、古代から極度に乾燥した気候の地域でしか残っていないため(すなわち、帝国の他のほとんどの地域では該当しない条件)、この事実は重要です。歴史的に重要な文書を保護するために、多大な努力が必要であったような気候の地域では、国勢調査の公式報告書のようなありふれた記録は保存される可能性が低いのです。つまり、文書が残っていないために、私たちが知ることでできないことがたくさんあるのです。しかし、B.C.9/8 と A.D.6/7 の国勢調査に、アウグストゥスとテベリウスのもとでの A.D.13/14 の国勢調査の事実を加えると、7 年周期のパターンが浮かび上がってきます。紀元前 2 年と紀元前 1 年は、この繰り返しの

狂信的な世俗主義であり、誤った考えに基づいているものの、彼の詳細な考察と参考文献は非常に貴重です。

³⁴ 最初のフレーズにギリシヤ語の定冠詞がないことから、「census」が述語であることが分かります(つまり、「これは、ある特定の国勢調査が起こった...」)。2 つ目の問題は、ルカが属格を支配するために最上級の形である *prote* を使用していることです(すなわち、「総督職の『最初』に起こった」という意味で、総督職の前を意味します)。この用法は、洗礼者ヨハネがイエスについて述べた箇所であるヨハネによる福音書 1:15 および 1:30 にも見られます。「彼は私の『最初』であった」(すなわち、私の前)という意味です。

³⁵ キレネの勅令では、陪審員の選任に国勢調査の分類が使用されています(SEG 9.8.1)。

³⁶ 特に、P.Oxy. II 254、207-214 ページの Grenfell と Hunt の議論を参照してください。

サイクルの中で唯一の空白期間です。³⁷ アウグストゥスが、特定の地方だけでなく、聖書の記録の記述とおり、ローマ帝国の支配下にあったすべての領土に、聖書の記録とまったく同じように、ローマの国勢調査の組織的な適用を始めたのは、行き当たりばったり行うよりもむしろ、綿密な組織化を好む彼の傾向に合致しているように思われます。:

そのころ、全世界(すなわち、ローマ帝国全体)の人口調査をせよとの勅令が、皇帝アウグストから出た。(ルカ 2 章 1 節)

ローマ帝国の地方における国勢調査の特徴として、このトピックに関するデータが不完全でありながらも示しているのは、登録された年の前年度の結果が記録されているということです³⁸。このように、国勢調査はおよそ二暦年をかけて行われ、最初の年は登録年、二年目は記録年となります。しかし、正式に記録された年の翌年の 4 月 15 日までに所得税を申告する今日のアメリカとは異なり、ローマ帝国の制度では、国勢調査は、最初の年に行われ(そして正式に登録されました)。評価可能な富と法的地位の「スナップショット」でした。帝国の調査はその翌年に認定、認証、そして必要とあれば修正、また記録を行っていました。少なくとも、現存する証拠はそれを強く示唆しています。そして、この最後の事実と、ヨセフとマリヤが B.C.2/1 の普遍的な国勢調査の法的要件を満たすためにベツレヘムに旅した可能性とを組み合わせると、キリストが(公式記録の B.C.1 年ではなく)登録の年である B.C.2 年に生まれたという上述の命題に再び行き着くことになります。

c) キリスト誕生の場所: 主のベツレヘムでのご降誕は、ダビデの子の到来に関する預言を成就させ、そのユニークな誕生の瞬間から、メシヤであることの具体的な証拠を物語っています(参照:[イザヤ 9 章 1-2 節](#); [マタイ 2 章 23 節](#); [4 章 14-16 節](#)):

しかしベツレヘム・エフラタよ、あなたはユダの氏族のうちで小さい者だが、イスラエルを治める者があなたのうちからわたしのために出る。その出るのは昔から、いにしえの日からである。(ミカ 5 章 2 節)

ベツレヘムで生まれることは、「イスラエルを治める」ために来ると預言されたダビデの偉大な子として、私たちの主が相続し、王位につくことを証明し、正当化するという

³⁷ 実際、この時期(すなわち紀元前 1 年から 2 年)にはガリアでも地方別人口調査が行なわれています。オックスフォード古典辞典(第 2 版)の「census」の項を参照してください。

³⁸ Grenfell and Hunt, op. cit., 208f.

重要な問題にも関連しています(主を通して私たちが永遠の相続を分かち合うことの重要性を参照: [ローマ 8 章 17 節](#); [ガラテヤ 3 章 29 節](#); [エペソ 1 章 11-18 節](#), [3 章 6 節](#); [コロサイ 1 章 12 節](#), [3 章 24 節](#); [テトス 3 章 7 節](#); [ヘブル 6 章 17 節](#), [9 章 15 節](#), [11 章 9 節](#); [第一ペテロ 1 章 4 節](#), [3 章 7 節](#); [ヤコブ 2 章 5 節](#); [黙示録 21 章 7 節](#))。ベツレヘムはもちろんだビデの町であり、主の肉的血統(マリアを通して)と法的血統(ヨセフを通して)は共にだビデに遡り、だビデの子孫の地上の相続の地理的な中心地として、ベツレヘムと密接に関係していました。そのため、だビデの血筋を受け継ぐと主張する者、特にメシヤであると主張する者にとっては、ベツレヘムで生まれることが必須条件でした([マタイ 2 章 5 節](#); [ヨハネ 7 章 42 節](#)参照)。さらに、ベツレヘムという名は「パンの家」を意味し、真のメシヤであるイエスは、信仰によって永遠の命を得る「命のパン」であることから、この事実も預言的な意味を持つことは間違いありません([ヨハネ 6 章 32-58 節](#)参照)。

すでに見てきたように、[マタイ 1 章 1-17 節](#)と[ルカ 3 章 23-38 節](#)の系図は少し異なった目的をもっています。マタイの系図はイエスの法的系譜(イエスの「継父」ヨセフを通して)を、ルカの系図はイエスの血統(イエスの真の人間性を疑問の余地なく示すために、マリアからアダムまで遡る)を示しています。どちらの系図もイスラエルの王家を通してだビデに遡り、マリア(イエスの血統)とヨセフ(イエスの相続の系譜)の両方が、あらゆる点で王家の血統を受け継いでいることになります。このことはまた、マリアとヨセフが異論を挟むほどではないにせよ、遠縁であったことを意味します。このことは一族内での相続を維持するために、この結婚を勧める理由となりました(以前も以後も、お見合い結婚では珍しいことではありません)。さらに、マリアとヨセフはそれぞれだビデの家系であったため、ベツレヘムとその近郊に「正式な相続地」があったはずで、この事実は、ユダヤ人の系図記録(特に王族と祭司の系図、[エズラ記 2 章 62 節](#)参照)にとっても、ローマ帝国の行政目的にとっても重要なことでした³⁹。上述したように、ローマは地方で定期的に国勢調査を行い(7 年ごとに行われ、イエスの誕生時の国勢調査が最初の「世界的な」国勢調査でしたが、それ以前にもいくつかの地方で行われていました)、そのような場合にはまず「登録の年」があり、各個人は自分の正式な居住地で、自分の財産を登録しなければなりません。勿論、このことは、当時は今日よりも遥かに重要なことでした。市民権や市民としての権利は、ローマ人以外の市民にとっては、その地方に縛られていたからです(このことは、今日で言えば、アメリカ市民がその権利を維持し、税金を納めるために、度々元の州に戻らなければならないことに

³⁹ 天使ガブリエルを訪ねた後、マリアは「ユダヤの丘の町」へ旅立ち、洗礼者ヨハネの母親となる従姉妹のエリサベツ(ルカ 1:39)を訪問したことが分かっています。洗礼者ヨハネは「あなたの親戚」(ルカ 1:36)でした。このことは、マリアの直系家族はナザレを故郷としていましたが、マリアにもユダヤに親族がいたことを明確に示しています。

似ています)。マリヤの近親者について具体的なことは何も分かりませんが、律法では、男兄弟がいないために先祖代々の遺産を相続する女性は、自分の部族内、自分の直系血族内で結婚することが義務付けられていました([民数記 36 章 6-9 節](#))。ですから、マリヤとヨセフはそれぞれ先祖代々の遺産を受け継ぐ者であり、主はこの例で(他の例も同様です; 上記 I .3.a 節参照)、そのユニークな人間性を象徴する「二重の分け前」を与えられたのです。さらに、ヨセフだけでなく、マリヤにもベツレヘムで国勢調査に登録する理由があったとすれば、ヨセフがマリヤの妊娠がかなり進んでいたにもかかわらず、マリヤを連れて行く必要があったと考えた理由が説明できます。いずれにせよ、これらの出来事はすべて、預言に従って、ダビデの町ベツレヘムで主の誕生をもたらすために、共に働いたのです。

d) キリスト誕生の時期: 聖書は、キリストがこの世に来られたのは、この世が始まる前から神が定めておられた、まさにその正確な時であったと明言しています。実際、神は、神のご計画の要であり、神の視点から正しく理解されるならば、歴史の中心人物であるイエス・キリストを中心に、歴史の真の時刻表を完全に構築されたのです

40。
。

キリスト[の来臨]は、天地が造られる前から、あらかじめ知られていたのであるが、この終りの時に至って、あなたがたのために現れたのである。
(第一ペテロ 1 章 20 節)

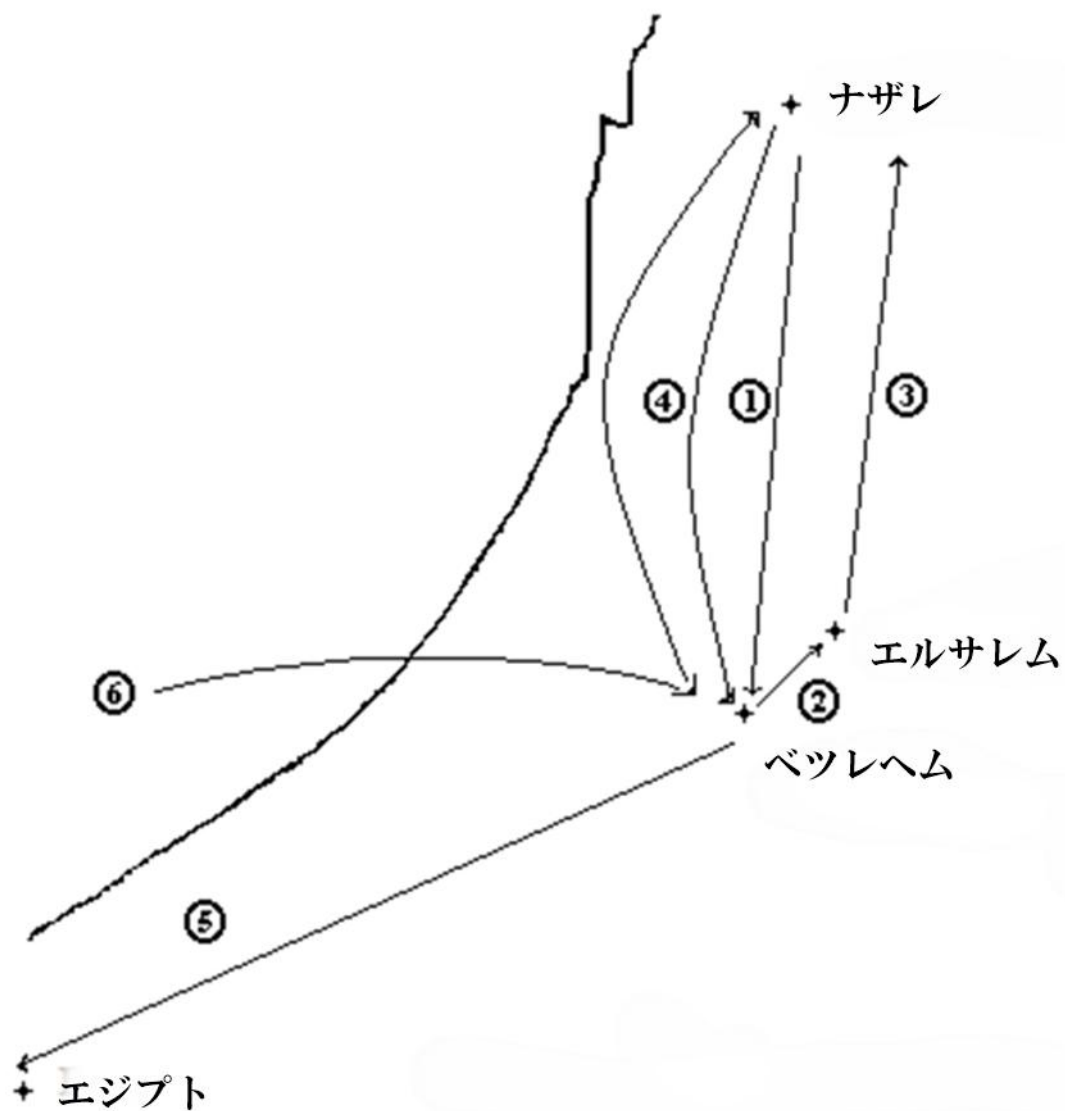
(1)神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、(2)この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。(ヘブル 1 章 1-2 節)

1. イエスは「時が満ちた」時に来られました: ([マルコ 1 章 15 節](#))
2. イエスは「時いたって」来られました: ([ローマ 5 章 6 節](#))
3. イエスは「時の満ちた時」に来られました: ([ガラテヤ 4 章 4 節](#))
4. イエス様が来られたのは、「時の満ちる」時でした: ([エペソ 1 章 10 節](#))
5. イエスは、まさに「時代の接合期」に来られたのです: ([ヘブル 9 章 26 節](#))

⁴⁰ 「サタン」の反乱 第 5 部:裁き、回復、そして置き換え」II.1「人類の歴史における神の計画:人類の歴史における唯一の中心人物」参照。

e)キリストの誕生にまつわる出来事:メシヤの到来は、当時の宗教界が期待していたような盛大なお祭り騒ぎとはなりませんでした。イエスの到来は、ユダヤ教の指導者たちに告げられず、夜、羊飼いたちに、暗闇に輝く光として告げられ([イザヤ 9 章 1-7 節](#); [ルカ 1 章 78-79 節](#))、良い知らせは遜る者に告げられました([イザヤ 61 章 1 節](#); [ルカ 1 章 52 節](#))。同国人に知らされるのではなく、異邦人、つまり、単なる人の伝統ではなく神の言葉に従う信者たち([マタイ 15 章 9 節](#); [マルコ 7 章 7 節](#))、この世のものを礼拝するのではなく([マタイ 23 章 1-36 節](#))、救い主を礼拝するためにこの世のものをを用いる信者たちに、主の来臨が知らされたのです。そして、イエスは栄光に輝いて来られたのではなく、肉体の誕生を通して、まだ栄光を受けていない真の人間として来られ([ヘブル 2 章 14-17 節](#); [4 章 14-16 節](#))、私たちのために死ぬためにこの世に来られたのです([ヘブル 10 章 5-10 節](#))。

イエス、ヨセフとマリヤの初期の旅の経路



- ① ナザレからベツレヘムへ(ルカ 2 章 4-20 節)
- ② ベツレヘムからエルサレムへ(ルカ 2 章 21-38 節)
- ③ エルサレムからナザレへ(ルカ 2 章 39 節)
- ④ ナザレからベツレヘムへ戻る(マタイ 2 章 1-12 節より推測される)
- ⑤ ベツレヘムからエジプトへ(マタイ 2 章 13 節)
- ⑥ エジプトからナザレへ(マタイ 2 章 19-23 節)

e) キリストの誕生にまつわる出来事

1. 羊飼いたちへのお告げ:

(8)さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。(9)すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。(10)御使は言った、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。(11)きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。(12)あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられるしるしである」。(13)するとたちまち、おびたしい天の軍勢(選ばれた天使たち)が現れ、御使と一緒に神をさんびして言った、(14)「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々(＝信者)に平和があるように」。(15)御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは「さあ、ベツレヘムへ行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と、互に語り合った。(16)そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。(17)彼らに会った上で、この子について自分たちに告げ知らされた事を、人々に伝えた。(18)人々はみな、羊飼たちが話してくれたことを聞いて、不思議に思った。(19)しかし、マリヤはこれらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた。(20)羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った。(ルカ 2 章 8-20 節)

羊飼いとしての忠実な経験を通して、神の民イスラエルを導くために神が備えられた、彼の有名な先祖であるダビデ王にならって、イエスは羊の良い羊飼い([ヨハネ 10 章 14 節](#))であり、私たちの主は、キリスト教会を導く上で本当に重要なことは何かを示すために、ペテロや彼以降のすべての「牧者」に対して、この同じ例えを用いました。すなわち、神の言葉を通して群れに食べ物を与え、彼らの安全を確保することです。[\(ヨハネ 21 章 15-19 節; 参照. \[ルカ 10 章 38-42 節\]\(#\)\)](#)。その即座の反応から明らかなように、天使たちによってメシヤの到来を告げられた羊飼いたちは、明らかに「イスラエルの希望」([使徒行伝 28 章 20 節](#)参照)を待ち望んでいた信者たちでした。私たちの主についての知らせは、エルサレムで集まった大群衆や民衆の支配者たちにではなく、ユダヤの支配者、祭司、サドカイ人、パリサイ人、その他の権力者たちの思いもつかなかったような人たちに告げられたのです。しかし、これらの忠実な信者たちは、天使に言われたことに対して従順であり、メシヤが最も不名誉な状況で卑しい人間の赤ん坊として生まれたという事実(世俗的な「評判の良い人々」が最もいら立たせられたであろうことであり、実際、私たちの主の初降臨の間中、そうでした)を不快に感じることもありませんでした。

2. 飼い葉おけの中の赤ん坊 (ルカ 2 章 4-20 節):

ヨセフとマリアがベツレヘムに滞在した場所には、生まれたばかりの主を寝かせるベビーベッドがありませんでした。このため、彼らは代わりに飼い葉おけを使いました。飼い葉おけとは、動物の餌を入れるのに十分な深さのある持ち歩きのできる木の箱のことで、通常は納屋で使われるものですが、ここではベビーベッドの代わりに使われました。これは、羊飼いたちがベツレヘムで見つけた赤ん坊が本当にメシヤであるという、彼らへの「しるし」であり、赤ん坊が「くるまれていた」という事実、つまり、その時代に生まれたばかりの赤ん坊に着せるのに普通使われていた衣に包まれていたというのが「しるし」だったのではなく、この世の主であり、すべてを創造し、その力強い御言葉によってすべてを保っておられるお方が、粗末なものの中に横たわっていたという事実が、注目に値するほどだったのです。このしるしは、神の子がこの世に来て、真の、栄光のない人間となり、しもべの姿になることが必要であることを明確に示すケノーシス、あるいは謙虚さでした。それは、特権や贅沢の人生ではなく、また自分が何者であって、全人類のために何をしようとしていたかのために感謝を受けるような人生でもなく、むしろ、謙虚さ、欠乏、そして、恩知らずな最もひどい待遇を経験することによって特徴づけられる、彼が歩むことになる人生を象徴し、示すものでした。

私たちの主の誕生に関するこの特別な側面について、多くの一般的な誤解があることを考えると、ここでさらにいくつかの説明をする必要があります。「宿屋に部屋がなかった」ので、イエスは納屋でお生まれになり、ヨセフとマリアはそこに泊まらなければならなかったという考え方は、今日では非常に一般的ですが、次の訳が示すように、ギリシヤ語で原文が意味しているものとは違う完全な誤解に基づいています:

そして、[マリアは]その子、初子を産み、その子を布で包み、飼い葉桶(ギリシヤ語 *φάτνη*, *phátē*)に寝かせた。宿屋には[その子を寝かせるのに][ふさわしい]場所がなかったからです。(英文直訳ルカ 2 章 7 節)

そして[羊飼いたちは]急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子[イエス](単数)を捜しあてた。(つまり、ルカ 2 章 7 節で説明されているものです。これが彼らが求めていたしるしです) (ルカ 2 章 16 節)

「場所」と訳されるギリシヤ語(*τόπος*, *tópos*)は、「面積」や「空間」という意味でのみ「部屋」と訳せるのですが、例えば欽定訳聖書が暗示していると思われるような、家

(あるいは宿屋)の「部屋」という意味をここでは**持ちません**。第二に、上記の飼い葉おけ(ギリシヤ語ファトネ、φάτνη)と訳されている単語は、まさに牛に餌を与えるために使われる比較的小さな長方形の木の箱を指しており、それ以外の意味を持ち得るかは非常に疑しいところです⁴¹。欽定訳ではその箇所の上記の訳(すなわち、英語では”manger{飼葉おけ}”は桶と同時にうまや全体を意味することがある)に至る解釈はわかります。しかし、欽定訳の英語の言葉の誤解からの推定が始まり、「馬小屋」の物語は残念ながら文化的な勢いがつくほどまでに発展してしまいました。「馬小屋」やそこに飼われているとされる動物たちに誤った焦点が当てられるため、本来注目すべき点、すなわち、ここで扱われている屈辱の印が主のみに属し、主のみが注目されるべきものであったという事実が隠れてしまっているからです。この屈辱の印は主の両親にはあてはまりませんし、ましてや場所にもあてはまるものではありません。飼い葉おけは彼(キリスト)の救世主であることの印で、また、彼(キリスト)が私たちのために耐える謙虚さと屈辱の人生の象徴でもありました。さらに、飼い葉おけは、私たちのために唯一の御子を犠牲に捧げることで、天の父が世界に与える贈り物が重大なものであることの象徴でもありました。生命の主であり、宇宙の創造主であり、永遠に栄光ある神は、死ぬために生まれました。主は、棺桶のような汚い木箱に入ってこの世に生まれ、復活前に荒々しい木の十字架に釘付けにされてこの世を去りました。私たちが死ぬことがなく、主と共に永遠の命を得るために、主は私たちの身代わりとなって死なれたのです。

3. イエスを神殿で聖別し捧げる(ルカ 2 章 21-23 節) :

私たちの主は、アブラハムに与えられた契約の儀式に従って、生後八日目に割礼を受け([ルカ 2 章 21 節](#); [創世記 17 章](#); [レビ 12 章 3 節](#); [ヨハネ 7 章 22 節](#); [使徒行伝 7 章 8 節](#); [ガラテヤ 3 章 17 節](#)参照)、天使がヨセフとマリヤに個別に与えた指示に従ってイエスという名を与えられました([マタイ 1 章 21 節](#), [1 章 25 節](#); [ルカ 1 章 31 節](#)参照)。長男の誕生に際して女性に義務付けられている 40 日間の別離と清めの期間が終わると([ルカ 2 章 22 節](#); [2 章 39 節](#); [レビ 12 章 1-4 節](#)参照)、一家はマリヤために必要な罪の捧げ物を捧げるため、また神殿でイエスを主に聖別するために([ルカ 2 章 23 節](#); [出エジプト 13 章 2 節](#); [民数記 3 章 13 節](#), [8 章 17 節](#)参照)、ベツレヘムからエルサレムまでの短い旅をしました([レビ 12 章 6-8 節](#), [レビ 5 章 7 節](#); [5 章 11 節](#)参照)。初子として生まれたすべての男子に求められる贖いの代価、「銀五シケル」も支払ったことでしょう。([出エジプト 13 章 11-15 節](#), [34 章 20 節](#); [民数記 3 章 13 節](#), [3 章 44-48](#)

⁴¹ 「納屋」の可能性を主張する論拠は、例えばバウアー、アーント、ギングリッチのギリシヤ・英語辞典 Bauer, Arndt and Gingrich Greek English Lexicon によって示されていますが、疑わしい類似点を挙げているという点において、説得力に欠けるものでしかありません。

節, [18 章 14-16 節](#))。⁴² ヨセフとマリヤはこれらの詳細をすべて注意深く果たしていたから、マリヤのために用意した罪の捧げ物が、小羊の代わりに安価なもの、すなわち、「やまばと二羽か二羽の家ばとのひな」([ルカ 2 章 23 節](#))であり、1)彼らは裕福な人々ではなかったこと、2)賢者らはまだ来ておらず、贈り物の金、乳香、没薬はまだイエスに捧げられていなかったと結論付けることができます。これらの贈り物は後にエジプトへの逃亡中に一家を支えるために必要なものでした。

最後に、神殿での主の初出は、キリストを見るまでは死なないと聖霊に告げられていたシメオンの言葉([ルカ 2 章 29-32 節](#)、ヌンク・デミティス nunc dimittis<ラテン語:「今こそ主よ、僕を去らせたまわん」-wp>としても知られる)によって、メシヤであることをさらに二人が証言する機会にもなりました([ルカ 2 章 26 節](#);参照:[ルカ 2 章 30 節](#):「私の目が[今]あなたの救いを見た」)、また預言者アンナの言葉によると、その言葉はそのまま記録されてはいませんが、「イスラエルの贖いを待ち望む」すべての人に向けられたものでした。これは、メシヤだけが成し遂げることができる偉業です([ルカ 2 章 38 節](#))。

4. 星と博士たち([マタイ 2 章 1-18 節](#)):

神殿での主の初出の後、ヨセフとマリヤは主イエスと共に「自分たちの町」ナザレに戻りました([ルカ 2 章 39 節](#))。その後、具体的な理由は語られていませんが、一家はその直後に再びベツレヘムに戻りました。神のお告げがあったのかもしれませんが、マリヤとヨセフの先祖の町であるダビデの町が、メシヤがよみがえるのにふさわしい場所だと自分たちで判断したのかもしれません。いずれにせよ、イエスが神殿で初出された後、彼らがナザレに短時間戻ったのは、ナザレにあった家屋を閉じ、引っ越しのために持ち物をまとめるためだったという仮説には妥当と思える理由が多くあります: [マタイ 2 章 11 節](#)では、マギ(博士ら)は彼らを「宿屋」ではなく「家」で見つけており、このことから、一家は二度目の南下後、ベツレヘムに定住することを望んでいたのかもしれませんが(エジプトからの帰還後、ヨセフが最初にナザレではなくユダヤに住もうとしたことも、彼がベツレヘムにすでにあった新しい家庭に戻るつもりであったことを示唆しています)。

⁴² 割礼は正確に 8 日目に行わなければなりませんでした([ペリピ 3 章 5 節](#)参照)が、長子の贖いについては、特定の日が定められていません。[民数記 18 章 16 節](#)で使われているヘブル語の「mibben-chodesh」は、むしろ、子供が満 1 か月になるまで、親は子供を捧げ、贖いの代価を支払うのを待つべきであることを示唆しています。

⁴³ その頃、世の光であるメシヤの誕生を告げる星を追って、マギが到着したのです⁴⁴。

(78)これはわたしたちの神のあわれみ深いみこころによる。また、そのあわれみによって、日の[光]が上からわたしたちに臨み、(79)暗黒と死の陰とに住む者を照し、わたしたちの足を平和の道へまっすぐに[歩ませる]であらう」。(英文直訳 ルカ 1 章 78-79 節)([イザヤ 9 章 2 節](#); [マラキ 4 章 2 節](#) 参照)

イエスは世の光です(前述 I .4.b.18 参照)。聖書全体を通して、光は、特に闇と対照すると、力強い比喻です。光は善であり([創世記 1 章 3 節](#))、光は真理であり([ヨハネ 3 章 21 節](#))、光は命です([ヨハネ 1 章 4 節](#))。闇とはこれらがなく、真の光であるイエスが来られたのはこの世の闇の中でした。ですから、主の誕生を告げる光の星は、暗闇の中で輝いており、主の初降臨の象徴としてふさわしいのです。主だけがいちであり、光であり、私たちを取り巻く闇の中にはっきりと見え、主の光のもとに来ようとするすべての人を引き寄せるのです。

(6)「主なるわたしは正義をもってあなたを召した。わたしはあなたの手をとり、あなたを守った。わたしはあなたを民の契約とし、もろもろの国びとの光として与え、(7)盲人の目を開き、囚人を地下の獄屋から出し、暗きに座する者を獄屋から出させる(すなわち、肉体的、霊的な贖い)。(イザヤ 42 章 6-7 節)

この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。(ヨハネ 1 章 4-5 節)(参照:[ヨハネ 8 章 12 節](#), [12 章 46 節](#))

「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。(第二コリント 4 章 6 節)

⁴³ 参照. Thomas and Gundry, A Harmony of the Gospels (Chicago 1978) p. 30 note o.

⁴⁴ したがって、羊飼いと東方の三博士の訪問がほぼ同時期であったという一般的な考え方は正しくありません。東方の三博士が去った直後に、家族はエジプトに逃れました(マタイ 2 章 13 節)。この事実から、ナザレへの最初の帰郷は、東方の三博士の訪問よりも前に行われたと理解する必要があります。ルカ 2 章 39 節は、家族がナザレに帰郷したのは、イエスを神殿で聖別した直後であったことを明確に示唆しています。

すべての人を照すまことの光があつて、世にきた。(ヨハネ 1 章 9 節)

しかし悲しいことに、主は全世界に光を与えるために来られたにもかかわらず、目を開いて真理の光を見ようとするのはほんの一握りの人達です。ベツレヘムの星は、ユダヤ全土のはるか彼方まで見えていたにもかかわらず、それがメシヤのしるしであることを認識するのは、ごく少数の異邦人に委ねられていただけでした。このように、暗闇の中で輝く星が、メシヤへの道、世の真の光への信仰による救いへの道へと導くというのは、イエスはご自分の民のもとに来られたにもかかわらず、その人々は概して、イエスを受け入れようとはしなかったという事実を表す、適切な比喻なのです。

彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。(ヨハネ 1 章 11 節)

そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛したことである。(ヨハネ 3 章 19 節)

マジ(これはペルシア語で、私達{英語圏}の magic{魔法}はギリシヤ語に由来している)は伝統的に「賢者」として知られています。これらの異邦人が神の国を待ち望む信仰者であったことは、彼らの行動から明らかです:

- 彼らは遠くから困難な旅をして来ました([マタイ 2 章 1-2 節](#))。
- 神が彼らの旅を導きます([マタイ 2 章 1-2 節](#), [2 章 9-10 節](#), [2 章 12 節](#))。
- メシヤに高価な贈り物をします([マタイ 2 章 11 節](#))。
- ベツレヘムでイエスを見つけると「礼拝」します([マタイ 2 章 2 節](#), [2 章 11 節](#))。
- ヘロデのもとに帰るなど警告した神の夢に従順に応えます([マタイ 2 章 12 節](#))。

賢者たちが信仰者として認められるのは、彼らがどのような手段と、動機で来ることになったのか、すなわち、聖書を熱心に調べることによってであったことからわかります:

[賢者たちは、](言った、)「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。(マタイ 2 章 2 節)

…ヤコブから一つの星が出、イスラエルから一本のつえが起り… (民数記 24 章 17 節後半)([マタイ 2 章 1-13 節](#); 参照:[創世記 49 章 8-12 節](#); [申命記](#)

[マタイ 2 章 1 節](#)では、賢者たちは「東方から」来たとされており、彼らがメシヤに関する聖句と預言を知っていて、心から熱心にそれらに応えていることを考えると、この博士たちが、ダニエルが監督として任命され、彼がその長として長く在任している間、疑いなく大きな影響力を及ぼしていた学会の後継者であることは確かなようです([ダニエル 2 章 48 節](#))。キリストの時代、バビロンはもはや重要な政治的首都ではありませんでしたが、このような「高等学問」の中心地でした。当時、「魔術師」という称号を名乗ったすべての人々に「信者」という真に祝福された称号を与えたいとは思いませんが、聖典に献身したこの異邦人(の博士ら)の小さな一団は、真理を信じる信仰に報いられ、このような特別な形で神に用いられたのです。聖典に献身したこの小さな異邦人のグループは、真理への信仰の報いを受け、このような特別な方法で神に用いられました。長く研究した予言の成就を体験し、メシヤを自分の目で見ることができただけでなく、「金、没薬、乳香」という高価な贈り物を贈ることで、神のご計画に大きく貢献することが許されたのです。金はイエスの神性を表し(神殿の象徴ではよくあることですが、金は希少で貴重で栄光に満ちたものです)、没薬(香を焚いたり、防腐処理に使われる高価な物質)は、私たちのために死ぬため受け継いだ人間性を表し、乳香の甘い香りはイエスの犠牲が受け入れられることを表しています(参照:キリストの御業を表すレビ人の供え物の「甘い香り」: [エペソ 5 章 2 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#)参照)。これらの貴重な宝物は、主とその家族がエジプトに逃れるための資金となり、エジプトにいる間、彼らを支えたことはほぼ間違いありません⁴⁵。

星そのものについては、この天体を現代天文学が定義する意味での「星」、あるいは小惑星や彗星と考えるのは間違いです。マタイによる福音書のこの光り輝く天体の動きについての記述は、この天体がそのような現象と同一視されるべきではないこと、また、古今東西を問わず、この天体の出現を示す世俗的な証拠を探しても無駄であることをはっきりと示しています。この特別な「星」の目的は、メシヤの到来を告げる[民数記 24 章 17 節](#)の預言の成就だけでなく、博士たちをベツレヘムに導くことでもあります。この特別な「星」は、実際に賢者たちをキリストの誕生の場所へと導き、実際、キリストとマリヤとヨセフが滞在していた家へと導いたのです([マタイ 2 章 9-10 節](#))。この星はキリストの誕生の時に現れ、預言を成就させ、博士たちをユダヤに連れて行き、イエスのもとに導き、そして、その目的が達成された後、姿を消したのです⁴⁶。これは完全に超自

⁴⁵ この見解はクリス・ロジャース師 Rev. Chris Rodgers のおかげです。

⁴⁶ マタイはそう言っていないですが、天使はしばしば星として描写され、星として現れることが多いの

然的な出来事であり、神によって予言され、綿密に指示されたものであり、科学によって説明されたり合理化されたりするような、予測可能な、あるいは認められている天文学的な出来事ではありません。これは全くの奇跡だったのです。

5. エジプトへ逃れることとナザレへの二度目の帰還:

別の天使の警告([マタイ 2 章 13-15 節](#))という形での神の介入によって、一家はベツレヘムの新居から急遽出発し、ヘロデの支配下にはなかった、帝国のある場所、すなわちエジプト(当時はローマ帝国の属州)に避難することになりました。夢を見たヨセフがその夜に従ったという事実は、彼の主に対する優れた応答性の証拠です。このような迅速な対応は、私たち全員とは言わないまでも、ほとんどの人にとって難しいことでしょう。最初の旅ではマリヤが身ごもり、二度目の旅では幼い子供を連れ、三度目の旅では持てる限りの家財道具を積んで、非常に困難な状況下で、陸路で何度も長い往復の旅をしたところでした。新しい家によく落ち着いたところで、少なくとも新しい家の手配や旅の準備のため数日間延期する誘惑はもちろん理解できます。しかし、ヨセフはその夜、主に対して完全に謙遜で従順になって、家族と共に逃げ出したのです。このことから、またヨセフのマリヤに対する先ほどの思いやりのある扱いから、私たちの主イエスは、神を畏れ、霊的に成熟した二人の特別な人物を養育者として与えられたことが読み取れるでしょう。

ヘロデがベツレヘムで「二歳以下」の男子を皆殺しにするように命じたこと([マタイ 2 章 16 節](#))は、博士たちの訪問が羊飼いたちの訪問のようにイエスの誕生直後に行われたのではないことをさらに示しています。というのも、彼らとの会話の後、ヘロデの理解では、星の最初の出現は過去のある時点に起こったものであり、そのため、明らかに新生児ではない多くの少年たちを殺害する必要があったのです⁴⁷。マギたちが具体的に東方のどこから来たにせよ、彼らの旅とその準備には少なくとも何ヶ月もかかったことは事実上確実です。

ヘロデの死後、ヨセフは再び主の天使から「イスラエルの地」に戻るように夢の中で告げられました。彼の従順は今ではおなじみのパターンですが、彼はそのように行い、そしてついによくユダヤのベツレヘムにある家族の新しい家屋に住むつもりでした。([マタイ 2 章 22 節](#))。しかし、途中で、ヘロデの息子アケラオがユダヤの新しい支配者

で、ベツレヘムの星が天使であった、あるいは天使の働きによるものであった可能性は確かにあります(例えば、[黙示録 9 章 1-2 節](#), [12 章 4 節](#); 参照、[イザヤ 14 章 13-14 節](#); また、[ルカ 2 章 13 節](#)と [イザヤ 40 章 26 節](#)を比較してください)。

⁴⁷ 出生証明書がない場合、これらの貧しい子供たちを送り込むために派遣された男たちは、まだ歩けず、話すこともできない男児を皆殺しにするよう命じられていた可能性が高いです。

であることを発見しました(ヘロデの死後、ローマ人がヘロデ王朝を完全に滅ぼすだろうという予想が一般的であったため、確かではありませんでした)⁴⁸。その結果、ヨセフは、ナザレに向かう方が賢明だと自分で決めたようです。この賢明な決断は、第三の夢によってヨセフに承認され([マタイ 2 章 19-23 節](#))、ベツレヘムにあって、今は手が届かない僅かな所有物を捨てたのは、間違いだったのではないかという思いから解放されたのです。こうして、ナザレはイエスが成長する場所となったのです(参照:[ヨハネ 2 章 1 節](#))。そして、ここで私たちはまた、闇(すなわち、世俗的な北の国)から光が出るというイザヤ書の預言の成就を見るのです:[イザヤ 9 章 1-2 節](#)-イエスの地上での宣教の始まりと終わりにおいて共に完成する:[マタイ 4 章 14-16 節](#), [28 章 7 節](#)(参照)、またイエスが「ナザレ人」とであるという預言([マタイ 2 章 23 節](#))をも成就します⁴⁹。

暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。[そして]暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。(イザヤ 9 章 2 節)

g. 初期の生活と宣教の準備:

主が三十歳前後で公生涯を始められる直前までの生涯について触れている福音書は、ルカによる福音書だけです。それでも十二歳の時にエルサレムで過ごした過ぎ越しの祭りの出来事だけが記されており、その出来事は、彼の形成期を特徴づける二つの大まかな説明でくられています。一方では、彼の成長期を、もう一方では、彼のさらなる準備期間を特徴づけるものです。この事実だけでも、主が私たちのために負われた重荷を私たちに印象づけるものがあります。なぜなら、主は処女降誕の時点から神であると同時に人であり、世の救い主であるにもかかわらず、三十年の間、完全に無名な者としてこの世を歩まれ、世の罪のためにご自身を犠牲にされることで終わる宣教の務めを準備されたからです。

(40) 幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みがその上にあった。(41) さて、イエスの両親は、過越の祭には毎年エルサレムへ上っていた。(42) イエスが十二歳になった時も、慣例に従って祭のため

⁴⁸ ヘロデの王国は 3 人の息子たちに分割され、アケラオはユダヤとサマリアを、ヘロデ・アグリッパ (イエスを尋問した「ヘロデ」) はガリラヤとペレアを、フィリップはイテュレアとトラコニティス (ガリラヤの東) を受け取りました。アケラオは西暦 6 年に退位し、ユダヤは正式にローマの保護領 (従属王国ではなく) となり、ポンテオ・ピラトなどのローマ総督が統治するようになりました。

⁴⁹ I.4.b.4「枝」のセクションにある上記の注釈と、この言葉が暗に[イザヤ書 11 章 1 節](#)を参照していることを参照。

に上京した。(43)ところが、祭が終って帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。(44)そして道連れの中にいることと思いこんで、一日路を行ってしまい、それから、親族や知人の中を捜しはじめたが、(45)見つからないので、捜しまわりながらエルサレムへ引返した。(46)そして三日の後に、イエスが宮の中で教師たちのまん中にすわって、彼らの話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。(47)聞く人々はみな、イエスの賢さやその答に驚嘆していた。(48)両親はこれを見て驚き、そして母が彼に言った、「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい、おとう様もわたしも心配して、あなたを捜していたのです」。(49)するとイエスは言われた、「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」。(50)しかし、両親はその語られた言葉を悟ることができなかった。(51)それからイエスは両親と一緒にナザレに下って行き、彼らにお仕えになった。母はこれらの事をみな心に留めていた。(52)イエスは[英文強調:継続して]ますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。(ルカ2章40-52節)

この箇所は、三十歳前後で宣教を開始するまでの主の生涯に関する情報の大部分を含んでいることを考えると、かなり短いのですが、示唆に富んでいます。一つは、主が通常の家生活を送るだけでも、その負担と困難がすぐにわかることです。彼は神であり、神の子であり、両親に対する彼の答えは、間違いなく彼がこれらの事実を完全に認識していたことを示しています。それにもかかわらず、私たちの罪の担い手となる資格を得るためには、わずかな罪の穢れもない、全く完全な人生を送らなければならなかったのです(それは私たちの理解を超えた偉業であり、主は実際に成し遂げられました)、主は完全な息子でなければなりませんでした。それは、両親が正しいときも、間違っているときも従うということでした。イエスが何年も後にミニストリーの務めを果たすために公に現れるまで、平凡な時間、日、週、月、年を完璧に生きられたように、私たちは疑う余地もなく、イエスは不作為の罪も、実際の罪も犯さず、決して間違ったことをなさらなかったと言うことができます。しかし、イエスは、関わりを持たざるを得ない他者が、不完全な存在である人間である以上、彼らの誤った結論、先入観、偏見を耐え忍ばなければならなかったことが数え切れないほどあったはずです。そして、成人するまでは、たとえ自分が正しく相手が間違っている場合でも、従順で服従的態度に関わらざるを得なかったのです。これは誰にとっても耐え難いものでしょう。しかし、神の子としての自覚を持ち、来たるべき時に備え、あらゆる瞬間、あらゆるエネルギーを注いで準備しなければならなかったことを考えると、私たちにとっての「日常」は、彼にとっては、一歩進むごとに厳しさを増す試練であったに違いありません。私たちは、神が人間とな

り、完璧な忍耐力で何年もの待ち時間を耐え忍ばれたことの犠牲を十分に理解できていないことがよくあります。神は、受肉前の存在が限りなく祝福されていたにもかかわらず、特に、受肉後は、人間が経験する中で最も比類なく困難な三年半の経験、すなわち受難と十字架に至る準備をするためにあらゆる機会を最大限に活用しなければなりませんでした：

あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っている。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである。(第二コリント 8 章 9 節)

この物語が示すように、主の両親、母のマリヤと継父のヨセフは明らかに完全に「理解」していたわけではありませんでしたが、主は「理解」しておられ、この時も、そして間違いなく他の多くの場面でも彼らに服従され、御自身の霊的成長に必要な道に対する無知、無理解、そして真っ向からの反対にもかかわらず、完全な従順を保たれたのです([ルカ 2 章 40 節](#))。しかし、私たちがマリヤとヨセフに辛く当たる前に、イエスが可能な限り最良の両親を持ったこと、そして私たちが同じくあり得る可能性は最も低いであろうことを振り返るのがよいでしょう。私たちは皆、イエスが私たちのいのちであることを「知っている」と言い、復活と永遠の報いを、この地上のいのちがもたらすどんなものよりもはるかに大切なものとして信じていると言いますが、それでも人生を、そうではないかのように生きる傾向があるのです。マリヤとヨセフは、イエスのメシヤであることを、**処女降誕**にそれ以降も間違いなく多くの驚くべきことを見て、ある面で信じていたにもかかわらず([ルカ 2 章 51 節](#);参照[ルカ 2 章 19 節](#)参照)、後の弟子たちと同じように、イエスの完全な神性が彼らの視界から遮られていたために、世を救うために世に来られた方と日々接することさえ、人間的なこの世への没頭を除くには十分ではなかったと言ってよいでしょう([マルコ 6 章 52 節](#), [8 章 17 節](#)参照)。これもまた、私たちの主が地上の生涯を通して直面しなければならない日々の試練の一部でした([マタイ 17 章 17 節](#); [マルコ 9 章 19 節](#); [ルカ 9 章 41 節](#)参照)。

また、主がわずか十二歳の時まで、御言葉の理解がエルサレムの高名な学者たちよりも明らかに何光年も進んでいたにもかかわらず、宣教の務めを始める前に、さらに十八年間の準備を受けなければならなかったことも、大きな意義があります。彼が直面した任務の重要性、前途の試練をうまく切り抜けるために必要な準備の度合いは、それほどのものであったのです。

上述したように、聖句は、イエスはその人間性において、私たちすべてに立ちほだかる通常の試練、誘惑、義務から免除されなかったことを非常に明確にしています(参照:[イザヤ 52 章 13-53 節 12 節](#); [第二コリント 8 章 9 節](#); [ピリピ 2 章 5-8 節](#); [ヘブル 2 章 5-18 節, 4 章 15 節, 5 章 7-10 節](#))。(人類一般ではそのように認識されていなくても)疑いなく、これは、人類の生活において最も重要な側面を意味します。つまり、霊的な成長、霊的な成熟、人間に啓示された神の知恵と箴言のすべてを深く完全に理解することは、なんの苦勞なく得ていたものではなかったのです。主も私たちと同じように真理を学び、霊的に成長しなければなりませんでした。主は実際に、完全な方法で、完全な程度まで成長されたのです。霊的成長とは、神の御言葉の真理を求め、学び、信じ、実践する(意識的に考え、話し、行動する)プロセスであり、聖書に示された真理のすべてを完全に理解し、主が完璧に習得し、完全に霊的に成熟するためかかった三十年は、彼を模倣するための尺度にもなります。(その準備には、彼の宣教に必要な準備期間も含まれます。これについては以下を参照)。私たちの主は、罪深い時間の浪費には決して関与されず、さらに重要なことは、主がこの世に遣わされ、来られた目的に徹底的に専心され、御父への愛が主のすべての思考と行動を支配されたということです。そのため、霊的に完全に成熟するという個人的に不可欠な準備を成し遂げることは、主にとって「第一の仕事」であり、しかも、ちょうどよいタイミングで完了しなければならない仕事でした。私たちの主イエス・キリストは、一分一秒の猶予もなく、幼い頃から霊的に成長するための仕事に取りかかり、わずか 12 歳の時までに、私たちのほとんどが達成することが到底できない洞察力を身につけました。(私たちがその事実を十分に理解しているかどうかは別として)人間に対する神の最も崇高な使命を開始する前に、さらに十八年間の集中的な「卒業研究」が必要であったことは、この最後の三年半が彼にとってどれほど困難であったかを示しています。

ですから「イエスはどのように成長されたのか？」と問うことは、公平であり、また実に重要な質問です。特に、12 歳の時のイエスの霊的成熟度は、これまで生きてきたすべての信徒とは言わないまでも、ほとんどの信徒を凌駕していたことは明らかだからです。ケノーシスの原則(上記 I .5.e 節参照)とは、イエスがある種の「不公平な優位性」を持っていたのではなく、私たち皆と全く同じように霊的に成長しなければならなかったことを意味します。神の子として、罪の性質を持たず、誕生した瞬間から聖霊によって無限の力を授けられ、自ら預言者でもありましたが、イエスが享受したこのような利点は、この世での生涯を通じて直面した悪魔の異常なまでの敵対や、私たちすべてを救うために遣わされた使命の信じられないほどの困難さによって、十分に相殺されました。それは、御父に完全に献身し、完璧で罪のない人生を送りながら、霊的に完璧に成長することだけでなく、十字架にかかる前のミニストリーを完璧に行い、十字架にかかるために最も恐ろしい反対勢力の試練を乗り越え、天と地の間の暗闇の中でそこに架けられ

て世の罪を背負うことも、彼の挑戦だったからです。

イエスの先駆者である洗礼者ヨハネについて、彼は「母の胎内を出た時から聖霊に満たされる<英文訳>」(すなわち、誕生の瞬間から;[ルカ 1 章 15 節](#))と預言されていました。そして、彼が予告したメシヤもそうであったことは確かでしょう([ミカ 3 章 8 節](#); 参照. [マタイ 3 章 11 節](#), [3 章 16 節](#), [4 章 1 節](#), [12 章 28 節](#), [12 章 31-32 節](#); [マルコ 1 章 8-12 節](#), [3 章 29 節](#); [ルカ 3 章 16 節](#), [3 章 22 節](#), [4 章 1 節](#), [4 章 14 節](#), [4 章 18 節](#), [11 章 13 節](#), [12 章 10 節](#); [ヨハネ 1 章 32-33 節](#); [7 章 39 節](#), [14 章 26 節](#), [15 章 26 節](#), [16 章 15 節](#))。

(2)その(メシヤの)上に主の霊がとどまる。これは知恵と悟りの霊、深慮と才能の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。(イザヤ 11 章 2 節)

(17)これは預言者イザヤの言った言葉が、成就するためである、(18)「見よ、わたしが選んだ僕、わたしの心にかなう、愛する者。わたしは彼にわたしの霊を授け、そして彼は正義を異邦人に宣べ伝えるであろう。(マタイ 12 章 17-18 節)

(34)神がおつかわしになったかたは、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。(35)父は御子を愛して、万物をその手にお与えになった。(ヨハネ 3 章 34-35 節)(参照:[ヨハネ 6 章 63 節](#))

わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたとみえる小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七つの目とがあった。これらの目は、全世界につかわされた、神の七つの霊である。(黙示録 5 章 6 節)

[ヨハネ 7 章 39 節](#)にあるように、普遍的な聖霊のバプテスマは、勝利した御子への御父からの賜物であり、すべての信者に聖霊が注がれたのは十字架後の最初の聖霊降臨の日からでした。しかし、私たちの主は「限りなく」([ヨハネ 3 章 34 節](#))御霊を持っておられ、主の誕生の瞬間から満たされておられました。このように、私たちの主の驚異的な霊的成長は、彼が何か特別な、あるいは秘密のアクセス権を持っていたことによるものではありません。 私たちもまた、無制限に与えられた御霊を持っています。御霊は今、私たち皆の中にも宿っておられ([ローマ 8 章 9 節](#); [第二テモテ 1 章 14 節](#))、その結果、私たちはまさに「キリストの心」([第一コリント 2 章 16 節](#); すなわち、聖句の真理を照らす御霊の内住であり、私たちがそれを追い求めようとするなら、そのすべてに

与ることができるのです。)を持っています。違いは、私たちの主イエスが、この素晴らしい助け手を完全に活用し、父が望まれた通りの学び方、成長の仕方、生き方を常に完璧に実践されたということです。なぜなら、イエス・キリストだけが、この無限の聖霊の力に完璧に応答したからです。

ルカによる福音書のイエスの幼少期に関する箇所は、いずれもイエスの聖霊に支えられた霊的成長のプロセスの仕組みに言及しています。[ルカ 2 章 40 節](#)には、イエスは「知恵に満たされて成長し、強められた」とあり、霊的成長の基本原則である、神の御言葉の真理(真の知恵)を学び、信じ、適用することを明確に示しています。[ルカ 2 章 52 節](#)はさらに、イエスは「知恵に富んで」成長され、その結果「神と人に対する恵みと好意」に富まれたと述べています：神に応答する者を神は当然喜ばれます。神の恵みは驚くべきものであり、真に無限のものです。この箇所や他の箇所から明らかなように、その恵みの中で「成長」することが可能であり、恵みが増し加わることを経験することが可能なのです。(使徒行伝 6 章 8 節; [ローマ 1 章 7 節](#); [第一コリント 1 章 3 節](#), [16 章 23 節](#); [第二コリント 1 章 2 節](#), [9 章 8 節](#), [9 章 14 節](#), [13 章 14 節](#); [ガラテヤ 1 章 3 節](#), [5 章 4 節](#); [エペソ 1 章 2 節](#), [4 章 7 節](#), [6 章 24 節](#); [ピリピ 1 章 2 節](#), [4 章 23 節](#); [コロサイ 1 章 2 節](#), [4 章 18 節](#); [第一テサロニケ 1 章 1 節](#); [第二テサロニケ 1 章 2 節](#); [第一テモテ 1 章 2 節](#), [1 章 14 節](#), [6 章 21 節](#); [第二テモテ 1 章 2 節](#), [2 章 1 節](#), [4 章 22 節](#); [テトス 1 章 4 節](#), [3 章 15 節](#); [ピレモン 1 章 3 節](#); [ヘブル 4 章 16 節](#), [12 章 15 節](#), [13 章 25 節](#); [第一ペテロ 1 章 2 節](#), [5 章 5 節](#); [第二ペテロ 1 章 2 節](#); [第二ヨハネ 1 章 3 節](#); [黙示録 1 章 5 節](#), [22 章 21 節](#))。そして、神の好意、すなわち私たちに対する神の喜びを増大させるための手段は、まさにそのような「恵みの増大」を、後にも先にも他に並ぶことのないほどに成し遂げられた方の模範によって、ここに示されているのです。重要なことは、神の好意は、この例では、圧倒的な物質的繁栄という点では現れないということです(そして、もし御自身の御子の完全な応答に対する場合がそうでないなら、私たちも、神の好意をただ物質的な面で求めるということはしない方が賢明でしょう)。しかし、イエスが霊的に飛躍的に成長された結果、神だけでなく、人との関係における恵みにおいても同時に成長されたことは重要なことです：私たちが神の望まれることを行うとき、神の目に好意を得るだけでなく、私たちが関わらなければならないすべての人、たとえ敵であっても、その人の目に好意を与えてくださるのです。(箴言 16 章 7 節)。

(1) だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか。主の腕は、だれにあらわれたか。(2) 彼は主の前に若木のように、かわいた土から出る根のように育った。彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。(イザヤ 53 章 1-2 節前半)

種から芽生えた植物は、土の抵抗に負けずに光に向かって突き進み、その光から力と成長を引き出しながら、小さなものから大きなものへと、成熟に至る道のりを歩みながら、どの段階も飛ばすことなく、自然な方法で成長しなければなりません。私たちの主は後に、種まきのたとえの中でこのイメージを繰り返し、私たちが成長する方法、私たちの信仰の種に良い土壌を与え、急速に成長し、この世の雑草の上に立ち、神の言葉の真理の光に向かって常に外側へ、上へ伸びる方法を教えてくださいました。イザヤ書の預言にも明らかなように、メシヤはこの教を説かれた時、すでにこの過程をご自身で成し遂げ、しかも完璧なまでに成し遂げられたのです。-メシヤの場合、地が乾いていたという事実にもかかわらず成し遂げられました。乾いた地というイメージはメシヤが歴史的に類まれな霊的成長を遂げている中でも、困窮と困難に立ち向かわなければならぬことを鮮明に伝えるものです。

(4) 主なる神は[真理の]教をうけた者の舌をわたしに与えて、疲れた者を言葉をもって助けることを[わたしの内に]知らせ、また朝ごとにさまし、わたしの耳をさまして、[真理の]教をうけた者のように聞かせられる。(5) 主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは、そむくことをせず、退くことをしなかった。(イザヤ 50 章 4-5 節)

ここには、神の言葉を学ぶ課程に完全に献身するメシヤの姿勢が示されています。イエスの霊的成長は、まさにそれが最優先事項であったために、毎朝一番に取り組みられました。もし私たちの主がそうであったなら、私たちもできる限り同じようなアプローチを取るべきではないでしょうか。そして、この聖句には他にも注目すべき重要なことがあります。私たちの主イエスが「拒まず」、「引き返さなかった」と書かれているのは、霊的成長はしばしば全く容易なプロセスではないことを私たちに思い起こさせるものです。神の御言葉はこの世で最も素晴らしいものであるにもかかわらず、それを一貫して取り入れるには規律と不屈の精神が必要です。調子悪くさせる要因になる、あらゆるプレッシャーがある時、そして現在または過去の行動(過失であれ不作為であれ)に問題があったり、何らかの理由で真理を受け入れがたい、あるいは直視しがたい領域など、御言葉がそれらの痛いところを突いてくる時は特にそうです。神の御言葉は、私たちすべてに挑戦し、私たちすべてを叱責し、るつぼの炎のように私たちすべてを精錬します。ただ耳を傾けるだけでなく、学び、信じ、真実であると知っていることを実践するためには、神への深い献身が必要です。(私たちはしばしば、三步進んで二歩下がるようなことがあります)私たちの主は、決して縮こまったり、後ずさりしたりしなかなただけでなく、状況や圧力、反対にもかかわらず、毎日毎日、前進されました(しばしば、必要な睡眠よりも、御父との交わりを好まれました:[マタイ 26 章 36-46 節](#); [ルカ 6 章 12-13](#))

[節](#); [ヘブル 5 章 7-9 節](#)参照)。そうすることによって、神に近づき、神を喜ばせ、神のみ心を行うのに適した者となるという、上へ高く向かう召命への道を私たちに示されたのです。世界の歴史の中で最も困難な務めに就く時が来た時、主イエスは準備ができていました。イエスは「疲れた人を励ます正しい言葉(真理)を知っておられた」という、上に引用した言葉の真理を、福音書のイエスの言葉のすべてに見ることができます。そして、その献身的な成長パターンのゆえに、時が来たとき、イエスは十字架に至る試練、そしてその後に来るもの、すなわち、すべての歴史の要であり、私たちの永遠のいのちの手段である、全人類の罪を負い、贖うことの準備が整っていたのです。

イエスの霊的成長が、この重要な日課に限定されていたと考えるべきではありません。それに加えて多くの時間を祈り、断食、そして、聖典を読む事に費やしました。それだけでなく、これまで生きてきたすべての人の中で、私たちの主は([創世記 5 章 22-23 節](#)のエノクを含む)誰よりも「神と共に歩む」ことを完成させたと断言できるでしょう。この一日一日、一瞬一瞬の「安息日」は、イエスの時代に存在した聖典(すなわち、旧約聖書全巻)についての深い、そしてイエスの場合は間違いなく完璧な知識に依存していました。例えば、イエスがサタンに誘惑された時、イエスは申命記からの正確かつ的確な引用で、悪魔の三つの策略すべてに答えたことが分かっています([マタイ 4 章 1-11 節](#); [ルカ 4 章 1-13 節](#)参照)。

悪しき者のはかりごとによらず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う。(詩篇 1 篇 1-2 節)

わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。(詩篇 16 篇 8 節)

私たちはその詳細をすべて知ることはできませんが、会堂での彼の行動は、彼がナザレで聖典を最大限に利用したことを示唆しています([ルカ 4 章 16-20 節](#)参照)。さらに、イエスの日々の行動において、イエスは思考において怠けず、心を御言葉の真理と御言葉そのものに常に集中していたと予想されます。旧約聖書の多くの聖句はメシヤの経験を反映しており、特に詩篇 119 篇は、若かりし頃のイエスの霊的成長の道を示しています([詩篇 119 篇 161 節](#)と[ヨハネ 15 章 25 節](#)を参照)。

(9) バス 若い人はどうしておのが道を清く保つことができるでしょうか。み言葉にしたがって、それを守るよりほかにありません。

(10) わたしは心をつくしてあなたを尋ね求めます。わたしをあなたの戒め

から迷い出させないでください。

(11) わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました。

(12) あなたはほむべきかな、主よ、あなたの定めをわたしに教えてください。

(13) わたしはくちびるをもって、あなたの口から出るもろもろのおきてを言いあらわします。

(14) わたしは、もろもろのたからを喜ぶように、あなたのあかしの道を喜びます。

(15) わたしは、あなたのさとしを思い、あなたの道に目をとめます。

(16) わたしはあなたの定めを喜び、あなたのみ言葉を忘れません。

(57) ヘス 主はわたしの受くべき分です。わたしはあなたのみ言葉を守ることを約束します。

(58) わたしは心をつくして、あなたの恵みを請い求めます。あなたの約束にしたがって、わたしをお恵みください。

(59) わたしは、あなたの道を思うとき、足をかえして、あなたのあかしに向かいます。

(60) わたしはあなたの戒めを守るのに、すみやかで、ためらいません。

(61) たとい、悪しき者のなわがわたしを捕えても、わたしはあなたのおきてを忘れません。

(62) わたしはあなたの正しいおきてのゆえに夜半に起きて、あなたに感謝します。

(63) わたしは、すべてあなたを恐れる者、またあなたのさとしを守る者の仲間です。

(64) 主よ、地はあなたのいつくしみで満ちています。あなたの定めをわたしに教えてください。 詩篇 119 篇 9-16 節、57-64 節(ベス段、ヘス段)

このような完全な献身と揺るぎない正しい姿勢の結果、イエス・キリストは、正式な教育を受けていなかったにもかかわらず、地上での宣教を開始するまでに、これまで生きてきた誰よりも聖書に完璧に精通していました。このことは、「プロの」聖職者や学者でさえも、自分たちをはるかに凌ぐ聖書の完全な知識を持っていたことを説明できず、「プロの」聖職者や学者の敵対者たちさえも困惑させられました([ヨハネ 7 章 15 節](#); [マタイ 13 章 54-56 節](#); [マルコ 6 章 3 節](#)参照)。また、「権威をもって」教えられた([マタイ 7 章 28-29 節](#); [マルコ 1 章 22-27 節](#); [ルカ 4 章 32-36 節](#))と言われる意味も説明でき

ます。聖書とその真意について完璧な知識と完璧な理解を持ち、聖霊によって教えられたイエスは、**実際に**預言者であられ([申命記 18 章 15 節](#); [ヨハネ 1 章 25 節](#); [使徒行伝 3 章 22-23 節](#))、迷いも疑いも反省もなく、自分が教えたことはすべて神からのものだと言うことができました。

そこでイエスは彼らに答えて言われた、「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。」([ヨハネ 7 章 16 節](#))

真に神であり、その重大な事実を十分に知っていたにもかかわらず([ヨハネ 5 章 18 節](#), [14 章 9 節](#), [17 章 5 節](#))、真の人間性を帯びるために自らを謙遜にされた主は、その準備の年月の間にも絶えず謙遜にされ、私たちが皆そうでなければならぬように、世の中の観察を通して真理を学ばれました([ヨハネ 2 章 25 節](#)参照)。聖典を熱心に学び、預言的な啓示に謙虚に注意を払い、学び、信じた真理を体系的に適用することに専心しました。もし私たちが神に近づきたいと願うなら、私たちの主の模範以上に、最善の方法、いや、唯一の方法を求めることはできません。

(4)不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである。(5)それとも、「(文脈上、本質的な罪である世への誤った集中による利己的な野心と他者への羨望に対して:1-3 節参照)神は、わたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに愛しておられる」と聖書に書いてあるのは、むなしい言葉だと思うのか。(6)しかし神は、いや増しに恵みを賜う。であるから、「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」とある。(7)そういうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。(8)神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいて下さるであろう。罪人どもよ、手をきよめよ。二心の者どもよ、心を清くせよ。(9)苦しみ、悲しみ、泣け。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えよ。(10)主のみまえにへりくだれ。そうすれば、主は、あなたがたを高くして下さるであろう。(ヤコブ 4 章 4-10 節)

h. 正式な宣教の開始:

1) ヨハネのバプテスマ:

(13)そこで御使が彼に言った、「恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈が聞

きいれたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい。(14)彼はあなたに喜びと楽しみとをもたらし、多くの人々もその誕生を喜ぶであろう。(15)彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず、母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされており、(16)そして、イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせるであろう。(17)彼はエリヤの霊と力とをもって、みまえに先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、**整えられた民を主に備える**であろう」。(ルカ 1 章 13-17 節)

上記の箇所からよくわかるように、ヨハネの宣教の目的は、メシヤの到来が間近に迫っていることに対して、同胞の心を整えることでした(参照:[マラキ 3 章 1 節](#); [ルカ 1 章 76-77 節](#))。ヨハネは王の布告者であり、イエスは王ご自身です。ですから、イエスのバプテスマの目的は、ヨハネが王国の到来を告げたときに悔い改めることを選んだイスラエルの人々のバプテスマのそれとはまったく異なります。彼らは罪人でしたが、イエスは罪のない方です。彼らは王を待ち望んでいましたが、イエスは王です。彼らはイエスなしでは無力でした。イエスは彼らの助けであり、今日の私たちの助けでもあります。ですから、ヨハネがイエスにバプテスマを施すのをためらったこと([マタイ 3 章 14 節](#))はよく理解できます。私たちの主は、「今、これをさせなさい。すべての義を全うするために、私たちがこのように[行動する]ことは適切だから。」と答えられました。ヨハネが正しく見抜いたように、イエスはバプテスマを受ける必要はありませんでした。主は罪のない方ですから、悔い改める必要などなかったのです。イエスのバプテスマは独特であり、十字架を受け入れたことを示しています。他の人々が罪を洗い流す象徴のために水の中に入った後、主はその罪のために死ぬことを象徴するために、その同じ水の中に入りました。それで主のバプテスマは、御父の正しい救いの条件を満たすこと、すなわち「すべての(父なる神の)義を満たすこと」を表しているのです。(すなわち、キリストの血による私たちのすべての罪の贖い、私たちの代わりに[霊的に]死んでくださった十字架上の御業を表しています)。イエスが水から上がること(主が水の中に入ることが私たちの代わりに霊的に死ぬことを表しているのと同じように、イエスの復活を表しています)と同時に、聖霊が目に見える形で現れたことは、イエスがメシヤであること(私たちが見てきたように、生まれたときから聖霊に包まれていること)を示すとともに、イエスが栄光を受けた後に私たちにも与えられる聖霊の賜物を表すものです([ヨハネ 7 章 39 節](#))。

2) 荒野での誘惑: 主の荒野での 40 日間の試練は、それ自体が準備であったというよりも、ますます激しい反対を受けた後に、さらに激しい試練を経て世の罪を背負う十字架へと導く宣教の務めを担うのに、主イエスは実際に完全に準備されていたこと

を示すためのものでした。イエス・キリストが、他の人々から離れて断食と祈りに長い時間を費やすように導かれたのは、これが初めてではありませんでした。孤立と断食は、ごく限られた期間でなければ、私たちのほとんどにとって耐えることが非常に難しいものですが、正しい動機のもとに行われる場合には、人を神と神の声と御心に開かせる可能性を秘めています。真実に神を求めるためではなく、神からまったく離れて敬虔に見せかけるために、このような行動をとる人が大勢います([マタイ 6 章 16-18 節](#)、[ルカ 18 章 12 節](#)参照)。私たちの主は、それとはまったく反対に、聖霊なる神によって荒野に導かれました([マタイ 4 章 1 節](#)、[マルコ 1 章 12 節](#)、[ルカ 4 章 1 節](#))。私たちはこの出来事を(同じ聖霊による啓示によって)後から知ったのですが、同時代の人々は誰もこの特別な試練が起こっていることを知らなかったのです(主が 30 年近い準備の間に受けたであろう非常に多くの試練のすべてがそうであったように)、主の動機は全く純粋なものであったと断言することができます:人からの賞賛を求めるのではなく、最も試練に満ちた困難な状況下でも御父に應えようとする意志でした。さらに、この主の 40 日間の試練は、モーセ(キリストの聖書的予型)⁵⁰が律法を授かるためにシナイ山で過ごした 40 日間と、意図的な対応があります。(民が金の子牛を礼拝したことに対して第一の石版を壊したため)モーセが第二の石版を受け取った時、モーセも四十日間断食したと言われています([出エジプト 34 章 28 節](#); [出エジプト 24 章 18 節](#); [申命記 9 章 9 節](#)参照)。モーセの場合、空腹であったとは言われていません: ([マタイ 4 章 2 節](#); [ルカ 4 章 2 節](#); [マタイ 4 章 11 節](#); [マルコ 1 章 13 節](#)参照)モーセが主との特別な交わりの間に、超自然的に養われたことを強く示唆しています。このように、モーセはメシヤの経験の予兆を表していますが、比較の重要なポイントは断食の期間ではありません。モーセの経験は、イエスとの永遠の交わりの中で、私たちが食べ物を一切必要としなくなる時を予見するものであり、一方、主の四十日間の断食は、御父の御心を実行するために、主が例外的に苦しまれる覚悟をされたことを示すものだからです。真の対比はモーセの務めとキリストの務めとの間であり、後者はキリストの受難を通して契約を始動するもので、モーセを介した古い契約を破棄するものです(それは、キリストの型としてのモーセがメシヤを表すことができたのと同じように、まだ来ていないこの素晴らしい現実を予示しただけであり、実際に救いが提供されるためには、メシヤご自身、すなわち私たちの主であり救い主であるイエス・キリストが、肉となって来なければなりません)。この 40 日間の苦難は、救い主の公の宣教と更なる生涯の基調を定めるものでもあります。荒野に放たれた「身代わり」が象徴的に民の罪を負わされたように([レビ 16 章 8-26 節](#))、私たちの主イエスは「宿営の外で苦しみ」、世の罪を負わされるのです([ヘブル 13 章 11-12 節](#)参照)。この 40 日間の肉体的苦痛(着の身着のまま風雨、虫や野生動物にさらされる)は主が、十字架上の最後の 3 時間の暗闇の中で、この世

⁵⁰ 「来たる艱難期」の第 3 部 A、V.3、「モーセとエリヤの回復の働き」参照。

の罪を負い、償うという最高の犠牲の行為を象徴し、また実際にそれを予期しているのです(彼の宣教が伝統的な宗教社会からの追放を伴うことは言うまでもありません)。

悪魔が主に試みた三つの具体的な誘惑は、サタンの全体的な方法論に関して、前に詳しく取り上げました⁵¹。私たちがまず注目すべきなのは、四十日間もこのような激しい苦難に遭わされた後の私たちの主の応答は、疑いなく主の真の内心を反映したものであったということです。私たちの中には、十分な休息と十分な食事があり、特別なプレッシャーがなければ、このような強烈で極悪非道な攻撃に直面しても、大胆な態度で臨む者がいるかもしれませんが、病気であったり、危険にさらされていたり、トラブルに巻き込まれていたり、困窮していたりするときに、サタンの訴えに抵抗するのは、まったく別のことです(ヨブの経験がよく示しているように、つまり、死すべき人間がなしうるような完全で正しい人でありながら、同じように特殊な種類の圧力によって最終的に消耗してしまった人のケースです)。このような極端な試練に耐えるためには、神の言葉がその人の心に深く刻み込まれ、内面の一要因ではなく、内面の生活全体を支配するように**ならなければなりません**。私たちの救い主は確かにそうでした。彼は、るつぼの中で金のように精錬されたとき、真に内なるものの精妙な質を映し出したにすぎませんでした。また、若い頃から完璧に培われた内なる自己の輝きが、聖典の直接的な引用という具体的な形で現れたことも見逃せません。このことは、イエス・キリストに従う者であるクリスチャンとして、私たちが行くこと、あるいは行おうと志すことのすべてにおいて、聖書が極めて重要であることを私たちに思い起こさせるものです:神の御言葉は私たちの霊的な活力源です。すべてのことにおいて私たちの模範である方にとってそうであったように。

これまで見てきたように(前の注を参照)、悪魔が私たちの主に向けた三つの誘惑、すなわち、神の御心より自分の意志を優先させる誘惑(石をパンに)、神と私たちの立場を逆転させ、神の意志を私たちの意志に置き換える誘惑(飛び降りる)、神の権威より個人的な野心を優先させる誘惑(この世の王国)、それぞれの真の問題を紛らわすためのサタンの巧妙な手口に主イエスは聖句でお答えになりました。最初の誘惑に関して、主の最初の答えである[申命記 8 章 3 節](#)「パンだけで生きず」の文脈は、主ご自身が、「あなたがたをへりくだらせ、あなたがたの心の中にあるものを知り、主の命令に従うかどうかを試すために」([申命記 8 章 2 節](#))意図的に、そして正当な理由のために砂漠で「彼ら(イスラエルの民)を空腹にされた」ことを示しているのです。この苦難は、彼らがテストに失敗した後、恵み深い超自然的なマナの供給が与えられました。第二の

⁵¹ 「聖書の基本」の第 3 部 A、第 IV.2.1-3 節、「誘惑」、また『サタンの反乱』の第 4 部、第 IV.4 節、「サタンの世界システム: 戦略的教理」参照。

誘惑に関して、主の第二の答えである[申命記 6 章 16 節](#)「あなたがたの神、主を試みてはならない」の背景には、**荒野**の「マッサであなたがたがしたように」と締めくくられる聖句においての対比があります。マッサは、民が神の代弁者であるモーセに水を与えるよう要求して神を試し、「主はわたしたちのうちにおられるかどうか」([出エジプト 17 章 1-7 節](#))と言ってモーセを石打ちにしようとした場所です。このように水の要求は、神との立場を逆にして「神を試みる」ことだったのです。私たちを試すのが主であって、その逆ではないからです(悪魔が引用した詩篇 91 篇を参照。真の文脈は、私たちの主が私たちの住まいであるということで、そうである場合においてのみ、「その天使たちに命じて」守られるのです。すなわち、私達が試すのではなく、信頼している時)。第三の誘惑に関して、主の第三の答えである[申命記 6 章 13 節](#)「あなたの神、主を恐れてこれに仕え…なければならない」の文脈は、主が民を奴隷状態から**荒野**に連れ出した方であるということです。主は忘れ去られるのではなく、私たちに真に価値あるものを与えてくださる唯一の方として記憶されるべきです。私たちが繁栄するとすれば、私たちにそれをくださる方は主です。(サムエル記上 2 章 7 節; 詩篇 75 篇 7 節参照)。また、これらの誘惑はすべて、主の場合、私たちが受けるよりも厳しいものでした。なぜなら、神であると同時に真の人であるイエスは、石をパンに変えることが**本当に**でき、飛び降りたら**本当に**天使たちに助けられたことでしょう。そして主は**本当に**全世界を支配する権利があったのです。しかし、これらのことすべてにおいて、神の御言葉の真理を完全に理解し、完璧に適用することによって、生ける御言葉である主御自身は、御父の権威、御父の意志、御父の栄光を認め、あらゆること、あらゆる方法、あらゆる時に、初降臨の御計画を実行されたのです。このように、これら三つの誘惑は、主が十字架にかけられ、その後栄光をお受けになるまでの地上での期間を通じて、完全に守り抜かれた謙遜の範疇を示す役割を果たしています。

イスラエルは約束の地を調べるために使った日数に従い、一日につき一年として 40 年間砂漠をさまよっていました([民数記 14 章 34](#))。彼らは荒野で神に信頼するという試練に(何度も)失敗しましたが、私たちの主イエス・キリストは、この過酷な環境での 40 日間の断食の後、最後の力を振り絞っていたに違いないにもかかわらず、今までも、そしてこれからも、最後までご自分の行動パターンであり続けるであろうこと、すなわち、必要なことから信仰の確信、人生の計画に至るまで、すべてのことにおいて御父に完全に頼っておられることを、はっきりと示されたのです。すべてのことにおいて、真理を第一に考えておられました。そして、その真理を完璧に理解することと、その真理を完璧に実行することの間には、一片の隙もありませんでした。この 40 日間とそれに続くサタンによるテストは、主がこの世の荒野で、悪の力がすべて主に対して配列され、全人類のために十字架上で死なれるに至る試練の中、ご自分の意志よりも御父の意志を優先させる用意が十二分にできていたことを、疑いの余地なく証明したのです。

i. 主のミニストリーの経過 : 4つの福音書を完全に解説することはできないので、この研究では、私たちの主イエスが引き受け、成功裏に完了させたミニストリーの簡単なあらすじを述べる以上のことはできません。ここで言えることは、福音書に記されているイエスの教えは、旧約聖書であれ新約聖書であれ、聖典の他の箇所に見られるすべての真理と一致し、その反映であり、それに映されているということです。さらに彼の奇跡は、神の子であるメシヤとしての彼の地位と権威を示しています。最後に、その宣教の過程における行いは、私たち皆のために御父の御心を行うために、この腐敗した世界に喜んで遣わされた方の愛、犠牲、献身を明らかにしています。

一方では、福音書の内容はクリスチャンなら誰でも知っている(あるいは知っているはずの)ものであり、他方では、主の事件、たとえ話、講話のほとんどとは言わないまでも、その多くはそれ自体、詳細な釈義を必要とします(ですから、ここで簡単に考察してもほとんど意味がありません)。従って、私たちはイエスの「受難」(つまり、十字架刑に向かって走り通さなければならなかった試練)、十字架そのもの、そしてその後の出来事に進む前に、イエスの三年半のミニストリーの主要な出来事のいくつかを概観することに留めておくことにします。

1) イエスのミニストリーへの障害: その準備に必要な 30 年間の苦闘と、いわゆる普通の生活の放棄(例えば、私たちは結婚を控えたり、肉体的な子孫を残す望みを犠牲にすることが軽いものと見なすべきではありません)とは別に、私たちの主の十字架前のミニストリーは、(困難の種類がそうでなかったとしても、その度合いにおいて、確かに)彼に特有の深刻な障害を幾つも乗り越えるための絶え間ない努力が伴いました。ここでのリストはそれらを網羅するものではありません。--私たちは、イエスが私たちのためにこの世に来られ、完全な人生を送られ、完全な宣教をされることによって、どのようなことを耐え忍ばれたのか(まして、私たちの罪を背負って歩まれたこと、特に十字架上で耐え忍ばれたことなどについては)、おぼろげにしか知ることはできません。

a) 物理的な障害: ガリラヤとユダヤの領域を三年半にわたって旅し、御言葉を教え、癒しとその他の奇跡を通してその力を示しながら宣教することは、単に安楽椅子で福音書を読むだけでは容易に理解できないレベルの肉体的努力と労苦、そして精神的・感情的疲労を伴いました。弟子たちや支援者たちがどれほどの重荷を負おうと、あるいは負うことができようと、必然的にその重荷の大部分は、教えを行い、癒しを行い、あらゆる重要なレベルで宣教をする指揮する者であるイエスにのしかかったのです。孤独と命令の重圧、教えと宣教に必要なエネルギー、宣教のあらゆる側面に注意深く目を配り続けるために必要な努力は、世界の歴史の中で他のどのような人も耐えられ

ないほど、疲れさせるものであったに違いありません。それは、イエスが、計画し、教え、一般的な行動において、わずかな不手際や見落とし、間違いもなく、毎日、毎年、あらゆる機会に、あらゆる時点で、すべてを完璧に行ったということを考慮すれば、なおさらのことです⁵²。同時に、もちろん、主はご自身の宣教の特徴である集中的な教えのために、あらゆる空き時間に絶えず準備をしなければなりませんでした。このように、イエスの初期の準備生活がいかに困難なものであったとしても、その後公に活動された期間には、さらに何倍もの困難が伴いました。私たちは、イエスがその数年間を「わたしの試練」([ルカ 22 章 28 節](#))と呼んでいるように、肉体的にも精神的にもストレスと緊張を伴うものであったことを垣間見ることができます。この表現は、特にイエスが敵対する宗教権威から絶えず受けた[潜在的かつ最終的には]暴力的な反対という点で、その時期にイエスに課せられた途方もない要求を説明しています(例えば、[マタイ 12 章 14 節](#); [マルコ 3 章 6 節](#); [ルカ 6 章 11 節](#); [ヨハネ 5 章 18 節](#), [7 章 1 節](#), [7 章 19 節](#), [7 章 30 節](#), [7 章 32 節](#), [7 章 44 節](#), [10 章 39 節](#), [11 章 53 節](#)) :

こういうわけで、わたしたちは、[11 章の]このような多くの[人と天使の]証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪(特に、私たちに習慣的に影響を与えている罪)とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである。(ヘブル書 12 章 1-3 節)

b) 心理的プレッシャー： 神であることに加えて、私たちの主は完全な人間でした(そして今もそうです)。しかし、主は地上におられたすべての期間、真の人間であり、疲労する肉体に加えて、罪は犯さなかったけれども、私たち人間が感じるあらゆる種類の感情を体験されたのです。主は早くから、御自分の感情をコントロールする方法と、その感情に影響を与える出来事を(神のみことばの真理に基づいて)解釈する方法を学ばれました。しかし、これは主が感情的な痛みを経験しなかったことを意味す

⁵² 家族(母、兄弟姉妹、[マタイ 12 章 46 節](#)参照)に対する主の責任は、福音を公に宣べ伝え始めたときにも終わりませんでした。特に、この時までにはヨセフは亡くなっていたでしょうから、イエスが一家の長であったことは間違いありません([マタイ 13 章 55 節](#); [マタイ 12 章 46 節](#)参照)。カナの婚宴では、ヨセフの名前は出てきませんが、マリヤは物語の中で重要な役割を果たしています([ヨハネ 2 章 1-11 節](#))。十字架上でイエスが最後に語った言葉の中には、イエスの人間性の母であるマリヤの世話と扶養の手配が含まれているという事実も付け加えられます(つまり、ヨセフが生きていれば、彼女をヨハネに託す必要はなかったでしょう)：ヨハネ.19:26-27)。

るものではないのです。主は確かに経験されていました(そして時には、それを正当に表現されました。例えば、[マタイ 17 章 17 節](#); [ルカ 22 章 48 節](#)など)。ですから、私たちは、主の人生は非現実的なもので、肉体的な重圧よりもはるかに重くのしかかる心の重圧がどんなものであるかをご存じなかったなどと想像すべきではありません。実際、主が対処しなければならなかった心の重圧は、私たちが直面しなければならないものよりも激しかっただけでなく、多くの場合、主に特有のものでした。

－ 神の子でありながら、無礼な扱いを受けるというプレッシャー：

(1) だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか。主の腕は、だれにあらわれたか。(2) 彼は主の前に若木のように、かわいた土から[湧き]出る根のように育った。彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき美しさもない。(3) [それどころか、]彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。

もちろん、福音書にはこのプレッシャーの例がたくさんあります。イエスは何度も、全く不当な軽蔑を受けて、敵を厳しく罰することができたにも関わらず、一貫して完璧に耐え忍ばれました。実際、ある時、弟子たちが格別の侮辱に対して正当な報復をしたいと言ったとき、イエスは彼らを厳しく叱責されました([ルカ 9 章 51-55 節](#))。イエスは、ご自分の真に崇高な地位を十分に認識しながらも、この世を完全な謙遜のうちに歩まれ、人の意見や期待に動じることを拒み、御父の意向に沿うことだけをお考えになりました(私たちはほとんど確実に何等かの反応を示してしましますが;[マルコ 15 章 5 節](#)と[詩篇 39 篇 1-3 節](#)を比較してください)。私たちの主は、「この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ」る([ローマ 12 章 2 節](#))ということが、本当はどういうことなのかを、模範をもって示してくださったのです。

－ 主の宣教に対する反応の悪さへの対処というプレッシャー：

(60) 弟子たちのうちの多くの者は、これを聞いて言った、「これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」。(61) しかしイエスは、弟子たちがそのことでつぶやいているのを見破って、彼らに言われた、「このことがあなたがたのつまずきになるのか。(62) それでは、もし人の子が前にいた所に上るのを見たら、どうなるのか。(63) 人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。(64) しかし、あなたがたの中には信じない者がい

る」。イエスは、初めから、だれが信じないか、また、だれが彼を裏切るかを知っておられたのである。(65)そしてイエスは言われた、「それだから、父が与えて下さった者でなければ、わたしに来ることはできないと、言ったのである」。(66)それ以来、多くの弟子たちは去って行って、もはやイエスと行動を共にしなかった。(ヨハネ 6 章 60-66 節)

ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人々を石で打ち殺す者よ。ちょうどめんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。(ルカ 13 章 34 節)

これらの箇所や他の多くの同様の箇所からわかるように、主は真理を受け入れないすべての人々に対して正直に不承認を表明しながらも、否定的な反応([詩篇 118 篇 22 節](#); [イザヤ 49 章 4 節](#)参照)に過度に、あるいは理不尽に苛立つことを決してお許しになりませんでしたし、主の宣教がしばしば巻き起こす表面的で一過性の肯定的な反応([ルカ 11 章 27-28 節](#); [ヨハネ 6 章 15 節](#)参照)に流されることもありませんでした。何千人もの人がイエスの名によって「ホサナ」と歌っても、その後すぐに態度を変え、イエスの十字架刑を要求するのです([ヨハネ 12 章 37 節](#)と[使徒行伝 1 章 15 節](#)を比較)。イエスは、人の中に何が本当にあるのかをよく知っておられ([ヨハネ 2 章 25 節](#))、人の反応やその反応の悪さによって影響されて、御父が御自身のために示された道から逸れてしまうようなことは決して許されませんでした。

－ 十字架の予期

(37)そしてペテロとゼベダイの子ふたり(すなわち、ヤコブとヨハネ)とを連れて行かれたが、悲しみを催した悩みはじめられた。(38)そのとき、彼らに言われた、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」。(マタイ 26 章 37-38 節前半)(参照: [マルコ 14 章 33-34 節](#))

この聖句は、主が捕まえられ十字架につけられる数時間前に、押しつぶされそうな不安が主を襲っていたことを記録していますが、十字架を予期する重荷、つまり、試練や十字架そのものよりも、暗闇の中で世の罪を背負うことは、主が生涯背負わなければならない重荷でした。そして、私たちは、この迫りつつある十字架の重圧が日々、主の上にのしかかっていたことを正しく理解することはできないかもしれませんが(結局のところ、私たちは、世の罪のために裁かれるために何が必要で、何が伴うことになった

のかをおぼろげにしか理解することができないのですから)、聖句は、主の初降臨のこの側面を重要なものとして記録しているという事実があります([マルコ 10 章 38 節](#); [マタイ 16 章 21 節](#); [ルカ 9 章 22 節](#), [9 章 44 節](#), [13 章 32-33 節](#), [17 章 25 節](#), [18 章 31-34 節](#); [ヨハネ 12 章 27 節](#)参照)。

(49)わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。火がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか。(50)しかし、わたしには受けねばならないバプテスマがある。そして、それを受けてしまうまでは、わたしはどんなにか苦しい思いをすることであろう。(ルカ 12 章 49-50 節)

- 自制が試される

イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な、曲った時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまであなたがたに我慢ができればようか。…(マタイ 17 章 17 節)

この箇所は、主が正当で義にかなった憤りをあらわにされた数少ない箇所の一つであり、例外的です。しかし、地上の母に対する正当で、必要で、穏やかな叱責([ルカ 2 章 49 節](#); [ヨハネ 2 章 4 節](#); [ルカ 11 章 27-28 節](#)参照)の場合と同様に、この正しい状況判断の後には、恵み深い奇跡的な介入が続きます。しかし、私たちとは異なり、この自制の分野における主の試練は実にユニークなものでした。というのも、主の場合、怒りに満ちた反応やそれに対する総括的な行動への誘惑が理解できるだけでなく(主は完全なお方であり、その結果、常に他者が「間違っている」ことに対処しておられたからです)、主は、ご自身の身に降りかかる不正、軽蔑、攻撃、敵対を是正するために、神の力を行使することができたからです。このような行動は初降臨においては、父のご計画ではありませんでしたが([ルカ 9 章 51-55 節](#)参照; 再臨の際には全く違ったこととなるでしょう)、しかし、イエスはその力を手にしておられたのですから、地上の生涯を通じて、この点に関して日々刻々と自制されたことは、まさに偉業でした(そのような力を与えられているなら、私たちの誰が一日たりとも完全に自己の正当性を主張することを控えることができるでしょうか)。

(14)人々はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った。(15)イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた。(ヨハネ 6 章 14-15 節)

裁きを下すことに関して完全な自制心を示す必要性と同様に、イエスの奇跡の結果としてもたらされた大衆の熱狂に流されない必要性もありました。ヘロデでさえ、「彼が何か奇跡を行うのを見たいと思った」([ルカ 23 章 8 節](#))ために、彼に会いたがりました。私たちの主は、ほとんどの人が例外なくそうであるように、有名人になることを望まれず、上記の箇所が示しているように避け、できる限りそれを避けるために多大な努力を払われました([マタイ 8 章 4 節](#), [9 章 30-31 節](#), [12 章 16 節](#), [14 章 13-14 節](#); [マルコ 1 章 43-45 節](#), [3 章 20 節](#), [8 章 26 節](#), [9 章 30 節](#); [ルカ 4 章 42-44 節](#), [5 章 15-16 節](#), [5 章 19 節](#))⁵³。イエスは、人からのほまれは風のように定まらないものであることをよく知っておられ、人からのほまれではなく、天の父を喜ばせることを求めておられました(例えば、[マタイ 26 章 42 節](#); [ルカ 11 章 2 節](#); [ヨハネ 4 章 34 節](#), [5 章 30 節](#), [6 章 38 節](#))。

(1)わたしの支持するわがしもべ、わたしの喜ぶわが選び人を見よ。わたしはわが霊を彼に与えた。彼はもろもろの国びとに道をしめす。(2)彼は叫ぶことなく、声をあげることなく、その声をちまたに聞えさせず、(イザヤ 42 章 1-2 節)

c) 超自然的な攻撃: 荒野での誘惑(先に扱いました)とユダの裏切りを画策した悪魔の役割(あとで扱います)以外にはほとんど記録されていませんが、私たちの主の場合における悪魔の対抗の激しさ(そして、間違いなく選ばれた天使たちによる対抗行動)は、世界史上最も激しかったに違いありません。要するに、私たちの主イエスは、ご自分がなされたすべての良いことで、激しい抵抗に遭われたのです。

悪魔はあらゆる試みをしつつして、一時イエスを離れた。(ルカ 4 章 13 節)

2) イエス・キリストの教えるミニストリー: 私たちの主の三年半の公の働きについて、まず注目すべきことは、イエスはいつも教えておられたことです([マタイ 4 章 23 節](#), [5 章 2 節](#), [7 章 28-29 節](#), [9 章 35 節](#), [11 章 1 節](#), [13 章 54 節](#), [21 章 23 節](#), [26 章 55 節](#); [マルコ 1 章 22 節](#), [2 章 13 節](#), [4 章 1 節](#), [6 章 2 節](#), [6 章 34 節](#), [8 章 31 節](#), [9 章 31 節](#), [10 章 1 節](#), [11 章 17 節](#), [12 章 35 節](#), [14 章 49 節](#); [ルカ 4 章 15 節](#), [4 章 31 節](#), [5 章 3 節](#), [5 章 17 節](#), [6 章 6 節](#), [13 章 10 節](#), [13 章 22 節](#), [19 章 47 節](#), [20 章 1 節](#), [21 章 37 節](#), [23 章 5 節](#), [ヨハネ 6 章 59 節](#), [7 章 14 節](#), [7 章 28 節](#), [8 章 20 節](#), [8 章 28 節](#), [18](#)

⁵³ 参照. また、[マルコ 8 章 28 節](#): (ヘロデも含めて)人々がイエスは死からよみがえった「ヨハネ」ではないかと考えているという事実は、ヨハネが死ぬまで有名人であったことを示しています。ヨハネの死後、有名人という要素はイエスの行動の自由を奪い始め、ユダヤの権力構造からの敵意をますます強める結果となりました。

[章 20 節](#))。彼の生涯は、その時代に彼に注意を払ったすべての人にとって完璧な模範であり、今日、彼について注意深く読むすべての人にとっても完璧な模範です。正式な教えの場であろうとなかろうと、神の真理を完璧に伝えるために、彼の行動や発言はすべて完璧に考慮されていました。

a) 組織と支援: 上記で示唆したように、主はマリヤの生活を確保するために、一方ではこのミニストリーのために家庭的な準備をされ、他方では、家業は間違いなくその後の三年半のために十分な安定した基盤が整えられていたことでしょう。対照的に、個人的な観点から見た主の「戦闘のための組織」は印象的です。というのも、足のサンダルと背中の衣服以外には、物質的な意味で、この宣教にもたらずものはほとんどなかったように思われるからです⁵⁴。しかし、霊的には、後にも先にも誰よりも貴重な財産を心に携えておられました。このことは、私たちにとても教訓となることでしょう。世間では、大きな(あるいは多大な)後方支援がなければ、ほとんどの宣教活動は試みられるべきでないと考えられています。イエスは目的を第一に考え、細かいことは彼と私たちの天の父に任せました。もちろん、このようなアプローチを成功させるためには、(神のみこころが本当は何であるかに疑いを抱かないように)神と共に極めて親密な歩みをすることと、個人の霊的成熟度の両方が絶対に不可欠であることは言うまでもありません。

このような極めて身軽な旅は、イスラエルの子供たちが急いでエジプトを出るように命じられた出エジプト記を思い起こさせるような神への信頼を示しています。「腰を引きからげ、足にくつをはき、手につえを取って、急いでそれを食べなければならない」という食事についての過越の祭りの命令の中に記念されている出来事です。(出エジプト 12 章 11 節)。そして、これは、イエス・キリストに従うすべての人が持つべき心の態度と同じであり、この世の妨げから離れ、「平和の福音の備えを足にはき、」(エペソ 6 章 15 節) イエス・キリストに仕え、従う用意ができています。また、神からの特別な支えがあったとしても、地上の現実を完全に無視し、あたかもそれらが存在しないかのようにすることは意図されていないことも示しています(神殿税の納付でさえ、ペテロはある意味で「働く」ことを要求され、そのために彼が最も得意とする漁をする必要がありました: [マタイ 17 章 27 節](#))。⁵⁵ 弟子たちには共通の財布があり(ユダが持っていた、ヨ

⁵⁴ 主は、ガリラヤの初期(例えば、カペナウムで)、ご自身を支え、(例えば、ヨハネが洗礼を授けた場所まで)旅するために、最小限の資源、あるいはそれを得る手段を持っておられたかもしれません。いずれにせよ、彼の資力は、どのような基準から見ても、貧弱極まりないものでした。

⁵⁵ ですから、弟子たちが「すべてを捨てて」イエスに従った一方で([ルカ 18 章 28 節](#), [5 章 11 節](#) 参照)、[ルカ 5 章 4-11 節](#)で報告されている例外的な大漁は、彼らが「すべてを捨てた」直後のことで

[ハネ 12 章 6 節](#)： 過越の祭りに必要なものなど、必需品を買うために使われました：[ヨハネ 13 章 29 節](#)）、他の人々（その多くは女性であったようです：[ルカ 8 章 3 節](#)、[10 章 38-40 節](#)、ヨハネ 11 章）によって支えられ、彼らは惜しみなく自分たちの富を捧げたのです。私たちは、主がこの宣教のために「蓄え」をされたことを前述しましたが、「棕櫚の日曜日」に主がエルサレムに凱旋されるために用意された仔馬（[ゼカリヤ 9 章 9 節](#)の預言を成就するために、主が前もってこの必要なものを用意されたことは間違いありません；参照：[マタイ 21 章 1-7 節](#)）の場合にも見る事ができます。また、ごくわずかな持ち物しか持たずに派遣された 72 人（[マタイ 10 章 9 節](#)；[マルコ 6 章 8 節](#)；[ルカ 10 章 4 節](#)）でさえ、宣教する相手の備えを頼りにするように言われています（この状況は、使徒時代にはむしろ劇的に変化します：[ルカ 22 章 35-36 節](#)参照）。つまり、この世の手段を利用しつつも、それに惑わされることなく、その手段を与えてくださる方、すなわち天の父に全幅の信頼を置くのです。

b) 計画と目的： もちろん、私たちすべてに対する神のご計画そのものは、イエス・キリストに要約することができます。私たちはイエス・キリストのために存在し、イエス・キリストは私たちと運命をともにし、私たちの罪のために十字架で死なれたのです。ですから、最も重要なレベルにおいて、主の宣教の目的は、その背後にある計画と同じくらい明白です。つまり、世界を救うために、世の救い主を世に捧げるといことです。しかし、主は栄光のうちに来られることもできましたが、もし目がくらむような栄光のうちに来られたなら、主が誰であり、何であるかを否定することは、人間には不可能なこととなったことでしょう。それどころか、主がしばしば教えられたたとえ話のように、主の個人的な真理と栄光は、非常に大きく遮蔽されていました。実際、主はかつて神の子であり、今も神の子であるにもかかわらず、人間はその事実を無視し、否定することさえできたのです（そして今もそうです）⁵⁶。それ以上に、神の現実、すなわち神の本当のお姿は、今日でもなお、朽ち果てたこの世の喧噪と怒りの陰に隠されており、神の真理を探し求めることを選んだ者だけが、神が私たちの人生のあらゆる転機に置かれた招きに応えながら、それを見出すことができるのです。しかし、それにもかかわらず、その人の心が望まなければ、反応することなく通り過ぎるのはとても簡単なことです。

あり、おそらくペテロ、ヤコブ、ヨハネの家族はしばらくの間、安泰だったことでしょう（神は与えてくださるのです！）。

⁵⁶ これは、「豚の前に真珠を投げない」ように注意するという原則と一致しています；参照：[マルコ 4 章 11-12 節](#)：「あなたがたには神の国の奥義が授けられているが、ほかの者たちには、すべてが譬で語られる。それは『彼らは見るには見るが、認めず、聞くには聞くが、悟らず、悔い改めてゆるされることがない』ためである」。（参照：[マタイ 13 章 34 節](#)「イエスはこれらのことをすべて、譬で群衆に語られた。」）私たちが真理に応答するとき、ある程度の献身と決意を示さなければならないことは、神のご計画において重要です（参照：[箴言 25 章 2 節](#)前半；[マタイ 12 章 16-17 節](#)；[マタイ 12 章 19 節](#)、[13 章 3-23 節](#)）。

このような理由から、イエスは地上のミニストリーにおいて、力ではなく弱さのうちに、富ではなく貧しさのうちに、栄光ではなく謙遜のうちに来られたのです。明らかに、主の来臨とその教えはしるしであり、静まり返った小さな声のように万人の耳にささやかれる真理であり、耳を傾けようとする者を永遠の命へと導くものでしたが、そうしたくない者は主とそのメッセージを完全に軽んじることができました。イエスは王として来られることもできましたが、しもべとして来られたのです。その理由は、神のご計画の重要な部分の背後にある目的は、今日と同じように、麦と稗穀を分けることでした。人間の歴史、人類に対する神のご計画と目的は、すべて選択に関するものであり、すべて信仰において行使される自由意志に関するものです。世にアピールするものという観点から見れば、私たちの主とそのミニストリーには何の魅力もありませんでした。主は、有名人のように魅力的ではありませんでした([イザヤ 53 章 2 節](#))。群衆を味方につけるために説得力のある議論をすることもなく([ルカ 11 章 27-32 節](#))、聴衆がしばしば受け入れがたい、あるいは受け入れることのできない真理を語られました([ヨハネ 6 章 60 節](#))。イエス・キリストは、経済的、政治的、社会的な解決策や救済策を提示されたわけではありません([ルカ 19 章 11 節](#); [ヨハネ 6 章 26 節](#))。要するに、イエス・キリストに聞き従うということは、他のすべての地上の関心事よりも、目に見えない神の国を非常に明確かつ決定的に選ぶことを要求されたのです。それは、すべての人間が常に直面する選択であり、主の宣教の時ほどそれが明確にされたことはありません。一方では、主についての預言があれほど完全に成就したのを見た後、主によってあれほど劇的に行われた奇跡を見た後、主からあれほど透徹した真理の言葉を聞いた後では、誰も、この方がメシヤ、神ご自身の御子であることをまともに疑うことはできなかったからです。その一方で、イエスが要求された献身、イエスが暴露した罪深さ、そしてイエスが要求された世俗的な懸念の排除は、当時も今も、世間が真実であると教えていることすべてに逆行するものでした。イエスの地上でのミニストリーは、後にも先にもないミニストリーであり、イエスの御言葉である神のみ言葉全体と同じように、すべての心の質を即座に、揺るぎなく証明する試金石であり、銀と滓(かす)を分け、「わたしについてきなさい」という選択を明確にするものでした。[ヨハネ 10 章 27 節](#); [12 章 26 節](#); [21 章 19 節](#); [21 章 22 節](#); 参照 [マタイ 4 章 19 節](#), [8 章 22 節](#), [9 章 9 節](#); [10 章 38 節](#), [16 章 24 節](#); [19 章 21 節](#); [マルコ 1 章 17 節](#), [2 章 13 節](#), [8 章 34 節](#), [10 章 21 節](#); [ルカ 5 章 27 節](#), [9 章 23 節](#), [9 章 59 節](#), [14 章 27 節](#), [18 章 22 節](#); [ヨハネ 1 章 43 節](#); [ローマ 15 章 5 節](#); [第一コリント 11 章 1 節](#); [第一ペテロ 2 章 21 節](#); [黙示録 14 章 4 節](#))。

(34) 地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである。(35) わたしがきたのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。

(36)そして家の者が、その人の敵となるであろう。(37)わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。(38)また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。(39)自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。(マタイ 10 章 34-39 節)

イエス・キリストは、まさに「時代の節目」([ヘブル 9 章 26 節](#); [ローマ 5 章 6 節](#)参照)に地上に来られました。イエス・キリストの生涯と死、その人となりと働き、その宣教と十字架は、人類の歴史が実際に回転するまさに軸なのです。三年半の地上での宣教において、真理の言葉そのものである方が、全宇宙、悪魔とその世界体制、そして政治的、宗教的な当時の世俗的な権力機構に真っ向から立ち向かわれました。イエス・キリストにおいて、神の力、神の恵み、神の愛という、実際に存在する神の姿を一人間の勝手な空想の中で想像されるようなものではなく、すなわち肉体を持つ神を一メシヤに見るのです。イエスが説かれた神の天の御国は、ほとんどの人が期待したり望んだりした地上の権力と栄光の世俗の国ではありませんでした。メシヤを拒否する機会と余地が与えられれば進んで十字架につけられたことが明瞭に示しているように、ほとんどの人がはっきりとした形で拒否したのです。このように、イエス・キリストの地上での働きの中で、私たちは神のご計画と目的が成就されることだけではなく、同時に、その目的が実現されるのも目の当たりにします。神の国か悪魔の国かの選択が、御子御自身が世に提供されたときほど明確に示されたことはなかったからです。この世を完全に救うためにこの世に来られたにもかかわらず、ごく少数の例外を除いて、世はイエスを決定的に拒絶し、その貴重な数年の終わりに、イエスは十字架上で死なれ、その救いを全人類に現実のものとされたのです。イエスの宣教は、すべての人が直面する選択の本質を示しています。真理を直視し、それに譲渡して、信仰を通してイエス・キリストにある神の憐れみをありがたく受け入れるか、あるいは、それを無視したり拒絶したりして、心を硬くし、代わりにサタンに仕えるか。イエス・キリストは神のご計画**であり**、旧約で約束されていた新約**であり**、すべての人の罪のために十字架上で死ぬというご自身の真の犠牲を通して、あらゆる面で旧約を成就させ、旧約に取って代わる方だからです。イエス・キリストは、ご自身を私たちに捧げて下さっている神**であり**、私たちが犠牲を払うことなく永遠の命を頂けるようにしてくださいました。それゆえ、イエス・キリストの地上での活動において、最も明確に示されたのは、永遠の命を最も感謝し、最も理解する権利がある人々に対して、この永遠の命が差し出されたことでした。それにもかかわらず、彼らは主に、そして主の言葉の真実に対して、心を頑なにすることを選んだのです。しかし、ご自身に立ち返った少数の人々、そして今日ご自身に立ち返るすべての人々に対しては、ご自身の務めの目的と計画は常に成就され、天の目に見えない王国へ

の生命の門を開き、そこに入ることを選ぶすべての人々に、神の真の力と豊かさと栄光を示しています。

- (11)彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。
(12)しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。(13)それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。
(ヨハネ 1 章 11-13 節)

c)方法と応答: 主の御姿と御業を信じる信仰による永遠のいのちの提供を知らせるために、私たちの主が用いられた方法は、イスラエルの国民全体に届くように計画されたものでしたが、それでも前述のように、その反応は全体的に肯定的なものとはほど遠く、最初は肯定的な反応を示した人々の大半の信仰も、岩の上に蒔かれた種のように、最初の困難の状況に遭うと枯れてしまいました。しかし、イエスの世代は間違いなく「われわれは、メッセージを聞かなかった」とは言え**ません**。イエス・キリストの個人的な働きは、メシヤを国民に示し、イスラエルに王を差し出す役割を果たしました。完璧な神の子の完璧なミニストリーの完璧なプレゼンテーションが明らかにすることの一つは、人類の救済の問題は、神のメッセージの提供と**何の関係もない**ということです。神は、ご自分を求めるすべての人のために、完全に備えておられるのです。イエスの時代のイスラエル人はメシヤを切望し、実際にメシヤは提供され、メシヤの王国のメッセージは個人的に、そして劇的で完璧な方法で伝えられました。しかし、それでも、神の条件に従って神に応え、神を受け入れようとする者はほとんどいませんでした。人間の心の硬さがいかに自由意志による選択の問題であるか、そして、それゆえに神による救いの提供とそれに関する情報である福音が、それゆえ、これまで生きてきたすべての人間にとって、いかに完全で完璧に設計されてきたかを、これほど明確に記録している歴史も、聖典に記述された一連の出来事も、他にはありません。なぜなら、神はすべての人が心の中で本当に何を考えているのか、また、すべての人が真理に対してどのように反応するのかを知っておられるからです。このような素晴らしい方法での真理そのものの提供は、神を拒み、代わりに自分の道を歩もうと決めた人々の救いには至らなかったのです。

- (25)パウロが言った、「フェスト閣下よ、わたしは気が狂ってはいません。わたしは、まじめな真実の言葉を語っているだけです。(26)王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対しても、率直に申し上げています。それは、片すみで行われたのではないのですから、一つとして、王が見のがされたことはないと信じます。(使徒行伝 26 章 25-26 節)

私たちの主イエスは、ご自身と御国のメッセージをユダヤの人々に広く知らせました。安息日にユダヤ人が集まる会堂で教えられ([マタイ 4 章 23 節](#); [9 章 35 節](#), [12 章 9 節](#), [13 章 54 節](#); [マルコ 1 章 21 節](#), [1 章 39 節](#), [3 章 1 節](#), [6 章 2 節](#); [ルカ 4 章 15 節](#); [4 章 44 節](#), [6 章 6 節](#), [13 章 10 節](#); [ヨハネ 6 章 59 節](#))、神殿で教え、ユダヤ、ガリラヤ、そして全世界のユダヤ人がエルサレムに礼拝に来る主要な祭りの時には、ご自身とそのメッセージを伝えられました([マタイ 26 章 55 節](#); [マルコ 14 章 49 節](#); [ルカ 19 章 47 節](#), [21 章 37 節](#), [22 章 53 節](#); [ヨハネ 18 章 20 節](#); [マタイ 21 章 14 節](#), [21 章 23 節](#); [マルコ 12 章 35 節](#); [ルカ 20 章 1 節](#); [ヨハネ 7 章 14 節](#); [7 章 28 節](#)参照)。主は町々で教え([マタイ 11 章 21-23 節](#); [ルカ 10 章 13-15 節](#))、湖岸で教え([マタイ 13 章 2 節](#); [マルコ 4 章 1 節](#); [ルカ 5 章 3 節](#))、ヨルダン川のほとりで教え([ヨハネ 10 章 40-42 節](#); [マルコ 10 章 1 節](#); [ルカ 3 章 3 節](#); [ヨハネ 3 章 22-26 節](#))、内でも外でも教え([マルコ 6 章 56 節](#); [マルコ 2 章 1-4 節](#)参照)、荒野でも、人々が集まればいつでもどこでも教えました([マタイ 4 章 25-5 章 2 節](#); [マルコ 6 章 32-34 節](#); [ルカ 9 章 10-11 節](#); [マタイ 14 章 13-14 節](#), [15 章 29-32 節](#); [マルコ 8 章 1-4 節](#)参照)。田舎町にも街でも神の真理の言葉で満ち、その宣教の壮大な性質、言葉と奇跡のまぎれもない力によって、主はそのわずかな年月の間に、真理を聞こうとする人、あるいは少しでも考えてみようとする人、また頭ごなしに拒否しようとする人、すべての人に真理を伝えられました。私たちの主は、ご自分を一つの地域、一つの場所、一つの方法に限定されなかったからです：主は、神の国の福音をすべての人に伝えるために、旅し、努力し、労苦されたのです：

(42)夜が明けると、イエスは寂しい所へ出て行かれたが、群衆が捜しまわって、みもとに集まり、自分たちから離れて行かれないようにと、引き止めた。(43)しかしイエスは、「わたしは、ほかの町々にも神の国の福音を宣べ伝えねばならない。自分はそのためにつかわされたのである」と言われた。(44)そして、ユダヤの諸会堂で教を説かれた。(ルカ 4 章 42-44 節)

メシヤとして、イスラエルの王となるという約束(そしてイスラエルの手によって拒絶されるという預言)を成就するためにイスラエル民族に遣わされたお方として、主の務めは主に同胞に神の国を捧げることでした。しかし、それにもかかわらず、ふさわしい異邦人、すなわち、「義と永遠のいのちの真理を渴望する」人々がどこにいても、主は御霊の導きによって、彼らも拒まれないようにされました。

－ 悪霊の軍団に取りつかれたガダラの男([マタイ 8 章 28 節](#)；[マルコ 5 章 1 節](#)；[ルカ 8 章 26 節](#))、彼の地域で唯一キリストのもとに来ようとした人([マタイ 8 章 34 節](#)；[マ](#)

[ルコ 5 章 17 節](#); [ルカ 8 章 37 節](#))。

－ 娘が悪霊にとりつかれていたスロ・フェニキアの女は、私たちの知る限り、彼女の周辺でただ一人、主に応答した人でした([マタイ 15 章 21-28 節](#); [マルコ 7 章 24-30 節](#))。

－ イスラエルの誰よりも信仰を持った百人隊長([マタイ 8 章 5-13 節](#); [ルカ 7 章 1-10 節](#))。

－ ユダヤ人の町を恥じさせるほどの信仰を示して応対したサマリア人の村([ヨハネ 4 章 4-42 節](#)と[マタイ 11 章 21-23 節](#)を比較)。

私たちの主がそのユニークなミニストリーを行う際に採用された具体的な手順についても、少し述べておく必要があります。第一に、初期の時から弟子たちがついていました(ただし、初めからいたわけではありません。[マタイ 4 章 12 節](#)を[マタイ 4 章 18-20 節](#)、[マタイ 9 章 9 節](#)と比較してみてください。1) 主によって選ばれた十二人([マタイ 4 章 18-22 節](#); [マルコ 1 章 16-20 節](#); [ルカ 5 章 2-11 節](#), [6 章 12-16 節](#); [ヨハネ 1 章 35-42 節](#))、2) 主によって選ばれた七十二人([ルカ 10 章 1 節](#)-)、3) ある程度の一貫性と献身をもって主に従うように「召された」その他の真剣な決心をした信者たち([マタイ 8 章 18-22 節](#); [ルカ 9 章 57-62 節](#); [マタイ 5 章 1 節](#)参照)。これらの人々は、公式の側近ではなく、その日その日、主の話を聞き、主の奇跡の恩恵を受けようと集まった群衆とは区別されます。弟子たちを持つことは、預言者にとって前例のないことではありませんので、このように大預言者に付いているのは驚くべきことではありません(ヨハネ: [マタイ 9 章 14 節](#); エリヤ: 列王記下 2 章参照)。しかし、12 人([マタイ 10 章 1 節](#)-)や 72 人([ルカ 10 章 1 節](#)-)の派遣のように、最も側近の二つのグループが選ばれた理由の一端が宣教に関係していたことは確かですが、主がこれら**すべての**人物を選ばれたのは、(ご自身のために運営や後方支援を提供するためというよりは、むしろ、)彼らのためであり、後の教会全体のためでもありました。簡単に言えば、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そして名ある者もない者も、主との密接な関わりから大きな恩恵を受け(間違いなく私達が彼らの立場にいた場合、より多く受けることになっていたでしょうが、すべきほどには到達していなかったことでしょう)、主に常に付き添い、主のすべての言葉を聞き、主のすべての行いを観察することを通して、数年後に自分たちが担うことになる使徒的な務めのために準備されていたのです。教会はイエス・キリストという岩の上に建てられており([マタイ 16 章 18 節](#))、イエス・キリストは、旧約聖書の預言者たちと共に、隅のかしら石であるイエスを受け入れ、イエス・キリストの教会の土台の残りの部分を提

供した十二使徒とこれら初期の「柱」を個人的に訓練されたのです⁵⁷。

(19)そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。(20)またあなたがたは、**使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である**。(21)このキリストにあつて、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、(22)そしてあなたがたも、主にあつて共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである。(エペソ 2 章 19-22 節)

使徒たちにとってもそうであったように、ユダヤとガリラヤ中の会堂は、来たるべき神の国と、ご自身を信じる信仰によってすべての人に与えられる救いの福音を、主が広めるための重要な場でした([マタイ 4 章 23 節](#), [9 章 35 節](#), [12 章 9 節](#), [13 章 54 節](#); [マルコ 1 章 21 節](#), [1 章 39 節](#), [3 章 1 節](#), [6 章 2 節](#); [ルカ 4 章 15 節](#), [4 章 44 節](#), [6 章 6 節](#), [13 章 10 節](#); [ヨハネ 6 章 59 節](#))。このような「集まる場所」(ギリシヤ語の意味)はすべての主要な共同体にあり、現代の多くの教会や教派とは対照的に、神の民(パリサイ人、サドカイ人、エッセネ人など、もちろん当時もユダヤ人と異邦人の区別はありましたが)の間に区別はなかったので、エルサレムでの主要な集団集会が必要であったのと同様に、このような正式な地域集会でもメッセージを広めることが不可欠でした。イエスの時代に生きていた者は、裁きの時に「しかし、私は知りませんでした」と言うことができないからです。イエスの時代の会堂は、正式な教えや説教以外の(律法と預言書を定期的に読むことは別として)、演説する絶好の機会を提供していました。イスラエルの地域団体は安息日に二度(そして多くの場合、一週間に少なくとも一度)集まる習慣があり、現代のユダヤ教の習慣とは対照的に、またほとんどすべてのキリスト教会の習慣とも大きく異なっており、正式な教えや説教(律法と預言書を定期的に読むことは別として)はなかったからです。シェーラー Schürer が述べているように、「不思議なことに、(イエスの時代の会堂では)礼拝を執り行うために指名された人はいませんでした。聖書の朗読、説教、そして公の祈りは、まだ会衆自身によって執り行われていたのです。その理由で、イエスは(そしてパウロも)様々な会堂で話すことができたのです…」⁵⁸ こ

⁵⁷ ユダの真の後任者であるパウロは、もちろんこの点で、最も顕著な例外です。彼は、私たちの主について非常に詳細な啓示を受けました([使徒行伝 9 章 1-22 節](#); [22 章 3-21 節](#); [26 章 9-23 節](#))。主から直接指導を受けること無しに、これらの偉大な信徒たちさえも凌ぐ彼の勤勉さと献身は、生ける御言葉、救い主イエス・キリストの思いそのものである、書かれた御言葉に注意を向けることによって、どれほどのことが成し遂げられるかを知って、私たちは勇気づけられるはずです([1 コリント 2 章 16 節](#))。

⁵⁸ The History of Jewish People in the Age of Jesus Christ^{2nd} (Edinburgh 1973) v. II, pp.

のように、現代とは異なり、私たちの主や後の使徒たちは、会衆の支配者や長老たちによる事前の根回しなしに、少なくとも真理の最初のプレゼンテーションを行うことが可能でした。ですから、聞いた後、そのメッセージが拒絶されることはあり得ましたが（そしてそれはよくあることです）、メッセージが知らされていなかったと主張することはできませんでした。

(15)イエスは諸会堂で教え、みんなの者から尊敬をお受けになった。(16)それからお育ちになったナザレに行き、安息日にいつものように会堂にはいり、聖書を朗読しようとして立たれた。(17)すると預言者イザヤの書が手渡されたので、その書を開いて、こう書いてある所を出された、(18)「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、(19)主のめぐみの年を告げ知らせるのである」。(20)イエスは聖書を巻いて係りの者に返し、席に着かれると、会堂にいるみんなの者の目がイエスに注がれた。(21)そこでイエスは、「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した」と説きはじめられた。(ルカ 4 章 15-21 節)

もちろん、私たちの主はあらゆる点でユニークな方でしたが、そのユニークな働きのために、会堂という正式な集まりの外で聴衆を集める方法の一つは、奇跡を行うことでした。死者を生き返らすこと、ハンセン病の治癒、あらゆる悪霊の追い出し、盲人の視力回復、パンと魚の増殖、水のぶどう酒への変えることなど、イエスのなさったすべての不思議についてもしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収め切れないでしょう([ヨハネ 21 章 25 節](#))！しかし、このような例外的な奇跡を行うことは、イエスにとって問題が伴いました。イエスはご自身の栄光ではなく、イエスを遣わされた方の栄光を求めておられたからです([ヨハネ 7 章 18 節](#), [8 章 50 節](#); [8 章 54 節](#))。イエスは、ご自分への注目を集めるために奇跡を行ったのではなく、ただ神の御言葉に耳を傾けさせるために奇跡を行いました。あなたや私がそのような素晴らしい賜物を持っていたとしたら、そのような賜物に付きまとうかもしれない傲慢さや高慢さを、イエスはその完全さゆえに一切持ちませんでした。ですから、癒しなどの奇跡的なわざを成し遂げられたのは、御父のご計画を推し進めるためであり、御自身に託された御国のメッセージに権威を与えるためでした([マタイ 13 章 58 節](#); [マルコ 1 章 39 節](#))。それゆえ、このような劇的な出来事に必然的に伴う名声と熱狂には、大きなマイナス面も潜在していました(奇跡によって増えたパンと魚を食べた人々が、力づくでイエスを王にしようとした時のように: [ヨハネ 6 章 15 節](#))そのため、主は奇跡の受益者たちに、主が行われた不思議を世間に広めてはならないと何度も指示されたのです。それでも、主が最

後の過越の祭りの前にエルサレムに入られたときの「ホサナ！」という大声と、その数日後の「十字架につけろ！」という轟きとの対照を見れば、私たちは、名声による熱狂の真価を十分に理解することができます。私たちの主はこのことをよく理解しておられました([ヨハネ 2 章 25 節](#)参照)。そして神のみ言葉を宣べ伝えるすべての人にとって、ここから学ぶべき教訓が確かにあります:大切なのは、心に受け取る御言葉だということです。どんなに熱心であっても、表面的な反応は朝もやのようにはかないものです。

d) 対応行動: 主は真理を妥協されなかったため一まさしく、主は真理です—主の宣教は、世俗的なものであれ、宗教的なものであれ、自分たちの立場のために真理を拒んできた人たち([詩篇 119 篇 161 節](#)と[ヨハネ 15 章 25 節](#); [詩篇 35 篇 19 節](#), [69 篇 4 節](#); 参照.イザヤ 52-53 章; [ヨハネ 8 章 59 節](#))に反感を与えてしまうことは避けられませんでした。私たちの主の真理の宣教は、彼らの偽りの権威の衣を剥ぎ取り、彼らの偽善を片っ端から暴くことによって、彼らの快適な立場を脅かしたからです。自分たちの真の動機について問われ、偽りであることを見せつけられたのですから、彼ら以前のすべての偽預言者たちのように、この「邪悪な農夫たち」がすぐに自分たちにとって邪魔となる存在を滅ぼそうとするのも不思議ではありませんでした([マタイ 21 章 33-41 節](#); [マルコ 12 章 1-9 節](#); [ルカ 20 章 9-16 節](#))。

私たちの主の権威は御父から来たものですが、主の時代の宗教的権威は真理から完全に切り離され、彼らの唯一の権威は、彼らが保持する地位と彼らが保持する律法主義的な伝統に完全に基づいた偽りの権威であり、律法が教えることを意図していた霊的な現実をあいまいにする伝統でした([マタイ 23 章 1-26 節](#)参照)。主は、ご自分の権威を問われたとき、告発者たちにバプテスマのヨハネの宣教についての彼らの立場を尋ねることによって、この特別な点の核心に真っ向から切り込みました。そのため、彼らは真実を認めるのではなく、むしろ自分の無知を言わざるを得なかったのです:彼らは神にはまったく関心がなく、自分の地位のことだけを考えていました([マタイ 21 章 25 節](#); [マルコ 11 章 30 節](#); [ルカ 20 章 4 節](#))。

実際、真理に基づいて聖典をしっかり理解している人なら、主の権威は誰の目にも明らかでした。主がなされた奇跡はその権威を完全に立証し([ヨハネ 10 章 25-38 節](#)参照)、主が教えられたことはすべて、旧約聖書の聖句と重なり、また旧約聖書と一致するものです(例えば、[マタイ 5 章 5 節](#)と[ゼパニヤ 3 章 12 節](#)を比較してください)。主の完璧な教えがどれほど素晴らしかったか、考えてみる価値があります。主は優しく、同時に率直で正直でした。「豚に真珠」([箴言 23 章 9 節](#)参照)を投げることなく、正しく語る方法をいつも見出していました。主は、問題を不必要に個人的なものにすることな

く(あるいは他の人にそのように受け取らせることなく)、すべての聞き手の心に響く完璧な方法を持っていました。上で言及した[マタイ 21 章 23-37 節](#)の例のように、主の言葉はいつも核心を突いており、わずかな言葉で、イエスは人々の真の動機を明らかにすることができました。これは、彼が語ったことすべてにおいて、彼は常に、神に立ち返り、神に従う(彼が遣わした者に従うことの)必要性という、その場での主要な問題から決して逸脱しなかったからです。肉体をとって来られたイエス・キリストの御姿に直面し、否定できない奇跡に支えられたその完璧な言葉を聞くことによって、その時の人々は皆、生と死の問題を非常に明確に直視せざるを得ませんでした。この完璧な教えの基準は、実践者の側に完全な正直さを求めています(そして、なぜイエスのシンプルな言葉が他の誰の言葉よりも力強く、筆舌に尽くしがたいほど違うのかを説明しています)。このように御言葉の真理を完璧に示すためには、お世辞や個人的な意図を、完全に拒絶することが必要でした([マタイ 22 章 15-22 節](#); [ルカ 11 章 27 節](#); [ヨハネ 6 章 15 節](#))。それは私たちの主が、私たち皆のためにしてくださっていたこと、そして十字架上でしようとしておられたことについての、愚かな拒絶や自分勝手な中傷、誹謗、評価に対し、たとえそれが正当なものであったとしても、恨みや傷つくことを許さないものでした。個人的な名誉や栄光への欲望、好反応への渴望、否定的な反応を避けたい欲望、不当な扱いを受け、中傷され、辛辣に反対されると報復したくなる衝動(特に主の場合は、謙虚な感謝と畏敬の念以外には、どんな正当性もなかったもので、いら立たせられるものでした)などは、私たちが必ず陥ってしまうような誘惑ですが、主はそのような誘惑を完全に拒否し、それに打ち勝つことが必要でした。イエスは、これまで、そしてこれからも、誰よりも、すべての人から崇拝に値する存在であったにもかかわらず、それが得られなかったときには、ご自分の自然な感情を否定し、そのような前例のない「ご自身に対する罪人らの反抗」([ヘブル 12 章 3 節](#))を耐え忍ばなければなりません。私たちの主は、その独特な働きにおいて、それが引き起こした独特な反応に直面し、神様の義と、ご自身への信仰によってそれを達成する方法に関する絶対的な真理を伝えるために、完全な謙遜、知恵、そして自制心が必要でした。

e) イエスの教えの形と内容: イエスはロゴスであり、人格を持たれた神の生きた言葉です([ヨハネ 1 章 1-14 節](#))。さらに、神の真理の内容は、聖典の中で(聖霊によって伝えられる)「キリストの思い」と呼ばれています([第一コリント 2 章 16 節](#))。ですから、イエス「ご自身の言葉」を強調した「赤文字」版の聖書はそれなりの用途がありますが、私たちは、聖典の「一点、一画」が、イエス・キリストについて、イエス・キリストを通して、イエス・キリストのために、神が世に伝えようと意図された正確なメッセージであることを忘れて、惑わされてはなりません。イエス・キリストは御言葉であり、聖書のすべての言葉は御言葉だからです。上述したように、旧約聖書(例えば、[列王記上 8 章 59 節](#)と[マタイ 6 章 11 節](#)、[ルカ 11 章 3 節](#)を比較)や新約聖書の書簡(例えば、[ヨハネ 17 章 17 節](#)

と[エペソ 4 章 24 節](#)を比較)と、つり合いのとれていない福音書のイエスの教えというのはありません。これら主要な三つの部分に分けられる聖典は、それぞれ独自の表現方法を持っていますが、表現されている真理の内容はすべて一貫しています。確かに、聖典には段階的開示の一般的な傾向があります、たとえば、ダニエル書から終末の時代について私たちが知れることは、主の「オリーブ山での講話」(マタイ 24-25 章、マルコ 13 章、ルカ 21 章)で詳しく説明されており、さらに黙示録(すなわち、「**イエス・キリストの黙示**」)でさらに詳しく解かれています。しかし、この展開は詳細においてのみであって、本質的な真理においてではありません。ダニエル書も、私たちの主も、ヨハネも、(これらの箇所を正しく理解すれば)あらゆる点でまったく同じことを教えています。啓示を拡大していく神のご計画によって、私たちは真理が明らかにされるたびに、時が経つにつれ、より多くの詳細を知ることができるのです。このように、イエスは何かを「変えた」のではなく、すべてを成就され、すべては彼の中に成就されたのです：

(17)わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思っ**て**はならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。(18)よく言うておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。(マタイ 5 章 17-18 節)

キリストは、すべて信じる者に義を得させるために、律法の終りとなられたのである。(ローマ 10 章 4 節)

ですから、キリストを予表する律法であろうと、受肉された御言葉であるイエスの教えであろうと、新約聖書の残りの部分において御霊を通して宣べ伝えられる真理の詳細な説明であろうと(参照：[ヨハネ 14 章 26 節](#), [15 章 26 節](#), [16 章 13-15 節](#))、メッセージは一つであり、統一された、不可分な、不変の、完全なものであり、御言葉ご自身を証しする、神ご自身のお言葉であり、耳で聞くことのできる真理の宣言であり、人が真理を知ることができる唯一の手段なのです⁵⁹。

(4)主なる神は[真理の]教を[完全に]うけた者の舌をわたしに与えて、**疲れた者を言葉をもって助けることを知らせ、また朝ごとにさまし、わたしの耳をさまして、[真理の]教をうけた者のように聞かせられる。**(5)主なる神はわたしの耳を開かれた。わたしは、そむくことをせず、退くことをしなかった。(イザヤ 50 章 4-5 節)

⁵⁹ [ヨハネ 21 章 25 節](#)にあるように、主の地上での務めの教えと奇跡は膨大な量に及び、この種の研究では、適切な注釈を付して列挙することさえ、スペースと時間がありません。

「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。」(ヨハネ 7 章 16 節)

(38)わたしはわたしの父のもとで見たことを語っているが、あなたがたは自分の父から聞いたことを行っている」。(39)彼らはイエスに答えて言った、「わたしたちの父はアブラハムである」。イエスは彼らに言われた、「もしアブラハムの子であるなら、アブラハムのわざをするがよい。(40)ところが今、神から聞いた真理をあなたがたに語ってきたこのわたしを、殺そうとしている。(ヨハネ 8 章 38-40 節前半)

(44)イエスは大声で言われた、「わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなく、わたしをつかわされたかたを信じるのであり、(45)また、わたしを見る者は、わたしをつかわされたかたを見るのである。(46)わたしは光としてこの世にきた。それは、わたしを信じる者が、やみのうちにとどまらないようになるためである。(47)たとい、わたしの言うことを聞いてそれを守らない人があっても、わたしはその人をさばかない。わたしがきたのは、この世をさばくためではなく、この世を救うためである。(48)わたしを捨てて、わたしの言葉を受けいれない人には、その人をさばくものがある。わたしの語ったその言葉が、終りの日にその人をさばくであろう。(49)わたしは自分から語ったのではなく、わたしをつかわされた父ご自身が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったのである。(50)わたしは、この命令が永遠の命であることを知っている。それゆえに、わたしが語っていることは、わたしの父がわたしに仰せになったことを、そのまま語っているのである」。(ヨハネ 12 章 44-50 節)

[父よ、]なぜなら、わたしはあなたからいただいた言葉を彼らに与え、そして彼らはそれを受け、わたしがあなたから出たものであることをほんとうに知り、また、あなたがわたしをつかわされたことを信じるに至ったからです。(ヨハネ 17 章 8 節)

j. 最後の過越の祭り：私たちの主が三年半の宣教活動を行った最後の一年は、しばしば「対立の年」と呼ばれています。なぜなら、その前の過越祭と最後の過越祭の間に、私たちの主は、ユダヤの政治・宗教の支配層(すなわち、サドカイ派とパリサイ派)からの敵意が著しく激化したからです。＜洗礼者＞ヨハネはその最後の過越の祭

りの直前に、ヘロデによって死刑に処せられましたが([ヨハネ 11 章 55 節](#))⁶⁰、この出来事は主に対する抵抗が強まる重要な要因の一つであったことに留意すべきです。ヨハネの「名声」は、その存命中(最後の二年間は牢獄にいたときでさえ)、私たちの主に代わって、ある種の「おとり」の役割を果たし([マタイ 11 章 10 節](#); [マルコ 1 章 2-3 節](#); [ルカ 7 章 27 節](#))、そうでなければ得られなかったであろう行動の自由を、イエスに与えたからです(ヨハネが「隠れ蓑」を提供しなければ、イエスとイエスのミニストリーは、当時進行中であった霊的復興に対する宗教的権威者らの敵意の唯一の的となってしまうことでしょう)。抵抗が激化した二つ目の大きな要因は、主イエスの働きの激しさにあります。福音書の内容の大部分が、この最後の年(すなわち、大まかに言えば、[マタイ 10 章](#)、[マルコ 5 章](#)、[ルカ 9 章](#)、[ヨハネ 6 章](#)以降のすべて)を扱っているのは偶然ではありません(すなわち、五千人、そして四千人の食物の供与、水の上の歩行、変貌、目の見えない人の癒し、ラザロの蘇生)。またイエスの弟子たちによる最も顕著で広範な伝道が行われるのは、この最後の年です(すなわち、十二人の派遣[開始時]: [マタイ 9 章 35 節](#)-[11 章 1 節](#); [マルコ 6 章 6-13 節](#); [ルカ 9 章 1-6 節](#); [ルカ 10 章 1-20 節](#))。主や弟子たちの最も劇的な奇跡や教えを前にして、最も激しく抵抗が強まったこの時期は、真理に対するこの世(究極的にサタンに仕えている当時の世の支配者)の容赦ない敵意を露わにすることになります: 真理が明らかになればなるほど、真理の源はより脅威的に見えてきます。さらに、その最後の年の驚くべき出来事は、「神の国は近づいた!」というイエスの宣言の真理を鮮明にしました。その国とは、主の敵対者たちが忠誠を誓っていた闇の王国を一掃するため定められた光の王国であり、彼らにとってその(闇の王国の)敗北は、自分たちの高い地位を失うことを意味するので、ひどく恐れさせるものでした。: [マタイ 21 章 33-44 節](#); [マルコ 12 章 1-11 節](#); [ルカ 20 章 9-18 節](#); [マタイ 27 章 18 節](#); [マルコ 15 章 10 節](#); [ルカ 13 章 17 節](#)参照):

- 五千人の食物と四千人の食物の供与([マタイ 14 章 15-21 節](#); [マルコ 6 章 35-44 節](#); [ルカ 9 章 12-17 節](#); [ヨハネ 6 章 4-13 節](#); [マタイ 15 章 32-38 節](#); [マルコ 8 章 1-9 節](#)): 王の臣民を養う力が示されました。

- 水の上を歩く([マタイ 14 章 24-33 節](#); [マルコ 6 章 45-52 節](#); [ヨハネ 6 章 16-21 節](#)): 時間と空間を支配する王の力が示されました。

- 変貌([マタイ 17 章 1-8 節](#); [マルコ 9 章 2-8 節](#); [ルカ 9 章 28-36 節](#)): 王の栄光と

⁶⁰ 「サタンの反乱」シリーズ第 5 部の「洗礼者ヨハネとイエス・キリストのミニストリーの比較年表」を参照。

王国の予表⁶¹。

- 七十二人の派遣([ルカ 10 章 1-24 節](#))：王国が間近に迫っていることの宣教：七十二人はその力を宣べ伝え、示しました。これは「遠く広く」宣べ伝えることであり([黙示録 14 章 6 節](#)を予表)、「私たちは聞いたことがない」という弁解を取り除くものです([ローマ 10 章 18-21 節](#)参照)。

- 盲人として生まれた人のいやし([ヨハネ 9 章 1-41 節](#))：王の真理の啓示。

- ラザロの蘇生([ヨハネ 11 章 1-16 節](#))：永遠の死に代わって永遠の命を与える王の力の予表。

十字架につけられる前の最後の一週間に関して聖書は、ベタニヤでマリヤがイエスに油を注ぐことから始まる(すなわち、[ヨハネ 12 章 1 節](#)の「6 日間」)⁶²、その期間中に起こるほとんどすべてのことは、イエスがこの初降臨の最終段階を通して弟子たちに予告しようとしてきた本質的な真理を、前もって示す役割を果たしています(例えば、[マタイ 16 章 21-26 節](#)、[17 章 22-23 節](#)、[20 章 17-19 節](#)；[マルコ 8 章 31-37 節](#)、[9 章 30-32 節](#)、[10 章 32-33 節](#)；[ルカ 9 章 22-25 節](#)、[9 章 43-45 節](#)、[18 章 31-34 節](#))。すなわち、メシヤは二度来なければならず、二度目は栄光のうちに治める(人々はイエスはすぐにそうされるであろうと期待していました)ためであり、しかし、一度目は世の罪のために死に、王としての統治を永遠に共有する「ご自分のための民」を買い取るためでした([黙示録 5 章 9 節](#)；[黙示録 1 章 5-6 節](#)参照)。

1) ベタニヤでの油注ぎ：これらの出来事の第一は、マルタとラザロの姉妹であるマリヤによるイエスの油注ぎでした([ルカ 7 章 36 節](#)に関連している以前の出来事と似ていますが、区別されるべきです)⁶³。イエス自身が語っているように、これは非常に重要なことでした。イエスの死と埋葬を予示していたからというだけでなく(つまり、埋葬

⁶¹ 来たる艱難期、第 3 部 A、V.5、「変貌」参照。

⁶² ここでの年表は、トーマスとガンドリーの解釈に従い、ヨハネがこれらの出来事を厳密な時系列で配置しているのに対し、共観福音書ではテーマ別に配置されている(これはよくあること)という見解に基づいています：R.L. Thomas と S.N. Gundry 著『A Harmony of the Gospels』(シカゴ 1978 年)。

⁶³ ルカは彼女の名前を挙げてはいませんが、この二つのユニークな行為の類似性(この前の例では、彼女はイエスの足を香油に加えて涙で洗った)、それをするための金銭的負担という事実が他の可能な選択肢を減らすということ(つまり、どちらの機会にも香油の費用を出せるような一般的な身分の女性はいなかった)、そして両方のケースでシモンがホストであるという事実が、両方のケースの女性がベタニヤのマリヤ、別称「マグダラのマリヤ」であることを論証しています。

の準備として頭と足に油を塗ること：[マタイ 26 章 6-13 節](#)；[マルコ 14 章 3-9 節](#)；[ヨハネ 12 章 1-8 節](#)；[出エジプト 30 章 22-33 節](#)）、弟子たちは誰も理解していなかったが、少なくともマリヤは、主が皆のために犠牲となってお自分の命を捧げようとしておられることを十分に理解していたからであって、そのため主は「全世界のどこでも、この福音（御国の知らせ）が宣べ伝えられる所では、この女のした事（彼女の信仰）も記念として語られるであろう」と言われたのです（[マタイ 26 章 13 節](#)；[マルコ 14 章 9 節](#)参照）。この事件と、（金銭の「浪費」のために）弟子たちの間に最初に起こった憤慨は、ユダにとって「最後の藁」であったと考えることができます。というのも、使用されたナルドは非常に上質で、（かなりの高値のつく）純粋な香油であったからです⁶⁴。

2) 凱旋（[マタイ 21 章 1-17 節](#)；[マルコ 11 章 1-11 節](#)；[ルカ 19 章 29-44 節](#)；[ヨハネ 12 章 12-19 節](#)）：王の王、主の主であるメシヤである私たちの主イエス・キリストは、ハルマゲドンの戦いで敵の返り血を浴びて、天の白い馬に乗り、栄光のうちに東からエルサレムに入られます（[黙示録 19 章 11-13 節](#)）。ここで取り上げられているのは、主が世の罪のためにご自分のいのちの血を注がれる（全人類の罪を贖うために、イエスが暗闇の中で霊的な死を遂げられたことを象徴する）日にまもなくろうとしている時、私たちの主は、謙遜の姿勢でエルサレムに入城されました。子ろばに乗られ、その後におとなのろばが続いていました。この二頭のろばは、当時の来臨の目的が民衆の期待とは異なることを象徴し、また民衆が待ち望んでいた栄光の来臨は後の将来に訪れることを示していました。この、主が子ろばに乗られたことは、若く訓練されていない動物は戦い（すなわち、ハルマゲドン）には適さず、十字架が先であること、また、主には罪がなく、世の罪のための純潔で無垢ないけにえにふさわしい象徴を思い起こさせます。

（10）つえはユダを離れず、立法者のつえはその足の間を離れることなく、シロの来る時までには及ぶであろう。もろもろの民は彼に従う。（11）彼（すなわち、ユダ、ひいてはメシヤ）はそのろばの子をぶどうの木につなぎ、その雌ろばの子を良きぶどうの木につなぐ。彼はその衣服をぶどう酒で洗い（再臨、参照：[黙示録 19 章 13-15 節](#)）、その着物をぶどうの汁で洗う（初降臨、参照：[黙示録 7 章 15 節](#)＜訳者：小羊の血で洗うことは[黙示録 7 章 14 節](#)に記されています＞；[ルカ 22 章 20 節](#)）であろう。（創世記 49 章 10-11 節）

シオンの娘よ、大いに喜べ、エルサレムの娘よ、呼ばわれ。見よ、あなた

⁶⁴ また、[マルコ 14 章 3 節](#)では、ピスティケ（pistike）という単語が「本物」、つまり、二流品とは対照的であることを意味しています。

の王はあなたの所に来る。彼は義なる者であって勝利を得(再臨)、柔和であって、ろばに乗る。すなわち、ろばの子である子馬に乗る(初降臨)。(ゼカリヤ 9 章 9 節)

主がオリーブ山からキドロン谷に下られ、エルサレムに向かわれたとき、やがて主が十字架につけられることを求めることになる民衆の多くは、征服者としてのメシヤかもしれないとの期待をこめて預言者(マタイ 21 章 11 節参照)を見ようと、(メシヤがもたらす至福千年の象徴となる)棕櫚(しゅろ)の枝⁶⁵をまき散らし、勝利の詩篇を歌っていましたが、メシヤはまず世の罪のために苦しみ、死ぬ必要があると語られていた象徴については、完全に見落としていたのです。

(19)[メシヤが語っている:]わたしのために義の門(すなわち、エルサレムの東の門と東向きの神殿の門)を開け、わたしはその内にはいって、主に感謝しよう。(20)これは主の門である。正しい者は(キリストを通して;ヨハネ 10 章 1-9 節)その内にはいるであろう。(21)(英訳:あなたはわたしを謙遜にされましたが)わたしはあなたに感謝します⁶⁶。あなたがわたしに答えて、わが救となられたことを。(22) [祝祷者の合唱が答える:]家造りらの捨てた石は隅のかしら石となった。(23)これは主のなされた事でわれらの目には驚くべき事である。(24)これは主が設けられた日(すなわち、再臨の日)であって、われらはこの日に喜び楽しむであろう。(25)主よ、どうぞわれらを[艱難期から]お救いください(*hoshi'ah na'*=ホサナ **hosanna!**)。主よ、どうぞわれらを(=千年王国の祝福で)栄えさせてください。(26)主のみ名によってはいる者(=メシヤ)はさいわいである。われらは主の家からあなた(英訳「あなたがた」:=メシヤとその従者)をたたえます。(27)主は神であって、われらを照された。枝を携えて祭の行列を祭壇の角(=十字架を思い起こさせるための千年王国の初代記念のいけにえ)にまで進ませよ。(詩篇 118 篇 19-27 節)

その最初の日、エルサレムに入るとすぐに主は神殿の山に登られ、神の礼拝を人間的な金銭取引システムに変えてしまった金儲けをしている者達を、異邦人の庭から一

⁶⁵ 仮庵の祭りまたは幕屋の祭りの象徴については、「サタンの反乱」シリーズの第 5 部、II.8.c.III.7、「仮庵(幕屋)」を参照してください。

⁶⁶ ここでは(カルの 'anahI ではなく)ピエル態の 'anahII と読みます。この別の読み方は、次の節<22 節>の「捨てた」に照らして多くのことを説明しますが、本質的な子音テキストを変更する必要はなく、発声を少し変えるだけです。というのも、後世の不信仰なユダヤ人学者たちは、苦しみを受けるメシヤという概念を可能な限り排除しようとしたからです。

掃されました。これは千年王国で起こることの顕著な伏線であり([ゼカリヤ 14 章 21 節](#); [ダニエル 12 章 10 節](#)参照)、イエスのメシヤ性を示すもう一つの預言的しるしです。

二日目、彼らがベタニヤから町に戻って来る途中、主はいちじくの実を求めて道ばたのいちじくの木に近づかれましたが⁶⁷、何も見つからなかったのも、主はその木を呪われ、その後すぐに枯れてしまいました([マルコ 11 章 13-14 節](#), [11 章 19-25 節](#); [マタイ 21 章 18-22 節](#))⁶⁸。この奇跡の象徴は非常に重要です。木はイスラエルとその実りの欠如を表しているからです([ミカ 7 章 1 節](#)参照)。彼らはメシヤを両手を広げて歓迎し、その霊的な労苦の実をメシヤの足もとに置くべきときに、真に敬神的な業をすべて失い、自分を罪から救うために来られた方を十字架につけようとしていたのです。こうした実証的なしるしは、すべての信者の霊的生活にも関係して言えることです。なぜなら主のために実を結ぶことは、霊的成長の正常な期待される結果ですが、実を結ばないことは通常、背教と関連しているからです([ヨハネ 15 章 1-17 節](#); [ヘブル 6 章 7-8 節](#))。

エルサレムでの最後の数日間に起こった、象徴的に重要なもう一つの出来事は、あるギリシヤ人たちがイエスに会いたいと願い出たことと、そして主が「よくよくあなたがたに言うておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」と答えられたことです。([ヨハネ 12 章 20-32 節](#))。ユダヤの民に対する預言的な働きが完了した今、この地上におられた時の主の重要な目的、第一の目的であった、全世界の罪を十字架の上で負われることを果たすために、その先にある虐待の試練を耐え抜くために、主は御顔を「火打ち石のように」([イザヤ 50 章 7 節](#); [ルカ 9 章 51 節](#)参照)されました。つまり、全世界の罪を十字架上で背負うということです。イエスの死は、例えるなら一粒の麦のように、あらゆる国の人々(この好奇心旺盛なギリシヤ人はその代表です)を神の家族へと導くという豊かな「実」を結ぶことになるのです。

3) オリブ山の説教: これは、オリブ山で弟子たちが王国の到来の時期について質問したことに答えて、主が弟子たちに「将来のこと」について詳しく語られた教えの通称です([マタイ 24 章 1 節-25 章 46 節](#); [マルコ 13 章 1-37 節](#); [ルカ 21 章 5-36 節](#))。「御霊はまだ与えられていなかった」([ヨハネ 7 章 39 節](#))ので、終末に関しての多くの

⁶⁷ 注意:マルコは物語の中で、いちじくの木のはらいの後に清めを位置づけていますが、マルコ 11 章 15 節を正確に訳すとわかるように、実際には本当の時系列を示しています:「さて、彼らがエルサレムに入り(すなわち、その前日)、主が神殿に入られたとき、... ..」。

⁶⁸ マタイが parachrema(マタイ 21 章 19-20 節)を使ったからといって、木が「彼らの目の前で」枯れたとは限りません。マルコの記述で明らかのように、呪いと枯れとの間には間隔がありましたが、それでもその早さは明らかに奇跡的でした。

本質的な詳細は、ペンテコステの後まで待たなければならないことに注意することが重要です(ヨハネ 16 章 12-15 節; 聖霊が与えられる前の使徒行伝 1 章 7 節を、与えられた後の状況の第一テサロニケ 5 章 1 節および第一ヨハネ 2 章 20 節の記述を比較してください。)⁶⁹。にもかかわらず、主は旅立ちの間際に、終末の時にに関する多くの重要な情報を弟子たちに与え、その将来の艱難期を安全に切り抜けるために、信者が永遠の現実に集中する必要性を説かれました。さらに、これらの同じ真理は、主の受難と復活の後に来る二千年にわたる教会時代に、すべての弟子たちが個人的な苦難の日々を耐え忍ぶために、不可欠であることが証明されます。実際、弟子たち自身も、わずか数時間の間に、それらをよく覚えて適用する必要があったのです。

4) ユダとサンヘドリンのイエス殺害計画：ヘロデがその 33 年前に、本物の「ユダヤ人の王」によって自分の王朝が脅かされると考え、イエスを殺そうとしたように、ユダヤの政治的、宗教的な権力者たちもまた、主と主の働きによって自分たちの地位が「脅かされる」ことを、長い間懸念していました(マタイ 21 章 46 節, 26 章 4 節; マルコ 12 章 12 節, 14 章 1 節; ルカ 20 章 19 節; ヨハネ 7 章 30 節, 7 章 44 節, 10 章 39 節)。彼らは、主の凱旋の直前に開かれた、祭司、パリサイ派、サドカイ派の会議で、自分たちを「国家」とであるとみなしており、そのことについて、ヨハネがうまく要約して伝えています：

そこで、祭司長たちとパリサイ人たちは、議会を召集して言った、「この人が多くのしるしを行っているのに、お互は何をしているのだ。(48)もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪ってしまうであろう」。(49)彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った、「あなたがたは、何もわかっていないし、(50)ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が滅びないようにするのがわたしたちにとって得だということ、考えてもいない」。(ヨハネ 11 章 47-50 節)

この会議の直後、群衆との対立を避けて、「ひそかに」イエスを逮捕するため、密告者を立てるようにとの指令を出しました(ヨハネ 11 章 57 節; マタイ 26 章 4 節; マルコ 14 章 1 節参照)。ユダが訴えに応じたとき、彼らが「喜んだ」のはこのためです(マルコ 14 章 11 節; ルカ 22 章 5 節)。主が群衆と一緒にではない時の居場所や、何をしているかについての「内部情報」を手に入れた彼らは、反乱を起こさず主を逮捕できると思ったからです。

⁶⁹ 終末論については、「サタンの反乱」と「来たる艱難期」シリーズに収録されている膨大な資料を参照されることをお勧めします。使徒行伝 1 章 7 節の「あなたがたの知るところではない」は「あなたがたが決めるところではない」と訳すのが適切です。

ユダのもともとの動機が何であったかは、推測するしかありません。彼の動機の一部は確かに金銭的なもので、バラム([ヨハネ 12 章 6 節](#); [第二ペテロ 2 章 15 節](#)参照)のように、この新しい成り行きから利益を得ようとしたのでしょう。また、イエスのミニストリーの人気と、明らかに奇跡的な性質に惹かれた部分もあったかもしれません。しかし、ユダはすでに背信しており、そしてサタンからのあらゆる影響下にあったことは確かです。そうでなければ、命の主を裏切ることはなかったでしょう([第一コリント 2 章 8 節](#))、そうでなければ、悪魔に憑依されることもなかったでしょう([ルカ 22 章 3 節](#); [ヨハネ 13 章 27 節](#))。ですから、サタンは最初からユダに手をかけ、主の側近の中に潜入者を置こうとしていたことは確かでしょう(そして、その過程で預言が成就したのです:[ヨハネ 13 章 18 節](#))。ユダがイエスを信じていなかったことは主もよくご存じでしたが([ヨハネ 6 章 64 節](#), [6 章 70 節](#), [13 章 18 節](#)参照)、他の弟子たちはユダを疑っていなかったようです。それは、主がヨハネとペテロに「<食物を>ひたす」という明確なししを与え([ヨハネ 13 章 26-28 節](#))、「まさか私ではないでしょう?」という質問に対して「いや、あなただ」とユダを名指した後も、ユダが疑われることはなかったという事実から見て取ることができます([マタイ 26 章 23-25 節](#))。このことからユダは、他の人十二人の誰よりも敬虔で立派な外見を装っていたと考えることができます。また、墓の外側を「白く塗る」ことに最も気を使うのは、内側に最も激しい腐敗を持つ人々であることが多いのです(律法学者やパリサイ人の場合:[マタイ 23 章 27 節](#))。

5) 最後の晩餐：私たちの主が裏切られた夜の最後の過越の祭りも、私たちのために差し迫った主の犠牲と、十字架の上での主の勝利が、神の恵みの働きと地上の教会に対する神のご計画において変化をもたらすことを预示するものでした。もちろん、過越の祭りは旧約の主要な儀式であり、主はそれを「聖餐式」または「主の晩餐」として知られる教会時代の唯一正当な儀式に変えられたことは、十字架がもたらそうとしていた契約の変化を、最も鮮明かつ集中的に示しています。過越の小羊を食べることは、明らかに神の小羊を信じることの象徴です。しかし、この儀式や動物の犠牲を用いる他のすべての旧約の儀式が、世の罪のためのメシヤの死を予表するものであったのに対して、イエスは過越の祭りを聖餐式に変えることによって、儀式の影を、間もなく完成する救いの現実にあずかることに変えるのです。イエスのからだであるパンを食べることによって、私たちはイエスの人格、すなわち、神であり、衰えることのない神性と真の人間性とは永遠に一体となったお方であるイエスを信じることを表明するのです。そして、ぶどう酒を飲むことによって、私たちは主の御業、すなわち、主が私たちのためにしてくださったこと、すなわち、世の罪のために死んでくださり、カルバリの暗闇の中で十字架の死によって、私たちのすべての罪を洗い流してくださったことへの信仰を表すのです。このように、「聖餐式」にあずかることによって、私たちは、イエス・キリストが私た

ちのためにしてくださったこと、唯一完全なメシヤとして私たちのためにしてくださったことに基づいた、私たちのイエス・キリストとの「一体性」への信仰を示すのです。

それゆえ、この新しい儀式は、二つの契約の違いの本質を見事にシンプルな方法で宣言しています。旧約も新約も、本質的には神を求めるすべての人に約束された神からの約束ですが、旧約では、その成就の詳細がまだ完全に明らかにされていない将来の現実を、予見する影が用いられていました([第一ペテロ 1 章 10-12 節](#); [ヨブ記 17 章 3 節](#)参照)。実際、十字架は人類史の現実であり、神がこの被造物においてこれまでなさったこと、またこれからなさることすべての究極的な目的であり、力なのです([ローマ 1 章 16-17 節](#)参照)。十字架は「良い知らせ」です。なぜなら、十字架によって私たちは永遠の命を得るからです。それは単に、将来の解放を神から約束されただけでなく(それは素晴らしいことでしたが)、それは御子の人格と御業に対して神が満足しておられることを宣言しており、「現わされようとしている」救い([第一ペテロ 1 章 5 節](#); [5 章 1 節](#))を待ち望んでいる今も、私たちがその御子を信じる信仰によって、御子の人格と御業に対して神が満足しておられることを宣言するものだからです。イエスは弟子たちに、ご自分が成し遂げようとおられる救いの具体的なしるしと、キリストを信じる信仰によって、当時も今も私たちのものとなる永遠の交わり—私たちが「パンを食べ、杯を飲む」たびに世に示される—を与えることによって、それまでのすべてを照らし出し、新約の「よりすぐれた約束」([ヘブル 8 章 6 節](#))の新しく不思議な現実を説明されました。「より優れて」いるのはそれを望み見ているのではなく、実際のキリストの犠牲に基づいているからです。キリストが実際に、歴史的に罪の代価を支払われたからこそ、御霊が「与えられる」([ヨハネ 7 章 39 節](#))ことができ、その結果、すべての驚くべき教会時代の賜物、異邦人への神の家族の爆発的拡張、新約聖書に具体化された、聖書のすべての貴重な新しい真理の啓示がもたらされたのです。

(23)わたしは、主から[直接]受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり、(24)感謝してこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、[ささげられた]わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。(25)食事ののち、杯をも同じようにして言われた、「この杯は、わたしの血による[血によって結ばれた]新しい契約である。飲むたびに(すなわち、聖餐式にあずかるたびに)、わたしの記念として、このように行いなさい」。[\(第一コリント 11 章 23-25 節\)](#)(参照:[マタイ 26 章 26-29 節](#); [マルコ 14 章 22-25 節](#); [ルカ 22 章 15-20 節](#); 参照:[ヨハネ 6 章 51-59 節](#))

それが終わると、イエスと弟子たちは賛美歌を歌い、オリーブ山とゲッセマネに向か

って夜のうちに出て行きました([マタイ 26 章 30 節](#); [マルコ 14 章 26 節](#))。主はその園で、これから耐え忍ぶ試練の前に、準備のための最後の祈りを捧げられました。ヨハネによる福音書 17 章に記されているこれらの祈りの詳細は、主が弟子たちのことを、そしていつかそうなるであろう私たちのことを、最も案じておられたことを示しています([ヨハネ 17 章 6-26 節](#))。共観福音書の著者たちによって書き残されたこれらの短縮版は、よく誤解されています。イエスが十字架の「杯」([マタイ 20 章 22 節](#); [マルコ 10 章 38 節](#)参照)を「御心でしたら」取り去ってくださいと願ったのは、ご自身のためではなく、私たちのためです。園の祈りの前に起こったペテロの抗議([マタイ 16 章 22-23 節](#); [マルコ 8 章 32-33 節](#))と、多くの異端が現れるため、私たちの主は、私たちが救われるためにはこの杯が取り去られることはないことを、明確にされました。主が示された紛れもない苦悩は、私たちの利益のためでもあり、十字架刑に至るまでの裁判や拷問の際に主が示された、圧力下での驚くべき冷静さと併せて慎重に考慮されるべきです。私たちの主イエスは、十字架上の暗闇の中で、罪のための死([ローマ 6 章 10 節](#))を予期しておられたのです。それは、私たちが理解することも想像することもできないほどの重い苦しみであり、この霊の死によって達成されようとしている贖いのために先立つ苦しみは、それに比べればむしろ軽いものでした。これがゲッセマネの祈りのメッセージです。すなわち、私たちが永遠のいのちを得るためには、主がこれからなそうとしていることの必要性を私たちに示し、彼がこれから可能にしようとしている真に不可避な課題である、罪のための死を強調するためでした。

k. キリストの試練：三度目の祈りを終えると、イエスは再びペテロ、ヤコブ、ヨハネのところに来て、彼らが眠っているのを見つけ、彼らを起こされました。その時が来たことをよく知っておられたからです([ヨハネ 18 章 4 節](#); 参照 [マタイ 26 章 36-47 節](#); [マルコ 14 章 40-43 節](#); [ルカ 22 章 46-47 節](#))。ユダは祭司長やパリサイ派の者たちに詳細を告げて、導き([ヨハネ 18 章 3 節](#))、大勢のユダヤ人の非正規軍([マタイ 26 章 47 節](#); [マルコ 14 章 43 節](#); [ルカ 22 章 47 節](#))、松明と武器で武装したローマ兵の全隊(正規の兵力は 600 人)が、主とその少数の弟子たちに襲いかかりました。ユダは主を「ご主人様」と呼んで抱きしめることによって、この不法な襲撃の目的である主を特定したのです([マタイ 26 章 49 節](#); [マルコ 14 章 45 節](#); [ルカ 22 章 48 節](#); [第二サムエル 20 章 9 節](#)参照)⁷⁰。真夜中の暗闇の中、悪意を持った圧倒的な敵対勢力に襲われ、主の仲間たちの心に、どのような恐怖がわき起こったかは想像するしかありません。しかしそれから起こった事で、イエスは、御父との完璧な歩みを通して、ご自身が脅迫の域を超えた方であることを示されたのです。この危機への対処のあらゆる側面から見る事が

⁷⁰ すなわち、ラビ、あるいは「Rabbi」、意味は「私の偉大な方」、まさに主が弟子たちに互いに使うなど言われた挨拶([マタイ 23 章 8 節](#))ですが、ユダは明らかにイエスに好んで使っていたようで、明らかに本心ではないお世辞の欺瞞的手口の一部でした([マタイ 26 章 25 節](#))。

できるように、主は揺るぎない信仰に基づいた真の「真夜中四時の＜訳注：不意打ち、またプレッシャーの下で、冷静で気を散らさず集中し続ける＞勇気」を持っておられたのであり、ゲッセマネの祈りの中で私たちのために示されたように、主が感じておられたプレッシャーが、私たちの罪を一人で背負うことと関係していたことの、これ以上確かな証拠はありません。イエスに従う者として、私たちは本当に人を恐れることは何もありません([詩篇 56 篇 4 節](#), [118 篇 6 節](#))。疑いなく、神の御子は恐れていませんでした。そして、その夜のすべての出来事に対する、そして実際、私たちに代わってカルバリの暗闇の中で裁きを受ける前の、すべての出来事に対する主の応答は、このことを最も明瞭に示しています。神のご意志は必ず成就し、人間や人間の集団が神のご意志を妨げることはできません。

(4)しかしイエスは、**自分の身に起ろうとすることをことごとく承知しておられ**、進み出て彼らに言われた、「だれを捜しているのか」。(5)彼らは「ナザレのイエスを」と答えた。イエスは彼らに言われた、「わたしが、それである」。イエスを裏切ったユダも、彼らと一緒に立っていた。(6)イエスが彼らに「わたしが、それである」と言われたとき、彼らはうしろに引きさがって地に倒れた。(ヨハネ 18 章 4-6 節)

(51)すると、イエスと一緒にいた者のひとりが、手を伸ばして剣を抜き、そして大祭司の僕に切りかかって、その片耳を切り落した。(52)そこで、イエスは彼に言われた、「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる。(53)それとも、わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか。(54)しかし、それでは、こうならねばならないと書いてある**聖書の言葉は、どうして成就されようか**」。(マタイ 26 章 51-54 節) (参照：[ヨハネ 18 章 11 節](#))

差し迫った十字架の重荷と、世の罪のための死を耐えようとしているにもかかわらず、私たちの主の上記の行動とコメントは、ご自分が神の子そのものであることを、完全に確信しておられることを明らかにしています。主の神性に触れただけで、襲ってきた者たち全員が主の前に倒れ、主がひと言言うだけで、抵抗できない天使の力を呼び寄せることができたのです。しかし、主は私たちのために死ぬことを決意され、この世のいかなるものも、私たちの偉大な永遠の福利のために、御父の御心を成し遂げることを思い留まらせることはできませんでした。

主がこれらのことを言われたとき、ペテロが剣を取り上げたときに見せた誤った威勢

は消え失せて、弟子たちは予言されたとおりのパニック([マタイ 26 章 31 節](#); [マルコ 14 章 27 節](#); [ゼカリヤ 13 章 7 節](#) 参照)で反応し、主は逮捕され、引き立てられて行きましたが、主はこの事態に抵抗されませんでした([イザヤ 53 章 7-8 節](#))。

(55)そのとき、イエスは群衆に言われた、「あなたがたは強盗にむかうように、剣や棒を持ってわたしを捕えにきたのか。わたしは毎日、宮ですわって教えていたのに、わたしをつかまえはしなかった。(56)しかし、すべてこうなったのは、預言者たちの書いたことが、成就するためである」。そのとき、弟子たちは皆イエスを見捨てて逃げ去った。(マタイ 26 章 55-56 節)(参照:[マルコ 14 章 48-52 節](#); [ルカ 22 章 52-53 節](#))

あなたがたに言うが、『彼は罪人のひとりに数えられた』(イザヤ 53 章 12 節)としるしてあることは、わたしの身に成しとげられねばならない。そうだ、わたしに係わることは成就している」。(ルカ 22 章 37 節)

キリストの七つの裁判： 聖書の象徴では、七は完全の数であり、神の数(例えば、七日目、千年王国、七つのエデン)である一方、六は人間の数(すなわち、六日目に創造され、イエス・キリストというお方が加わらなければ不完全)です。ですから、私たちの主が、暗闇の中で私たちの代わりに御父によって十字架上で裁かれる前に、人間の手によって六つの試練を受けさせられたのは、偶然ではありません。これらの試練のそれぞれにおいて、イエスは反論の余地のない無罪の身でありながら、それにもかかわらず断罪され、しみも傷もない完全ないけにえの小羊として、私たちの罪の身代わりとなるため死刑に処せられました。そして、人間の手によって行われたそれぞれの裁判において、私たちの主は断罪されただけでなく、肉体的にも精神的にも虐待されました。とはいえ、このような六つの試練の一つでも、私たちにとっては耐え難いことですが、主にとっては、十字架上で試練中の試練が始まる前に、主の気概と完全性を示すための前哨戦だったのです。

人類史上前例がなく、二度と再現されることのないこの虐待の試練は、預言されたメシヤの最後の屈辱です。私たちの主イエスの受難と屈辱は、旧約聖書の預言に繰り返し登場するテーマであり、まぎれもないものです(イザヤ 52-53 章参照)。それがあまりにも「不快」であったため、イエスの同時代の人々はイエスご自身を拒絶しました。その結果、それ自体がイエスの苦しみと屈辱の一部でした([詩篇 22 篇 6 節](#), [118 篇 22 節](#); [イザヤ 53 章 3 節](#); [マルコ 9 章 12 節](#); [第一ペテロ 2 章 4 節](#))。そのため、[詩篇 118 篇 21 節](#)の誤った伝統による唱えのように、このことを預言している聖句の部分が、意図

的に隠ぺいされることもありましたが(上記脚注#66 の「凱旋」で取り上げています)。私たちはすでに、主の裏切り(預言された言葉:「わたしの仲間、わたしの親しい友」[詩篇 55 篇 13-14 節](#), [詩篇 41 篇 9 節](#)参照)、弟子たちに見捨てられたこと(預言された言葉:「牧者を撃て」:[ゼカリヤ 13 章 7 節](#)、ペテロの三度の否認については後述)を取り上げてきました。これから私たちは、その過程と結果において、基本的な正義の概念からこれ以上かけ離れることはあり得ないほどの、主が耐えなければならなかった試練について(預言された言葉:「彼らは理由なしにわたしを憎んだ」:[ヨハネ 15 章 25 節](#), [詩篇 35 篇 19 節](#), [詩篇 69 篇 4 節](#), [イザヤ 52 章 13 節-53 章 12 節](#)参照)考えてみます。これらのことはすべて、私たちの主の苦しみや「受難」に大きく影響を与えました。それは単に、家でくつろぎながらそれらについて読むだけでは見逃しがちなことです。何年も気につけ、助けようとしてきた人に裏切られて死に至ること、また、最も必要な時に、最も親しい仲間たちから見捨てられ、否定されることは、小さな事ではありません。

最後に、十字架の刑そのものに至る前に、キリストが受けた 6 つの試練は、私たち誰もが耐えることのできない、まさに耐え難い重荷でした。特に、私たちの主のような完全に聖化された行動で耐えることは、到底不可能なことでした。肉体的な苦しみ、殴打や鞭打ち、中傷や冒瀆、つばを吐きかけられることやあざけりによる精神的な苦痛を越えて、司法手続きによって断罪されること、邪悪な人間、法を犯す人間、まともな市民から敬遠されるべき人間であると裁かれること、自分を中傷し死を求める怒れる群衆に襲われることは、恐ろしいことです。特にそれが全く真実でない、不当で不正なものであれば、なおさらです。しかし、私たちの主イエス・キリストほど、すべての悪事やそのように見えるものに対して、完全かつ明白に無実であった人はいません。それであるのに、主イエス・キリストは六回も断罪され、ご自分が救いに来た人々は、イエス・キリストよりも本物の犯罪者(バラバ)を助命することを優先したのです。

ゴルゴダの前の最後の数時間、肉体的な苦しみに加え、強烈な恨みと怒りにふける誘惑に耐え、**すべての人から拒絶され、見捨てられ、罵倒された主が、十字架の前に耐え忍ばれた精神的な苦しみを、私たちはおそらく完全に理解することはできないでしょう。**これに、世の罪のために死ぬという主の予期を加えると、ゲッセマネの園での祈りが示すように、他のあらゆる苦難とは比較にならないほど重大なものであり、それらの他の事柄については、祈りの中で言及さえされていないほどです。(すなわち、十字架上の罪のための死が、主の言われていた「杯」のことです。)とはいえ、主の「受難」のこの部分を考えるとき、キリストが十字架の前に受け、預言されたキリストの屈辱を構成するこれらの事は、私たちの罪を償うものではなかったことを理解することは、私たちクリスチャンを自称する者にとって、絶対的に重要です。私たちの主イエスが十字架上の暗闇の中で裁かれたことが、これらの罪を洗い流したのであって、神の正しい視

点から見れば、十字架に先立つ想像を絶する肉体的、精神的な苦しみ、つまり、こうした歴史的出来事が罪を洗ったのではなかったということです。

では、なぜイエスは、私たちの罪を「木の上でその身に負う」([第一ペテロ 2 章 24 節](#))十字架に至る以前に、このような試練を乗り越えなければならなかったのでしょうか。この先立つ苦しみは、間違いなく旧約聖書の預言の数々を成就させるものでした([使徒 13 章 27-29 節](#)参照)。そして悪魔は、イエスが御父に受け入れられ、私たちの罪の身代わりとして受け入れられる形で十字架に至るのを阻止するために、できる限りのことをしました。(ヨハネ 16 章 33 節; [ローマ 14 章 9-10 節](#); [エペソ 1 章 19b-23 節](#); [ピリピ 2 章 9-11 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#); [黙示録 5 章 5-14 節](#); [エペソ 4 章 8-10 節](#)参照)⁷¹。さらに言えることは、私たちの主がこの最後の試練に断固として揺るぎなく立ち向かわれたことは私たちに対する、そして全世界に対する主の限りない愛を、鮮明に示す役割を果たしているということです。

過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。(ヨハネ 13 章 1 節)

神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ 3 章 16 節)

しかし、サタンが私たちの主を物理的に阻止することでもないかぎり(それはサタンには明らかに許されなかったこと)、どんなに辛く、痛く、感情的、肉体的に灼熱のものであっても、また痛みと屈辱の試練を乗り越えた先に待っていたのが、私たちが地上でおぼろげにも理解することのできないような、とてつもなく過酷で恐ろしいこと、つまり、私たちの罪のために、そして全世界の罪のために裁きを受け、死んでいくことであっても、父の御心を最後まで遂行することを止めることはできませんでした。重要なことすべてにおいてそうであるように、イエスは私たちの模範であり、イエスがされたように、私たちも自分の十字架を背負い、神が私たちの前に置かれたことは何でも行うべきなのです。しかし、私たちは確信を持って言えます。この試練が何であれ、それはイエスが経験されたものには決して及ばないでしょう。そして、私たちが直面するいかなる試練の先にも、たとえ大患難の真っ只中で殉教が私たちの運命であっても、私たちの主がされた究極の犠牲のようなものを経験するのではなく、私たちはさらなる苦しみから解放

⁷¹ 「来たる艱難期 第 2 部 B「天の前奏曲」II[b]「勝利を得た小羊」参照。

され、第三の天で彼の前で「よくやった」と称賛されることになるのです([第一ペテロ 4 章 13 節](#)。参照。 [ローマ 8 章 17 節](#); [第二コリント 1 章 5 節](#); [ヒリピ 3 章 10 節](#); [コロサイ 1 章 24 節](#)参照)。

(52:13)見よ、わがしもべは栄える。彼は高められ、あげられ、ひじょうに高くなる。(14)多くの人が彼に驚いたように——彼の顔だちは、そこなわれて人と異なり、その姿は人の子と異なっていたからである(劣っていたからである)——(15)彼は多くの国民(異邦人)を驚かす(救いを施す)。王たちは彼のゆえに口をつむぐ。それは彼ら(異邦人)がまだ伝えられなかったことを見、まだ聞かなかったことを悟るからだ。(53:1)[しかし]だれがわれわれの聞いたことを信じ得たか。主の腕(すなわち、メシヤ)は、だれにあらわれたか。(2)彼は主の前に若木のように、かわいた土から出る根のように育った。彼にはわれわれの見るべき姿がなく、威厳もなく、われわれの慕うべき[特別な]美しさもない。(3)彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。(4)まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。(5)しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼は[神と和解するために、わたしたちに代わって]みずから懲しめ[必要な罰]をうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。(6)われわれはみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。(7)彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。(8)彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。(9)彼は暴虐を行わず、その口には偽りがなかったけれども、その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者と共にあった。(10)しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、主は彼を悩まされた。彼が自分を、とがの供え物となすとき、その子孫を見ることができ、その命をながくすることができる。かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。(11)彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する(その生涯に与えられた悩みから解放され再び命の光を見て、満足する)。義なるわがしもべはその知識によって、多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。(12)それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲

物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。(イザヤ 52 章 13 節-53 章 12 節)

(6)わたしを打つ者に、わたしの背をまかせ、わたしのひげを抜く者に、わたしのほおをまかせ、恥とつばきとを避けるために、顔をかくさなかった。(7)しかし主なる神はわたしを助けられる。それゆえ、わたしは恥じることがなかった。それゆえ、わたしは顔を火打石のようにした。わたしは決してはずかしめられないことを知る。(イザヤ 50 章 6-7 節)

わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか。なにゆえ[あなたはそんなにも]遠く離れてわたしを助けず、わたしの嘆きの言葉を聞かれ[ず、答えられ]ないのですか。(詩篇 22 篇 1 節)

(6)しかし、わたしは虫であって、人ではない。人にそしられ、民に侮られる。(7)すべてわたしを見る者は、わたしをあざ笑い、くちびるを突き出し、かしらを振り動かして言う、(8)「彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」と。(マタイ 27 章 39-43 節; マルコ 15 章 27-32 節; ルカ 23 章 35-37 節参照)(9)しかし、あなたはわたしを生れさせ、母のふところにわたしを安らかに守られた方です。(10)わたしは生れた時から(すなわち、生まれた直後から)、あなたにゆだねられました。母の胎を出てからこのかた[わたしが胎から出た時から]、あなたはわたしの神でいらせられました。(11)わたしを遠く離れないでください。悩みが近づき、助ける者がいないのです。(12)多くの雄牛[のように、彼ら]はわたしを取り巻き、バシヤンの強い雄牛[のように、彼ら]はわたしを囲み、(13)かき裂き、ほえたけるししののように、わたしにむかって口を開く。(14)わたしは水のように注ぎ出され、わたしの骨はことごとくはずれ、わたしの心臓は、ろうのように、胸のうちで溶けた。(15)わたしの力は陶器の破片のようにかわき、わたしの舌は[渇きで]あごにつく。あなたはわたしを死のちりに伏させられる。(16)まことに、犬[のように彼ら]はわたしをめぐり、悪を行う者の群れがわたしを囲んで、わたしの手と足を刺し貫いた。(17)わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。(18)彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする。(19)しかし主よ、遠く離れないでください。わが力よ、速く来てわたしをお助けください。(20)わたしの魂をつるぎから、わたしのいのちを[これらの]犬[たち]の力から助け出してください。(21)わたしをししの口から、苦しむわが魂を野牛の

角から救い出してください。(詩篇 22 篇 6-21 節)

わたしの信頼した親しい友、わたしのパンを食べた親しい友さえもわたしにそむいてくびすをあげた。(詩篇 41 篇 9 節)

(12)わたしをののしる者は敵ではありません。もしそうであるならば忍ぶことができます。わたしにむかって高ぶる者はあだではありません。もしそうであるならば身を隠して彼を避けることができます。(13)しかしそれはあなたです、わたしと同じ者、わたしの同僚、わたしの親しい友です。(14)われらはたがいに楽しく語らい、つれだって神の宮に上りました。
(詩篇 55 篇 12-14 節)

彼らはわたしの食物に毒を入れ、わたしのかわいた時に酢を飲ませました。(詩篇 69 篇 21 節)(参照:[19-21 節](#); [マタイ 27 章 34 節](#), [27 章 48 節](#); [マルコ 15 章 23 節](#), [15 章 36 節](#); [ルカ 23 章 36 節](#); [ヨハネ 19 章 29 節](#))

主よ、あなたのしもべがうけるはずかしめをみこころにとめてください。主よ、あなたのもろもろの敵はわたしをそしり、あなたの油そそがれた者の足跡をそしります。わたしはもろもろの民のそしりをわたしのふところにいだいているのです。(詩篇 89 篇 51 節)

家造りらの捨てた石は隅のかしら石となった。(詩篇 118 篇 22 節)

敵はわれわれを攻め囲み、つえをもってイスラエルのつかさのほおを撃つ。(ミカ 5 章 1 節後半)

殴打、つばをかけられること、あざけり、嘘つき、ののしり、裏切り、拒絶、その他主が耐えなければならなかったすべてのことに加えて、主が十字架につけられたことは(石打ちの刑や斬首の刑とは違って)、特に苦痛の伴う処刑であったことに加えて、主の屈辱の一部でもあったことに注意すべきです。というのも、このような死の方には([ヘブル 12 章 2 節](#)参照)、「呪いの下」([申命記 21 章 23 節](#); [ガラテヤ 3 章 13 節](#))にあると宣言するものなので、ある種の恥が伴うからです。

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。(第二コリント 5 章 21 節)

... [モーセは]キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。(ヘブル 11 章 26 節)

こういうわけで、わたしたちは、[11 章の信者のように]このような多くの証人[人と天使たちの両方]に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、**恥をもいとわないで**十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである。(ヘブル 12 章 1-3 節)

したがって、わたしたちも、**彼のはずかしめ**を身に負い、営所の外に出て、みもとに行こうではないか。(ヘブル 13 章 13 節)

さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架に＜英直訳：**木に**＞かかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。(第一ペテロ 2 章 24 節)

しかし、十字架にかけられ、暗闇の中で私たちに代わって罪のために死ぬという究極の試練の前に、私たちの主は、全く罪がないにもかかわらず、罪深い人間の手による六つの裁判を受けさせられ、主が彼らの罪のために死のうとしているその人間たちから罵倒され、拒絶され、断罪されるのです。

1) アンナスの前での裁判([ヨハネ 18 章 12-24 節](#))：主の時代、大祭司職は主に政治的な役職になっていました。アンナスはもう職には就いていませんでしたが、カヤパの義父であり、王座の背後にある明らかな権力者でしたので、ゲッセマネの園で逮捕された主が、最初に連行されたのはアンナスでした。激しい尋問の中、イエスは弟子たちに関する質問に答えることを拒否し、肉体的な虐待にもかかわらず、臆することはありませんでした(参照：[ヨハネ 18 章 21-23 節](#)；[イザヤ 50 章 8-9 節](#))。

2) カヤパの前での裁判([マタイ 26 章 57-68 節](#)；[マルコ 14 章 53-65 節](#))：ヨハネとマタイの記述を比較すると、アンナスの住居は大祭司の公邸と中庭を共有していたようで

す。最初の尋問と同様、この裁判も邸宅の中庭で行われたに違いありません。ペテロは裁判の進行を観察することができ、主はペテロが三度目の否認をした直後に会うことができたからです([ルカ 22 章 61 節](#))。第一回目の裁判は、主の従者たちを一網打尽にするための情報収集に重点が置かれていたようですが、この第二回目の裁判は、ローマ総督に受け入れられ、かつ説得力のある死刑のための適切な罪状をでっち上げることを目的とした、下準備的な機能を果たしていたようです。しかし、取り調べを受けた証人の誰も、説得力のある証言はしておらず、主が直接の尋問を受けてメシヤであることを認めたときに初めて、告発者たちはイエスを有罪にする十分な証拠が揃ったと満足したのです。この裁判の過程で、イエスは唾を吐きかけられ、平手打ちをされ、殴られ、目隠しをされ、あざけられました。

3) サンヒドリンでの裁判([マタイ 27 章 1 節](#); [マルコ 15 章 1 節](#)前半; [ルカ 22 章 66-71 節](#); [ヨハネ 18 章 28 節](#)参照): 最初の二つの裁判は地理的に近い場所で行われましたが、おそらく夜明け前に、主はユダヤの元老院またはサンヒドリンが開かれた公会堂に連行されました。四つの福音書すべてによると、この三回目の裁判は、二回目の裁判のすぐ後に行われ、ペテロの否認を挟んで、夜明けに行われました。エルサレムとユダヤで(ローマ総督とそのスタッフ以外の)最も政治的に力のある人々の前でこの裁判が行われた目的は、大祭司が用意した罪状に正式な「ゴム印」を押すことにすぎませんでした。この裁判の詳細はルカにのみ記録されており、主が問われた唯一の告発は、カヤパが衣を引き裂く原因となったのと同じものです:

彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」。(ルカ 22 章 70 節)

この非常に短い裁判の結果は、迅速な有罪判決で、主は縛られたままプラエトリウム(ローマ総督の本部)に連れて行かれました([マタイ 27 章 2 節](#))。

4) ピラトの前での裁判: 第一段階([マタイ 27 章 11-14 節](#); [マルコ 15 章 1b-5 節](#); [ルカ 23 章 1-5 節](#); [ヨハネ 18 章 28-30,31-34,34c-36,37-38 節](#)): ローマ帝国の保護領であったユダヤでは、死刑の権限はローマ総督に委ねられていたため([ヨハネ 18 章 31 節](#))⁷²、主をピラトの前に連れて行く必要がありました。イスラエルの支配者たちがイエスは死ぬべきであると決定した以上、あとはこの決定を実行に移すだけであり、そのためにはローマ総督を説得して、彼らの死刑宣告を承諾させる必要があったから

⁷² 参照. A.N. Sherwin-White, Roman Society and Roman Law in the New Testament (Oxford 1963) 25-47.

です。この目的のために、祭司、長老、律法学者、パリサイ人たちは、どんな偽りでも厭わず、自分たちがすでに下した決定に対して、何らかの根拠を示さなければならぬことに、明らかに苛立っていました（「もしこの人が悪事をはたらかなかつたら、あなたに引き渡すようなことはしなかったでしょう」[ヨハネ 18 章 30 節](#)）。ルカは、イエスを処刑する理由を求めるピラトの要求に対して、三つの告発を記録しています：

そして訴え出て言った、「[1]わたしたちは、この人が国民を惑わし、[2]貢をカイザルに納めることを禁じ、また[3]自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。（ルカ 23 章2節）

彼らが、私たちの主が犯罪的な行為をしているのにたった今「出くわした」という訴えは、（妬みからしているのではないと思わせるための）訴訟全体が不審に思われないために意図されたものです。「民衆を惑わした」というのは、全く一般的な罪状で、ピラトがそのまま無罪放免にすることになりかねない場合に、ピラトに有罪の理由を与えるためのものです。「税金を納めさせないようにした」というのは、もちろん全くのでたらめです。「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」という主の命令は、既に知れ渡っていました。異邦人への納税に憤慨し、そのような納税を回避し、抵抗するために共謀したことは、実際、彼ら自身が有罪であった可能性が高い犯罪でした。しかし、この第二の罪状は、ピラトに死刑執行を許可するもつともな言い訳を与えることとなります。

最後に、ほとんど後付けのように、サンヒドリンが実際に合意した罪状が含まれています：イエスはメシヤだと主張したということです⁷³。これは彼らの不信心な目には冒涇であり、彼らは説明のために「王」という言葉を付け加えましたが、それは間違いなく、カイザルに代わる王権を主張するもの、特に神の委任を主張するものは、ローマ政權から謀反者の脅威とみなされる可能性が高いことをよく知っていたからでしょう。しかし、彼らは、ピラトが最初の二つの罪状を見抜き、頭から退け、三番目の罪状に集中するとは思っていませんでした。

「あなたがユダヤ人の王であるか」([マタイ 27 章 11 節](#)) ([マルコ 15 章 2 節](#); [ルカ 23 章 3 節](#); [ヨハネ 18 章 33 節](#))

⁷³ もちろん、ここでも、この告発の修辭的な言い回しは、裁判官を予断させるためのものです。イエスはご自分がメシヤであると大声で宣言して回ったわけではありません。イエスは弟子たちに真理を明かし、質問されて真理を認めましたが、この告発は（イエスがメシヤである以上）不適切であるだけでなく、自己中心的で傲慢で見栄っ張りな振る舞いを不当に示唆するという点で、偏見に満ちたものです。

「そのとおりである」([マタイ 27 章 11 節](#))([マルコ 15 章 2 節](#); [ルカ 23 章 3 節](#); [ヨハネ 18 章 37 節](#))

ヨハネだけが、イエスのより詳細な説明を記録しています。イエスは確かに王ですが、その王国はこの世のものではありません。イエスは真理を証しするために来られたのであって、この世の支配に取って代わるために来られたものではありません。「真理とは何か」([ヨハネ 18 章 38 節](#))というピラトの悪名高い答えは、主が地上の反乱を扇動しているのではないことを、はっきりと理解していたことを示しています。その結果、ピラトが最初に下した正当な評決は、彼にとって容易なものでした：

「わたしはこの人になんの罪もみとめない」。
([ルカ 23 章 4 節](#)) (参照：[ヨハネ 18 章 38 節](#))

しかし、この判決によって無罪を言い渡された者について、告発者たちは激しく訴えました。あらゆる正義の基準に反して、ピラトはこの言葉による猛攻撃をしばらく続けさせ、主がそれ以上の告発に答えられなかったことに「驚いた」のです([マタイ 27 章 14 節](#); [マルコ 15 章 5 節](#))：イエスは、圧倒的に不当であつたにもかかわらず、それまで受けてきたすべての法的手続きに協力されたのです。そして罪を認められなかったイエスは、もはや正義の基準によって拘束されることはありませんでした(「**あんなにまで次々に、あなたに不利な証言を立てているのが、あなたには聞えないのか**」と言ってイエスから言葉を引き出そうとしましたが、ピラトはそれ以上歩み寄る術はありませんでした：[マタイ 27 章 13 節](#); [マルコ 15 章 4 節](#))。それで、ピラトがイエスの宣教がガリラヤで始まったという事実を知るやいなや、そのことを利用しようとしたわけです([ルカ 23 章 5-7 節](#))。

5) ヘロデの前での裁判([ルカ 23 章 8-12 節](#))：主をヘロデのもとに送ることは、ピラトにとって完璧な解決策に思えたことでしょう。それは責任を転嫁させる素晴らしい方法でした。ヘロデの父であるヘロデ「大王」は、結局のところ、ローマ帝国の保護国としてユダヤで王権を振るっていたのですが、王としての統治権は大王の死後、(その長男であるヘロデ・アケラオの不正行為のため)消失することになりました。もう一人の息子であるこのヘロデ<アンテパス>もまた、自分の父親のかつての地位を獲得しようとしていたことは想像がつかます。他人が「王」を名乗ることに腹を立てる者がいるとすれば、それは間違いなくヘロデでしょう。ヘロデの父はイエスを殺そうとし、ベツレヘムの男児を殺し([マタイ 2 章 1-19 節](#))、その息子であるヘロデ(アンテパス)は、主の布告者である洗礼者ヨハネを処刑しました([マタイ 14 章 3-12 節](#)、[マルコ 6 章 17-30 節](#); [ルカ 9 章 9 節](#))。このように、イエスをヘロデのもとに送ることは、良心的な行為とはほど遠いもの

で、それとイエスは分かったに違いありません。しかし、ヘロデはこの待遇を受けたことを喜び、私たちの主を長々と問い詰めましたが(私たちの主はこの違法な手続きに応じなかったので、ヘロデは何の得るものもありませんでした)、主は明らかに、いかなる法的手続きにも関与する気はなく、そのつもりもありませんでした。イエスをさらに罵倒した後、ヘロデはイエスをピラトに送り返しました。

6) ピラトによる裁判: 第二段階([マタイ 27 章 15-26 節](#); [マルコ 15 章 6-15 節](#); [ルカ 23 章 13-25 節](#); [ヨハネ 18 章 39 節-19 章 16 節](#)):ピラトは、ヘロデが主を自分のもとに戻したことを、自分が以前に無罪判決を下したことへの承認と解釈しました([ルカ 23 章 15 節](#))。イエスが返された後、ピラトはさらに何度も主の十字架刑を阻止しようとしました。これにはいくつかの理由があるのは間違いないでしょうが、その一つとして、彼の正義に対する深い敬意を挙げる必要はないでしょう。(参照:[ヨハネ 18 章 38 節](#)「真理とは何か」)。主のあかしと主の臨在の力は、ローマ総督に深刻な不安(参照:[ヨハネ 19 章 7-12 節](#))を引き起こし、また、彼の妻が主とは一切関わらないようにと彼に警告したことも、さらなる不安の原因であったと思われます([マタイ 27 章 19 節](#))。しかし、ピラトはまた、1) 自分とユダヤ当局との間のこの「意地の張り合い」に負けたくないという願望、2) 明らかに政治的な殺人と見なされていることに、何らかの形で巻き込まれることを避けたいという願望、つまり、正義感からではなく、むしろ、どの派閥をも不必要に疎外しないために、ユダヤ党派政治の争いに巻き込まれないようにしたいという願望(つまり、イエスが「ねたみから」逮捕されたことがわかっていた)から、イエスを助けるように動かされていた可能性が高いです:[マタイ 27 章 18 節](#); [マルコ 15 章 10 節](#)。群衆を説得しきれずに、文字通り「手を洗った」のも、このためです:[マタイ 27 章 24-25 節](#))。

自分自身とヘロデの尋問に基づいて、イエスは無罪だと宣言しようとした彼の試みが説得力を持たなかったとき、ピラトは、ますます緊迫していくこの状況から解放されるために、十字架刑に代わる妥協策を見つけようとしていました。しかし、祭司長や長老たちに煽られた群衆は、代わりにバラバを求めて叫びました([マタイ 27 章 20 節](#); [マルコ 15 章 11 節](#))。彼はまた主に対して屈辱と虐待を試みて、主はさらに殴られ、鞭打たれ、兵士たちに嘲笑され([マタイ 27 章 27-30 節](#); [マルコ 15 章 16-19 節](#); [ヨハネ 19 章 2-3 節](#))、紫色の服を着ていばらの冠をかぶった主(ピラトは知らなかったが、主が全世界のために呪われようとしていることの象徴:[創世記 3 章 18 節](#)参照)⁷⁴を群衆にコミカルに紹介して差し出しました:「見よ、これがその人だ!」([ヨハネ 19 章 5 節](#))。この妥協策も受け入れてもらえず、主とのさらなる尋問によっても、彼のジレンマに対して解決策にも助けにもならなかったとき(「わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架

⁷⁴ この見解は、マドレーヌ・ウッドワードさん Ms. Madeleine Woodward のおかげです。

につける権威があることを、知らないのか」。イエスは答えられた「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」(ヨハネ 19 章 10-11 節))、ピラトはついにイエスを十字架刑に引き渡したのですが、これはユダヤ人指導者の指導の下、民衆がエースの切り札を使ったときでした：「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。」(ヨハネ 19 章 12 節)。究極の政治的実利主義者であったピラトは、この時点で自分が負けたことを知っていました。民衆と民衆の意思に主を引き渡さないことは、(それが彼の力の及ぶ範囲であったとしても)彼にとって大きな代償を伴う決断となり、イエスのために不利益(当面の暴動、将来の不安定、あるいはカイザルに告発される可能性のある不正行為など)も被りたくはありませんでした。そこで、ピラトは、ユダヤ人たちが自分たちで決めたことを受け入れてただけだということをはっきりさせるために、まず手を洗い、自分の「潔白」(申命記 21 章 6 節参照)を示したのです。その時人々は叫んで：「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい！」と言ったのです(マタイ 27 章 25 節)。そして、疑いを残すことのないように、またこの敗北から政治的資本を得るために、ピラトはイエスを彼らの「王」と呼び、彼らが本当に自分たちの王を十字架につけることを望んでいるのかどうか、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」と彼らが返すまで、質問しました。ピラトは、悪い状況を最大限に(靈的に盲目的視点から)利用し、イエスを十字架につけるために「彼らの意志に引き渡した」のです(ルカ 23 章 25 節；マタイ 27 章 26 節；マルコ 15 章 15 節；ヨハネ 19 章 16 節参照)。

1. 十字架刑:

1) 十字架の出来事:

嘲笑され、拒絶され、殴られ、鞭打たれた主は、この時、体力の限界に近づいていましたが(しかし、道徳的な決意は失っていませんでした)、ヘブル語で「頭蓋骨」を意味するゴルゴタという名の場所まで主は十字架を担いで歩かされました。ヨハネの福音書によれば、イエスは十字架を背負わされた最初の行程で、自ら十字架を背負っていました(ヨハネ 19 章 17 節)。私たちの主は、その前の夜から朝にかけて、たいていの男を殺すのに十分な肉体的虐待を受けて、どうやら、主が死に行く場所まで連行するローマ兵の動きに合わせて、速く動くことができなかったようです。そこで彼らは、アレキサンデルとルポスの父(ローマ 16 章 13 節参照)であるクレネ人のシモンに「無理やり」、残りの道のりを主に代わって十字架を担がせました(マタイ 27 章 32 節；マルコ 15 章 21 節；ルカ 23 章 26 節)。二人の犯罪人も十字架につけられることになり(ルカ 23

[章 32 節](#))、行列が進んでいく中、途中で主はついて来ていた大勢の群衆に向かって、胸を打ち、嘆き悲しむ女たちに声をかけられました：

イエスは女たちの方に振りむいて言われた、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、あなたがた自身のため、また自分の子供たちのために泣くがよい。『不妊の女と子を産まなかった胎と、ふくませなかった乳房とは、さいわいだ』と言う日が、いまに来る。そのとき、人々は山にむかって、われわれの上に倒れかかれと言い、また丘にむかって、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう。もし、生木でさえもそうされるなら、枯木はどうされることであろう」。(ルカ 23 章 28-31 節)

[ホセア書 10 章 8 節](#)の後半<「…そのとき、人々は山にむかって、われわれの上に倒れかかれと言い、また丘にむかって、われわれにおおいかぶされと言い出すであろう」>の引用は、メシヤの再臨の際、邪悪で改心しない人々が、どのような反応を示すかについての預言です。この引用と言葉によって、主は嘆き悲しむ人々の焦点を、御自身の状況から彼ら自身の霊的な危機へと移されました。数十年のうちに(紀元 68 年)、エルサレムは間違いなくローマ帝国によって完全に破壊されることになるのです。イエスの十字架刑をいくら嘆いても、エルサレムをその運命から救うことはできないでしょうし、この嘆きによって、イエスをメシヤとして、自分たちの罪と全世界の罪のために死のうとしている神のひとり子として、受け入れ信じようとしないう群衆を一人として救うこともできないでしょう。

ゴルゴダに到着したとき、主は痛みを消すためにある種の添加物を混ぜたぶどう酒を飲まされました。マルコはそれを「没薬」と呼び、マタイは「苦いもの」と呼んでいます。どちらの言葉もギリシヤ語では(よくさまざまな苦味や芳香のある物質を意味する)やや一般的な言葉です。マタイが「苦いもの」という単語を選んだのは、[詩篇 69 篇 21 節](#)の預言の成就を強調するためであることは明らかです。「彼らはわたしの食物に毒を入れ、わたしのかわいた時に酔を飲ませました」(ヘブル語のロシ ro'sh[ここでは「毒」と訳されています])は、実際には特定の苦いハーブ「にがよもぎ」を指しますが、しばしば有害な効果をもたらすものに喩えられます)。ある種の没薬には鎮静作用があると考えられており、主は、この恐ろしい試練の後、ひどく喉が渇いていたのは間違いないのですが、世の罪を引き受けるというご自分の自由意志の決断を、少しでも損なうようなものを飲みたくはなかったのです。十字架にかかるまで、私たちのために走り通されたこの試練のすべての出来事のように、私たちが永遠の命を得るために、主は私たちのためにそうされたのです。

彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いて、その着物を分け、
(マタイ 27 章 35 節)

それから、イエスを十字架につけた。そしてくじを引いて、だれが何を取るかを定めたうえ、イエスの着物を分けた。(マルコ 15 章 24 節)

されこうべと呼ばれている所に着くと、人々はそこでイエスを十字架につけ、犯罪人たちも、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけた。(ルカ 23 章 33 節)

彼らはそこで、イエスを十字架につけた。イエスをまん中にして、ほかのふたりの者を両側に、イエスと一緒に十字架につけた。(ヨハネ 19 章 18 節)

私たちの主を十字架に釘付けにする行為に関する実際の描写について、筆者がいつも気になるのは、特に何千年もの間、キリスト教の芸術、文学、音楽の中で重要視されてきたことに比べて、福音書の作者たちはそれをほとんど軽く扱っているようにさえ見えるのです。この事実だけでも、私たちのために主が支払われた犠牲を考える際に強調されるべきなのは、主の肉体的な死ではないことを示していると思います。結局のところ、後述するように、イエスは日射病やショックや外傷や失血によってではなく、自発的に霊を吐き出して肉体的に死なれたのです。私たちのために霊的に死ぬという十字架上の御業が成し遂げられた後、御自身の肉体の命を捨てられたのです。その「御業」、すなわち[霊的な]死は、私たちの代わりに裁かれ、世の罪のために裁きを受けるためであり、そのことによって世は、主を信じる信仰によって救われるのです。

(16)まことに、犬[のような者達]はわたしをめぐり、[この]悪を行う者の群れがわたしを囲んで、**わたしの手と足を刺し貫いた**。(17)わたしは自分の骨をことごとく数えることができる。彼らは目をとめて、わたしを見る。(18)彼らは互にわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする。(詩篇 22 篇 16-18 節)

しかし、彼は**わたしたちのそむきの罪のために刺し通され**、わたしたちの咎のために砕かれた。(イクシス訳:イザヤ 53 章 5 節)

わたしは、ダビデの家およびエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。**彼らは自分たちが刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように**

に、その者のために激しく泣く。(新改訳:ゼカリヤ 12 章 10 節)

(14)そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、**人の子も**(すなわち、罪の赦しのための信仰の対象として、すべての人が見ることができるように、十字架の上に)また**上げられなければならない**。(15)それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」。(16)神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ3章14-16節)

見よ、彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目、ことに、**彼を刺しとおした者たち**は、彼を仰ぎ見るであろう。また地上の諸族はみな、彼のゆえに胸を打って嘆くであろう。しかり、アメン。(黙示録 1 章 7 節)

死罪に問われたローマ市民に対する通常の刑罰は、斬首刑(参照. ファスセス:ローマの執行官が持っていた、斧に棒の束を巻きつけたものを指す)でした。それは十字架につけられるほどには、はるかに残酷ではなく苦痛の少ない処刑方法であり、しかもはるかに早く終わるものでした。しかし十字架刑は、ローマ帝国の権力に逆らう者を待ち受ける恐ろしい報いを、それを目撃したすべての人に伝えるためのものでした。そのため、十字架刑がほとんどの場合、ショック死、日射病死、脱水症状による非常に苦しい死を伴うものであり、その過程が数日間も続いたのは偶然ではありません。ピラトがイエスの「素早い」死に驚いたのも([マルコ 15 章 44 節](#))、ローマ兵がイエスの右と左にはりつけにされた二人の犯罪人の足を折って、安息日が始まる前に取り除かなければならなかったのも、このためです([ヨハネ 19 章 33 節](#))。足によって、十字架の上での自分の体を支えることができなくなると、すぐに窒息死が起こるからです(もちろん、ショックは大きいですし、その過程を早めることになります)。しかし、預言によれば、私たちのために死なれた主のからだの「骨は一本も」折られませんでした([詩篇 34 篇 20 節](#); [ヨハネ 19 章 36 節](#); [出エジプト 12 章 46 節](#); [民数記 9 章 12 節](#)参照)。兵士たちは主の脇腹を刺して、彼がすでに死んでいるとわかって、主に対しては何もしませんでした。十字架上の暗闇の三時間の間に、贖罪の業はすでに完成していたのです。

それゆえ、ローマ世界の住民にとって、十字架は恥辱、非難、死のしるしであり、象徴であり、とりわけ非常に苦痛を伴う、公然の、恥ずべき死でした。さらに、ユダヤ人にとってそれは、特に言えることで、人を(木や十字架に)吊るすことは、その人が「呪いの下にある」ことを意味します([申命記 21 章 23 節](#); 参照. [ヨシュア 8 章 29 節](#), [10 章 26 節](#); [サムエル下 4 章 12 節](#); [ガラテヤ 3 章 13 節](#))。このことは「クリスチャン」を名乗る私たちに、主が「自分の十字架を背負って」主に従いなさいと言われたとき([マタイ 10](#)

[章 38 節](#), [16 章 24 節](#), [マルコ 8 章 34 節](#); [ルカ 9 章 23 節](#), [14 章 27 節](#))、実際に何を意味していたか思い起こさせるはずです。主の模範から明らかであるように、これは単なる些細な、あるいは一時的な「不都合」に耐えなさいという命令ではなく、むしろ、この世とそこにあるすべてのものを避け、私たちが自分のために決してできないこと、つまり私たちの罪のために十字架上で死ぬことによって神の裁きを受け、私たちが神と共に生きる永遠の命への扉を開くということを、私たちのためにしてくださった方を喜ばせるために、キリストの苦しみとはずかしめを受け入れる人生への呼びかけなのです。

(24) 信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、(25) 罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、(26) キリストのゆえに受ける**そしり**を、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。(ヘブル 11 章 24-26 節)

(1) こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人(人と天使たち)に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とを(特に、私たちに習慣的に影響を与えているどんな罪でも)かなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。(2) 信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、**恥をもいとわないで十字架を忍び**、神の御座の右に座するに至ったのである。(ヘブル 12 章 1-2 節)

(12) だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために(すなわち、十字架上の死)、門の外で(すなわち、交わりから離れて)苦難を受けられたのである。(13) したがって、わたしたちも、彼の**はずかしめ**を身に負い、営所の外に出て(すなわち、同じように、世よりも神を選んで)、**みもと**に行こうではないか。(ヘブル 13 章 12-13 節)

十字架に架けられ、両手両足を釘で刺し通された時でさえ、時のペールを透かして彼方の栄光を思い見ることができるべきであった主の全ての弟子たちにとって、この苦しみと辱めの姿は、この世の恥辱の中に上げられた私たちの主が、復活して天に昇り、御父の右の座に栄光のうちに着座される、間もなく来たるその日を思い起こさせるものであったはずでした；そしてこれからも間もなく、私たちの主の十字架のしるしが天に現れ全地から目撃され、先んじて殉教したばかりのモーセとエリヤが主の右と左の栄誉の座につく、その日が来ることを思い起こすべきです([マタイ 24 章 29-30 節](#); 参照. [黙](#)

[示録 11 章 7-14 節](#)参照)。

私たちの主が十字架に釘付けにされ、ゴルゴダの丘で上げられた後、超自然的な暗闇が真昼頃にカルバリを訪れましたが、その前にいくつかの出来事が起こったことが福音書に記録されています：

1. 主の衣を分ける：これももちろん、メシヤの苦難に関する預言の成就でした([詩篇 22 篇 18 節](#)；[ヨハネ 19 章 24 節](#))。生きている間に、自分の地上の財産がすべて分割されるのを見なければならぬのは、十字架刑という心理的な苦痛の少なからぬ部分であったはずです。しかし、主が私たちにそうしなければならないと言われたように([ルカ 14 章 33 節](#)；[マタイ 19 章 29 節](#)；[マルコ 10 章 29-30 節](#)；[ルカ 18 章 29-30 節](#)参照)、主は初めからこの世のものには一切手をつけず、召された務めを効果的に果たすために、必要最低限のものしか持っておられませんでした([マタイ 8 章 20 節](#)；[ルカ 9 章 58 節](#))。これは、私たちが極貧の生活に召されているということでも、生命を維持するために必要以上のものをすべて切り捨てるべきだということでもありません。しかし、主の模範は私たちに完璧な基準を示しています：この世のものは主を支配する力は全くなかったのです。この残酷な行為は、主の目的を少しも思い留まらせることができなかったのです。ですから、私たちもまた、パウロが言うように「欠乏の中にあろうが、豊かさの中にあろうが」([ピリピ 4 章 12 節](#))、持っているものはすべて、神の御心を行うための神からの賜物であると考え、イエス・キリストのために必要であれば、それを手放す用意ができていなければなりません([ピリピ 3 章 7-8 節](#)参照)⁷⁵。

2. 十字架の罪状書き：マタイとマルコは、主が十字架につけられた「罪状」として、ピラトの罪状書きを記しています。公式的に言えば、キリストは尋問の中で、実際にキリストが「ユダヤ人の王」であり、そうであったことを認めたために、十字架につけられるように命じられたという事実には、意図的な神の皮肉があります([マタイ 27 章 37 節](#)；[マルコ 15 章 26 節](#)；参照 [マタイ 27 章 11 節](#)；[マルコ 15 章 2 節](#)；[ルカ 23 章 2-3 節](#)参照)。キリスト教の図像学では、INRI という文字がピラトによる罪状の(アクロステック：詩などの各行の最初の文字を並べた語句を読むという言葉遊び)頭文字としてしばしば用いられますが、これは実際には「ヘブル語、ラテン語、ギリシヤ語」([ヨハネ 19 章 20 節](#))で三重に書かれたものです。これらの文字は、ヨハネのギリシヤ語版を基に、ラテン語

⁷⁵ すなわち、主が「金持ちが天国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方が易しい」([マタイ 19 章 24 節](#)；[マルコ 10 章 25 節](#))と言われたのも、また、主が金持ちの若い支配者に「自分の持っているものを全部売って、貧しい人々に与えなさい」([マタイ 19 章 21 節](#))と言われたのも、富が人を救いから遠ざけるからではなく、むしろ富を所有することによって、その所有者が神ではなくその富に頼るようになることがしばしばあり、そのような誤った依存は信仰に不都合だからです。

の罪状に書き直されたものです：Iesus Nazoraius Rex Iudaeorum（「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」“Jesus of Nazareth, King of the Jews”）。⁷⁶ 罪状書きの最初は、エルサレムで話されていた言語であるヘブル語（NIV をはじめとするいくつかの版ではギリシヤ語のヘブライシュティという単語を「アラム語」と翻訳していますが、これは誤りです）で書かれており、当時の帝国の公用語であるラテン語はその次に記されていました。エルサレムにいてヘブル語やラテン語を知らない人でも、東地中海全域の共通語であるギリシヤ語は読んで理解するのに十分な知識があるはずなので、ギリシヤ語も使われたのです。このように、ピラトがイエスを「王」と表現したことは、イエスの十字架刑を見に来たすべての人に理解できたのです。さらに、この言葉が書かれたプラカードは、四つの福音書（[マタイ 27 章 37 節](#)；[マルコ 15 章 26 節](#)；[ルカ 23 章 38 節](#)；[ヨハネ 19 章 19 節](#)）すべてに同じように記述されていますが、それは主の十字架に取り付けられ、誰の目にも明らかでした。そのため、祭司長たちはピラトが「ユダヤ人の王」がここにいると宣言していることに反対し、ピラトに文言を変えさせようとしたましたが、ピラトはそれを拒否し、「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」（[ヨハネ 19 章 22 節](#)）と答え、彼らにとって気まずいこの真実をそのままにしておいたのです。

3. [イエスは十字架の上であざけられました](#)（[マタイ 27 章 39-44 節](#)；[マルコ 15 章 29-32 節](#)；[ルカ 23 章 35-39 節](#)）：群衆一般、特に祭司長や特に律法学者たちが、私たちの主が十字架にかけられ、私たちの罪のために裁きを受けようとしているときに注いだ侮蔑は、聖書全体でも（特に[詩篇 22 篇 7 節](#)を参照）、また具体的にも預言されていました。後者では、祭司長や律法学者たちが、実際にメシヤの苦しみを預言している詩篇 22 篇を引用して主を非難しますが、それは自分たちの盲目的で独善的な振る舞いを糾弾しているのです：

「彼は主に身をゆだねた、主に彼を助けさせよ。主は彼を喜ばれるゆえ、主に彼を救わせよ」と。（詩篇 22 篇 8 節）

（41）祭司長たちも同じように、律法学者、長老たちと一緒にあって、嘲弄して言った、（42）「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。（43）**彼は神にたよっているが、神のおぼしめしがあれば、今、救ってもらいがよい。自分は神の子だと言っていたのだから**」。（マタイ 27 章 41-43 節）

⁷⁶ ヴルガータによる第二語のラテン語訳「ナザレヌス」（Nazarenus）は、[ヨハネ 19 章 19 節](#)のギリシヤ語訳「ナゾライオス」（Nazoraïos- Ν α ζ ω ρ α ῖ ο ς）よりも可能性が低い表現です。

私たちの主が四方八方から受けたこの暴言、主が救うために来られ、そのために死のうとされた人々からの恩知らずの極みについて、最後に一つ注目すべきことがあります。イエスは、そうしようと思えば十字架から下りてきて、暴言を撤回させることも**できた**のです。イエスはご自分の考えを変えることも**できた**のです。世の罪のために死ぬ必要はなかったのです。イエスは私たちへの計りきれないほどの深い愛から、私たちのためにしてくださったのです。そして、私たちが背を向け、彼らが激しくあざ笑ったにもかかわらず、ご自分をあざける者たちにも永遠の贖いを与えるために、十字架に留まることを選ばれたのは、主の偉大な勇気と大いなる愛のしるしです。

4. 二人の強盗 :主と共に、二人の強盗も主の処刑の行列の中でカルバリーに連れて行かれ([ルカ 23 章 32-33 節](#))、主の右に一人、左に一人、十字架につけられました([マタイ 27 章 38 節](#); [マルコ 15 章 27-28 節](#); [ルカ 23 章 33 節](#))。これはまた、イエスご自身が言及された預言、すなわち、メシヤは「罪びとのひとりに数えられ」([ルカ 22 章 37 節](#))るという預言の一部を成就させたのです⁷⁷。これらの人々を表現するために使われたギリシヤ語、マタイとマルコでは「レステス」、ルカでは「カクールゴス」は、これらの者たちが軽犯罪者ではなく、最も凶暴な種類のプロの重罪人、追いはぎや恐ろしい犯罪を犯した家宅侵入者であったことを示しています。最初、彼らは他の者たちと一緒にあって、無実であるイエスを非難していましたが、しばらくして、間違いなく主が示された不屈の精神と勇気に感銘を受け、残っていた少しの良心に動かされたのでしょう。盗賊の一人が心を入れ替えました。彼は自分のあざけりをやめ、同胞を叱責し、主に憐れみを求めました。

(39) 十字架にかけられた犯罪人のひとりが、「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」と、イエスに悪口を言いつづけた。(40)もうひとりは、それをたしなめて言った、「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか。(41)お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」。(42)そして言った、「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」。(43)イエスは言われた、「よく言うておくれ、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。(ルカ 23 章 39-43 節)

「よく言うておくれ、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」という

⁷⁷ マルコ 15 章 28 節の本文への挿入により、この出来事を[イザヤ 53 章 12 節](#)に帰結させていますが、これは聖書の一部ではありません。

主のお言葉は、それを聞こうとするすべての人のために、一方ではこの世の全くのむなしさを、他方では私たちがこの世にいる本当の理由の極めて重要なことを、結晶化したものです。この男は、誰が見ても恥ずかしくなるような人生を送っていたにもかかわらず、ただ自分の愚かさを悔い改め、自分のために命を捨ててくれようとしていた主を信じただけで、イエスにある兄弟として、永遠に私たち全員と一緒に天国にいるのです。一方、見ていた人々の大多数は、世の人々の目には称賛され、それなりに立派な人生を歩んでいたかもしれませんが、ただ神の愛する御子というお方における、神の恵み深い救いの賜物を受け入れようとしなかったという理由で、永遠に火の池に投げ込まれるのです。

5. マリヤについてのヨハネへのイエスの指示:

(25)さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。(26)イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。(27)それからこの弟子にいわれた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。(ヨハネ 19 章 25-27 節)

これらの節は、このような苦痛と苦悩のただ中、世の罪のために死ぬ寸前であっても、主はなお、この世におけるあらゆる責任を完璧に果たし、十字架から、人間としての母のための備えをされたことを明確に示しています。しかし、マリヤの姉がそばにいたこと、また、マリヤには大家族([ルカ 1 章 39-45 節](#)参照)に加え、彼女にはかなり多くの子供がいたことを考えると([マタイ 13 章 56 節](#), [28 章 10 節](#); [マルコ 3 章 31 節](#); [ルカ 8 章 19 節](#); [ヨハネ 2 章 12 節](#), [7 章 3 節](#); [使徒行伝 1 章 14 節](#); [第一コリント 9 章 5 節](#); [ガラテヤ 1 章 19 節](#); [ユダ 1 章 1 節](#))、主がなぜこのような特別な采配をされたのかについての説明が必要です。兄として、残されたたった一人の親の世話は、まさに主の責任であり、主はご自分に代わって他の人にその決断を任せることを望まれなかったようです。世俗的な優先順位の観点から言えば、私たちの多くはこのような状況では(「血は水よりも濃し(家族の絆は他の関係よりも強い)」という言葉にあるように)家族を第一に考えたとしても無理はありません。あるいは、物質的な面を考え、愛する人を最もよく養える人に託すかもしれません。ヨハネは家族ではありませんでした。ヨハネは貧しかったのです(そして、イエスの兄弟たちよりも貧しかったことは間違いありません。ヨハネはそれまでの三年間、世俗的な意味で失業しており、イエスや十二人の弟子たちと共に、他の人からの施しで生活していたからです:[ルカ 8 章 3 節](#)参照)。しかし、主は明らかに、家族的な配慮や経済的な心配(兄弟たちに母の世話をさせた方が、この二つの点

でよかったでしょう)よりも、母の霊的な福利を気遣っておられたのです。イエスは、母が信仰の環境にあり続けることに気を配られ、この行動によってイエスは母の永遠の命と霊的成長が、肉体的状況や経済的安定よりもはるかに重要であることをはっきりと示されたのです。十字架の他のすべての出来事と同様に、これは私たちにとって重大な教訓です。もし私たちが誰かを本当に愛しているなら、ここでイエスの模範に倣って生き、その人の霊的な幸福を、他のすべての考慮事項よりも優先させるべきです。なぜなら、たとえその人が幸せで、健康で、経済的な欠乏がないことを確認したとしても、私たちが他の問題(健全な信仰を保ち、真理のうちに成長し、神と御子に近づくことよりも、神の目から見てはるかに下位の問題)に集中したため、その人が霊的に苦しむことになるなら、私たちは実にまずい取引をしたことになるからです。

これまで見てきたように、弟子たちの誰もが、主の死が間近に迫っている現実や重大性を事前に把握していなかったのですから、主がこの責任をヨハネに(あるいは他の誰かに)、それ以前に委ねていたとしたら、いささか軽率だったことでしょう。ヨハネはここにあるように、「イエスが愛された弟子」でした(参照:[ヨハネ 13 章 23 節](#), [20 章 2 節](#), [21 章 7 節](#), [21 章 20 節](#))。主のご判断は完璧でしたから、ヨハネの霊的な優先順位は、他の弟子たちと比べても良かったということです。そのような意味で、ヨハネはマリヤの世話をするのに最適な、そして実際に完璧な選択であったと思われます。

6. 「父よ、彼らをおゆるしてください」という挿入句は聖句ではない: 最も有名で、最も頻繁に翻訳されている聖句のひとつに、「父よ、彼らをお赦してください。彼らは自分で何をしているのかわからないのです」は聖書の言葉だと思われています。[ルカによる福音書 23 章 34 節](#)の前半にあるこの半節は、間違いなく聖書の一部ではなく、福音書の物語を補うために(後述するような動機で)後から書き加えられたものです。言語学、古文書学、歴史学、神学のどの観点から見ても、この箇所は明らかに偽造です。

1) 言語学的証拠: [ルカによる福音書 23 章の 33 節](#)は「…人々はそこでイエスを十字架につけ、犯罪人たちも、ひとり右に、ひとり左に、十字架につけた」で終わっています。一方、挿入部分に続く 34 節では、「そして、彼らはイエスの服を分け、くじ引きでそれを引いた」と、この文章が締めくくられています。ほとんどの英語訳でも(少なくとも、この不自然な挿入部分の問題を「化粧直し」するのにあまり手間をかけなかった場合)、変更された文書は説得力に欠けます。ギリシヤ語では、唐突に主題が変わり、すぐにまた元の物語に戻るという展開となって、このテキストに対する疑念がすぐに湧き起ります。この挿入句(ギリシヤ語では動詞は未完了時制であり、イエスが「言い続けた」ことを意味します)は、ルカの物語の文体とは一致しません。ルカの文体は、出来事の連鎖が中断されることはほとんどなく、特に重要な発言は通常、何らかの導入

部があり、それにいくつかの論評や説明、あるいは反応の描写が続くのが特徴です。ルカがこれを 34 節の冒頭ではなく、節の終わりに記していたとしたら、違和感は少なかったでしょう。しかし、挿入者がこの箇所を挿入のために選んだのは、主が十字架に釘付けにされた直後に、これらの言葉をイエスの口から発せさせたいと思ったからであることは明らかです（そして、私たちはすでに、聖書が実際にはその行為について詳しく述べていないという事実について議論しました。それはまさに、私たちの救いの基盤となるのは、十字架に釘付けにされるという肉体的苦痛ではなく、闇の中で罪のために死ぬことであるからです）。それでも、「そして、不法を犯した者は、一方を右に、一方を左に」という言葉によって、イエスの十字架刑とこの記述は切り離されています（この聖書にはない、追加部分の配置が、さらに不自然に見える理由です）。それぞれ単独では決定的なものではないかもしれませんが、この箇所を疑わしいものにする要素であるには違いなく、本文を注意深く読んでいる人、特にギリシヤ語で読んでいる人にとっては、疑いを抱かせるものです。

2) テキスト上の証拠：おそらく、この半節を聖書の一部と見なすことに対する最も決定的な証拠は、この半節が新約聖書の最も古く、最も優れた写本のいくつかに出ないという事実です。最も優れた古代写本であるシナイ写本の当時の校訂者は、その写本における誤った挿入箇所を修正して抹消しているだけでなく、他の主要な写本のいくつか（例えば、バチカン写本、D、W、シータ Theta、そして最後にボドマー・パピルス Bodmer papyrus は、他のほとんどの写本よりも古い証拠であり、一般的に西暦 250 年から 290 年頃とされています）では、そもそもそのような挿入箇所が存在しません。その結果、ギリシヤ語新約聖書の最も優れた批評版ではすべて、この箇所を偽書としています。文書分析の規範によると、この種のケースで考慮すべき主な検討事項の一つは、その文書が原本であるか否かによって、その一節を含められるか排除されるかの可能性を考慮するということです。この箇所がどれほど有名で、簡潔で、引用栄えするか（おそらく新約聖書の中で最も引用されている「節」です）を考えると、写本作業者がこれを省く理由として、納得のいく説明はできません。また、これほど有名な箇所がなぜ偶然見落とされたのか、合理的な説明もできません。したがって、最古の写本群の一部にその箇所が欠けていることは、その箇所が真正なものではないという決定的な証拠となります。なぜなら、これらの初期の写本にその箇所が欠けている唯一の可能性は、それがもともと真正な文書にはなかった（初期の写本が書かれた後に追加された）場合のみだからです。

3) 歴史的証拠：書記者がこの一節を書いてはいなかった根拠は容易に手に入りませんが、誰かがこのような一節を挿入したり、一旦挿入された一節を弁護したりする理由は明らかです。例えば、聖書を熱心に読む人なら誰でも知っているように、ステパ

ノは石打の刑に処せられているとき、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」と宣言しました(使徒行伝 7 章 60 節)。ステパノが世の罪のために死のうとしていたメシヤではなかったという明白な区別はさておき、私たちに代わって罪のために死んでくださった主の本質を表面的に理解している人が、同じような包括的な赦しの声明がないことを問題視し、この挿入によって認識した「問題」(実際にはまったく問題ではありません)を訂正しようとする事は簡単に推測できます。主要な現代英語版のすべてが、一般的にギリシヤ語原文に明確に記されていることだけを記するという方針をとっているにもかかわらず、この箇所を印刷しているという事実は、これが単なる古代の偏見ではないことを示しています(もちろん、現在では、多くの人がこの節に大きな感情的愛着を抱いています)。

もしこの<半節を挿入した>者が単にステパノの言葉か、あるいはその一部を再現しただけなら、彼の虚偽はすぐに明白になったでしょう。彼は犯罪の証拠となる可能性のあるこの証拠を避けたが、私たちににとっては幸いなことに、彼はその半節を一から作り出したわけではありませんでした。この半節は、実はヘギシッポス(Hegisippus)という名の初期の教会史家(彼の著作は現在では断片的にしか残っておらず、エウセビオスの『教会史』の中に存在する)から引用されたものです。この引用はエウセビオスの第二著のヤコブの殉教についての記述にあります：

そこで、彼らは上って行って、義人を投げ捨て、互いに言った、『義人ヤコブに石を投げつけよう』。ヤコブは倒れても死ななかつたので、彼らは彼に石を投げ始めましたが、彼は振り返ってひざまずき、こう言いました。「あなたに乞い願います。主なる神であるわれらの父よ、彼らをゆるしてください。彼らは自分たちが何をしているかわからないからです」。

エウセビオス 2.23.16

上記の太字の言葉は、単に響きが似ているだけではありません。ギリシヤ語では、ルカによる福音書にある文章と同一のものです。⁷⁸ エウセビオスの文章には、主の類似の言明との一致を示唆するものがないため(また、ルカの一節がどれほど有名になったかを考えると、このような正確な引用であることを認める何らかの表明が必要であったでしょう)、<半節を>挿入した者はヘギシッポス Hegisippus(その作品は現在、断片的にしか残っておらず、エウセビオス著『教会史』に存在しています。)から直接、あるいはエウセビオスから派生的にこの言葉を引用したと言ってよいでしょう。ギリシヤ語の構文、形態、語順の柔軟性を考えると、これが偶然の一致である可能性は天文学

⁷⁸ 両文書の文章は次のとおりです： Πάτερ, ἄφες αὐτοῖς, οὐ γὰρ οἶδασιν τί ποιοῦσιν.

的に極めて低い確率です。⁷⁹

4) 神学的証拠：使徒行伝第 7 章におけるステパノの祈りは、適切かつ気高いものでしたが、イエスは世界の罪のためにご自身を差し出しておられました。(ステパノも、私たちの誰も、このようなことを想像することさえできなかったことです)。このように、罪の赦しのために、イエスとその御業、御自身と十字架上の死を受け入れるかどうか、人間の人生の課題なのです。もちろん、父も、もちろん私たちの主も、すべての人々の赦しと救いを望んでおられます。

そのような赦しがすべての人に与えられるように、まさにそのために、父は御子を犠牲にし、御子は私たちの身代わりとなって死なれたのです。しかし、この挿入文のような声明を提示することは、赦しには悔い改めは必要ない、救いは救われる側の信仰がなくても可能だというメッセージを送ることになります。これほど真実から遠いことはありません。イエスはこの世の罪のために死ぬことができ、また死なれましたが、イエスができなかったこと、またされなかったことは、この世の不信仰のための死です。不信仰は、赦しが不可能な「赦されざる罪」の一つであり、私たちの主イエス・キリストがそのような言葉で不信仰を免罪したことは、神の御計画全体に計り知れない影響を及ぼすことになります(そして、究極的には、そのような一把ひとからげの赦しは、事実上、神の義を損なうことになり、決してあり得ないことです)。

イエスに従う者は、神の限りない憐れみと、私たちの罪の赦しは、罪のために十字架上で死なれた主の御業に完全にに基づいているという事実を理解し、感謝せずにはられません。イエスは罪を赦すことができましたし、実際に赦しました。「人の子には、地上で罪を赦す権威が与えられている」([ルカ 5 章 24 節](#))のです。しかし、イエスは間もなくすべての人の罪のために死なれる段階になっても、すべての人の罪を赦されたわけではなく([ヨハネ 8 章 24 節](#), [9 章 41 節](#), [17 章 9 節](#))、信仰を持ってイエスに立ち返った人の罪だけを赦されたのです([マタイ 9 章 2 節](#); [ルカ 7 章 48 節](#); 参照 [ヨハネ 20 章 23 節](#))。もしイエスが、イエスを断固として拒絶し、今後も拒絶し続ける人々(イエスの十字架の周りに立ってイエスをあざ笑った人々の大半のように)にも無条件で赦しを与えるのであれば、それは救いに対する信仰の必要性を排除することになり、罪に対する償いを、信仰によってキリストの功績に与えることに求める神の義を損なうことになり、本質的には十字架を無意味なものにしてしまいます。イエスが私たちのためにしてくださったことを受け入れなくても、人が赦されるのであれば、犠牲そのものが不要になる

⁷⁹ ちなみに、エウセビオスが挿入者にとって格好の収獲地であることは、この箇所だけではありません。彼の第 3 巻でも同様の状況が見られ、聖書外の文献ではあるものの、同様に愛読されているヨハネによる福音書第 8 章の姦通の女の物語が、聖書には元来なかったものの、エウセビオスはその物語の起源である可能性が高いことを示すような形で概略が描かれています(H.E. 3.39.16)。

からです。この誤った箇所は、信仰を通して行使される、時間の次元の中での自由意志の問題や、そもそも人類が創造された根拠全体を排除しています⁸⁰。

この挿入がこれほど広く引用され、しかも聖書も主の犠牲の真の性質もほとんど理解していない人々によって引用されるという事実は、示唆に富んでいます。私たちの主が死なれたのは、信仰によって主の御業を受け入れることによって私たちが救われるためであって、世が主を拒絶し、神とその賜物を放棄しても救われるということではありません。私たちの主イエス・キリストが、その霊的な死によって全世界の罪を贖うことによって、全世界がこの恵み深い行為を信じ、彼を信じることで救われるように永遠の命への門が開かれようとしていたのです。ゴルゴタに闇が下る直前に、主の犠牲も私たちの応答も不要であることを宣告するメッセージを送ることなどは、主にとっては考えにも及ばぬことです。

2) イエス・キリストの霊的な死:

1) 超自然的な暗闇 : 私たちのために犠牲となられたイエス・キリストの痛烈な予型である過越の小羊が「夕べ(複数形)の間」に屠られるように命じられたように(すなわち、昼でも夜でもない時間:[出エジプト 12 章 6 節](#), [29 章 39-41 節](#))、私たちの主が全人類のために死なれたのも、同じような、しかし超自然的な暗闇を伴う運命でした。聖書は、「第六時頃」(すなわち、真昼頃)、ゴルゴダの上に暗闇が訪れ、この暗闇は「第九時頃まで」([マタイ 27 章 45-54 節](#); [マルコ 15 章 33-39 節](#); [ルカ 23 章 44-49 節](#))続いたと伝えています。この超自然的な「真っ暗闇」の間に、私たちの主は世の罪を負い、そのために裁きを受け、私たちの身代わりとなって、私たちの罪のために霊的に死なれたのです(下記 II.5 節「霊的な死」参照)。この暗闇が本当に超自然的なものであったこと(したがって、1 世紀の自然現象の日食を、この出来事に関連付けようとする試みが役立つものではないこと)は、暗闇の持続時間からわかります: 三時間にわたってです。このことから、闇の中の世の罪に対する裁きと、神の重要な裁きに伴う超自

⁸⁰ 「サタンの反逆」シリーズ、パート 3A「人の目的、創造、墮落」を参照してください。さらに、これらの言葉は、十字架が神の計画の一部であるというよりもむしろ間違いであるかのような印象を与えているという事実も問題です(「では、聖書の言葉はどうして成就されようか」[マタイ 26 章 54-56 節](#)参照)。また、十字架にかけられたという物理的な行為が重要な出来事であるかのような印象を与えているという点も問題です。救いをもたらすのは、私たちの罪を負い、その罪のために裁かれ、罪を償うことなのです。

然的な闇の事例との間に、類似点があることがわかります。⁸¹ もちろん、キリストが私たちに代わってこの裁きを担い、私たちの代わりに裁かれたことによって、キリストを信じ、私たちの罪のために死んでくださったキリストの御業を受け入れるすべての人のために、永遠の命の門が開かれたという極めて重要な例外があります。

2) キリストの血: 「キリストの血」とイエスの十字架上的私たちのための霊的な死については、後の II.4 と II.5 でそれぞれ取り上げていますが、ここでいくつかのことを指摘する必要があります。主イエス・キリストは、ご自身の霊を吐き出して肉体的な生涯を終えられたことから明らかなように、血を流して死なれたのではありません([マタイ 27 章 50 節](#); [マルコ 15 章 37 節](#); [ルカ 23 章 46 節](#); [ヨハネ 19 章 30 節](#); また以下のセクション I.5.1.3 を参照のこと)⁸²。また、闇が去った後の十字架上の最後の言葉(詳細は次の項目で説明)からも明らかなように、主が息を引き取る前に、罪のための死は完了していたという事実があります。これらを総合すると、私たちの罪のために死ぬという、私たちの主の有効な償いは、主がまだ肉体的に生きておられた時に、私たちのために暗闇の中で耐え忍ばれたことにあるということを意味します。そのため、ゴルゴタに闇が降りる前に、私たちのためにイエスが受けた肉体的苦しみは、目に見える形で皆に明らかであり、計り知れないほど大きなものでした。しかし、その闇の中で、世界の罪の代価を支払うために、私たちが想像も及ばないような霊的な死を遂げたイエスが受けた苦しみの激しさは、その直前に通過された苦しみよりも、比べようの無いほど甚大なものであったに違いありません。

(18) あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、(19)きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。(第一ペテロ 1 章 18-19 節)

「キリストの血」は私たちが贖われた代価ですが、これはあくまで聖なる喩えです。イエスは文字通りの小羊ではありませんし、同様に、私たちはイエスの肉体的な血によつ

⁸¹ 例えば、地球に関する裁き([創世記 1 章 1 節](#)と[創世記 1 章 2 節](#)の比較)、パロの王国に関する裁き([出エジプト 10 章 21-29 節](#); [詩篇 105 篇 28 節](#)参照)、第五の鉢の裁き([黙示録 16 章 10-11 節](#))、再臨([イザヤ書 13 章 9-13 節](#), [34 章 4 節](#), [60 章 1-2 節](#); [エゼキエル 32 章 7-10 節](#); [ヨエル 2 章 2 節](#), [2 章 10 節](#), [2 章 31 節](#), [3 章 15 節](#); [ゼパニヤ 1 章 15-18 節](#); [ゼカリヤ 14 章 6-7 節](#); [マタイ 24 章 29 節](#); [マルコ 13 章 24-25 節](#); [使徒行伝 2 章 17-21 節](#); [黙示録 6 章 12-13 節](#))、黄泉([ルカ 16 章 24 節](#); [第二ペテロ 2 章 17 節](#); [ユダ 13 節](#))、火の池([マタイ 8 章 12 節](#), [22 章 13 節](#), [25 章 30 節](#))において。サタンの反逆シリーズのパート 2、セクション II.2.d「神の裁きによる闇」を参照。

⁸² 詳細は、R.B. Thieme Jr. 著『The Blood of Christ』(ヒューストン、1977 年)を参照してください。

て贖われたのではありません。むしろ、イエスは父なる神の犠牲であり、小羊はそれを象徴しています。肉体的な血は、私たちの主の肉体的な死よりもさらに貴重なものを象徴しています。それは、主が十字架上で闇の中で死なれた、霊的な死を象徴しています。主は、全世界の罪の罰を支払うために死なれたのです。

なぜなら、キリストが死んだのは、ただ一度罪に対して死んだのであり、キリストが生きるのは、神に生きるのだからである。(ローマ 6 章 10 節)

神はわたしたちの罪(すなわち、罪の供え物)のために、罪を知らない[個人的に罪をおかした体験のない]かたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。(第二コリント 5 章 21 節)

さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。(第一ペテロ 2 章 24 節)

3) 主の最後の達成宣言 :

(28) そののち、イエスは**今や万事**(すなわち、肉体的な苦しみと、世の罪のための霊的な死)**が終った**ことを知って、「わたしは、かわく」と言われた。それは、聖書[にある救いの預言]が全うされるためであった。(29)そこに、酔いぶどう酒がいっぱい入れてある器がおいてあったので、人々は、このぶどう酒を含ませた海綿をヒソプの茎に結びつけて、イエスの口もとにさし出した。(30)すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「すべてが終った<英直訳では: **それ(すなわち、救い)は[今]成し遂げられた**>」と言われ、首をたれて息をひきとられた。(ヨハネ 19 章 28-30 節)

上記テキストの二番目の太字のギリシヤ語の動詞 teleo (τετέλεσται、文中における活用完了形)は、28 節の同じ形(πάντα τετέλεσται)に対応し、それと共にキリストの初降臨の目標の完了を意味します。この文は実際、メシヤに関する詩篇 22 篇 31 節の最終節を言い換えたものです: 「主は成し遂げられた!」。私たちはすでに、この詩篇が主の十字架上の苦しみの多くを預言的に予言していることを見てきました(たとえば、7-8 節の群衆のあざけり、16 節の主の「刺し貫かれた手と足」、18 節の主の衣服の「くじ引き」、そして全体を通しての主の苦しみの生き生きとした詩的描写)。しかし、主はこの詩篇の終わりを言い換えておられるだけでなく、詩篇の始まりも直接引用して

おられるので、この「今、成し遂げられた！」という力強い宣言は、「わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか」([詩篇 22 篇 1 節](#); [マタイ 27 章 46 節](#); [マルコ 15 章 34 節](#)参照)という前の引用によって投げかけられた質問に対する直接的な答えなのです：前者が後者を説明しているのです。救いが「成し遂げられる」ために、御父は御子を見捨て、世の罪のために裁きに渡さなければならなかったからです。まだ肉体的に生きておられたイエスご自身が、救いの達成を宣言しておられる(そして、イエスの苦しみと捨てられることはその必要な前提条件である)という事実は、私たちの贖いの達成は、主が霊を吐き出して肉体の生命を捨てられる前に、すでに行われていたことを示しています。このように、イエスの十字架上の勝利は、暗闇の中で私たちの罪のために死なれた霊的な死(イエスはまだ肉体的に生きておられたので、「今、成し遂げられた」と宣言することができたのです)の中にあるのであって、それに続く肉体の死にあるものではありません。(時々冒流的に描かれるように)十字架からの絶望的な疑いの訴えとは程遠く、「なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉は、正反対のことを意味しています。なぜなら「見捨てること」はもはや過去のことであり(「なぜわたしをお見捨てになったのですか」)、一方、イエスが御父の使命を成功裏に成し遂げ、罪に打ち勝たれたことは、今や達成された現実だからです([τετέλεσται](#)：「それは今や成し遂げられた！」)。

主は、わたしたちの罪過のために(すなわち、私たちを罪から贖うために)死に渡され、わたしたちが義とされるために(すなわち、イエスの死によって義とされた私たちもよみがえるために)、よみがえらされたのである。(ローマ 4 章 25 節)

イエスがぶどう酒を飲まれたのも、預言の成就であり、同様にメシヤの使命の達成を告げるものです：

彼らはわたしの食物に毒<英直訳：苦いもの>を入れ、わたしのかわいた時に酢を飲ませました。(詩篇 69 篇 21 節)([マタイ 27 章 34 節](#), [27 章 48 節](#), [マルコ 15 章 23 節](#), [15 章 36 節](#); [ルカ 23 章 36 節](#); [ヨハネ 19 章 29 節](#))

彼は道のほとりの川からくんで飲み、それによって、そのこうべをあげるであろう。(詩篇 110 篇 7 節)

上記の最初の引用は、二つの出来事に関するものです；ひとつは、イエスが苦いものを拒否した試練の始まりの場面、もうひとつは、試練が成功裏に終わった場面で、主が酸い葡萄酒を求められ、それを受け入れたことで、勝利、すなわち、世の救いが

達成された後の短い休憩を象徴しています。二番目の箇所も同様に、よく知られたメシヤの詩篇から引用されていますが、この詩篇は(過去に何度も見てきたように、旧約聖書の預言ではよくあることですが)二回の降臨を融合しています。詩篇 110 篇は主に勝利の詩篇であり、メシヤが第一の降臨において、救いを成し遂げられたことを祝い、第二の降臨において、世界の支配者として再臨されることを予期しています。この最後の節は、ハルマゲドンの戦いの後のメシヤの軍隊の休憩を指しているとも読めますが、この文脈では、初降臨において、ご自身の使命を終えられたイエスご自身を指しています⁸³。ですから、主のこの飲む行為は、預言の成就を通じて、真の「戦い」が終わったこと、そして、主が私たちに代わって罪のための死を通して救いを成し遂げ、勝利されたことに注意を喚起することを第一の目的としています。これはまた、[ヨハネ 19 章 30 節](#)に記されているように、主が霊を吐き出す準備として「頭を上げ」たことの原因でもあります。つまり、主が飲んだ後に頭を上げられたという点で、[詩篇 110 篇 7 節](#)にあるもう一つの預言が成就したのです⁸⁴。どちらの成就も救いがこの時点で達成された事を強調するものです。

最後に、主の十字架上での最後の言葉、[詩篇 31 篇 5 節](#)の引用、「父よ、御手にわたしの霊をゆだねます」([ルカ 23 章 46 節](#))もまた、主の使命が成功裏に完了したことを示しています。というのも、イエスを使わされたのは御父であり(上記 I.3.c 節参照)、私たちの主は、この言葉が示唆するように、御父のもとに自発的に戻られたのです。イエスはご自分の命を捨て、またそれを取り返す力([ヨハネ 10 章 18 節](#))を持っておられましたが、それは恣意的なものではなく、世の罪のために死ぬという、ご自分に与えられた重大な使命を果たした後のことでした。この引用も、この時点で救いがすでに成就した事実であることを示していることは、この詩の聖句節の第二文から明らかです。この節は、私たちの主が語ったものではありませんが、詩篇を読む人なら誰でもよく知っているものです。「主、真実の神よ、あなたは私を贖われました」。[\(詩篇 31 篇 5 節\)](#)。イエスが私たちを罪から贖うために死なれたことは、もはや成就した事実であり、イエスが霊を捧げられる前に、私たちの贖いはすでに保証されていたのです。

⁸³ つまり、動詞 *yishteh* と *yarum* は、同じように、ここでは「彼は飲み、持ち上げる」という意味かもしれないし、三単数形を非人称形と理解して、「一人(=一般に人々、ここではメシヤの軍隊)が飲み、持ち上げる」と読むこともでき、最初の読みは最初の降臨に対応し、二番目の読みは二番目の降臨に対応する。

⁸⁴ この文脈では、ギリシヤ語の分詞形 *klinas* は世界中で誤訳されています。しかも、驚くほど誤訳されています。なぜなら、明らかに、「大声で叫」ぼうとして「頭を垂れる」(つまり「前かがみになる」)人は誰もいないからです([マタイ 27:46](#)、[マルコ 15:37](#))。代わりに、声門を開くために、当然、頭を後ろにそらすか、「頭を上げる」でしょう。動詞の形では両方の可能性が考えられるが、叫ぶという文脈、そしてもちろん[詩篇 110:7](#)の成就を考慮すると、後者の意味<頭を上げる>となるでしょう。

3) イエス・キリストの肉体の死と埋葬:

イエスはもう一度大声で叫んで、ついに息をひきとられた。(マタイ 27 章 50 節)

イエスは声高く叫んで、ついに息をひきとられた。(マルコ 15 章 37 節)

そのとき、イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。こう言ってついに息を引きとられた。(ルカ 23 章 46 節)

すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、「すべてが終った」と言われ、首をたれて息をひきとられた。(ヨハネ 19 章 30 節)

私たちの主は、私たちに真理を教えた後、私たちの代わりに十字架上で私たちの罪のために死ぬという、特別な使命を果たすためにこの地上におられたのです。その使命が果たされると、イエスは自らの意志でこの世を去られました。救いが達成された今、十字架に留まることはもはや何の役にも立たなかったのです。残された私たちにとっては、この世を去る決断を自らの手で下すことは、神の意志に対する恐ろしい反逆行為です。人間の生命は、(世俗の科学がどのように信じていようと)誕生時に神が人間の霊魂を授けられたときに始まり、霊魂が授けられた方のもとに戻るときに終わります⁸⁵。しかし、私たちの主は、人類の歴史の中で唯一、御業を成し遂げた後に命を捨てる権利と力を与えられていたのです([ヨハネ 10 章 18 節](#))。イエスが世の罪を負われる間、ゴルゴダを三時間にわたって覆った暗闇が、例外的で議論の余地のない奇跡であったように、私たちの主が死なれた方法そのものが、主が本当に主張通りの神の子であられたことを証明する奇跡的なしるしでした。この事実は、ローマの百卒長によって証言されています。百卒長は、それまで多くの人が死ぬのを見てきた戦闘のベテランでした(この地位は、長年にわたる功労によってのみ得られるものだったからです):

イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして[イエスが] [霊を吐き出して]息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。(マルコ 15 章 39 節)(参照:[マタイ 27 章 54 節](#); [ルカ 23 章 47 節](#))

⁸⁵ このシリーズの第 3 部 A、II.3「人間の霊」参照。

主がこの世を去られた様子はあまりにも印象的であったため、この頑ななベテラン兵士でさえも感銘を受け、以前は嘲笑っていたイエスについての話を信じるようになりました。イエスがこの世を去られた際には、他の奇跡も起こりました。それらはすべて、主の神性を示すと共に、主の十字架上の勝利がもたらしたあらゆるものの根本的な変化を示すものでした。(例えば、[詩篇 110 篇 1 節](#); [エペソ 1 章 10 節](#); [4 章 7-10 節](#); [コロサイ 1 章 13 節](#), [1 章 20 節](#), [2 章 13-15 節](#); [ヘブル 2 章 14-15 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#); [第一ヨハネ 3 章 8 節](#))

(8)自らをへりくだり、死に至るまで従順になり、[私たち皆のために]十字架上で死なれたのです。(9)**それゆえ**、神はこの方を最も高い所に上げ、すべての名にまさる名をお与えになりました。(10)それは、イエスの御名によって、天においても、地においても、また地の下においても、すべてのひざがひざまずき、(11)すべての舌が、父なる神の栄光のために、イエス・キリストが主であることを告白するためです。(ピリピ 2 章 9-11 節)

1) **地震**：地震は重要な神の感嘆符であり([列王記上 19 章 11-12 節](#); [使徒行伝 4 章 31 節](#)参照)、歴史における新しい時代の始まりを示すために、神が非常に頻繁に用いられる(例えば、[イザヤ 29 章 6 節](#); [マタイ 28 章 2 節](#); [ヘブル 12 章 26-29 節](#); [黙示録 8 章 5 節](#), [11 章 13 節](#), [11 章 19 節](#))⁸⁶。キリストが霊を放たれた後に地震が起こり、マタイが告げているように「岩を裂いた」([マタイ 27 章 51 節](#))ので、神の言葉である御子の働きに、父の承認の印が劇的に押されたのです。

主は仰せられる、わたしの言葉は火のようにではないか。また岩を打ち砕く鎚のようにではないか。(エレミヤ 23 章 29 節)

2) **神殿の幕が裂けること**：地震と同じように(あるいは、この場合、なさっているのは神であることを否定することはさらに難しいので)、神殿の聖なる場所と至聖所の奥の間を隔てる幕が超自然的に裂けたことは、神ご自身からのしるしでした([マタイ 27 章 51 節](#); [マルコ 15 章 38 節](#); [ルカ 23 章 45 節](#))。このしるしは、さらに、普遍的な事実の根本的な変化を非常に生々しい形で示しました。聖なる所は象徴的に第三の天と神ご自身の臨在を表し、幕が裂けることは、罪のゆえに避けられない人と神との敵対関係の終わりを象徴し、人類がイエス・キリストの血とイエス・キリストの体によって、神に近づ

⁸⁶ [来たる艱難](#) 期第 5 部 1.7「地震」を参照。

くことを象徴しているからです(後述のⅡ.9 節「和解」参照)。

幕屋の奥には大祭司が年に一度だけはいるのであり、しかも自分自身と民とのあやまちのためにささげる血をたずさえないで行くことはない。それによって聖霊は、前方の幕屋が存在している限り、聖所にはいる道はまだ開かれていないことを、明らかに示している。この幕屋というのは今の時代に対する比喩である。すなわち、供え物やいけにえはささげられるが、儀式にたずさわる者の良心を全うすることはできない。それらは、ただ食物と飲み物と種々の洗いごとに関する行事であって、改革の時まで課せられている肉の規定にすぎない。しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって**永遠のあがないを全う**されたのである。(ヘブル 9 章 7-12 節)

(19)兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかりことなく聖所にはいることができ、(20) (「新しく殺された」)[犠牲の]彼の肉体([ヘブル 10 章 10 節](#), [10 章 18 節](#)参照)なる[天の]幕をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、はいって行くことができるのであり、(ヘブル 10 章 19-20 節)

3) 死者の蘇生 :

また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。(マタイ 27 章 52-53 節)

ラザロのように、これらの人々は生き返ったのですが、それは今の私たちの命と同じでした。つまり、彼らは永遠に復活したのではなく、一時的に蘇生したのであり、マタイは上記の箇所、彼らの状態と本当に復活した主の状態とを区別しています。それにもかかわらず、これは驚くべき奇跡であり、主が勝ち取られたばかりの勝利の生命を与える特別な力に、注意を喚起するためのものであることは明らかなです。私たちの罪のための主の死によって、私たちは主を信じる信仰によって永遠の命を与えられたからです([ヨハネ 3 章 16 節](#); [第一ヨハネ 5 章 11 節](#))。

死後の主の体の取り扱われ方もまた、旧約聖書のいくつかの預言を成就させ、メシ

ヤとしての主の真の地位を疑う余地なく示しています。兵士の槍で刺し貫かれた結果、「血と水」が出てきましたが([ヨハネ 19 章 34 節](#); 後の II.4「キリストの血」の項を参照)、これはほとんどの医学的権威によると、この出来事が起こったときには、彼はすでにしばらくの間、肉体的に死んでいたしるしです。実際、ローマ兵士たちが彼の死を早めるために彼の足を折らなかったのは(彼と一緒に十字架につけられた二人の場合のように:[ヨハネ 19 章 31-37 節](#))、彼が明らかに、疑いなく肉体的に死んでいたからです。

(36)これらのことが起ったのは、「その骨はくだかれないであろう」との聖書の言葉が、成就するためである。(37)また聖書のほかのところに、「彼らは自分が刺し通した者を見るであろう」([ゼカリヤ 12 章 10 節](#); [黙示録 1 章 7 節](#)参照)とある。(ヨハネ 19 章 36-37 節)

アリマタヤのヨセフ(裕福な人物:[マタイ 27 章 57 節](#))とニコデモは、ピラトに願い出て、イエスの遺体を引き取り、埋葬することを許可されました。彼らは、イエスの遺体を約 60 ポンド<1ポンド=450g>の没薬と沈香(これには莫大な費用がかかったことでしょう)で包み、それを「これまで誰にも使われてない新しい墓」に安置しました。(ヨハネ 19 章 38-41 節; [マタイ 27 章 57-60 節](#); [マルコ 15 章 43-46 節](#); [ルカ 23 章 50-53 節](#))。こうして、苦難のしもべの埋葬に関するイザヤの預言が成就しました。ひどい虐待と、司法による殺人の後のこの埋葬は神の好意表明の明らかな印です。

(7)彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。(8)彼は**暴虐なさばきによって**取り去られた。その代の人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。(9)彼は暴虐を行わず、その口には偽りがなかったけれども、**その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者**<英語・新改訳IVでは「富む者」>**と共に**あった。(イザヤ 53 章 7-9 節)

これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、**とがある者と共に数えられた**からである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。(イザヤ 53 章 12 節後半)

メシヤは完全に拒絶されてしまったのです。メシヤはご自分の民のもとに来られたのに、ご自分の民は彼を受け入れようとしなかったのです([ヨハネ 1 章 11 節](#))。しかし、彼は律法と預言者がメシヤについて預言した通りの方であり([ルカ 22 章 37 節](#), [24 章](#)

[44 節](#); [ヨハネ 5 章 39 節](#), [5 章 46 節](#))、そして、彼はまさにイスラエルが主をお願いした通りの人物であり、存在でした。すなわち、全能の神の燃えるような神聖さと、自分たちの間に立つ仲介者だったのです：

(15)あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞のうちから、わたしのようひとりの預言者をあなたのために起されるであろう。あなたがたは彼に聞き従わなければならない。(16)これはあなたが集会の日にホレブであなたの神、主に求めたことである。すなわちあなたは『わたしが死ぬことのないようにわたしの神、主の声を二度とわたしに聞かせないでください。またこの大いなる火を二度と見させないでください』と言った。(17)主はわたしに言われた、『彼らが言ったことは正しい。(18)わたしは彼らの同胞のうちから、おまえのようなひとりの預言者を彼らのために起して、わたしの言葉をその口に授けよう。彼はわたしが命じることを、ことごとく彼らに告げるであろう。(19)彼がわたしの名によって、わたしの言葉を語るのに、もしこれに聞き従わない者があるならば、わたしはそれを罰するであろう。(申命記 18 章 15-19 節)

m. パラダイスへの主の降下：十字架にかけられた主は、仲間を叱責した盗人にこう答えました。イエスは言われた、「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」。[\(ルカ 23 章 43 節\)](#)。この「パラダイス」は、ラザロと金持ちの話[\(ルカ 16 章 19-31 節\)](#)では「アブラハムのふところ」と呼ばれていますが、旧約聖書では陰府(＝黄泉)またはシェオール([שְׁאוֹל](#))の三つの「区画」の一つです(ヘブル語テキストの[詩篇 16 篇 10 節](#)でこの降下に関して言及されているのはシェオール Sheol です)。新約聖書ではハデス([ᾍδης](#))と呼ばれています([使徒行伝 2 章 27 節](#)と[2 章 31 節](#)のギリシヤ語訳では[詩篇 16 篇 10 節](#)の引用で、この降下に関して言及されているのはハデスです)。パラダイスはイエスの昇天前に亡くなった義人の場所であり、他の二つの地下の区画、「苦悶の場所」(救われていない死者の場所：[ルカ 16 章 28 節](#), [16 章 23 節](#))と「タルタロス」また「深淵/底知れぬ所」(現在の紛争において神の根本的な規則に違反した墮天使たちが閉じ込められている場所：[ルカ 8 章 31 節](#); [第二ペテロ 2 章 4 節](#); [ユダ 6 節](#); [黙示録 9 章 1-11 節](#), [20 章 1-3 節](#))としても知られています。これら三つの場所は、厳密には区別され、互いに不可侵的に分離されていますが([ルカ 16 章 26 節](#)参照)、聖書ではシェオールやハデスという一般的な名前で呼ばれることがあります。さらに、この二つの単語は英語版の聖書では「地獄」や「墓場」と表現されることもあり、使徒信条にある「(主は)陰府に下り、」という表現を説明するのに役立ちます。しかし、その意味するところは特にパラダイスであり、シェオール・ハデスではありません。つまり、主が十字架で勝利されて昇天され、第三の天に移される前のすべての救

われた信者の場所であり、次の日曜日の復活を待つためにイエスの人の霊が降りた祝福された場所なのです。主が「今日、あなたはわたしと一緒にパラダイスにいる」と言われたのはこの場所です。主の到着(と第三の天への差し迫った移動)を待つ兄弟姉妹の皆に、勝利を宣言された主の短期滞在は、使徒ペテロによっても言及されています。

その霊においてキリストは、捕らわれている(天使の)霊たちのところ(深淵)に行って(キリストの勝利を)宣言されました。かつてノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐をもって(裁きを遅らせて)待っておられたときに従わなかった(天使の)霊たちにです。(新改訳IV 第一ペテロ 3 章 19-20 節)

上記で「宣言され」と訳されている言葉(KJV では「preached 宣べ伝えた」と訳されていることで有名です)は、ギリシヤ語の *kerusso* ケルツソという言葉です。この動詞は名詞 *keryx*、つまり「布告者」の逆成語で、その神聖なギリシヤの役人は、地位を示す特別な杖を携え、公式の交渉や連絡において相手側と対応する立場にあるため、殺害や投獄から免れていました(今日の免責特権を持つ大使に似ていますが、古代ギリシヤではもっと真剣に受け止められていました)。つまり、この動詞は、現代のキリスト教で使われるような「宣教する」というよりも、むしろ「王の大使として王のメッセージを伝える」([第二コリント 5 章 20 節](#)参照)という意味であり、それこそが、タルタロス(または「底知れぬ所」)に幽閉された墮天使たちに対して、私たちの主が行ったことなのです。私たちの主がパラダイスで過ごされた三日間のある時点で、主はこの勝利の宣言をされました。パラダイスと苦悶の場所の間の物理的な分離(すなわち、両者の間にある「大きな淵」:[ルカ 16 章 26 節](#))と同様に、タルタロスも他の二つの区画から完全に分離されていると考えてよいでしょう(聖書の他の箇所での描写を参照:[ルカ 8 章 31 節](#); [第二ペテロ 2 章 4 節](#); [ユダ 6 節](#); [黙示録 9 章 1-4, 4b-8, 9-11 節](#), [20 章 1-3 節](#))。ですから、主がこれらの悪霊と交わされたのは、まさにペテロが描写しているような方法、すなわち、「御霊[の力]において」でなければならなかったのです。この勝利の宣言は、主の使命の成功と切迫した支配を確認するものでした。それはまた、御使いたちに対する私たち主の従者たちの優越性を示すものでもありました([第一コリント 6 章 3 節](#); [ヘブル 2 章 5 節](#))。この旅の方法についても、メッセージの具体的な内容についても、詳しいことは記されていませんが、この勝利の知らせは、サタンに従う者たちにとっては破滅のメッセージであったと言えるでしょう。⁸⁷ 十字架を妨げる事が悪魔の最終的な裁きを免れる唯一の希望だったからです。

⁸⁷ 「サタンの反乱」シリーズ、特に第 1 部と第 5 部を参照。

(7)しかし、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。(8)そこで、こう言われている、「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」。(9)さて「上った」と言う以上、また地下の低い底にも降りてこられたわけではないか。(すなわち、黄泉の国のパラダイスから十字架以前の信者を天に連れて来られた)(10)降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちる(十字架で勝ち取られた勝利を完成する:[詩篇 110 篇 1 節](#)参照)ために、もろもろの天の上(すなわち、父の住まいの場所である第三の天)にまで上げられたかたなのである。(エペソ 4 章 7-10 節)

キリストは肉において現れ、[聖]霊において義とせられ、御使たちに見られ、諸国民の間に伝えられ、世界の中で信じられ、栄光のうちに天に上げられた。(第一テモテ 3 章 16 節)

n. 復活 :

(3)わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、(4)そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、(第一コリント 15 章 3-4 節)

1) 三日 : [ルカ 24 章 21 節](#)で、エマオへの道を歩いていた二人の弟子は、「この事が[すなわち、主の復活の日である日曜日;参照.[13 節](#):これらのことは、主の復活と「同じ日」に起こります]、起ってから、きょうが三日目なのです」と報告しています。ギリシヤ語でもヘブル語でも、包括的な数え方をしますから、この三日間は間違いなく、金曜日(十字架につけられた日)、土曜日、日曜日(文脈上のこの日)です。このことは、主ご自身が復活後初めて集まった弟子たちに姿を現されたとき、「こうしてある。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえる」([ルカ 24 章 46 節](#))と言われたことから確認できます。この表現は、「三日」が実際にはイースター週の金曜日、土曜日、日曜日であり、木曜日(水曜日はともかく)を含まないという解釈を立証する上で重要です。その場合<木・水曜日を含む場合>は、「三日後」のような表現が必要になるのに対して、「三日目に」は、金、土、日を含まざるを得なくなります⁸⁸。筆者の考えでは、

⁸⁸ すなわち、この二つの箇所の表現は、その可能性を排除しています。例えば、[マルコ 8 章 31 節](#)

木曜日(と水曜日)説は、「墓の中で三日三晩」([マタイ 12 章 40 節](#))というキリストの預言が、自分たちが納得できるような形で成就するのを見たいという願望によるところが大きいのです。しかし、これはギリシヤ語やヘブル語の表現に現在の文化的規範を押し付けることです。当時の聴衆は、預言の解釈に関して昼と夜の一部を、丸一日とみなすことに何の問題もなかったことでしょう。一方、聖書の明確な証言にもう一日(あるいはそれ以上)を加えることを支持する人々は、キリストが日曜日の明け方に昇天され、昼過ぎに霊を吐き出されたので、どのような方法でも「正確に」三日三晩とは算出できないという事実も考慮しなければなりません。私たち現代西洋人の視点からは、正確な 3/3 より長い期間は受け入れても短い期間は受け入れられませんが、古代の視点からは全く逆で、もし私たちの主が木曜日に十字架につけられたとしたら、「これは三日目である」([ルカ 24 章 21 節](#))と「三日目に」([ルカ 24 章 46 節](#))という表現は厳密には正しくなく、非常に間違っていると見られるでしょう。艱難期の前半に二人の証人が反キリストに殺され、その死体が人目にさらされるようになることについての聖句は、その状態が「三日半の間」([黙示録 11 章 9 節](#), [11 章 11 節](#))続くと慎重に述べています。この言い回しには、少々奇妙な印象を受けますが、古代の視点を考慮すると合点がいきます。(この場合、)丸三日以上として受け取られなければなりません、その各日にちが丸一日に満たなくても一日として数えられるということです。

木曜日(そして水曜日)という誤った見解が広まっているため、ここにいくつかの聖句を追加して検討する必要があります:

1) [マルコ 15 章 42 節](#)は、主が十字架につけられた日をプロサバトン(安息日の前日)と呼んでいます。

2) [ルカ 23 章 54-55 節](#)と[ルカ 24 章 1 節](#)を比較すると、十字架刑から復活までの時系列は、まず、パラスケウエ<準備>(すなわち、安息日の「準備の日」、すなわち金曜日の昼間)、次に「安息日」である土曜日、そして三番目に「週の初めの日」である日曜日)です。

3) [マタイ 27 章 62 節から 28 章 1 節](#)にかけて、マタイは定冠詞("the")をパラスケウエという単語と一緒に使っていますが、これは主の十字架につけられた日が本

では「三日後」という表現が見られます。一方、その用語は必ずしもそうではないのです。なぜなら、ギリシヤ語の包括的な数え方では、「三日後」は事実上、「三日間の預言が成就した後」を意味するからです(つまり、72 時間前という期間が完全に経過している必要はない)。[マタイ 27 章 63-64 節](#)では、63 節の「三日後」は、64 節の「三日目」とほぼ同義語として扱われています(私たちの文化的な視点から予想される「四日目」ではなく、私たちの場合は「三日後」にあたる日です)。

当に準備の日であったこと、すなわち、通常の安息日前の準備の時間、パラスケウエ、すなわち金曜日の昼間の時間であったことを示しています。

墓の中の三日は、主の肉体的な死に関する預言を成就するために非常に重要であり(例えば、[マタイ 12 章 40 節](#), [16 章 21 節](#), [17 章 23 節](#), [20 章 19 節](#), [26 章 61 節](#); [ルカ 9 章 22 節](#), [13 章 22 節](#); [ヨハネ 2 章 19 節](#); [創世記 22 章 4 節](#)と[ルカ 24 章 46 節](#)を参照)、またその死の現実を示すためにも重要です。ローマ兵の槍で刺し貫かれた後、御体から落ちた血と水([ヨハネ 19 章 34 節](#))、御体が埋葬のために準備され、墓に安置されたこと、墓の前で石が転がされたこと、墓の入口に番人が配置され、墓が封印されたこと([マタイ 27 章 62-66 節](#))、この時系列は、私たちの主イエスが疑う余地なく肉体的に死んでおられたこと、そして、それゆえ、死者の中からよみがえられたことは、反論の余地のない奇跡であったこと、実際、それは私たちの将来の希望のすべての基礎となる岩であることを、力強く、決定的に示しています。

2) 復活の意味: 復活の預言([詩篇 16 篇 10 節](#); [使徒行伝 2 章 24-31 節](#), [13 章 30-38 節](#))や、王国の継承者としての地位([使徒行伝 5 章 30-31 節](#), [10 章 40-43 節](#), [17 章 31 節](#); [ローマ 1 章 4 節](#); [第一ペテロ 1 章 21 節](#))を確証することだけでなく、(それに先行する十字架とともに)主の復活は、人類史そのものだと言っても過言ではないでしょう。なぜなら、私たちの主イエスが死からよみがえられたことにより、主を信じて生まれ変わるすべての人々のための命の門が今開かれたという、神からの紛れもないしるしが私たちに与えられたからです。さらに、神と永遠の命から、私たちを引き離していた罪という障害を取り除くために十字架は必要でしたが、私たちを永遠の命のために、新しく変える過程を実際に可能にするためには、復活も同様に必要です。

主は、わたしたちの罪過のために(すなわち、私たちを罪から贖うために)死に渡され(すなわち、見捨てられ)、わたしたちが義とされるために(すなわち、主の死によって義とされた私たちもよみがえるために)、よみがえらされたのである。(ローマ 4 章 25 節)

(12)さて、キリストは死人の中からよみがえったのだと宣べ伝えられているのに[そして、私たちは宣べ伝えているのですが]、あなたがたの中のある者が、死人の復活などはないと言っているのは、どうしたことか。(13)もし死人の復活がないならば、キリストもよみがえらなかったであろう。(14)もしキリストがよみがえらなかったとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい。(15)すると、[もしその仮定の場合]わたしたちは神

にそむく偽証人にさえなるわけだ。なぜなら、万一死人がよみがえらないとしたら、わたしたちは神が実際よみがえらせなかったはずのキリストを、よみがえらせたと言って、神に反するあかしを立てたことになるからである。(16)もし死人がよみがえらないなら、キリストもよみがえらなかったであろう。(17)もしキリストがよみがえらなかったとすれば、あなたがたの信仰は空虚なものとなり、あなたがたは、いまなお罪の中にいることになる。(第一コリント 15 章 12-17 節)

これらの箇所が示すように、父なる神への昇天と、私たちのために贖いのわざを成し遂げられた私たちの主の権能と適正が正式に認められるためには、(主が父の右に座すことを示す)キリストの復活が必要でした。⁸⁹ 復活は、主の十字架上の業に対する父なる神の承認であり、主への信仰によって義と認められ、救いのすべての祝福を受け取るために必要なものでした。(エペソ 1 章 19-23 節; 使徒行伝 2 章 34-36 節; ローマ 1 章 4 節; 第一コリント 6 章 14 節; ピリピ 3 章 10 節; コロサイ 2 章 12 節参照)。このように、復活は、私たちのために犠牲を払ってくださった主の犠牲の有効性を確認すると同時に(ピリピ 3 章 10 節; 第一ペテロ 1 章 3 節, 3 章 21 節)、私たちがその復活に与るための土台となるのです(ローマ 6 章 5 節, 8 章 11 節, 8 章 34-35 節, 10 章 9 節; 第一コリント 6 章 14 節, 15 章 21 節; 第二コリント 4 章 14 節, 5 章 15 節; コロサイ 2 章 12 節)。

それは、死がひとりの人によってきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人によってこなければならぬ。アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。(第一コリント 15 章 21,22 節)

3) 復活の本質: イエスが被造物におけるすべてのことにおいて第一人者であるように(コロサイ 1 章 15-20 節)、復活においても私たちの先駆者です(ヘブル 2 章 10 節, 6 章 20 節, 12 章 2 節参照)。

ただ、各自はそれぞれの[復活の]順序に従わねばならない。最初はキリスト、次に、主の来臨に際してキリストに属する者たち(すなわち、再臨の教会)、(第一コリント 15 章 23 節)、

⁸⁹ 昇天、座につかれること、なだめについては、それぞれ後の I.5.o、I.5.p、II.6 を参照のこと。

しかし、その証人となる前の弟子たちは、死者の中からよみがえるということがどういうことなのか、まったく理解できていませんでした([マルコ 9 章 10 節](#), [9 章 32 節](#)参照:[ヨハネ 16 章 19 節](#))。人間や天使の歴史の中で、復活の例を見たことのある人は誰もいなかったのですから。キリストが地上での宣教中に死者をよみがえらせた奇跡(例えば、会堂支配者の娘、ナインのやもめの息子、ラザロ)は、厳密に言えば、復活の例ではありません。これらの各個人は肉体的に死に、この世を後にしたからです。このような特殊なケースを、私たちは別の場所で「蘇生」と呼んでいます。しかし、復活は永続的な状態です。

(35)しかし、ある人は言うだろう。「どんなふうにして、死人がよみがえるのか。どんなからだをして来るのか」。(36)おろかな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。(37)また、あなたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではない。麦であっても、ほかの種であっても、ただの種粒にすぎない。(38)ところが、神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。(39) [種子や植物がそうであるように、生身の体も同じです]。すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。(40)天に属するからだもあれば、地に属するからだもある。天に属するものの栄光は、地に属するものの栄光と違っている。(41)日の栄光があり、月の栄光があり、星の栄光がある。また、この星とあの星との間に、栄光の差がある。(42)死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、(43)卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、(44)肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである。肉のからだがあるのだから(そして明らかにある)、霊のからだもあるわけである。(45)聖書に「最初の人アダムは生きたものとなった」と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった。(46)最初にあったのは、霊のものではなく肉のものであって、その後に霊のものが来るのである。(47)第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。(48)この土に属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、天に属している人々は等しいのである。(49)すなわち、わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであろう。(第一コリント 15 章 35-49 節)

ここで、私たち自身の復活について詳しく述べるのは適切ではありませんが、少なくとも、私たちの主イエスが、パウロが上記のように述べた私たちの復活の模範であると

いう事実について、聖句が非常に明確であることを指摘すべきです。ですから、私達は復活された主が持っているような永遠の体を受け取ることになるのです⁹⁰

もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら[私たちは、キリストに霊的に洗礼を受けることによって、キリストと結ばれています]([ローマ 6 章 3 節](#))、さらに、彼の復活の様にひとしくなるであろう[そしてキリストと結ばれるでしょう]。(ローマ 6 章 5 節)

(20)しかし、わたしたちの[真の]国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる。(21)彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう。(ピリピ 3 章 20-21 節)

わたしたちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには(私たちは確かにそう信じています)、同様に神はイエス[への信仰]にあって眠っている人々をも、[主の再臨の時に]イエスと一緒に導き出して下さるであろう[と信じるべきです]。(第一テサロニケ 4 章 14 節)

愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が[栄光のうちに]現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。(第一ヨハネ 3 章 2 節)

そして、復活後の出現では、主は「まだ栄光を受けていない」状態で現れましたが(主の栄光が完全に現されるのは、天に昇られ、御父の右の座に着かれた後でなければならなかったからです; [ヨハネ 7 章 39 節](#)と、[使徒行伝 9 章 1-6 節](#), [22 章 6-11 節](#), [26 章 12-18 節](#); [黙示録 1 章 12-18 節](#)を比較参照のこと)、しかし、私たちは主の復活の記述から、私たち自身の復活の将来の状態について、多くのことを知ることができます(私たちは「主のようになり」、私たちの地上の体は「主の栄光の体に等しいもの」に変えられるからです)。

1) 復活のからだはもはや死に支配されない: 復活はしばしば永遠の命という言葉で表現されます([ヨハネ 6 章 40 節](#); [マタイ 25 章 46 節](#); [マルコ 10 章 30 節](#); [ルカ 18 章 30 節](#); [ヨハネ 3 章 15-16 節](#), [5 章 24 節](#), [10 章 28 節](#); [ローマ 2 章 7 節](#), [6](#)

⁹⁰ このテーマについては、「聖書の基礎」シリーズの第 2 部 B「終末論」で詳しく取り上げます。また、「来たる艱難期」の第 5 部 V.「小羊の花嫁の復活」も参照。

章 23 節; [ガラテヤ 6 章 8 節](#); [テトス 1 章 2 節](#); [第一ヨハネ 1 章 2 節](#), [2 章 25 節](#) 参照) が、私たちはイエスの復活から、この不死の原則を見ることができます:

(8)もしわたしたちが、キリストと共に死んだなら(すなわち、聖霊のバプテスマによって「キリストのうちに」いるのなら)、また彼と共に[永遠に]生きることを信じる。(9)キリストは死人の中からよみがえらされて、もはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことを、知っているからである。(ローマ 6 章 8-9 節)(参照: [ヘブル 7 章 16 節](#))

(25)イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。(26)また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。(ヨハネ 11 章 25-26 節)

2) 復活の体は真に人間であり、ただ苦しみと痛みを受けないだけ: 復活において、私たちは真に「ありのままの自分」となり、罪を犯すことなく、肉体におけるあらゆる善きもの、尊いものを享受し、永遠に欠乏と涙から解放されることになります。(黙示録 7 章 17 節; [21 章 4 節](#); 参照: [イザヤ 25 章 8 節](#), [35 章 10 節](#), [65 章 17-19 節](#); [第一コリント 15 章 54-58 節](#); [ヘブル 2 章 14 節](#); [黙示録 2 章 7 節](#), [2 章 11 節](#), [2 章 17 節](#), [2 章 26-28 節](#), [3 章 4-5 節](#), [3 章 12-13 節](#), [3 章 21 節](#), [20 章 5 節](#), [21 章 27 節](#), [22 章 3-6 節](#), [22 章 14 節](#))。この原則は、私たちの主の復活の事例から明らかであり、イエスをご自分として認識することができ、いかなる人格の減弱もなく、ご自分として振る舞われました([ルカ 24 章 31 節](#); [ヨハネ 20 章 16 節](#); [20 章 20 節](#); [20 章 26-28 節](#); [21 章 12 節](#))。キリストの変えられたからだは、確固とした有形であり([マタイ 28 章 9 節](#); [ルカ 24 章 39 節](#); [ヨハネ 20 章 17 節](#), [20 章 27 節](#))、通常の人間のあらゆる活動が可能です([マタイ 28 章 10 節](#), [28 章 18-20 節](#); [ルカ 24 章 15 節](#), [24 章 43 節](#); [ヨハネ 21 章 13-15 節](#))。

3) 復活のからだは新しい能力を持つ: 復活の後、主と共に「雲に乗って」地上に戻る奇跡から明らかのように、私たちも永遠の嗣業を享受する手段として、私たちの大きな希望である永遠のからだのすべての付加的な利益を享受します。主の復活後の姿から明らかのように、復活の体は、物質的な利点を損なうことなく、超物質的な能力を持っており、物質的な空間を自由に行き来することができます([マタイ 28 章 1-3 節](#); [ルカ 24 章 31 節](#), [24 章 36 節](#); [ヨハネ 20 章 19 節](#); [使徒行伝 1 章 9-10 節](#) 参照)。トマスとグンドリー Thomas and Gundry が指摘しているように、天使たちが墓から石を取り除いたのは、「イエスを外に出すため」ではなく、むしろ、イエスがもうそ

ここにいないことを他の人々に知らせるためでした⁹¹。私たちの場合、おそらく最も崇高な恩恵は、私たちが主との甘美な交わりを永遠に楽しむことができることに加えて、私たちが永遠に主と「顔と顔とを合わせる」([第一コリント 13 章 12 節](#))とき、最終的に「私たちが知られているように、私たちも知ることができる」という祝福でしょう。

4) 復活の経緯

(39)わたしたちは、イエスがこうしてユダヤ人の地やエルサレムでなされたすべてのことの証人であります。人々はこのイエスを木にかけて殺したのです。(40)しかし神はイエスを三日目によみがえらせ、(41)全部の人々にではなかったが、わたしたち証人としてあらかじめ選ばれた者たちに現れるようにして下さいました。わたしたちは、イエスが死人の中から復活された後、共に飲食しました。(42)それから、イエスご自身が生者と死者との審判者として神に定められたかたであることを、人々に宣べ伝え、またあかしするようにと、神はわたしたちにお命じになったのです。(43)預言者たちもみな、イエスを信じる者はことごとく、その名によって罪のゆるしが受けられると、あかしをしています」。(使徒行伝 10 章 39-43 節)

過越の祭りの前の金曜日に十字架上で霊を吐き出されたイエスは、続く日曜日に死からよみがえられ、その後 40 日間にわたって、すべての人にではなく、以前から信じていた人々の中のふさわしい証人に現れました。

(1)テオピロよ、わたしは先に第一巻を著わして、イエスが行い、また教えはじめてから、(2)お選びになった使徒たちに、聖霊によって命じたのち、天に上げられた日までのことを、ことごとくしるした。(3)イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。(使徒行伝 1 章 1-3 節)

(30)しかし、神はイエスを死人の中から、よみがえらせたのである。(31)イエスは、ガリラヤからエルサレムへ一緒に上った人たちに、幾日ものあいだ現れ、そして、彼らは今や、人々に対してイエスの証人となっている。(使徒行伝 13 章 30-31 節)

⁹¹ op. cit. p.252, n.

(3)わたしが最も大事なことであなたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり(成就して)、わたしたちの罪のために死んだこと、(4)そして葬られたこと、聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえったこと、(5)ケパ(すなわち、ペテロ)に現れ、次に、十二人に現れたことである。(6)そののち、五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。その中にはすでに眠った(すなわち、死んだ)者たちもいるが、大多数はいまなお生存している。(7)そののち、ヤコブ(主の地上の異父弟)に現れ、次に、すべての使徒たちに現れ、(8)そして最後に、いわば、月足らずに生れたような(キリストの地上での宣教のときに、取り残された)わたしにも、現れたのである。(第一コリント 15 章 3-8 節)

その最初のイースターの日曜日が明けたとき、私たちの主は神の力によって死者の中から復活されました([ローマ 1 章 4 節](#); [第一コリント 6 章 14 節](#); [第二コリント 13 章 4 節](#); [エペソ 1 章 18-23 節](#); [ピリピ 3 章 10 節](#); [コロサイ 2 章 12 節](#); [ヘブル 7 章 16 節](#); [黙示録 20 章 6 節](#)参照)。つまり、金曜日の午後以来死んでいたキリストの人間の体は、腐敗することのない新しい永遠の体に変えられ、キリストの人間の霊は、誕生時に神がすべての人間の体に霊を吹き込まれるのと同じような方法で、その中に戻されたのです。この時点から、キリストの人間性は永遠に生きるようになり、詩篇 16 篇に記されている預言に従って、メシヤは「決して朽ちることを見なかった」のです([詩篇 16 篇 10 節](#); [使徒行伝 2 章 27 節](#), [2 章 31 節](#), [13 章 35 節](#)参照)。主は、葬りの布をきれいにたたまれた後([ヨハネ 20 章 5-6 節](#) < [7 節](#) >: これは、復活を示すだけでなく⁹²、主がすべてのことに注意深く勤勉であることを示すものであり、主も私たちも復活後も「同じ人」であるという素晴らしい事実を証明するものでもあります)、注意深く封印され、警備されていた墓から、どうやら見張り兵の目にも触れることなく、ただ歩いて出て行かれました([マタイ 27 章 62-66 節](#))。

イエスの復活と墓からの出発を、神はイエスの死と同じように、大きな地震によって区切られました。輝く天使が現れ、イエスの遺体が横たわっていた場所を明らかにするために、石を転がしました([マタイ 28 章 2 節](#))。この天使の出現は、当然のことながら、衛兵たちをあまりの恐怖に陥れたので([マタイ 28 章 3-4 節](#))、衛兵たちはこの後(後でサンヒドリンにこの奇跡的な出来事を報告する以外には: [マタイ 28 章 11-15 節](#))、衛兵たちはこの話には登場しません。イエスが地上で宣教されておられた間、イエスのそ

⁹² すなわち、トーマスとガンドリー Thomas and Gundry が指摘しているように、op. cit. p.254、これらは残されることはなく、もしキリストの体が「盗まれた」のであれば、きちんと折りたたまれることもないでしょう。

ばにいた女性たちが、イエスの遺体に油を注ぐために墓に来たとき、入り口の石をどのように除くか心配していましたが、彼女たちが墓に行ったとき、墓はすでに開いていて、そして空だったのです。その時、この天使は、主は「死者の中からよみがえられた」ので、そこにはおられないと、やって来た女たちに説明したのです([マタイ 28 章 6-7 節](#); [マルコ 16 章 6 節](#); [ルカ 24 章 5-7 節](#)参照)⁹³。

1) [マグダラのマリヤ](#)に([ヨハネ 20 章 11-18 節, 14b-16, 17-18](#)): イエスの地上での宣教の間中、イエスに同伴し、イエスと弟子たちを後方支援した女性たちの重要性は、たとえ一般的には評価されていないとしても、過小評価されるべきではありません([ルカ 8 章 2-3 節](#)参照)。最初のイースターの日曜日の早朝、空っぽの墓に行った女性たちから、彼女たちが果たした重要な役割の一端をうかがい知ることができます。イエスの遺体を手入れするために墓に赴いたとされる女性たちのリストには、マグダラのマリヤも含まれています。([マタイ 28 章 1 節](#); [マルコ 16 章 1 節](#); [ルカ 24 章 10 節](#))、「もう一人のマリヤ」([マタイ 28 章 1 節](#); [マルコ 16 章 1 節](#))はおそらくヤコブの母マリヤ([マルコ 16 章 1 節](#); [ルカ 24 章 10 節](#); またおそらく「ヨセの」母でもある; [マルコ 15 章 40 節](#), [15 章 47 節](#)参照)、サロメ([マルコ 16 章 1 節](#))、ヨハンナ([ルカ 24 章 10 節](#))、そして「他の女たち」([ルカ 24 章 10 節](#))。この中には、ルカ 23 章 55 節で「ガリラヤからイエスと一緒に来た」([ルカ 23 章 55 節](#)参照)女性たちが含まれていたかもしれません。この女性たちの中には、宣教を積極的に支援し([ルカ 8 章 2-3 節](#))、十字架でイエスのそばに立った([マタイ 27 章 55-56 節](#); [マルコ 15 章 40-41 節](#); [ルカ 23 章 49 節](#); [ヨハネ 19 章 25 節](#))女性たちも含まれていたことは間違いありません。

このグループの中でも際立った存在であり、十字架上で磔にされているところを見守っていたと名指しで言及されている人々は、イエスの母マリヤ([ヨハネ 19 章 25 節](#))、その姉妹マリヤ([ヨハネ 19 章 25 節](#))、クロパの妻マリヤ(マリヤの姉妹であった可能性があります;[ヨハネ 19 章 25 節](#))⁹⁴、小ヤコブとヨセフの母マリヤ([マタイ 27 章 56 節](#); また

⁹³ マタイとマルコは、女性たちに話しかけた一人の天使についてのみ言及していますが、ルカは、彼には実際、仲間がいたと伝えています([ルカ 24 章 4-5 節](#))。

⁹⁴ ヨハネ 19 章 25 節のギリシヤ語のテキストでは、この二つが同一視されているように思われますが、この解釈には明らかな問題があります。すなわち、同じ名前を持つ 2 人の兄弟という解釈です。ただし、ギリシヤ語の音訳(苦味や反乱を意味する語源を持つ伝統的な「Miriam」ではなく、アラム語の Mari-Yah、「主は私の主」に由来する「Mary」と解釈する方が、主の母の場合には魅力的でしょう)。もし「義理の姉妹」という意味であれば、クロパはイエスの叔父ということになります(あるいは従兄弟という意味で、「妻」ではなく「母」と訳するのが正しいでしょう。ギリシヤ語の原文では「彼女」としか書かれておらず、どちらの可能性も認められます)。クロパがルカ 24:18 のクレオパと同じ

はヨセ:[マルコ 15 章 40 節](#))、サロメ、弟子ヤコブとヨセフの母([マタイ 27 章 56 節](#); [マルコ 15 章 40 節](#); [ルカ 24 章 10 節](#)参照)、マグダラのマリヤがいますが、このグループの中でも際立った存在はこの人、マグダラのマリヤです。⁹⁵ これにはいくつもの理由があります。マグダラのマリヤは、復活後に主が最初に現れた人であり、その名誉は小さくはありません。

現代の学術的見解では、マグダラのマリヤとベタニヤのマリヤ(マルタとラザロの姉妹)を同一人物と見なす初期の時代の見解は疑わしいとされていますが、実際のところ、この二人を同一視するには十分な理由があります。すなわち、ベタニヤのマリヤは、ルカによる福音書 7 章に記されている、涙でイエスの足を洗って、その足に香油を注いだ女性(ルカ 7 章 36-50 節[36-38,39-41,42-44,45-47,48-50](#))でもある可能性が高いということです。なぜなら、マリヤは十字架につけられる六日前に同じような行為をした女性であることが確実であり(そして、<二度目には>涙を流さなかったことと、埋葬を予期してイエスの頭にも油を注いだことで、初めに油を塗った時とは区別されます)、イエスが死刑にされようとしているという旨のイエスの言葉を理解した人が、少なくとも一人いたことを示す第二の例だからです(マタイ 26 章 6-13 節[6-8,9-11,12-13](#); マルコ 14 章 3-9 節[3-5,6-9](#); ヨハネ 12 章 1-8 節[1-3,4-6,7-8](#))。先に述べたように、これらの行為のユニークさ、かなりの出費を伴うこと(必然的に大多数のユダヤ人女性は考慮の対象から除外されます)、そして両方がシモンの家で起こったという事実([マタイ 26 章 6 節](#); [マルコ 14 章 3 節](#)を[ルカ 7 章 40 節](#)と比較参照)は、私たちが同一人物を扱っていることを示す良い証拠です。さらに、マリヤがシモンの家に入出入りしていたという事実([ヨハネ 12 章 2-3 節](#))は、この「罪深い女」が、ルカの記述の中で、非難されることなく、自由に中に入ってイエスの足を洗うことができたことを説明しています⁹⁶。

ルカは、7 章でこの物語を報告した直後、8 章でイエスと弟子たちの宣教の間、彼らに従って個人的な努力と持ち物を通して、宣教を支えた女性たちについて説明しています。

人物である可能性は十分にあります。後者の名前はギリシヤ語であるという理由で否定されることもあります。前者の名前も同様にギリシヤ語である可能性が高く、単にヨハネ福音書ではよりセム語の音訳が用いられているだけであると考えられます(すなわち、子音性閉鎖音の直後に「L」の音が続くのは、通常のヘブル語やアラム語の組み合わせではありません)。

⁹⁵ ここでも、マグダラのマリヤは、マタイ([マタイ 27 章 56 節](#))とマルコによる福音書([マルコ 15 章 40 節](#))の両方で最初に言及されています。

⁹⁶ ルカによる福音書第 7 章の冒頭で、ヨハネからイエスのもとに使いの者がやって来ます。ヨハネは「ベタニヤの近く」で洗礼を受ける習慣があったため([ヨハネ 1 章 28 節](#)参照)、この出来事がベタニヤで起こったことを示唆している可能性もあります。

(1) そののちイエスは、神の国の福音を説きまた伝えながら、町々村々を巡回し続けられたが、十二弟子もお供をした。(2) また悪霊を追い出され病気をいやされた数名の婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ、(3) ヘロデの家令クーザの妻ヨハンナ、スザンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒にいて、自分たちの持ち物をもって一行に奉仕した。(ルカ 8 章 1-3 節)

この段落の冒頭にあるギリシヤ語の言い回し (Καὶ ἐγένετο ἐν τῷ καθησῆς) <カイ エゲネト エン トー カセクセース: 口語訳、新改訳では「そののち」と訳されています> は、<7 章の終りの> 油を塗った事と、<8 章の> イエスの旅とイエスに付き添った女性たちの描写を、意図的に結びつけています。ルカはそれによって、7 章の女性が 8 章のリストに含まれていることを示唆しているようです(ただし、<7 章で言われている> 「罪深い女」という彼女の立場を考慮して、その名指しは避けられています)。このリストの中では、マグダラのマリヤが最初に挙げられており、またこの人は最大の悪霊の攻撃から解放されています。このような悪霊憑きは、不信仰者の場合にのみ起こり得ることであり、通常は神と神の意志を拒絶した結果として起こります(多くの場合、極度の罪深さが原因です)。⁹⁷ しかし、ゲラサの悪霊に憑かれていた人の場合と同様に<ルカ 8 章 26 節->、マリヤは神に立ち返り、救いの恵みを心から受け入れました。彼女は多くのことを許されたからこそ、他の人よりも感謝の気持ちが強かったのです([ルカ 7 章 40-49 節](#))。ルカ 7 章で油を塗ったことは、それ以前に行われたはずの悪霊の支配からの解放の後の、マリヤの最初の公的な感謝の表現であり、サマリヤのらい病人の場合と同様に、彼女はこの最も劇的で記憶に残る方法で神に栄光を帰し、彼女の感謝の深さと回心の完全さを示しています。以後、彼女は自分の人生と持ち物をイエスの宣教に捧げることになります(ベタニヤ出身の姉妹が与えた支援が、<彼女の油を塗るのと> 同様に普通以上に与えていることを比べてみてください: [ルカ 10 章 38-42 節](#); [ヨハネ 11 章 9 節](#), [12 章 2 節](#), [12 章 3-6 節](#)、主と御言葉に対するマリヤの喜び: [ルカ 10 章 39-42 節](#)、三人の兄弟に対する主の愛: [ヨハネ 11 章 5 節](#), [11 章 35 節](#))。十字架刑(十字架のそばに立つ)、埋葬(主がどこに葬られたかを見守る)、そして主の復活(香料を買い、再び持ち物を与え、誰よりも最初に行き、最後に帰ること)におけるマグダラのマリヤの信仰と誠実さの姿は、ベタニヤのマリヤの姿と完全に一致しています。どちらも、若い頃に重大な過ちを犯し、イエスが説かれた永遠の命の申し出を熱心に受け入れ、その結果、並外れた信者となり、信仰と無私の行為によって、私たちの主への愛と、十字架上で私たちのために死なれた主の使命への愛を示した女性です。

⁹⁷ 「サタンの反乱」シリーズ第 4 部の V.4「悪霊憑き」を参照。

よく聞きなさい。全世界のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう。(マタイ 26 章 13 節)([マルコ 16 章 9 節](#); [ヨハネ 12 章 7 節](#)参照)

マリヤが主の死の必要性と復活の現実の両方を信じ、理解しようとしたこと（以下のマリヤの行動によって証明されています）は、上記の称賛だけでなく、復活したイエスを最初に見るという栄誉をももたりました-この点において、彼女は教会全体でも唯一無二の存在であり、これは小さな栄誉ではありません。これが理由で、多くの註釈者がこのマリヤをマルタとラザロの姉妹であると見なすことに消極的であったという事実の根底にある、この「マグダラのマリヤ」という名前があるのです。ほとんどの人は、「マグダラの“Magdalene”」という言葉が、ガリラヤの町を指す属格の形容詞であると当然のように考えています。しかし、他のギリシヤ語の形容詞に見られるように、語尾の-エネ-“ene”が接尾辞である可能性があります。そうであれば（通常提唱される仮説的な町の名前ではなく）、「塔」を意味するアラム語のマグダル “magdal”（ヘブル語ではミグドル “migdol”）がこの形容詞の語源となります。このように、マリヤのこの称号は、彼女の生まれ故郷や町（実のところ彼女はベタニヤ出身）を表す属格的なものではなく、むしろ、十字架に架けられる前、その最中、そしてその後、他の多くの人々が絶望に屈した時に、彼女が「塔のように」しっかりと立っていた時に示された、彼女の信仰の堅固さに対して与えられた敬称（マグダラと「呼ばれる」理由を説明しています：[ルカ 8 章 2 節](#)）⁹⁸ なのです。マリヤの行動とその結果としてのこの栄誉は、私たち全員にとって模範であり、また励ましとなるべきです。主は、この世での主に対する私たちの応答に基づいて、私たちすべてに永遠の名前を与えることを私たちは知っています（[黙示録 2 章 17 節](#); [イザヤ 65 章 15 節](#); [イザヤ 62 章 2 節](#)後半; [黙示録 3 章 12 節](#)参照）。主が語られたことを彼女が実際に聞き、それを信じた結果、信仰の粘り強さが生じました。それは今も昔も、この世での私たちの人生における「最良のもの」（[ルカ 10 章 42 節](#)）であり、霊的成長と成功のための唯一の道です。

それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で**大いなる者と呼ばれる**

⁹⁸ レビ人ヨセフ・キプロスに与えられた名前を参照：使徒たちからバルナバ（「励ましの子」という意味）と呼ばれたバルナバ（[使徒行伝 4 章 36 節](#)）、また、主からシモンに与えられたペトロまたはケファ（[ヨハネ 1 章 42 節](#)）、そして、おそらくその反対の極にある「デドモ」という名前はトマスに与えられたもので、これは「双子」を意味するものと考えられていますが、おそらくは「二心」や「疑い」を意味するものであったのかもしれませんが（[ヨハネ 11 章 16 節](#), [20 章 24 節](#), [21 章 2 節](#)）。

であらう。(マタイ 5 章 19 節)

では、マリヤが死からよみがえったイエスをどのようにして見たのか、その経緯について考えてみましょう。三つの共観福音書は、信仰深い女性たちの内輪の者達が、アリマタヤのヨセフとニコデモが主の遺体を十字架から降ろした後、どこに安置したかを告げています([マタイ 27 章 61 節](#); [マルコ 15 章 47 節](#); [ルカ 23 章 55-56 節](#))。マタイとマルコは、マグダラのマリヤ(ヨセの母マリヤである「ほかのマリヤ」と共に)を特に特定し、最初に言及しています。四つの福音書すべてが、ユダヤ教の慣習に従ってイエスの遺体に油を注ぐ目的で、安息日に女性たちが墓を訪れたと記録しています([マタイ 28 章 1 節](#); [マルコ 16 章 1-2 節](#); [ルカ 24 章 1 節](#); [ヨハネ 20 章 1 節](#))。またここでも、マタイ伝、マルコ伝のみならず、ヨハネ伝でもマリヤが最初に挙げられています。ヨハネの記述は、最初のイースターの朝の出来事を再現する上で特に重要です。他の福音書では出来事の概要のみが書かれてあるからです:

(1)さて、一週の初めの日に、朝早くまだ暗いうちに、マグダラのマリヤが墓に行くと、墓から石がとりのけてあるのを見た。(2)そこで走って、シモン・ペテロとイエスが愛しておられた、もうひとりの弟子のところへ行って、彼らに言った、「だれかが、主を墓から取り去りました。どこへ置いたのか、わかりません」。(ヨハネ 20 章 1-2 節)

他の女性たちも墓にやってきましたが、マリヤは夜明けを待っていませんでした。聖書には確かなことは書かれていませんが、彼女が最初に到着したことから、彼女の大きな愛だけでなく、死者の中からよみがえるというイエスの言葉に対するわずかな信仰に基づいて、イエスが生きておられるのを見ることができるといふ希望があったことが推測されます。なぜなら、彼女は、その可能性に、山をも動かすことができる、からし種ほどのわずかな信仰に固執した唯一の人物だったからです(参照:[ヨハネ 20 章 9 節](#)の NASB 訳「彼らはまだ、聖書が『彼は死者の中から復活しなければならない』と述べていることを理解していなかった」)。このような理由から、主は彼女に復活の姿を最初にさ現わされ、また彼女が主に油を塗るという行為が、福音の物語の一部となることを保証してくださったのです。福音は、マリヤと同じように信じる人々にとってのみ有益だからです。

上に引用したヨハネの福音書 20 章の 2 節が示しているように、その朝に起こった具体的な出来事を明確に把握するために一つずつ順を追って見てみる必要があります。マリヤは私たちの主がよみがえられたすぐ後、夜が明ける前に墓に向かい夜が明けた直後に、最初に墓に着いたのですが、石が転がされていたのを見ました。もう一人の

マリヤ、そして他の女性たちもその後まもなく到着し、墓に入りました(そこで天使たちはイエスの復活を告げ、使徒たちにその知らせを伝えるように指示しました)。しかし、マリヤは墓に入ることなく、開け放たれた墓の外から、イエスの遺体がもうそこにはないことを(参照:[ヨハネ 20 章 11 節](#)では、彼女はまだ入ろうとはしていませんでした)見分けることができました。他の女性たちと一緒に墓に入ろうとしなかった彼女は、他の女性たちが中に入り、天使たちが現れる前に、そこを立ち去ったに違いありません。これは、彼女が使徒たちに「だれかが、主を墓から取り去りました。どこへ置いたのか、わかりません」という報告を説明します。(後に到着した他の女性たちは天使たちの報告を使徒たちに伝えました)。マリヤの言葉を受けて、ペテロとヨハネが墓へと走っていたときには、すでにその場にいた他の女性たちは、勇気を出して墓に入り、天使たちから復活の吉報を受け取り、すぐに指示通りにメッセージを伝えるため、使徒たちを探しました。そして彼らは行く途中で、復活した主に出会いました(すぐ下のセクションを参照)。しかし、それはイエスがマリヤに現れる前ではありませんでした。マリヤは、ヨハネとペテロがすでに帰った後、再び墓に戻ったのでしょうか。しかし、途中で使徒たちや他の女性たちには会いませんでした。マリヤが墓に着いて涙を流していた時、天使たちがイエスの頭と足があった場所に座っているのを見ます。

(13)すると、彼らはマリヤに、「女よ、なぜ泣いているのか」と言った。マリヤは彼らに言った、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」。(14)そう言って、うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。(15)イエスは女に言われた、「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」。マリヤは、その人が園の番人だと思って言った、「もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります」。(16)イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。(17)イエスは彼女に言われた、「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい」。(ヨハネ 20 章 13-17 節)

復活に関するイエスの教えを他の女性たちは直接受け取り、使徒たちには間接的にそれを伝えるように言われました([マタイ 28 章 6-7 節](#); [マルコ 16 章 6-7 節](#); [ルカ 24 章 5-8 節](#); なぜなら、使徒たちはまだ、主が繰り返し語られたことを理解していなかつ

たからです：[ヨハネ 20 章 9 節](#)）のに対し、マリヤにはそのような知らせはありませんでした。なぜなら、彼女はずっとこの祝福された出来事を待ち望んでいたからです。彼女が受け取ったのは、これから起こる出来事についての説明でした。主が父のみもとへ昇天し、勝利に満ちた再臨の日を待つ前に、主は彼女と他の弟子たちと短い間だけしか一緒にいれないので、彼女の喜びは制御されなければなりませんでした。しかし、この真理の言葉は、信仰によって正しい位置と正しい心構えでそれを受け取るにふさわしく備えられた彼女に、主ご自身が与えられたものでした。

2) 他の女性たちに ([マタイ 28 章 9-10 節](#))：マリヤへの出現に続いて、主はすでに天使たちから使徒たちに戻って報告するように指示されていた他の女性たちにも現れました ([マタイ 28 章 9-10 節](#)；そして、この出現は、彼らが天使の指示に従った後に起こったようです：参照、[マタイ 28 章 8 節](#)と[ルカ 24 章 11 節](#)を参照)。主の二度目の復活の出現が、この女性たちだけになされたことは重要であり、彼女たちはイエスが死んでいたにもかかわらず墓に来ました。これは彼女たちの愛と希望と信仰の表れです。一方、彼女たちが報告した相手の弟子たちは、女性たちに、ガリラヤの指定された場所で彼に会うようにという天使からの指示を、弟子たちに再度伝えるよう、この二度目の出現において、主ご自身が命じられたのに関わらず、彼女たちの言葉を「愚かな話」([ルカ 24 章 11 節](#)；すでに墓に駆けつけていたペテロとヨハネを除く)と思ったのです ([マタイ 28 章 10 節](#)；[マタイ 28 章 7 節](#)；[マルコ 16 章 7 節](#)参照)。

3) ペテロに ([ルカ 24 章 34 節](#)；[第一コリント 15 章 5 節](#))：女性たちから、天使たちがイエスの復活について告げたことを聞いた時、他の弟子たちには「愚かなことのように」思えました。しかし、ペテロとヨハネは、マリヤが「墓が空っぽです」と宣言するのを聞くや否や、空の墓に駆けつけました ([ヨハネ 20 章 3-10 節](#))⁹⁹。ヨハネはペテロより先に走りましたが、ペテロは大胆にも真実を知ろうとして墓に入り、主の埋葬衣を目の当たりにしました。その後、ヨハネも墓に入り、二人は「それぞれの家に向かって行った」のです ([ヨハネ 20 章 10 節](#))。主がペテロに現れたのは、おそらくこの時か、家に着いてからでしょう ([第一コリント 15 章 5 節](#)と[ルカ 24 章 34 節](#)を比較参照)。主を最も明白に否定したペテロが、十一人の弟子の中で最初に信仰と希望を取り戻した(それに次いでヨハネ)ことは重要であり、これが誰よりも先に主が＜ペテロに＞現れた理由なのです ([第一コリント 15 章 4-5 節](#)参照)。

4) エマオへの道を行く二人に ([ルカ 24 章 13-32 節](#))：クレオパ、おそらくクロ

⁹⁹ ルカは、マリヤの報告を他の女性 ([ルカ 24 章 9-12 節](#)) の報告と一緒にまとめて要約していますが、ルカの記述が、マリヤの最初の(空の墓についてだけの)報告の後に、ヨハネとペテロが立ち去り、後で他の女性が残りの弟子たちに報告した流れを打ち消すわけではありません。

パと思われる者、どちらにしても主についてほとんど何もわかっていない人物(上記参照)と、もう一人(おそらく十一人のうちの一人ではない:[ルカ 24 章 36 節](#)-参照)は同じ日にエマオの村に向かう旅の途中で、復活した主と出会いました。しかし、主は彼らにご自分の正体を意図的に隠されました。私たちにこの情報が与えられたのは、何年も宣教に加わっていた多くの女性たち([ルカ 24 章 22-24 節](#)参照)の詳細で力強い証言にもかかわらず、男性信徒全員がまだ懐疑的な状態であることを示すためでした。復活を直接目にしない限り、彼らは信じることに消極的でした。疑い続ける彼らに対する主の答えは、それを愚かで心の鈍いことだと言い([ルカ 24 章 25 節](#))、聖書から、キリストの受難と復活の必要性について、十字架につけられる前に主が繰り返しなされたことを、彼らに教えられました([ルカ 24 章 26-27 節](#))。その後、パンを裂きながらイエスであることを明かし、姿を消します([ルカ 24 章 30-32 節](#))。そして、最終的に彼らは、自分の目で見たものについては信じるようになります。

5) 十人とその他の人々へ([ルカ 24 章 36-43 節](#); [ヨハネ 20 章 19-25 節](#); [第一コリント 15 章 5 節](#)後半): クレオパとその仲間は、すぐにエルサレムの弟子たちのところに戻ると、トマスを除く十人全員が、何人かのその他の者たちと共に集まっていた([ルカ 24 章 33 節](#))。彼らの証言を受け入れる用意ができていたのです。なぜなら、彼らはこの時点ですでに、主の出現に関するペテロの報告([ルカ 24 章 33-35 節](#); 参照:[ヨハネ 20 章 24-26 節](#))と、マグダラのマリヤの証、そして他の女性のそれも聞き、信じていたからです。そして二人がその詳細を話している最中に、イエスは現れ、「戸が閉まっていた」にもかかわらず、彼らの中に直接入ってこられたのです([ヨハネ 20 章 19 節](#))。この奇跡的な出現は、復活したばかりの肉体の力を示すものでしたが、魚を食べたこと([ルカ 24 章 41-43 節](#))や、この肉体が「形あるもの」であることを示す他の証拠([ルカ 24 章 39-40 節](#); [ヨハネ 20 章 20 節](#))によって、それが本当にイエスご自身であること、本当に生きておられること、つまり、最初の肉体よりもはるかに多くのことができるようになり、二度と死を経験することのできない肉体を持って死から復活されたことが、疑問の余地なく証明されたのです。

この時主は、昇天前の40日間中に、十一人の重要な教えの務めを確立するために([マタイ 28 章 16-19 節](#); [ルカ 24 章 44-49 節](#); [ヨハネ 20 章 21-23 節](#); [20 章 30 節](#))、聖霊の特別な油注ぎ([ヨハネ 20 章 22 節](#); [出エジプト 31 章 3 節](#), [31 章 18 節](#); [民数記 11 章 17 節](#), [11 章 25-26 節](#), [27 章 18 節](#); [申命記 34 章 9 節](#); [サムエル上 10 章 6 節](#)など)を授けられました。これは一時的な油注ぎであって、間もなくより優れた御霊の内在に代わるものです(つまり、ペンテコステのとき、集まったすべての信者に与えられた聖霊の「バプテスマ」であり、使徒時代の初期以来、キリストを信じた時点ですべての信者に与えられている聖霊の「バプテスマ」です: [ローマ 8 章 9 節](#); [エペソ 4 章 5 節](#);

[第二テモテ 2 章 1 節](#)参照)。私たちの主がこの時、諸国民への伝道は聖霊が与えられるまでは始めてはならないという非常に具体的な指示を与えたのは([ルカ 24 章 49 節](#))、まさにこのためなのです。これが、[ルカ 24 章 49 節](#)の「都にとどまっていなさい」という命令の趣旨であり、その間の彼らのガリラヤ行きに適用されると捉えるべきではありません。「彼らは絶えず宮にいて、神をほめたたえていた」と記されている[ルカ 24 章 53 節](#)や、[使徒行伝 1 章 1-9 節\(1-3,4-6,7-9\)](#)と合わせて見てみると、ガリラヤへの旅は全くなかったかのような印象を受けるかもしれませんが(しかし、他の福音書を見ると、ガリラヤへの旅があったことは明らかなです)。ルカは出来事を要約する際、復活後の出現のその部分は省いていますが、主が使徒たちに残された本質的な教えを盛り込み、[ルカ 24 章 45-49 節\(45-47,48-49\)](#)の伝道命令と、[使徒行伝 1 章 1-9 節\(1-3,4-6,7-9\)](#)の聖霊に関するイエスの最後のメッセージに焦点を当てています。この点で、ルカの証言は、正しく理解されるなら、マタイの「大宣教命令」と同じです(すなわち、命令／任務は、救いを通して**御霊**のバプテスマに至るプロセスである、世界への福音伝道、そして、み言葉の真理を教えることであり、それによって、キリストに忠実な弟子たちが「造られる」のです；すぐ後の8番目の点を参照してください)。

6) [エルサレムの十一人に\(ヨハネ 20 章 26-31 節\)](#)：この出現は、前の出現と同様、イエスが弟子たちのところに來られる「二度目」の出現です([ヨハネ 21 章 14 節](#)が暗示しています)。トマスは、自分も主の復活の同じ具体的な証拠を受け取らない限り信じようとしなかったことで有名ですが、主はまさにそれを与えられました。トマスがついに信じることを表明したとき、主は「見ないで信じる者たち」([ヨハネ 20 章 29 節](#))はさいわいであると宣言されます。ヨハネはこの出現が「八日後」([ヨハネ 20 章 26 節](#))に起こったと伝えているので、弟子たちはまだ、ガリラヤで主に会うという主の命令に従っていなかったと考えてよいでしょう。

7) [ガリラヤの海で七人に\(ヨハネ 21 章 1-23 節\)](#)：十字架につけられた後、十一人がエルサレムから直接ガリラヤに向かうことは、主がずっと計画されていて、待ち合わせ場所まで指定されていたようです：

しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう。(マタイ 26 章 32 節)

しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう。(マルコ 14 章 28 節)

今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて、**あなたがたに言われたとおり**、そこでお会いできるであろう、と。(マルコ 16 章 7 節) ([マタイ 28 章 7 節](#)参照)

そのとき、イエスは彼らに言われた、「恐れることはない。行って兄弟たちに、**ガリラヤに行け**、そこでわたしに会えるであろう、と**告げなさい**。(マタイ 28 章 10 節)

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行って、**イエスが彼らに行くように命じられた山に登った**。(マタイ 28 章 16 節)

理想的には、弟子たちが完璧に反応したと仮定すると、迫り来るイエスの死の必要性について、また、十字架刑の三日後に続く復活の現実について、イエスが語ったすべてを聞くべきであったし、また聞いたはずであったと推測できます。そして、彼らは約束の地であるガリラヤの山で主と会うために、すぐにガリラヤへ向かうべきであったし、また向かったはずでした。しかし、少なくとも上記の八日間を経て後、彼らは最終的にガリラヤに行きましたが、最初に行ったのは、ガリラヤの海の周辺にある彼らの家だったようです([ヨハネ 21 章 1 節](#); [マタイ 4 章 18-22 節](#)参照)。ヨハネは、21 章に記されているように、イエスが彼らに現れたのは「三度目」であり([ヨハネ 21 章 14 節](#))、さらに、その場所に一緒にいたのは七人だけであったと告げています：「シモン・ペテロ、トマス(ディディムスと呼ばれた)、ガリラヤのカナから来たナタナエル、ゼベダイの子たち、そして他の二人の弟子」([ヨハネ 21 章 2 節](#))。この出現において、主は再びその新しい肉体が現実の物理的なものであることを示されただけでなく、ペテロに、十一人のリーダーとして、彼ら全員が「わたしの羊を養う」こと([ヨハネ 21 章 15-17 節](#))の必要性を説かれました。つまり、キリストの体を定期的に、かつ継続的に栄養価の高い霊的な食物で養うこと、そして「食べる」ことは、教えられた真理への信仰の象徴であることを説かれました([マタイ 24 章 45 節](#); [ルカ 12 章 42 節](#); [使徒行伝 20 章 28 節](#); [第一コリント 3 章 2 節](#); [第一テモテ 4 章 6 節](#); [ヘブル 5 章 12-14 節](#); [第一ペテロ 2 章 2 節](#); [第一ペテロ 5 章 2 節](#); [マタイ 14 章 16 節](#); [マルコ 6 章 37 節](#); [ルカ 9 章 13 節](#); [ユダ 1 章 12 節](#)参照)。

8) ガリラヤの山で十一人に([マタイ 28 章 16-20 節](#)):

さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行って、イエスが彼らに行くように命じられた山に登った。(マタイ 28 章 16 節)

マタイの物語は、墓にいた衛兵のユダヤ当局への報告([マタイ 28 章 11-15 節](#))という余談の後、イエスの他の女性たちへの出現と、弟子たちに対する「ガリラヤに行け、そこでわたしに会えるであろう」([マタイ 28 章 10 節](#))というメッセージから、上の節に直接飛びます。ヨハネによる福音書 21 章のガリラヤの海での主の出現の後に、十一人全員はついに「行くように命じられた山」に集まりました([マタイ 28 章 16 節](#))。

(17)主を見たとき、彼らは[主を]拝した。しかし、[まだ、そのうちの]何人かは、疑いを抱いていた。(18)すると、イエスは近寄って来て、彼らに言われた。「天と地の一切の権威は、わたしに授けられた。(19)だから、あなたたちは行って、すべての国々を父なるお方(字義どおりには「名」と、御子なる[お方]と、聖霊なる[お方]に浸って一つに結ばれて<国々を御父なるお方と御子なるお方と聖霊なるお方と一つに結び付かせて>、わたしに従うものとしなさい。(20)わたしがあなたがたに命じたすべてのことを守るように教えなさい。見よ、私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(イクシス直訳:マタイ 28 章 17-20 節)

ガリラヤ、特に山上での待ち合わせは、主がそのために意図された場所でしたから、主は出現のたびに弟子たちに何かを教えられましたが、この箇所では、復活後の主の教えのおそらく最も詳細な例を見ることができるのは、驚くことではありません(ここでは非常に簡単な概要が示されていますが、[ヨハネ 20 章 30 節](#), [21 章 25 節](#); [使徒行伝 1 章 3 節](#)を参照)。この時までには、弟子たちは皆、主を少なくとも二度見ているのに(つまり、最初の出現にはトマス以外の全員が、二度目には十一人全員がおり、トマスはヨハネによる福音書 21 章の出現に挙げられている一人です)、それでもなお、彼らの中には「疑いを持つ」者もいたと言われていることは興味深いことです。復活という概念や考え方は、この最初の信者たちにとって非常に難しかったのです。彼らは復活の直接的な証人となるという祝福を受けていたにもかかわらずです。もちろん、聖書の詳細な証言と聖霊の普遍的な内在がある今日でさえ、文字どおりの肉体的な復活は、多くのクリスチャンにとって依然としてつまずきの石であり、それは悲劇的なことだと筆者は見ています。復活は私たちの希望であり、イエスの復活と私たち自身の復活から切り離すことのできない永遠の命の希望だからです([第一コリント 15 章 12-17 節](#))。これこそ、クリスチャンとして「私たちに委ねられている」第一の重要な点なのです([第一コリント 15 章 1 節](#))。キリストへの望みが現世にしか及ばないのであれば、私たちは実に「誰よりも哀れむべき存在」([第一コリント 15 章 19 節](#))だからです。復活の希望は、新約聖書のはほぼすべての章に見られます(例えば、[ローマ 5 章 2 節](#), [8 章 25 節](#); [第一コリント 13 章 13 節](#); [ガラテヤ 5 章 5 節](#); [エペソ 1 章 18 節](#); [コロサイ 1 章 23 節](#), [1 章 27 節](#); [第](#)

[一テサロニケ 1 章 3 節](#), [5 章 8 節](#); [第二テサロニケ 2 章 16 節](#); [第一テモテ 1 章 1 節](#), [4 章 10 節](#); [テトス 1 章 2 節](#), [2 章 13 節](#); [ヘブル 3 章 6 節](#), [6 章 18 節](#), [7 章 19 節](#), [11 章 1 節](#); [第一ペテロ 1 章 3 節](#), [1 章 13 節](#), [3 章 15 節](#); [第一ヨハネ 3 章 3 節](#))。この希望がクリスチャン生活の適切な、第一の焦点であると言っても過言ではありません。ですから、私たちは、主が死者の中からはっきりとした肉体をもってよみがえられ、その肉体はもはや死の対象ではなく、永遠の命にふさわしいものであったという多くの証拠を持っていることは、本当に幸いなことなのです。

この時、何人かの弟子たちが表明した疑念は、聖霊の到来と対をなすものであり、その後、弟子たち／使徒たち全員が、福音書における彼らの行動と『使徒行伝』における彼らの行動を比較すれば、誰もが目を見張るような熱意、勇気、そしてゆるぎない信仰を示すようになっていきます。ですから、マタイによって与えられたこの時期のイエスの教えの内容の概要の中で、たとえその事実がしばしば誤解されているとしても、聖霊の働きが大きく取り上げられていることは、十分に理解できるのです。主の教えの三つの要点がここに記されています。第一に、救いのメッセージ、すなわち、主イエスが死に打ち勝ち(それによって主は「すべての権威」を獲得されたのです)、復活されたことについての福音、あるいは「良い知らせ」は、今、主イエスに信仰を置き、主イエスに従うすべての人が手に入れることができるものであり、今、イスラエルを越えて、「すべての国民」に届けられるべきものであるということです。第二に、イエスはこれらの「進軍命令」(しばしば「大宣教命令」と呼ばれます)が達成される手段について述べます。そして第三に、使徒たちの中の疑念を抱く者たちだけでなく、将来同じような疑念を抱くかもしれないすべての人々のためにも、重要な安心感を与えるものです：現在、私たちは主を見ることができないかもしれませんが、ここで与えられた主の言葉を信じるなら、主は確かに「私たちと共に」おられ、それ以上に、私たちが主の再臨の日、すなわち「時代の終わり」の再臨までとどまるとしても、最後まで「私たちの内に」おられます。生き残ったすべての信者が「空中で主と出会うために一緒に引き上げられる」とき([第一テサロニケ 4 章 17 節](#))、生ける復活の中で、私たちの現在の体が一瞬にして永遠のいのちに飲み込まれるのです。

[御霊が来られる([ヨハネ 14 章 15-19 節](#))]その日には、わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおることが、わかるであろう。(ヨハネ 14 章 20 節)(参照：[ローマ 8 章 10 節](#); [第二コリント 13 章 5 節](#); [エペソ 3 章 17 節](#); [コロサイ 1 章 27 節](#))

もちろん、「イエスはまだ(父の右に坐することによる)栄光を受けておられなかった

ので、御霊がまだ下っていなかった」([ヨハネ 7 章 39 節](#))のです。弟子たちの一部が抱

いた疑いは、主から与えられた一時的な油注ぎは、後の聖霊の内在ほどではなく、真理を受け入れるための障害を、すべて取り除くには不十分であったことを明確に示しています([ヨハネ 20 章 22 節](#); [使徒行伝 2 章 1-44 節](#), [4 章 13 節](#)参照)。そして、主が第二の教えで言及されたのは、この賜物であって、水のバプテスマではありません。ヨハネは水でバプテスマを授けましたが、キリストは「聖霊でバプテスマを授ける」([マタイ 3 章 11 節](#); [マルコ 1 章 8 節](#); [ルカ 3 章 16 節](#); [ヨハネ 1 章 3 節](#); 参照 [使徒行伝 1 章 5 節](#), [11 章 16 節](#))のです。これは教会の「一つのバプテスマ」であって([エペソ 4 章 5 節](#))、イエスが弟子や使徒たちに父、子、聖霊「**のお方の中に浸って一つとなる**」ように指示したバプテスマなのです。信者が三位一体と一体となること、すなわち「一体性」は、いかなる儀式によっても達成されるものではありません。それは神の霊によってのみ、超自然的に達成されるものであり、今ではキリストを信じる時点で達成されるのです([使徒行伝 10 章 43-44 節](#); 参照 [ローマ 8 章 9 節](#); [第二テモテ 2 章 1 節](#)参照)。ですから、「バプテスマを授ける」ことは、私たちが救われ、キリスト(と御父と御霊)と一体となるために、御霊に浸ることによってキリスト(と御父と御霊)の中に入るという福音のメッセージを伝えることを意味し、今信者となった人たちをその対象としている「教え」と、完全に一組の対となっています。従って、ここには、弟子・使徒だけでなく、教会全体に対する「大宣教命令」、すなわち、すべての人の救いのため、また信じるすべての人の霊的成長のために働くという、この時代を通してすべての信者の本質的な任務が、簡約した形で提示されているのです。

9) [五百人に\(第一コリント 15 章 6 節\)](#): 私たちはこの「集団」への主の出現を[第一コリント 15 章 6 節](#)からでしか知り得ませんが、それはエルサレムでなされた可能性が高いです。なぜなら、主はガリラヤで弟子たち／使徒たちに個人的に教えた後、エルサレムに現れ、聖霊の約束が与えられるまでそこに留まるようにと指示されたからです(エルサレムは、このことが起こる場所と定められていたからです:[使徒行伝 1 章 4-5 節](#), [2 章 1-4 節](#))。それから 20 年以上経った紀元 55 年頃には、この時主を見た信者のほとんどが、まだ生きていたとパウロは報告しています。この事実と、パウロが文脈の中でこのことを述べていることから明らかなように、このように比較的長い期間にわたって多くの証人が証言したことは、イエスの復活を個人的に見たことのない多くの初期の信者にとって、復活の現実と真実を確認する重要な要素でした。

10) [ガリラヤ後の他の出現](#): 復活後、昇天までの 40 日間、主が地上にたびたび出現されたことが推測される二つの箇所があります。七人への主の出現は、ヨハネの記述によるとこれで「三度目」([ヨハネ 21 章 14 節](#))であり、山での出会いとエルサレムへの帰還がその直後に行われたことから、これらの他の出現はおそらく、使徒たちが聖霊の到来を待つために帰還した後の期間に行われたと考えられます:

イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。(使徒行伝 1 章 3 節)

(30)しかし、神はイエスを死人の中から、よみがえらせたのである。(31)イエスは、ガリラヤからエルサレムへ一緒に上った人たちに、幾日ものあいだ現れ、そして、彼らは今や、人々に対してイエスの証人となっている。(使徒 13 章 30-31 節)

11) ヤコブに ([第一コリント 15 章 7 節](#)): パウロは、イエスが異父弟のヤコブにも現れたと語っています。そして、この出現もまた(パウロの記述から推測すると:[第一コリント 15 章 7 節](#))、おそらくガリラヤ以降のことになるでしょう。復活以前には主の兄弟は誰も主を信じていませんでしたが([ヨハネ 7 章 5 節](#); cf.[詩篇 69 篇 8 節](#); [マルコ 3 章 21 節](#))、その後大きな心境の変化が起こり([ユダ 1 章 1 節](#)も参照)、このヤコブの改宗はイエスご自身からのこの出現がきっかけとなった(あるいはなり始めたの)です。後にエルサレム教会の指導者となったヤコブですが([使徒行伝 12 章 17 節](#), [15 章 13 節](#), [21 章 18 節](#); [ガラテヤ 1 章 19 節](#), [2 章 9 節](#); [ヤコブ 1 章 1 節](#))、また、彼がこの特別な扱いを受けることは、彼自身の信仰のためにも、十一人の使徒に匹敵する権威の尺度として(皆、主に一度以上お会いしている)も、間違いなく重要でした。

12) 昇天の弟子たちに (使徒行伝 1 章 1-9 節):

(1)テオピロよ、わたしは先に[あなたのために]第一巻を著わして、イエスが行い、また教えはじめてから、(2)お選びになった使徒たちに、聖霊によって命じたのち、天に上げられた日までのことを、ことごとくしるした。(3)イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって[使徒たちに]示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の国のことを語られた。(4)そして食事を共にしているとき、[イエスは]彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束(すなわち、聖霊)を待っているがよい。(5)すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。(6)さて、弟子たちが一緒に集まったとき(すなわち、最後の時)、イエスに問うて言った、「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのです」

か」。(7)彼らに言われた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって決めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない(すなわち、再臨などは、神の予定表に従って起こるのであって、あなた方の予定表に従って起こるのではない)。(8)ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。(9)こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。(使徒行伝 1 章 1-9 節)

ルカによって書かれたこの箇所は、ルカによる福音書の終わりと混同してはいけません。(上記の)使徒たちがガリラヤから戻った後に主と最後に会った時と、最初のイースターの日曜日の夜の最初の共同会合([ルカ 24 章 36-53 節<49-52>](#))との間には、明らかに類似点があります。[ルカ 24 章の 51 節](#)にある「そして、主は天にあげられた」という部分は、原文の一部**ではなく**、ルカによる福音書の終わりと使徒行伝の初めを一つにつなぐために(つまり、使徒行伝が昇天で始まるように、ルカによる福音書も昇天で終わるように)、後から付け加えられたものです。しかし、上記で見たように、これらは2つの別の出会いであって、前者はガリラヤに行く前のイースターの**夜**、後者はその約40 日後の昇天の**日**です。主が御霊のバプテスマに特別な焦点を置いておられること(特に、多くの教会では、これらの聖句がほとんど意味を持たないかのように、水のバプテスマを続けていますが)、また、主が特に御霊のバプテスマとヨハネの水のバプテスマを対比しておられることに注意すべきです。上記の聖書箇所は、主が「栄光を受ける」([ヨハネ 7 章 39 節](#)参照)前の、復活後の最後の出現を示しています(直後に、天の父の右に座する彼のセッション(着座)が続きます:[詩篇 110 篇 1 節](#)；下記セクション 5.o を参照)。

13) [パウロ\(使徒行伝 9 章 1-19 節, 22 章 3-16 節, 26 章 9-18 節; 第一コリント 9 章 1 節, 15 章 8 節\)](#)とヨハネ([黙示録 1 章 10-20 節](#))に:

…わたしは…使徒ではないか。わたしたちの主イエスを見たではないか。
… ([第一コリント 9 章 1 節](#))

復活の主を実際に「見ること」、それによって復活の証人となることは、使徒の職に就

くための不可欠な条件でした([使徒行伝 26 章 16 節](#); [使徒行伝 22 章 15 節](#)参照)¹⁰⁰。そして使徒の職は十二人だけであり、今後もそうであり続けるでしょう([黙示録 21 章 14 節](#)参照)。パウロは「栄光のうちに」主を見ました([使徒行伝 9 章 3 節](#), [22 章 6 節](#), [22 章 11 節](#), [26 章 13 節](#))、パトモスのヨハネも見ました([黙示録 1 章 12-17 節](#))。ですから、これらの昇天後の出現は、それ以前の出現とは著しく異なっており、主が御父の御前で昇天されたときに起こった栄光化の壮大さと大きさを示しているのです。

o. キリストの昇天とセッション(着座):

1) 昇天: 「昇天」とは、主が地上から第三の天におられる父なる神の御前に文字通り旅立たれたということです:

(9)こう(すなわち、3-8 節の内容を)言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。(10)イエスの上って行かれるとき、彼ら[弟子たち]が天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて (11)言った、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。[たった今]あなたがたを離れて[そして]天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」。(使徒行伝 1 章 9-11 節)

聖書には、地上の観察者から見た実際の出来事に関するこの唯一の記述に加え、¹⁰¹主が地上から第三の天の御父の御前に文字通り肉体をもって昇られたこと-復活の体なしには、明らかに不可能だったこと-に言及している聖句が数多くあります。(使徒行伝 2 章 33-36 節, [5 章 31 節](#); [エペソ 4 章 7-10 節](#); [ピリピ 2 章 9 節](#); [第一テモテ 3 章 16 節](#); 参照:[ヨハネ 3 章 13 節](#); [ヨハネ 6 章 62 節](#); [ヘブル 6 章 19-20 節](#)):

¹⁰⁰ すなわち、ペテロが、イエスの地上での十字架以前の働きに実際に参加することが必要条件であると思込んでいたことは誤りでした([使徒行伝 1 章 21-22 節](#))。マッテヤの「選出」も誤りでした([使徒行伝 9 章 15 節](#)参照:パウロは異邦人に福音を伝えるために、主の「選ばれた器」です)。

¹⁰¹ [ルカ 24 章 51 節](#)の「そして天に上げられた」という表現は、聖書には含まれていないもので、ルカの終わりと使徒行伝の冒頭を調和させるために後世になって付け加えられたものです。主が 40 日間姿を現したという記述([使徒行伝 1 章 3 節](#))はルカ自身によるものであり、弟子たちがガリラヤに向かったという記述と、ルカによる福音書の終わりと使徒行伝の冒頭を調和させようとした後世の付加部分との間には、主が姿を現した 40 日間の記述があります。このことから、復活祭の夜に起こった[ルカ 24 章 51 節](#)が昇天の時であったはずがないことは明らかです。

さて、わたしたちには、もろもろの天をとおって（御父の御前に）行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。（ヘブル 4 章 14 節）

キリストは天に上って神の右に座し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられるのである。（第一ペテロ 3 章 22 節）

2) キリストのセッション（着座）：私たちの主イエス・キリストが正式に御父の御前に、受け入れられたこと、また、私たちの主イエスに言われ、すぐに承諾された、御座の右の座で御父の傍らに座するようにとの御父なる神の勧めは、新約聖書全体を通して言及されています（[ローマ 8 章 34 節](#)；[エペソ 1 章 20 節](#)、[2 章 6 節](#)、[3 章 1 節](#)；[ヘブル 1 章 3 節](#)、[1 章 13 節](#)、[8 章 1-2 節](#)、[10 章 12 節](#)、[12 章 2 節](#)）。

主はわが主に言われる、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」と。（詩篇 110 篇 1 節）

イエスは、御霊の働きによってこれを書いダビデが、ダビデの子であるメシヤが自分（すなわち、ダビデ）の「主」にもなることを十分に理解していたことを、不信仰な同時代の人々に示すために、上の詩篇の予言的なセッション（着座）の預言をご自身に適用されました。この節と詩篇 2 篇の残りの部分から明らかなように、これは、イエスが神の御座の前に初めて正式に姿を現した時点での、御父から御子への宣言であり、イエスが第三の天におられる御父の御前に昇られた直後に起こった出来事、すなわち、神の「右の座」という栄誉ある地位に「座するように」との招きです（[列王記上 2 章 19 節](#)；[マタイ 20 章 21-23 節](#)、[25 章 33-34 節](#)、[26 章 64 節](#)参照）¹⁰²。

御子[イエス]は[御父]神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして罪のきよめのわざをなし終えてから、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである。（ヘブル 1 章 3 節）

この節は[詩篇 110 篇 1 節](#)を補足するもので、私たちの主が天の御座の間におられる神の傍らにお座りになることによって、父の申し出に即座に応答されたことを描写しています（すなわち、これはキリストの実際のセッションを描写しています）。

¹⁰² 天の御座とその象徴についての詳細は、「来たる艱難期：第 2 部 B『天国の前奏曲』」1.3.b「神の御座」参照。

(6)わたしはまた、**御座と四つの生き物との間、長老たちの間に**、ほふられたとみえる小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七つの目(これは全地に送り出された神の七つの霊)とがあった。これらの目は、全世界につかわされた、神の七つの霊である。(7)小羊は進み出て、御座にいますかたの右の手から、巻物を受けとった。(黙示録 5 章 6-7 節)

(16)彼ら(すなわち、艱難における殉教者)は、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。(17)**御座の正面にいます**小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいにとって下さるであろう」。(黙示録 7 章 16-17 節)

私たちの主イエス・キリストが御父の右の座に着いておられる時は、間もなく終わろうとしています。詩篇 110 篇 1 節には、セッション(着座の期間)の終了を「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで」としてあります。この箇所を拡張して解釈することは、許容されるものであり、また必要なものです。なぜなら、主がハルマゲドンの征服を待って地上に戻られるのではなく、将来の勝利のための、父なる神の第一の主体者として来られることは、他の多くの聖句から十分に理解できるからです。¹⁰³ 上記の聖句において、私たちの主イエス・キリストは、神の小羊として象徴的に描かれています。この小羊が、二千年のセッション(着座されている期間)から立ち上がって、主のすべての敵が主の足元にひれ伏すことになる、主の再臨の過程と期間が始まろうとしているのです(すなわち、巻物は黙示録であり、この書が開かれると、主の再臨と千年王国支配に先立つ世界史の最終期間である艱難期が始まります)。その栄光の日、最後の「主の日」が来るまでは¹⁰⁴、イエスは文字どおり御父とともに、御父の右の座に着き、御座に共におられます。というのも、第三の天は神の一時的な住まい(サタンの反乱が始まったときに地上に移された)に過ぎないからです¹⁰⁵。そこは、悪魔の反乱を鎮圧し

¹⁰³ すなわち、詩篇 110 篇における「～するまで」の用法は、出来事を予言的な予期表示の例です。この箇所については、「来たる艱難期」の第二部 B で次のように述べています。「ヘブル語の未完了時制が前置詞『*adh*, *עַד*』と組み合わせることで、この例では、そのプロセスが開始されることを意味し、その前に完了することを意味するものではありません。メシヤは、すべてが解決されるまで天で受動的に待機するように言われているのではなく、物事が解決され始める定められた時を待つように言われているのです。したがって、キリストが艱難期に直接関与されること(特にハルマゲドンで反キリストの軍勢を主が滅ぼすこと)は、この箇所と何ら矛盾するものではありません。

¹⁰⁴ 「来たる艱難期」第1部 IV.b「主の日パラダイム」を参照。

¹⁰⁵ 「サタンの反乱」シリーズ参照。

ようとしている神の「司令本部」です。そして、契約の箱を模した御座そのものが、実際には神の「戦車」なのです(この事実は、その独特な外観と独特な機能を説明するものです:参照:[歴代誌上 28 章 18 節](#); [詩篇 132 篇 7 節](#); [エゼキエル 1 章 4-28 節](#), [10 章 9-22 節](#); [ダニエル 7 章 9 節](#); [ハバクク 3 章 3-15 節](#))。この戦車のような御座に御父と御子が共に座られていることは、キリストが再臨し、ご自身の王座を地上に築かれる、神の敵に対する勝利の時が間近に迫っていることを象徴しているのです(参照:[黙示録 11 章 19 節](#)における神の箱の出現は、再臨の前触れを告げる箇所です)。

(9)わたしが見ていると、もろもろのみ座が設けられて、日の老いたる者(すなわち、御父)が座しておられた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のようであった。そのみ座は火の炎であり、**その車輪は燃える火**であった。(10)彼の前から、ひと筋の火の流れが出てきた。彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々、審判を行う者はその席に着き、かずかずの書き物が開かれた。(11)わたしは、その角(すなわち、反キリスト)の語る大いなる言葉の音がするので見ていたが、わたしが見ている間にその獣は殺され、そのからだはそこなわれて、燃える火に投げ入れられた。(12)その他の獣はその主権を奪われたが、その命は、時と季節の来るまで延ばされた。(13)わたしはまた夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者(すなわち、御父)のもとに来ると、その前に導かれた。(14)彼に主権と光栄と国とを賜い、諸民、諸族、諸国語の者を彼に仕えさせた。その主権は永遠の主権であって、なくなることがなく、その国は滅びることがない。(ダニエル 7 章 9-14 節)

「座せよ」という着座の招きは、御父が御子とその働きを正式に受け入れたことを意味します。これは、実際は決して疑われることのないものでしたが、厳格な神の正義の観点から、この時点まで保留されてきたものです。

(7)わたしは主の詔をのべよう。主はわたしに言われた、「おまえはわたしの子だ。きょう、わたしはおまえを生んだ。(8)わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を嗣業としておまえに与え、地のはてまでもおまえの所有として与える。(詩篇 2 篇 7-8 節)

この詩篇 2 篇 7-8 節も同様に、御子が初めて神の御座の前に来られた時、御父が御子の働きに正式に神の承認印を押されたことを描写しています。「きょう、わたしはおまえを生んだ」と、上で訳されているこの言葉は、この聖句の着座の文脈では、本質的に、「今日、わたしはあなたをわたしのものと宣言した」という意味です。私たちはこ

の言葉を、キリスト誕生の預言的な適用([ヘブル 1 章 5 節](#), [5 章 5 節](#)参照)に加えて、御父が御子とその働きを正式に認めた([使徒行伝 13 章 32-33 節](#)参照)という意味でも、適用されると見なすべきです。諸国と全世界の所有とは、教会時代がその役割を終えるや否や、ご自分の相続として獲得した千年王国を指しています。なぜなら、イエスが父なる神の計画を初臨において成功裏に完了されたことは、全人類の歴史上の転換点であり、悪魔の反乱(下記参照)を征服し、人類を罪から解放したからです。キリストの着座は、この勝利を父なる神が正式に受け入れ、承認したことを意味し、それゆえ、これから訪れるすべての祝福への道が開かれるのです。

(1)こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。(2)信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。
([ヘブル 12 章 1-2 節](#))

さらに、[使徒行伝 2 章 36 節](#)で、ペテロは、主イエスが十字架上で勝利を収めたことを受け、父なる神が彼を「主とキリスト」として任命したと述べています([使徒行伝 5 章 31 節](#)参照)。つまり、「(世界を統治するために)油を注がれた主」です。これは、キリストがサタンの世界支配に取って代わっただけでなく、父なる神の代理として世界の統治を受け入れたことを意味しています。したがって、イエス・キリストの着座は、十字架を待ち望む以前の社会と、十字架を振り返る現在の状況との間の正式な分岐点となります。十字架の勝利が完全に達成され、正式に認められたことで、メシヤは栄光を受け、歴史を変えるほどの偉業の恩恵と成果は、すべて即座に発揮されるか、あるいは予言的に差し迫ったものとなります。それは、メシヤだけでなく、私たちにも当てはまります。

1) 栄光の現われ：神として、神の栄光は私たちの主イエス・キリストの神性の親密で取り除くことのできない特徴です([イザヤ 40 章 5 節](#)と[ヨハネ 12 章 41 節](#)の比較)。主は常に無限の神の栄光を持ち、これからも持ち続けます。

(1)初めに言[イエス・キリスト]があった。言は神と共にあった。言は神であった。＜英文訳：言葉と神とは相互関係にあった＞(2)この言は初めに神[父]と共にあった。(3)すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。(ヨハネ 1 章 1-3 節)

ですから、ここで問題になっている栄光の現れは、主の人間性に関係しています。十字架の勝利と、キリストが御父の御座に御父と共に着座されたことを御父の御前で正式に認められる前は、この神の栄光は覆い隠されていました。なぜなら、一方では、イエスは十字架上で私たちのために死ぬことによって私たちを罪から救うために低められ、栄光の無い状態で人生を体験されなければなりませんでした(すなわち、[1.5.e 「ケノーシス」](#)の原則を参照)。他方では、主イエスの人間性の栄光の現れは、私たちの主イエスがなさったすべてのこと、特に私たちのために十字架上で死なれたことを御父が承認されたことの現れとして、聖書に記されています。そのため、公然と、目に見える形での栄光の現れは、必然的に、地上でのご自身の使命の後に続いたのです。

(31)さて、彼が出て行くと、イエスは言われた、「今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった。(32)彼によって栄光をお受けになったのなら、神ご自身も彼に栄光をお授けになるであろう。すぐにもお授けになるであろう。(ヨハネ 13 章 31-32 節)

父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。(ヨハネ 17 章 5 節)(参照:[ヨハネ 12 章 28 節](#))

この栄光の現れの最も目に見える第一の側面、すなわち、天地創造の前からキリストが神性において持っておられた栄光が人間性において現されるのは、キリストの新しい姿においてです。復活の後、イエスが弟子たちに現れた時でさえ、その姿は特別に栄光に満ちたものではありませんでした。しかし、昇天と着座の後、私たちの主はすべての場合において、神の栄光を肉体的に現しています([マタイ 16 章 27 節](#), [17 章 2 節](#), [24 章 30 節](#), [25 章 31 節](#); [マルコ 8 章 38 節](#), [9 章 2-8 節](#), [9 章 29-31 節](#), [13 章 26 節](#); [ルカ 9 章 26 節](#), [21 章 27 節](#); [第一テモテ 3 章 16 節](#); [ヘブル 1 章 3 節](#), [2 章 9 節](#); [第一ペテロ 4 章 13 節](#))。

(13)王よ、その途中、真昼に、光が天からさして来るのを見ました。それは、太陽よりも、もっと光り輝いて、わたしと同行者たちとをめぐり照しました。(14)わたしたちはみな地に倒れましたが、その時ヘブル語でわたしにこう呼びかける声を聞きました、『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげのあるむちをければ、傷を負うだけである』。(15)そこで、わたしが『主よ、あなたはどなたですか』と尋ねると、主は言われた、『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。([使徒行伝 26 章 13-15 節](#))(参照:[使徒行伝 9 章 3-4 節](#), [22 章 6-8 節](#))

(12)そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。(13)それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。(14)そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。(15)その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。(16)その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった。(黙示録 1 章 12-16 節)

個人的な外見に現れる、目に見える栄光の反面は、彼が万物の相続人であるという立場です。[詩篇 2 篇 7-8 節](#)で、父なる神が正式に御子を「わが子よ」と認めた後、父なる神は「わたしに求めよ、わたしはもろもろの国を嗣業としておまえに与え、地のはてまでもおまえの所有として与える」と言っています。十字架上ですでに勝ち取られ、予言的に差し迫ったイエスの世界支配には、最高権威のあらゆる正当な称号と共に、イエスという人物を表す御名(みな)の栄光が伴います。

(9)それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。(10)それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、(11)また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。(ピリピ 2 章 9-11 節)

その着物にも、そのもにも、「王の王、主の主」という名がしるされていた。(黙示録 19 章 16 節)

(4)ヨハネからアジヤにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、やがてきたるべきかたから、また、その御座の前にある七つの霊から、(5)また、忠実な証人、死人の中から最初に生れた者、地上の諸王の支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し、(黙示録 1 章 4-5 節)

(20)神(すなわち、父)はその力をキリストのうちに働かせて、彼を死人の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右に座せしめ、(21)彼を、すべての支配、権威、権力、権勢の上におき、また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名の上におかれたのである。

(22)そして、万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた。(23)この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない。(エペソ 1 章 20-23 節)

これらの節からわかるように、キリストが獲得し、宇宙のすべての者、くまなくすべてのものの上に与えられている栄光と権威の重要な側面として(参照:[ヘブル 1 章 6 節](#); [エペソ 3 章 10-11 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#))、教会の頭としてのキリストのユニークな地位があります。この教会こそ、主の「からだ」([第一コリント 12 章 27 節](#); 参照:[マタイ 26 章 26 節](#); [ローマ 12 章 5 節](#); [第一コリント 12 章 12-13 節](#); [エペソ 1 章 22-23 節](#), [3 章 6 節](#), [4 章 4 節](#); [コロサイ 1 章 18 節](#), [3 章 15 節](#))であり、主の「花嫁」([エペソ 5 章 31-32 節](#))であり、十字架の激しい試練を乗り越えて獲得しようとしておられた主の「御前に置かれた喜び」([ヨハネ 15 章 13 節](#); [エペソ 5 章 25-27 節](#); [ヘブル 12 章 2 節](#))—私たちは、彼がそのために奮闘された「賞」であり、彼が今享受している栄華の重要な一部なのです¹⁰⁶。この主の栄光の側面は、彼が十字架上での私たちのための死を通してご自身のために私たちを獲得された後、主の人間性においてのみ与えられるものでした([マタイ 20 章 28 節](#); [ガラテヤ 1 章 4 節](#), [2 章 20 節](#); [エペソ 5 章 2 節](#))。

(15)御子は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである(すなわち、宇宙で卓越している)。(16)万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子(イエス・キリスト)にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。(17)彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。(18)そして自らは、そのからだなる教会のかしらである。彼は初めの者であり、死人の中から最初に生れたかたである。それは、ご自身がすべてのことにおいて第一の者(復活の第一人者)となるためである。(19)神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、(20)そして、その十字架の血によって平和をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである。(コロサイ 1 章 15-20 節)

¹⁰⁶ 花嫁、すなわち復活の第二段階([1 コリント 15 章 24 節](#))は、やがて花嫁の友人たちによって補完されます。花嫁の友人たちは、千年王国の信者たちから成る復活の第三段階であり、長子の権利である「二倍の分け前」を構成します。『サタンへの反逆』第 5 部、第 II.8.b 項「再創造の七日間」の「第 7 日」を参照してください。

すべての信者が、キリストを信じた時点で受けた御霊のバプテスマの結果([ローマ 8 章 9 節](#); [第一テモテ 2 章 1 節](#))、私たちは「キリストと一つ」とされ([第一コリント 1 章 30 節](#), [15 章 22 節](#); [第二コリント 5 章 17 節](#); [エペソ 1 章 13 節](#), [2 章 6 節](#), [2 章 10 節](#); [コロサイ 1 章 27 節](#); [ヘブル 3 章 14 節](#))、このキリストとの一致は、キリストが再臨して地上に戻られて、復活の時に教会と「結婚」される時、目に見える素晴らしい体験的現実となるのです([黙示録 19 章 7-9 節](#); [第一テサロニケ 4 章 16-17 節](#)参照)。

2) 勝利:

(4)巻物を開いてそれを見るのにふさわしい者が見当らないので、わたしは激しく泣いていた。(5)すると、長老のひとりがわたしに言った、「泣くな。見よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる」。(黙示録 5 章 4-5 節)

ここで宣言されている勝利は、十字架の勝利です。私たちの罪のために死ぬという御父の使命を成功裏に果たすことによって、私たちの主は悪魔を打ち負かし、長子としての御名と栄光と誉れを永遠に勝ち取られたのです。私たちに代わって、その死によって私たちを救ってくださった、主の十字架での勝利が、万物と万物を支配する最高の権威を確立したのであり、それは御父の右の座に着かれるという主の着座において確認され([マタイ 28 章 18 節](#); [ルカ 10 章 17-18 節](#); [ヨハネ 14 章 2-3 節](#), [16 章 11 節](#); [使徒行伝 2 章 32-36 節](#), [5 章 30-31 節](#); [ローマ 16 章 20 節](#); [第一コリント 15 章 21-25 節](#); [エペソ 1 章 20-23 節](#), [3 章 10-11 節](#), [4 章 7-10 節](#); [ピリピ 2 章 9-11 節](#); [コロサイ 1 章 13-20 節](#), [2 章 14-15 節](#); [ヘブル 2 章 14-15 節](#); [第一ペテロ 3 章 22 節](#); [第一ヨハネ 3 章 8 節](#); [黙示録 1 章 18 節](#), [17 章 14 節](#))、私たちに代わって、その死によって私たちを救ってくださいました。

(31)今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。(32)そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」。(ヨハネ 12 章 31-32 節)

そして、[神は十字架によって]もろもろの[悪霊の]支配と権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。(コロサ 2 章 15 節)

(14)このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているのです、イエス

もまた同様に、それらをそなえておられる(すなわち、処女でお生まれになったので罪がないという点だけが同じではありません)。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、(15)死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解放するためである。(ヘブル 2 章 14-15 節)

このように、キリストの罪に対する勝利は、人類に最初に罪を犯させた悪魔に対する勝利と密接に結びついています。十字架は、罪を持つすべての人間に普遍的に救いを与えるだけでなく、サタンの反乱の歴史に終止符を打ち、神の正義に対する悪魔の中傷を、人類史の裁判で永遠に論破したのです([第一テモテ 3 章 16 節](#); [第一ペテロ 1 章 12 節](#)参照)。

(10)それは今、天上にあるもろもろの支配や権威が、教会をとおして、神の多種多様な知恵を知るに至るためであって、(11)わたしたちの主キリスト・イエスにあって実現された神の永遠の目的にそうものである。(エペソ 3 章 10-11 節)

(4)御子は[御自分のセッション(3 節)において]、その受け継がれた名が御使たちの名にまさっているので、彼らよりもすぐれた者となられた。(5)いったい、神は御使たちのだれに対して、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ(詩篇 2 篇 7 節)」と言い、さらにまた、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう(サムエル下 7 章 14 節)」と言われたことがあるか。(6)さらにまた、神は、その長子を世界に導き入れるに当って、「神の御使たちはことごとく、彼を拝すべきである(詩篇 97 篇 7 節後半)」と言われた。(ヘブル 1 章 4-6 節)

キリストは天に上って神の右に座し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられるのである。(第一ペテロ 3 章 22 節)

3) 地下のパラダイスから第三の天国への信者の移動 : 私たちの視野の彼方で繰り広げられている人の目には見えない戦いにおいての、主が十字架上で勝利された影響と筆舌に尽くせない驚くべき結果は、預言された「捕らわれ人の解放」([詩篇 146 篇 7 節](#); [イザヤ 14 章 17 節](#), [42 章 7 節](#), [49 章 9 節](#), [61 章 1 節](#); [マタイ 12 章 29 節](#); [第一ペテロ 3 章 18-22 節](#)参照)、つまり、亡くなった聖徒すべてのハデスからの解放(主が肉体の死において下られた「パラダイス」からの解放: [ルカ 23 章 43 節](#); 上記 I.5.m.参照)でした。これらの人々は、イエスの犠牲によって実際に罪が贖われるまで

は、神の完全な聖性のうちに神の御前に入ることができませんでした([ローマ 3 章 25 節](#))。しかし、私たちの大祭司であるイエスが、真の至聖所に入れ、そのいけにえが着座への招きによって公式に認められることによって、私たちの大祭司であるイエスは天の神殿の幕を裂き、信者が神の御前に入ることができるようにしてくださり([ヘブル 4 章 14-16 節](#), [6 章 19-20 節](#), [7 章 26 節](#), [8 章 1 節](#), [9 章 8 節](#), [9 章 11-28 節](#), [10 章 19-20 節](#); [マタイ 27 章 51 節](#)参照)、十字架以前に死んだすべての信者は、イエスが昇天された時、イエスによって勝利のうちに天に導かれたのです([詩篇 68 篇 18 節](#); [エペソ 4 章 8 節](#); [詩篇 68 篇 24-27 節](#); [ヨハネ 14 章 2-3 節](#); [コロサイ 2 章 15 節](#); [第一ペテロ 3 章 18-22 節](#); [黙示録 1 章 18 節](#)参照)。

(7)しかし、キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みが与えられている。(8)そこで、こう言われている、「彼は高いところに上った時、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた」。(9)さて「上った」と言う以上、また地下の低い底(すなわち、黄泉の国)にも[先に]降りてこられたわけではないか。＜ルギンビル訳:他に、どのような意味があるでしょうか。＞(10)降りてこられた者自身は、同時に、あらゆるものに満ちるために(すなわち、十字架で勝ち取られた勝利を完成させるために)、もろもろの天の上(すなわち、御父の住まいである第三の天)にまで上られたかたなのである。(エペソ 4 章 7-10 節)

悪魔が「捕えた者を家に帰さなかった」([イザヤ 14 章 17 節](#)後半)のに対し、私たちの主は「捕虜を引き連れて」、彼らを黄泉のパラダイスから解放し、勝利の凱旋をして第三の天におられる御父の御前に直接導かれました。その結果、その時点から主にあって死んだ者も皆、直接天国に行っているのです([ヨハネ 14 章 2-3 節](#)と[第二コリント 5 章 8 節](#)を比較、参照:[黙示録 6 章 9-11 節](#), [7 章 9-17 節](#))。

4) 聖霊の派遣 :

(4)そして食事を共にしているとき、[イエスは]彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束(すなわち、聖霊)を待っているがよい。(5)すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。(使徒行伝 1 章 4-5 節)

すなわち、イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊[のバプ

テスマ]がまだ下っていなかったのである。(ヨハネ 7 章 39 節後半)

(16)わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。(17)それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、また**あなたがたのうちにいる**からである。(ヨハネ 14 章 16-17 節)

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。(ヨハネ 14 章 26 節)

しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう。(ヨハネ 16 章 7 節)

(32)このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである。(33)それで、イエスは神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、それをわたしたちに注がれたのである。このことは、あなたがたが現に見聞きしているとおりである。(使徒行伝 2 章 32-33 節)

聖霊の内住の働きによる恩恵と祝福は、それ自体が計り知れないほど崇高な祝福と力づけであり、また、この教会の時代をユニークなものとするために組み合わされた、他の多くの恩恵と祝福の基礎でもあります([エペソ 1 章 3 節](#); [イザヤ 48 章 16 節](#)参照)。上記の聖句から分かるように、主の地上でのミッションの成功と、天の高みでの主の着座とそれに伴う栄光は、聖霊を遣わすという約束を、実際に実行するための不可欠な前提条件でした。＜それ以前にも＞聖霊が神のご計画において、常に重要な役割を担っていなかったわけではありません(このテーマについては、本シリーズの第 5 部「聖霊論」で詳しく取り上げます)。御霊は常に信者と「共に」おられました。教会の最初のペンテコステと、それに続くキリストを信じた時点での普遍的な御霊のバプテスマ以来、今の時代のすべての信者は、文字通り御霊の内在により祝福されています([ローマ 8 章 9 節](#); [第一コリント 2 章 16 節](#); [エペソ 4 章 5 節](#); [第二テモテ 2 章 1 節](#)参照)、私たちは御霊のバプテスマによってイエス・キリストと「一つ」になるのです([第一コリント 12 章 13 節](#); [エペソ 4 章 5 節](#); [マタイ 3 章 11 節](#); [マルコ 1 章 8 節](#); [ルカ 3 章](#)

[16 節](#); [ヨハネ 1 章 3 節](#); [使徒行伝 1 章 5 節](#), [11 章 15-17 節](#)参照)。

(3)それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかる(聖霊による)バプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。(4)すなわち、わたしたちは、その死にあずかる[聖霊の]バプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。(5)もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にひとしくなるであろう。(ローマ 6 章 3-5 節)

(26)あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によって、神の子なのである。(27)キリストに合う[御霊の]バプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを[衣のように]着たのである。(28)もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。(ガラテヤ 3 章 26-28 節)

5) 報酬 :

勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である。(黙示録 3 章 21 節)

上記の聖句がはっきりと述べているように、主の十字架での勝利は、主の着座によって証明されたものであり、私たちが「信仰の勝利」([第一ヨハネ 5 章 4 節](#))を通して、その勝利を分かち合うための礎でもあるのです。

(26)勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。(27)彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。それは、わたし自身が父から権威を受けて治めるのと同様である。(黙示録 2 章 26-27 節)

創造された世界全体を支配する方としての主の地位は、まさに父なる神の御座を共有するという主のセッション(着座-父の右に座られること)によって示され、同様に、主への奉仕を通して現世で勝ち取る報酬の一部として、その支配を私たちが共有するための礎(いしずえ)となります。報酬はクリスチャンの希望に不可欠な要素です([ヘブル](#)

[11 章 6 節](#), [11 章 24-26 節](#); 参照.[イザヤ 40 章 10 節](#), [62 章 11 節](#); [マタイ 6 章 19-21 節](#), [10 章 40-42 節](#), [25 章 21-23 節](#), [25 章 34-36 節](#); [ルカ 19 章 17 節](#); [第一コリント 3 章 8-15 節](#), [9 章 24-27 節](#), [15 章 58 節](#); [第二コリント 5 章 10 節](#); [ガラテヤ 6 章 9 節](#); [エペソ 2 章 6-7 節](#), [6 章 8 節](#); [コロサイ 3 章 24 節](#); [第一テサロニケ 2 章 19 節](#); [第一ペテロ 1 章 7 節](#); [第二ヨハネ 1 章 8 節](#); [黙示録 20 章 4-6 節](#), [22 章 12 節](#))。なぜなら、その報いによって私たちの復活の体が主イエスを永遠に讃えるものとなるということが伴います([第一コリント 9 章 25 節](#); 参照.[第一コリント 15 章 40-42 節](#); [ピリピ 4 章 1 節](#); [第二テモテ 4 章 8 節](#); [ヤコブ 1 章 12 節](#); [第一ペテロ 5 章 4 節](#); [黙示録 2 章 10 節](#), [3 章 5 節](#); [3 章 11-12 節](#), [19 章 8 節](#)参照)。私たちは主イエス・キリストの着座によってもたらされた勝利の「分捕品」に報酬として与ります([ルカ 11 章 22 節](#); [エペソ 4 章 7-8 節](#)参照)。

それゆえ、わたしは彼に大いなる者(多くの兄弟たち)と共に(獲た)物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。(イザヤ 53 章 12 節前半)

6) アクセス(つながり)ととりなし: 私たちの主が第三の天に入られ、御父の御座に着かれたことによってもたらされた最も励まされ、また現在進行中の祝福の一つは、天の御座におられる御父と御子([ヨハネ 14 章 13-14 節](#))に私たちの祈りが直接届くという二重の特権です([ゼカリヤ 4 章 7 節](#); [ローマ 5 章 1-2 節](#)前半; [第一ペテロ 3 章 18 節](#)参照)...

というのは、彼(イエス・キリスト)によって、わたしたち両方の者(ユダヤ人と異邦人)が一つの御霊の中にあって、父のみもとに近づくことができるからである。(エペソ 2 章 18 節)

この主キリストにあって、わたしたちは、彼に対する信仰によって、確信をもって大胆に神(御父に)に近づくことができるのである。(エペソ 3 章 12 節)

だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか。(ヘブル 4 章 16 節)

....同時に、大祭司としての私たちの主が、私たちのために絶えずささげておられる執り成しの祈り([第一テモテ 2 章 5 節](#); [ヘブル 7 章 24-25 節](#); 参照.[ヨブ 16 章 20-21](#)

節; [イザヤ 53 章 12 節](#)後半; [ヘブル 4 章 14 節](#), [6 章 19-20 節](#), [9 章 11-12 節](#), [9 章 24 節](#))から恩恵を受け、御霊の執り成しの祈りによって増強されるのです:

(33)だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。(34)だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、(わたしたちの身代わりとなって)死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。(ローマ 8 章 33-34 節)

わたしの子たちよ。これらのことを書きおくるのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためである。もし、罪を犯す者があれば、[わたしたちのため]父のみもと[に近づく]には、わたしたちのために助け主、すなわち、義なるイエス・キリストがおられる。(第一ヨハネ 2 章 1 節)

(26)御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。(27)そして、人の心を探り知るかたは、御霊の思うところがなんであるかを知っておられる。なぜなら、御霊は、聖徒のために、神の御旨にかなうとりなしをして下さるからである。(ローマ 8 章 26-27 節)

7) 来たる事柄: 現在、私たちの主は「わたしがあなたの敵をあなたの足の台とする[ことを始める]時まで」([詩篇 110 篇 1 節](#))、御父と共に座っておられます。その「時」とは、終末の時とも呼ばれ、二千年に及ぶ教会時代の終わりの艱難期から始まります。イエスが父の右に座っておられるということは、それらの出来事<敵を足台とすること>は確かに未来の事となります([詩篇 110 篇 1-7 節](#); [ヘブル 1 章 13 節](#); 参照:[第一コリント 1 章 7-8 節](#); [第一テサロニケ 1 章 10 節](#); [第二テサロニケ 1 章 6-10 節](#); [テトス 2 章 13 節](#); [ヤコブ 5 章 8 節](#))。それゆえ、イエスの事実上の世界の事実上の支配権の最終的な引き受けは、イエスの花嫁である教会の完成を待っているだけなのです¹⁰⁷。

(19)だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい。(20)それは、主のみ前から慰めの時がきて、あなたがたのためにあらかじめ定めてあったキリストなるイエスを、神がつかわして

¹⁰⁷ 神の視点による人類史については、『サタンの反乱』シリーズの第 5 部、II「人類史における神の計画」を参照。

下さるためである。(21)このイエスは、神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時まで、天にとどめておかねばならなかった。(使徒行伝 3 章 19-21 節)

a) 再臨とハルマゲドン： 艱難期の終結には、ちょうど反キリストがエルサレムに集中しているユダヤ人を滅ぼそうと構えているとき、私たちの主イエス・キリストが「現われ」([ルカ 17 章 30 節](#); [第一コリント 1 章 7 節](#); [第二テサロニケ 1 章 7 節](#); [第一ペテロ 1 章 7 節](#), [1 章 13 節](#), [4 章 13 節](#); [黙示録 1 章 1 節](#); 参照 [ローマ 8 章 19 節](#); [第一ペテロ 1 章 5 節](#))、栄光のうちに、新しく復活した聖徒たちと共に戻って来られます([第一テサロニケ 4 章 13-17 節](#); [黙示録 19 章 11-16 節](#))。人の子のしるしである十字架が空に現れて世界中から見え([マタイ 24 章 30 節](#))、「すべての目が彼を見」ます([黙示録 1 章 7 節](#))¹⁰⁸。未信者のイスラエルは悔い改め([ゼカリヤ 12 章 10-14 節](#))、「すべてのイスラエルが救われます」([ローマ 11 章 25-27 節](#))。獣の軍隊は滅ぼされ([黙示録 19 章 15-21 節](#))、獣と偽預言者は火の池に沈められ([黙示録 19 章 20 節](#); [イザヤ 24 章 21-22 節](#) 参照)、悪魔とその天使たちは底知れぬ所に閉じ込められます([黙示録 20 章 1-3 節](#))。

b) 千年王国： 主は、千年の統治を開始する一連の裁きにおいて神の正義が行なわれた後¹⁰⁹、正当な相続人であり預言されたメシヤ王として、エルサレムの神殿に座して千年の統治を開始します([黙示録 11 章 15 節](#))。彼の千年にわたる統治は、エデンの園以来、世界と人類が経験したことのないような平和、豊かさ、繁栄をもたらすでしょう。¹¹⁰ 復活し、報いを受けた教会([ローマ 2 章 16 節](#); [第一コリント 4 章 5 節](#))は、その栄光の支配を共有することになります([マタイ 25 章 19-23 節](#); [ルカ 22 章 28 節](#); [第一コリント 6 章 3 節](#); [ローマ 8 章 17 節](#); [第二テモテ 2 章 12 節](#); [黙示録 1 章 6 節](#), [2 章 26-27 節](#), [3 章 21 節](#), [20 章 4-6 節](#))。しかし、完全な正義、完全な管理、繁栄、欠乏のない自由が千年間続いたにもかかわらず、この至福の時代の終わりに悪魔が解放されると、人類の大多数はたちまちサタンの旗の下に群がり、神の子に反逆するようになります([黙示録 20 章 7-10 節](#))。神と神の真理を拒絶することと取り巻く状況

¹⁰⁸ これらの出来事はすべて、「来たる艱難期」シリーズ(特に第 5 部「再臨とハルマゲドン」を参照)で詳しく説明されています。

¹⁰⁹ すなわち、[黙示録 10 章 3-4 節](#)の「七つの雷」によって表される裁き、すなわち、バビロン、ハルマゲドンの軍勢、獣と偽預言者、マゴグと諸国の民、サタンとその悪霊(ミレニアムの間、投獄される)、イスラエル(不信者と獣を崇拝する者が国に入る前に一掃される)、教会(報いのため)に関する裁きです。これらは「来たる艱難期」の第6部で取り上げられています。

¹¹⁰ 「サタンの反乱」シリーズの第 5 部、IV「第二段階の回復：千年王国」と、「来たる艱難期」の第 6 部参照。

が何であるかは、何の関係もないことがはっきりと証明されるのです。

c) 最後の審判：千年期の終わりには、主が悪魔と、主に逆らうようにそそのかされた人々(ゴグマゴグの反乱)を、迅速かつ最終的に退治された後、復活の最終段階が行われ、再臨の時以降キリストに信仰を置いたすべての人々が、永遠の命に復活します([ダニエル 12 章 2-3 節](#); [マタイ 25 章 34-40 節](#); [第一コリント 15 章 24 節](#))。そしてカインから終末に至るまで、主を拒んだすべての人々が、最後の裁きで主と対面するために復活します([マタイ 25 章 41-46 節](#); [黙示録 20 章 11-15 節](#))。すべての裁きが委ねられたお方として、イエス・キリストは、ご自分を拒んだすべての人々を裁くために座に着かれるのです。

(21)すなわち、父が死人を起して命をお与えになるように、子もまた、そのころにかなう人々に命を与えるであろう。(22)父はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子にゆだねられたからである。(23)それは、すべての人が父を敬うと同様に、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない。(24)よくよくあなたがたに言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受け、またさばかれることがなく、死から命に移っているのである。(25)よくよくあなたがたに言うておく。死んだ人たちが、神の子の声を聞く時が来る。今すでにきている。そして聞く人は生きるであろう。(26)それは、父がご自分のうちに生命をお持ちになっていると同様に、子にもまた、自分のうちに生命を持つことをお許しになったからである。(27)そして子は人の子であるから、子にさばきを行う権威をお与えになった。(28)このことを驚くには及ばない。墓の中にいる者たちがみな神の子の声を聞き、(29)善をおこなった人々(すなわち、忠実にイエス・キリストに従った人たち)は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、**さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる時が来る**であろう。(ヨハネ 5 章 21-29 節)

d) 新しいエルサレムと永遠の国：歴史の中で故意に主を拒んだすべての人(人と天使の両方:[マタイ 25 章 41 節](#)参照)を処分した直後、主は私たちのために「義だけが住む」汚れのない世界([第二ペテロ 3 章 12 節](#))、新しい天と新しい地を創造されます([イザヤ 65 章 17 節](#), [66 章 22 節](#), [第二ペテロ 2 章 10-13 節](#); [黙示録 21 章 1 節](#), [21 章 5 節](#))。そして新エルサレムがイエス・キリストの教会の住まいとして、天から地上に永遠に降ります([黙示録 21 章 9 節](#); 参照:[ヨハネ 14 章 2-3 節](#)参照)。この祝福された場所で、私たちの主は天の父と王座を共にされ、私たちは永遠に彼らとの、また

互いの、栄光に満ちた、筆舌に尽くせない至福の交わりを楽しむのです。

(15)それだから(すなわち、信仰による救いのため)彼ら(すなわち、聖徒ら)は、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。(16)彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。(17)御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいにとって下さるであろう」。(黙示録 7 章 15-17 節)

II. イエス・キリストの救いの御業

1. 救い主の必要性：

このシリーズのパート 3B「ハマルセオロジー:聖書における罪の研究」の I.1.1.1,「霊的死」で説明されているように、アダムとエバの墮落以来、人間一人ひとりが罪の中に生まれ、その結果罪を犯しているという事実について、聖書ははっきりと述べています。永遠の観点から見ると、神の助けなしには、私たちは皆、差し迫った裁きと刑罰という絶望的な状況にあります。

主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られた。(創世記 6 章 5 節)

人はいかなる者か、どうしてこれは清くありえよう。女から生れた者は、どうして正しくありえよう。(ヨブ 15 章 14 節)

主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやし、(詩篇 103 篇 3 節)

善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない。(伝道の書 7 章 20 節)

(20) [イエスは]さらに言われた、「人から出て来るもの、それが人をけがすのである。(21)すなわち内部から、人の心の中から、悪い思いが出て来る。不品行、盗み、殺人、(22)姦淫、貪欲、邪悪、欺き、好色、妬み、誹り、高慢、愚痴。(23)これらの悪はすべて内部から出てきて、人をけがすのである」。

(マルコ 7 章 20-23 節)

神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。(ローマ 1 章 18 節)

すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、(ローマ 3 章 23 節)

このようなわけで、ひとりの人(すなわち、アダム)によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして(すなわち、アダムがその罪の性質を肉体的に受け継いだことによって)、すべての人が(明らかに)罪を犯したので、(すなわち、普遍的な罪は普遍的な霊的死をもたらして)死が全人類にはいり込んだのである。(ローマ 5 章 12 節)

(17)そこで、この(罪を犯す)事をしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。(18)わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている。なぜなら、善をしようとする意志は、自分にあるが、それをする力がないからである。(19)すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。(20)もし、欲しないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの内に宿っている罪である。(21)そこで、善をしようとする欲しているわたしに、悪がはいり込んでいるという法則があるのを見る。(22)すなわち、わたしは、内なる人としては神の律法を喜んでいるが、(23)わたしの肢体には別の律法があつて、わたしの心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、わたしをとりこにしているのを見る。(24)わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。(ローマ 7 章 17-24 節)

(1)さてあなたがたは、先には自分の罪過と罪とによって死んでいた者であつて、(2)かつてはそれらの中で、この世のならわしに従い、空中の権をもつ君(すなわち、悪魔)、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従つて、歩いていたのである。(3)また、わたしたちもみな、かつては彼らの中にいて、肉の欲(すなわち、罪の性質)に従つて日を過ごし、肉とその思いとの欲するままを行い、ほかの人々と同じく、生れながらの怒りの子であつた。(エペソ 2 章 1-3 節)

(5)だから、地上の肢体、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪欲、また貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は[事実上]偶像礼拝にほかならない。(6)これらの[故意に不従順な]ことのために、神の怒りが下るのである。(7)あなたがたも、以前これらのうちに日を過ごしていた時には、これらのことをして歩いていた。(コロサイ 3 章 5-7 節)

そして、一度だけ死ぬこと(すなわち、最初の「肉体的な」死)と、死んだ後さばきを受けること(すなわち、「第二の死」、[黙示録 2 章 11 節](#), [20 章 6 節](#), [20 章 14-15 節](#)参照)とが、人間に定まっているように、(ヘブル 9 章 27 節)

つまり、私たちは生まれながらにして霊的に死んでおり、「怒りの子」であり、私たち自身の力や能力をはるかに超えた奇跡的な介入がなければ、神の裁きと刑罰の執行を待つばかりなのです。そして、まさにその介入こそが、イエス・キリストにおいて神が私たちにしてくださったことなのです！

(9)神は、わたしたちを怒りにあわせるように定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによって救を得る(すなわち、復活する)ように定められたのである。(10)キリストがわたしたちのために死なれたのは、さめていても眠っていても、わたしたちが主と共に生きるためである。(第一テサロニケ 5 章 9-10 節)

救い、すなわち、永遠の刑罰からの解放と永遠の命の提供は、望みのない私たちには、世界史上最も驚くべき出来事によってもたらされました。イエス・キリストが私たちの代わりに、私たちのために死に至るまで犠牲となられたことは、神の視点から見ると、それだけが世界史であるほどに重要なのです。

2. イエス・キリストの身代わりの死：

大まかに言えば、神の完全な正義はすべての罪に対する償いを要求し、私たち人間には永遠の刑罰を受ける以外の方法で、その償いを提供することはできないため、神ご自身が言葉では言い尽くせないほど大きな慈悲と優しさをもって、身代わりの存在、すなわち神の愛する御子であり、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストを私たちに与えてくださいました。このため、イエスが私たちのために死なれたことにより、救いは全人類に提供されていますが、イエスというお方と、その御業を信仰によって受け入れない限り、確実に有罪判決を受けるという状況は変わりません。

神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。彼を信じる者は、さばかれぬ。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名(すなわち、このお方)を信じることをしないからである。(ヨハネ 3 章 17-18 節)

御子を信じる者は永遠の命をもつ。御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまるのである。(ヨハネ 3 章 36 節)

イエスは私たちの身代わりとなって死なれましたが、私たちは確かに彼が行うのを必要としていました。私たちは支払うことのできない負債に直面していましたが、その負債は神の完全な御性質のゆえに支払われなければなりません。この負債を支払う資格があるのは完全な神の御子だけであり、それこそが救い主が私たちのためにしてくださったことです。私たちのために十字架で死なれ、罪を贖ってくださったのです。

これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。(マタイ 26 章 28 節)

(25)神はこのキリストを立てて、その血による[によって達成され]、信仰をもって受くべき**あがないの供え物**とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって[すべて]見のがしておられたが、(26)それは、今の時に、神の義を示すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである。(ローマ 3 章 25-26 節)

(6)**わたしたちがまだ弱かったころ**、キリストは、時いたって、不信心な者たち**(わたしたち)のために**死んで下さったのである。(7)正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。(8)しかし、まだ罪人であった時、**わたしたちのために**キリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。(ローマ 5 章 6-8 節)

わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり(すなわち、聖書の言葉が成就して)、**わたしたちの罪のために**死んだこと、(第一コ

リント 15 章 3 節)

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。(第二コリント 5 章 21 節)

キリストは、わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身をわたしたちの罪のためにささげられたのである。(ガラテヤ 1 章 4 節)

生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、**わたしのために**ご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。(ガラテヤ 2 章 20 節)

また愛のうちに歩きなさい。キリストもあなたがたを愛して下さって、わたしたちのために、**ご自身を**、神へのかんばしいかおりのささげ物、また、**いけにえとしてささげられた**のである。(エペソ 5 章 2 節)

さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、**わたしたちの罪**をご自分の身に**負われた**。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。(第一ペテロ 2 章 24 節)

このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法(すなわち、罪; [第一ヨハネ 3 章 4 節](#))からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない。(テトス 2 章 14 節)

3. 無制限の贖罪:

すべての人が救われることが神の願いであり([エゼキエル 18 章 23 節](#); [マタイ 18 章 14 節](#); [ヨハネ 12 章 47 節](#); [使徒行伝 17 章 27 節](#); [第一テモテ 2 章 4 節](#); [第二テモテ 2 章 24-26 節](#); [第二ペテロ 3 章 9 節](#); 参照:[哀歌 3 章 33 節](#)参照)、この救いの使命を果たすためにこそ、神はご自分の唯一の愛する御子を世に遣わされました。

(16)神はそのひとり子を賜わったほどに[お捨てになったほどに]、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(17)神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。(ヨハネ 3 章 16-17 節)

わたしたちは、父が御子を世の救主としておつかわしになったのを見て、そのあかしをするのである。(第一ヨハネ 4 章 14 節)

ですから、私たちの主がすべての人のために死なれたのは、すべての人が救われるためであることは驚くことではありません。そして実際、イエスはすべての人のために、かつて息を吸ったことのあるすべての人間のために死なれたのです。

彼は、わたしたちの罪のための、あがないの供え物である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである。(第一ヨハネ 2 章 2 節)

このように、キリストの十字架上の犠牲は、全人類の罪の罰を贖うものとして、完全に有効でした。ですから、キリストの十字架の御業のゆえに、救いは例外なくすべての人に与えられるのです。

神は、わたしたちを責めて不利におとしいれる証書(すなわち、私たちの個人的な罪の記録)を、その規定もろともぬり消し、これ(神と私たちの間の障害となるもの)を取り除いて、十字架につけてしまわれた。(コロサイ 2 章 14 節)

キリストの犠牲は神のご計画の礎です([詩篇 118 篇 22 節](#); [イザヤ 8 章 13-15 節](#), [28 章 16 節](#); [ダニエル 2 章 34-45 節](#); [マタイ 16 章 18 節](#); [第一コリント 10 章 4 節](#); [第一ペテロ 2 章 4-8 節](#))。神の永遠の定めに従って実際に展開される歴史のすべては、十字架が前提となっています([エペソ 1 章 9-11 節](#); [コロサイ 1 章 17-20 節](#); [第二テモテ 1 章 9-10 節](#); [マタイ 21 章 42 節](#); [ローマ 5 章 6 節](#), [8 章 29-30 節](#); [第一コリント 8 章 6 節](#); [エペソ 2 章 20-22 節](#); [第一ペテロ 2 章 6-8 節](#); [ヘブル 9 章 26 節](#)参照)。聖書の中のすべての聖句は、究極的には、神の生ける言葉である方、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの御業に焦点が当てられています([ヨハネ 5 章 39 節](#); [ヨハネ 1 章 1-14 節](#); [ヘブル 1 章 1-4 節](#); [第一ヨハネ 1 章 1-4 節](#); [黙示録 1 章 2 節](#), [19 章 13 節](#)参照)。それゆえ、天使や人間が創造される前に、宇宙の礎の前に定められた神

の永遠の計画において、神は、信仰において、あるいは、この自由意志の規定がもたらすであろう、多くの人々の神の拒絶に、被造物の自由意志が行使されることを予見しておられました。神の計り知れない慈悲と知恵により、そのような被造物の反逆(最初はサタンの反逆、次に人間の墮落に見られる)によって生じる死と損失に対する解決策が与えられました。すなわち、御自身の御子の血による、墮落した人類の贖いであり、御子の御姿と御業を受け入れようとするすべての人が受け入れられるのです。罪のために私たちが死ぬという問題の解決は、イエスが私たちの罪のために死なれたことにあり([ローマ 6 章 10 節](#))、最終的に、信じる者すべてにとって、最も恐ろしい敵である死そのものは生命に飲み込まれるのです。([イザヤ 25 章 7-8 節](#); [第一コリント 15 章 26 節](#), [15 章 54-57 節](#); [ヘブル 2 章 14 節](#))。イエス・キリストの十字架は全人類のために、罪という不可能な問題を、それが私たちの主が世に代わって死なれる前に犯されたすべての罪の場合であっても取り除かれたのです:

(23) すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、(24) 彼らは[みな]、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。(25) 神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、(26) それは、今の時に、神の義を示すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである。(ローマ 3 章 23-26 節)

上記の箇所は、私たちの主が十字架につけられる前に歴史的に犯されたすべての罪(25 節)を非常に明白に指しており、この節の始めにある重要な事実、つまり、すべての者は罪を犯しており、それゆえすべての者が贖罪を必要としているという事実、に、直接対応しています。このキリストの犠牲の普遍性、つまり過去、現在、未来の世界史で犯したすべての罪のためにキリストが死なれたことは、多くの聖句が教えています([第二コリント 5 章 19 節](#); [第一テモテ 2 章 4-6 節](#); [第一ヨハネ 2 章 2 節](#)):

その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。(ヨハネ 1 章 29 節)

たとい、わたしの言うことを聞いてそれを守らない人があっても、わたしはその人をさばかない。わたしがきたのは、この世をさばくためではなく、この世を救うためである。(ヨハネ 12 章 47 節)

なぜなら、キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである。わたしたちはこう考えている。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのである。そして、彼がすべての人のために死んだのは、生きている者がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために、生きるためである。(第二コリント 5 章 14-15 節)

ただ、「しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。(ヘブル 2 章 9 節)

彼[イエス]は、ほかの[人間の]大祭司のように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、日々、いけにえをささげる必要はない。なぜなら、自分を[いけにえとして]ささげて、一度だけ、それ[いけにえとしてささげること]をされたからである。(ヘブル 7 章 27 節)

あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。(第一ヨハネ 3 章 5 節)

イエスがすべての罪のために死なれたので、それ以上の罪のためのいけにえは必要ないのです([ヘブル 10 章 15-18 節](#))。しかし、全世界のための罪のあがないとは、全世界の人が贖罪(しよくざい: 神が罪のゆるしのために犠牲を払われたこと)を受け入れるという意味ではありません。キリストがすべての人のために死なれたという事実は、すべての人がキリストの犠牲を受け入れ、キリストとキリストの御業に信仰を置き、永遠の命を得るという意味ではありません。全世界のための罪の赦しのわざというのは、イエスが救いの障害となる罪を取り除かれたことを意味します(後述の II.9 節「和解」を参照)。全世界のための贖罪とは、イエス・キリストを信じる信仰によって全世界が得られる罪の赦しと罪からの解放の贈りものを、全世界の人が皆、受け入れるという意味ではありません。

これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。(マタイ 26 章 28 節)(マルコ 14 章 24 節参照)

罪と死からの解放はすべての人に与えられていますが、すべての人がそれを受け入れるわけではありません。イエスがどのようなお方であることを、また私たちの罪のために死なれたことを受け入れられない人がいるからといって、十字架の贖いが全体的

にも個人的にも無効になるわけではありません。なぜなら、神がそのひとり子の犠牲によって私たちの罪を取り除いてくださったことを受け入れるのを拒否することによって、人は必然的に自分の功德(善い行い)によって神の前に立たなければならなくなるからです。イエスは全人類の救い主ですが、イエスを受け入れ、信じ、イエスに従う者だけが、イエスのうちに神がすべての人に与えてくださる救いの恩恵を得ることができるのです。

わたしたちは、このために労し苦しんでいる。それは、すべての人の救主、特に信じる者たちの救主なる生ける神に、望みを置いてきたからである。
(第一テモテ 4 章 10 節)

彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名(すなわち、ひとり子というお方)を信じることをしないからである。(ヨハネ 3 章 18 節)

その方[聖霊]が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。義についてというのは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。(ヨハネ 16 章 8-11 節)

上記の最後の二つの聖書の箇所は、十字架の贖いの恩恵を受けることができないのは、個人的な選択の結果、つまりイエスを信じないという選択の結果であることをはっきりと示しています。これは、私たちの主が死ぬことができなかった一つの罪、私たちの罪のために主の犠牲を受け入れることを拒否した罪です。神には、イエス・キリストの真理を否定する罪を除き、救いの妨げとなる他のすべての罪を赦す用意があります。神が私たちのために、ひとり子を犠牲にして死に渡されたのに、神を「嘘つき」呼ばわりすることは、「赦されない罪」であり、「聖霊に対する冒瀆」という「永遠の罪」、すなわち、主イエス・キリストというお方とそのなして下さったことを拒絶することです([マタイ 12 章 31-32 節](#); [マルコ 3 章 28-30 節](#); [ルカ 12 章 10 節](#))。しかし、真理を受け入れ、イエスを信頼し、最後まで信仰を保って忠実にイエスに従うすべての人にとって、イエスの贖いの犠牲は、神との関係に入る上での問題である罪をすでに取り除いており、信仰による恵みによって、実際には罪人である私たちも、原理的には義とされ、私たちに代わって血を流してくださった方の血によって義とされるのです([ローマ 3 章 24 節](#), [4 章 25 節](#); 後述の II.8 参照)。

4. キリストの血：

上記 I.5.1.2.2 項「キリストの血」で説明されているように、私たちの罪のために死なれた私たちの主の有効な贖罪の働きは、主が肉体的に生きている間、私たちのために闇の中で耐え忍ばれたことにあります(すなわち、私たちの罪を裁かれるために、私たちの身代わりとなって主が霊的に死なれたこと。次の項を参照)。ですから、ゴルゴダに暗闇が下る前に、私たちのためにイエスが受けた肉体的な苦しみは計り知れないものであり、理解を超えるものでしたが、その暗闇の中で、世の罪のために、私たちが十分に推し量ることもできないような霊的な死を遂げられたイエスの耐えられた激しい苦しみは、その事前の苦しみをはるかに凌ぐものであったに違いありません。キリストが私たち皆のために贖いを与えてくださったこの業、この死は、聖書では「キリストの血」と呼ばれています。

聖書で血が命の象徴であるのは、血が致命的に流されるとき、命が終わるという非常に単純で理解しやすい理由からです。これが動物の血を摂取することさえ禁じられている理由です。なぜなら、血は生き物の命を表しているからです。また、これは「血の罪」の原則を説明するものでもあります。血を流すことと命を奪うことは同じことだからです([創世記 9 章 4-6 節](#); [レビ 17 章 11 節](#); [申命記 12 章 23 節](#); 参照 [創世記 4 章 10 節](#))。この原則は、「ほとんどすべてのものは血によって清められ、血を流さなければ赦されない」([ヘブル 9 章 22 節](#))とある、モーセの律法の下で発展しました。生け贄の血が赦しを得るために必要であったのは、動物の血に不思議な力が宿っているからではなく、生け贄として流された動物の血が、私たちが赦され救われるためには、死(すなわち、失われた命を表す血)が必要であること、私たちに代わって、つまり身代わりの死が必要であること、誰かの血が私たちの罪を贖ってくれることが必要であることを、非常に強力かつ象徴的に示してくれるからなのです。

(7)やがてイサクは父アブラハムに言った、「父よ」。彼は答えた、「子よ、わたしはここにいます」。イサクは言った、「火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」。(8)アブラハムは言った、「子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであろう」。こうしてふたりは一緒に行った。(9)彼らが神の示された場所にきたとき、アブラハムはそこに祭壇を築き、たきぎを並べ、その子イサクを縛って祭壇のたきぎの上に載せた。(10)そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとした時、(11)主の使が天から彼を呼んで言った、「アブラハムよ、アブラハムよ」。彼は答えた、「はい、ここにおります」。(12)み使が言った、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子を

さえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」。(13)この時アブラハムが目をあげて見ると、うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた。(14)それでアブラハムはその所の名をアドナイ・エレと呼んだ。これにより、人々は今日もお「主の山に備えあり」と言う。(創世記 22 章 7-14 節)

創世記 22 章の上記の箇所は、モーセの律法が定めた動物のいけにえの儀式だけでなく、私たちの罪のために死んでくださったイエス・キリストの十字架上の身代わりのいけにえを、はっきりと、揺るぎなく予見しています。イエス・キリストこそ、「神がご自分のために備えてくださる」(8 節)「世の罪を取り除く神の小羊」([ヨハネ 1 章 29 節](#))なのです。

(18)あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、(19)きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。(第一ペテロ 1 章 18-19 節)

(6)わたしはまた、御座と四つの生き物との間、長老たちの間に、ほふられたとみえる小羊が立っているのを見た。それに七つの角と七つの目とがあった。これらの目は、全世界につかわされた、神の七つの霊である。(7)小羊は進み出て、御座にいますかたの右の手から、巻物を受けとった。(8)巻物を受けとった時、四つの生き物と二十四人の長老とは、おののおの、立琴と、香の満ちている金の鉢とを手を持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒の祈である。(9)彼らは新しい歌を歌って言った、「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、(10)わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう」。(11)さらに見ていると、御座と生き物と[二十四人の]長老たちとのまわりに、多くの御使たちの声が上がるのを聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍もあって、(12)大声で叫んでいた、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」。

(黙示録 5 章 6-12 節)

すべてのクリスチャンにとって、これが比喻であることを明確に理解することは非常

に重要です。イエス・キリストは文字どおりの「小羊」ではありませんし、私たちが救われるための「血」も、文字どおりの血ではありません。旧約聖書の初めから、血は命を表し、その血の喪失は死を表していたように、私たちの愛する主イエスが、十字架上で私たちのために犠牲となった場合、聖句の言う「血」とは、イエスが私たちに代わって命を捧げられたこと、つまり、イエスが十字架上で暗闇の中で霊的な死を遂げ、それによって私たちの罪をすべて「洗い流された」ことを指しています(すぐ後の II.5 節参照)。この比喻を用いることによって新約聖書は、十字架上のキリストの**真の犠牲**と、来るべき真の有効な犠牲を予表する律法の**象徴的な犠牲**とを密接に結びつけているのです。

しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、主は彼を悩まされた。彼が自分を、**とがの供え物**となすとき、その子孫を見ることができ、その命をながくすることができる。かつ主の(すなわち、「みこころ」)み旨が彼の手によって栄える。(イザヤ 53 章 10 節)(10)

聖書の中で「キリストの血」ほど、ひどく誤解されている比喻はほとんどありません。しばしば誤った教義(「全質変化説」が最も有名ですが、それだけが唯一のものではありません)という形で、非常に深刻な結果を招いています。「キリストの血」は聖書では常に象徴であり、決して文字どおりの血を指すもの**ではありません**。「神の小羊」([ヨハネ 1 章 29 節](#); [第一ペテロ 1 章 19 節](#); [黙示録 5 章 6 節](#), [13 章 8 節](#))の象徴と同様に、文字通りに受け取ることはできませんし、そうすべきではありません。これは私たちの主が、ゴルゴダで私たちのためにしてくださったことを軽視しているのではありません。むしろ、私たちを死と地獄から取り戻すために、主がなさったことを正しく理解することは、まずこの比喻の本当の意味を理解することによってのみ、得られるのです。「キリストの血」とは、イエスの十字架上の救いの御業を、象徴的に要約した言葉であり、私たちに代わって犠牲となったイエスの死は、モーセの律法、そして幕屋とその調度品、それに付随する動物のいけにえにおいて、最も明確に予表されています。旧約聖書の信者が「しみも傷もない」動物を捧げたように、それは完全なキリストの姿であり、これらの動物が流した血は、ご自分の命を捧げられたキリストの尊い犠牲を表しています。動物はキリストを象徴しています(そのためキリストは「神の小羊」と呼ばれるのです)。動物の血は、キリストが私たちのためにご自分の命を捧げられたこと、キリストの霊的な死を表しています(そのため、この死は「キリストの血」と呼ばれています。流された血は命が失われたことを象徴しているからです。)ヨハネはその福音書の中で、イエスが十字架上で血を流して死んだの**ではないこと**を、非常に意図的に記しています。イエスは犠牲が終わると、自らの意志で霊を「吐き出された」だけではありません。(出血による死亡ではないことを明らかにするために:[マタイ 27 章 50 節](#); [マルコ 15 章 36 節](#); [ルカ 23 章 46 節](#); [ヨハネ 19 章 30 節](#))ヨハネは、肉体の死後もイエスの血は体内にとどまって

いたことをはっきりと証言しています([ヨハネ 19 章 33-35 節](#); [第一ヨハネ 5 章 6-8 節](#)参照)。ですから、私たちが救われるのは、イエスの文字どおりの血によるのではなく、私たちの罪のために身代わりに裁かれ、その刑罰を受けたイエスの真の苦しみによるのだということ、つまり、私たちのすべての罪のために断罪され、罰せられたイエスの霊的な死によるのだということを理解することが、クリスチャンにとって非常に重要なのです。それこそが「キリストの血の意味するところ」であり、血は生命の喪失や死を表します。「キリストの血」をこのような事実に基づく聖書的な言葉で理解することで、私たちはイエスが私たちのためにしてくださったことへの感謝の気持ちを深めることができ、それを損なうことはありません。

(1)イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジアおよびビテニヤに離散し寄留している人たち、(2)すなわち、イエス・キリストに従い、かつ、**その血のそそぎを受けるために**、父なる神の予知されたところによって選ばれ、御霊のきよめにあずかっている人たちへ。恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。(第一ペテロ 1 章 1-2 節)

振りかけられた血の象徴は、旧約聖書のいけにえからでもあり、具体的には、神がご自身と来たるべき御子のいけにえについて教えるために、イスラエルの民の間で制定された儀式から取られています。モーセは「契約の書」(出エジプト記 20-23 章に要約されているモーセの律法)を読み終えると、「酬恩祭」のいけにえを捧げさせ、その血をすべて集めさせました。そして、モーセはこの血をすべての民に振りかけて、「見よ、契約の血である」と言いました。この血は、(旧約聖書のすべてのいけにえに見られるように)激しい死を表します。そして「契約の血」という言葉は、誰かの死によって、イスラエルの民が神と特別な契約を結んだことを意味しています。この事実は、モーセが動物のいけにえの血を、すべての民に文字通り振りかけたときに、目に見える形で劇的に描かれたのです。これは私たちにとっては少々ショッキングなことに思えるかもしれませんが、そうなるように意図されていたのです。キリストが十字架上で払われた犠牲は、私たちが想像できる以上の大きなものでした。私たちは彼を助けるために何もしていません。私たちは、いわば神の血を「振りかけられた」だけなのです。私たちはキリストを信じ、私たちに代わって成就されたキリストの御業を受け入れるとき、キリストの犠牲の死の恩恵を受けます。しかし、私たちの罪が「洗い流された」この犠牲は、(私たちの主は決してなさらなかった)「出血死」よりも、はるかに大きな意味を持つことを理解するのは極めて重要です。それは、私たちの罪すべてに対して裁きを受け、その代価と罰を支払うことを意味します。それが「キリストの血」の意味するところであり、私たちに代わってキリストが霊的な死を遂げることで、私たちは火の池が結末となる怒りと裁きから解放されるのです。それが私たちが聖餐式の杯を飲むとき、血や本物の血を表す

ものを飲んでいない理由です。むしろ、私達は信仰によって、私達のためのキリストの救いの業に与ることを示しているのです：

これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。(マタイ 26 章 28 節)

5. キリストの霊的な死：

また愛のうちを歩きなさい。キリストもあなたがたを愛して下さって、わたしたちのために、ご自身を、神へのかんばしいかおりのささげ物、また、いけにえとしてささげられたのである。(エペソ 5 章 2 節)

神への「かんばしい[いけにえの]かおり」という言葉は、御父がイエスのいけにえを喜ばれたこと、つまり、私たちが救われるためには、まず私たちの罪の代価をすべて支払うという神の義の要求を満たすために、それが効果的であり、あるいは「有効であった」ことを明らかに示しています。しかし、たとえここで主の死について使われている「いけにえとささげ物」と「かおり」という言葉が、律法の動物のいけにえの象徴を思い起こさせているとしても、実際には(主の体はレビ人のいけにえのように「喜ばせるかおり」を生み出すように焼かれなかったので)主の肉体的な死や、(救いは主が霊を捧げる前に成し遂げられたので、また、彼は血を流して死ななかったので、明らかに)文字通りの血として理解されるように意図されたものでなく、代わりに同じく象徴的に理解されることを意図しているのであれば(これは明らかにそうです)、問題は、「では、これらの言葉は正確に何を表しているのか？」ということになります。この質問に対する答えは上で示唆したように、「キリストの血」は十字架を予表する旧約聖書のすべての象徴を要約した言葉であり、私たちの主が暗闇の中で十字架の上で私たちの罪を負い、罪のあがないとして支払われた刑罰、つまり主の霊的な死を意味します。しかし、「霊的な死」とはいったい何を**意味する**のでしょうか？ この質問に対して、L.S.チェーフアー博士は次のようにコメントしています：

霊的な死に関して、キリストがどこまでその領域に踏み込まれたのか、明確には示されていません。もちろん、キリストは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と言われました(マタイ 27 章 46 節)。神が沈黙しておられるところに、敬虔な心は立ち入ることをためらうべきです¹¹¹。

¹¹¹ 組織神学(ダラス、1948 年)第 8 巻、115 ページ。

一般論として、チェーファー博士の慎重な姿勢に同意し、私たちが救われた主イエスの罪のための死については、地上にいる私たちには知ることのできないことがたくさんあることを認めつつも、聖典はこのテーマについて、(遠回しにはあるものの)かなりの情報を提供していると言うこともできます。宇宙の歴史の中で、イエスの死以上に重要な出来事はなく、それによって私たちは単なる肉体的な死よりも悪い運命から救われるのですから、この問題をできる限り完全に調査しないのは、私たちにとって怠慢と言わざるを得ません。ですから、ここでは言うべき以上のことを言わずに、言えるだけのことを言うのが私たちの仕事です。

a. キリストは霊的に死なれた：これは繰り返し述べるに値する重要なポイントです(上記 I .5.1.2.1-3 節参照)。主の肉体的な死は、主がこの世の罪のために裁かれた後に、人間の霊を吐き出して命を捨てられた時に起こったのです([マタイ 27 章 50 節](#); [マルコ 15 章 36 節](#); [ルカ 23 章 46 節](#); [ヨハネ 19 章 30 節](#))。私たちがここで学んでいるのは、イエスが私たちの罪のために刑罰を支払われたこの暗闇の中での裁き、すなわち、私たちの罪が赦される結果をもたらした、キリストの血として知られるイエスの「霊的な死」です。

これは彼が**死にいたるまで**、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。(イザヤ 53 章 12 節後半)

おのれを低くして、[わたしたち全ての者のために]死に至るまで、しかも**十字架の死に至るまで従順**であられた。(ピリピ 2 章 8 節)

上記のような箇所では、「死」は肉体的な死ではなく、霊的な死を意味します。私たちのすべての罪に対する裁きを受ける主の霊的な死は、主が人間の霊を捨てて息を引き取られた時点では、もうすでに起こっていたのです。イエスが十字架の上から強調された言葉、テテレストアイ!、「完了した! <新改訳IV>」([ヨハネ 19 章 30 節](#);ギリシヤ語: τετέλεσται) という言葉は、迫力のある力強い勝利の宣言であり、イエスの血によって勝ち取られた救いが、すでに完成された事実を強調しています—物理的な出血死ではなく、私たちの罪の代価と罰を支払うことによる霊的な死のために命を注ぎ出されたということです。¹¹²

¹¹² 参照. [ヘブル 7 章 28 節](#), [10 章 14 節](#), [11 章 40 節](#) この動詞は、主の完成された御業についても用いられており、これらのテレオ teleo の形はしばしば「完全なものにする」と訳されています。

(28)それから(すなわち、世の罪のために受けられた肉体的な苦しみと霊的な死の後)、イエスは**すべてのことが完了したの**を知ると、聖書[の中の救いの預言]が成就するために、「わたしは渴く」と言われた。(29)酸いぶどう酒がいっぱい入った器がそこに置いてあったので、兵士たちは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソプの枝に付けて、イエスの口もとに差し出した。(30)イエスは酸いぶどう酒を受けると、「(救いが)**[今]完了した**」¹¹³と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。(ヨハネ 19 章 28-30 節)

霊的な死は人類にとって常に問題であり、肉体の死は霊的な死の結果であって、その逆ではないからです(すなわちアダムとエバは、「あなたは、きっと死ぬであろう」という罰の木の実を食べた後、死に向かいながらも何年も生きました。霊的な死は即座に訪れ、やがて肉体的な死が訪れ、イエス・キリストの神の恵みによる救いがなければ、最後には永遠の死が訪れるのです)。¹¹⁴ 私たちの代わりに霊的に死なれることによって、私たちの主は宇宙の歴史上最大の勝利を収め、私たちを悪魔から解放し、そうでなければ確実に待ち受けていたであろう断罪から救ってくださったのです。

(13)あなたがたは、先には罪の中にあり、かつ肉の割礼がないままで**[霊的には]**死んでいた者であるが、[父なる]神は、あなたがたをキリストと共に生かし、わたしたちのいっさいの罪をゆるして下さった。(14)神は、わたしたちを責めて[神との関係を]不利におとし入れる(わたしたちの罪深い性質や個人的な罪という)証書を、その規定もろともぬり消し、これを[障害物として]取り除いて、十字架につけてしまわれた。(15)そして、[神は十字架によって]もろもろの[悪霊の]支配と[彼らの権力の]権威との武装を解除し、キリストにあって凱旋し、彼らをその行列に加えて、さらしものとされたのである。(コロサイ 2 章 13-15 節)

b. キリストは私たちのために霊的に死なれた： 私たちが現在巻き込まれているこの目に見えない争いにおいて、悪魔とその手先に勝利した十字架の大勝利は、**私たちのために戦い、勝ち取られたものです。私たちが**、イエスが十字架上で私たちのためにしてくださったことの結果として、私たちに注がれる神の限りない恵みの受け手であり、受益者なのです。イエスは**私たちのために**霊的に死なれ、その死によって私たちは救

¹¹³ 前述の通り、この声明は、実際にはメシヤの詩篇第 22 篇の最後の節、第 31 節の「彼(神)が成し遂げたのだ！」という言葉を使い換えたものです。

¹¹⁴ 「聖書の基礎: 罪に関する聖書学」の第 3 部 B、1「死の三つの側面」参照。

われたのです。その死によって、神の聖性と私たちとの間の関係を邪魔するものとしての私たちの罪は、永遠に取り除かれたのです。

(6)**わたしたちがまだ弱かったころ**、キリストは、時いたって、**<わたしたち>不信心な者たちのために死んで下さった**のである。(7)正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。(8)しかし、まだ罪人であった時、**わたしたちのために**キリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。(ローマ 5 章 6-8 節)

(14)なぜなら、キリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである。わたしたちはこう考えている。**ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのである**。(15)そして、**彼がすべての人のために死んだ**のは、生きている者がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために、生きるためである。(第二コリント 5 章 14-15 節)

生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、**わたしのために**ご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである。(ガラテヤ 2 章 20 節)

このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをすべての不法(すなわち罪;第一ヨハネ 3 章 4 節参照)からあがない出して、良いわざに熱心な選びの民を、ご自身のものとして聖別するためにほかならない。(テトス 2 章 14 節)

c. 罪を償うためにキリストは霊的に死なれた:「罪の問題」を解決することによってキリストの霊的な死が私たちに恩恵をもたらします。これが直喩において私達の罪を覆う「キリストの血」の背後にある第一のイメージです。動物のいけにえでは、犠牲となった動物の死はその流れた血から明らかであり、供え物を捧げる者は、その血を振りかけることによって象徴的に清められます([ヘブル 9 章 13-21 節](#), [11 章 28 節](#), [12 章 24 節](#); [出エジプト 24 章 6-8 節](#), [29 章 16-21 節](#); [レビ記 1 章 5-11 節](#), [3 章 2-13 節](#); レビ記と民数記の各節を参照)。

神は**わたしたちの罪のために**、[個人的な]罪を知らないかたを罪(すなわ

ち、罪の供え物)とされた。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。(第二コリント 5 章 21 節)

したがって、この喩えで言えば、実際の血はキリストの霊的な死を表しており、礼拝者(信仰の象徴:[第一ペテロ 1 章 2 節](#))に振りかけると、罪から清めることができます。キリストの霊的な死は、救いの障害となる罪を取り除くために必要でした。その結果、私たちに代わってキリストが霊的な死を遂げられた対象、つまり「標的」となったのは、過去、現在、未来に犯したすべての人間の罪です。キリストはあらゆる罪を償い、その罰を取り除くために、霊的に死にました。それは、他のどんな人間も償うことのできない、差し迫った不可能な負債のためでした。

なぜなら、キリストが死んだのは、ただ一度**罪に対して死んだ**のであり、キリストが生きるのは、神に生きるのだからである。(ローマ 6 章 10 節)

わたしが最も大事なこととしてあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであった。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、**わたしたちの罪のために死んだ**こと、(第一コリント 15 章 3 節)

キリストは、わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身を**わたしたちの罪のために**ささげられたのである。(ガラテヤ 1 章 4 節)

d. キリストは、その身に私たちの罪を負われた：人間は普遍的に二元論的であり、肉体と人間の霊の両方を備えています。¹¹⁵ 身体は、私たちが物質世界の影響を受ける場所であり、身体と精神が「心」、「精神」、「魂」(すなわち、身体と精神が接する内なる人間)の中で作用し合うことによってのみ、私たちは現在、痛みを感じることができるのです。永遠の世界では、復活を待つ天国(私たちは暫定的な肉体を持つ)でも、復活後の完全で永遠の肉体でも、信者にとって痛みや苦しみは完全に過去のものとなります([黙示録 7 章 14-17 節](#)参照)。私たちの罪を贖うために、つまり、私たちと聖なる神との間の問題や「障壁」を取り除くために([エペソ 2 章 14-18 節](#))、イエスはご自分のからだで罪を負わなければならませんでした。だからこそ、イエスの受肉、すなわち、(神性が損なわれることなく)真の人間としての肉体を得ることが、私たちが救われるために絶対不可欠だったのです。肉体がなければ、キリストは私たちの罪をその身に負い、その罪のために罰を受けることができませんでした。このように、主が人間の体を持た

¹¹⁵ 「聖書の基礎」第 3A 部、「人間学」第 II.3 章「人間の霊」を参照。

れたことは、主が私たちの代わりに霊的に死ぬことができるようになり、その結果、全人類に救いを与えられるようになるために、根本的に必要なステップだったのです。

(5)それだから、キリストがこの世にこられたとき、次のように言われた、**「あなた[父]は、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えて下さった。」**(6)あなたは燔祭や罪祭を好まなかった。(7)その時(すなわち、御降誕の時)、わたし(神なるイエス・キリスト)は言った、『神よ、わたしにつき、巻物の書物に書いてあるとおり、見よ、御旨を行うためにまいりました(すなわち、生まれました)』。(8)ここで、初めに、「あなたは、いけにえとささげ物と燔祭と罪祭と(すなわち、律法に従ってささげられるもの)を望まれず、好まれもしなかった」とあり、(9)次に、「見よ、わたしは御旨を行うためにまいりました」とある。すなわち、彼は、後のものを立てるために、初めのものを廃止されたのである。(10)この御旨に基きただ一度**イエス・キリストのからだ**がささげられたことによって、わたしたちはきよめられたのである。(ヘブル 10 章 5-10 節)

キリストが「私たちの罪を**その身に**負われた」ことを、聖書が強調しているのはこのためです。それはキリストが、すべての罪のために全罰を耐え忍んで霊的な死を受けられたのは、その本物の人間のからだにおいてだったからです：

(4)まことに**彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった**。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。(イザヤ 53 章 4 節)

(11)…**また彼らの不義**(文字どおりには罪)**を負う**。(12)それゆえ、わたしは彼に大いなる者[兄弟たち]と共に物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも**彼は多くの人の罪を負い、**とがある者のためにとりなしをした。(イザヤ 53 章 11 節後半-12 節)

(14)キリストはわたしたちの平和であって、二つ[ユダヤ人と異邦人]のものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、**ご自分の肉によって、**(15)数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、(16)十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、[神と人間との間の]敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。(エペソ

2 章 14-16 節)

(21)あなたがたも、かつては悪い行いをして神から離れ、心の中で神に敵対していた。(22)しかし今では、御子は**その肉のからだにより**、その死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである。(コロサイ 1 章 21-22 節)

(27)そして、一度だけ死ぬこと(すなわち、最初の「肉体的な」死)と、死んだ後さばきを受けること(すなわち、「第二の死」、[黙示録 2 章 11 節](#), [20 章 6 節](#), [20 章 14-15 節](#)参照)とが、人間に定まっているように、(28)キリストもまた、**多くの人の罪を負うために**、一度だけご自身をささげられた後、彼を待ち望んでいる人々に、罪を負うためではなしに二度目に現れて、救を与えられるのである。(ヘブル 9 章 27-28 節)

キリストも、あなたがたを神に近づけようとして、自らは義なるかたであるのに、不義なる人々のために、ひとたび**罪のゆえに死なれた**(すなわち主の死は罪による隔てを取り除くためでした)。ただし、肉においては殺されたが、霊においては生かされたのである。(第一ペテロ 3 章 18 節)

さらに、わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、**わたしたちの罪をご自分の身に負われた**。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである。(第一ペテロ 2 章 24 節)

この最後の箇所ではペテロが語っているように、私たちが罪に対して死んだのは、イエスが私たちの罪を負い、私たちにふさわしい刑罰を受けて、私たちのために霊的に死んでくださったからであり、私たちの傷がいやされたのは、私たちによって、また過去、現在、未来のすべての人類によって犯されたすべての罪のために、イエスが傷を負われたからなのです。

(14)このように、子たち(すなわち、神によってキリストに与えられた信者たち:13 節)は**血と肉とに共にあずかっている**ので、**イエスもまた同様に、それらをそなえておられる**。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、**ご自分の死によって滅ぼし**、(15)死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つためである。(ヘブル 2 章 14-15 節)

これは、私たちのためのイエス・キリストの霊的な死です。これが「キリストの血」なのです。私たちの親愛なる主イエスが、すべての人が救われるために、十字架上で**その身に**全人類の罪の罰、処罰、痛みを負われたのです。私たちが「いやされた」([第一ペテロ 2 章 24 節](#))のは、この主イエスの純粋な人間の体の「傷」によるのです：

(19)兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちは**イエスの血によって**、はばかることなく[天の]聖所にはいることができ、(20) [犠牲による]彼の(新しく殺された)肉体なる[隔ての天の]幕(参照、[ヘブル 10 章 10 節](#), [10 章 18 節](#))をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、はいつて行くことができるのであり、(21)さらに、神の家を治める大いなる祭司があるのだから、(22)心はすすがれて良心のとがめを去り[ぬぐい去られ]、からだは清い[御言葉の(参照、エペソ 5 章 26 節)]水で洗われ、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、[祈るために恵みの御座の]みまえ(参照、[ヘブル 4 章 16 節](#))に近づこうではないか。(ヘブル 10 章 19-22 節)

e. キリストは私たちのために死なれ、私たちのために見捨てられた：完全な聖性を持たれる神は、罪や罪深さとは直接的な接触を持つことはできません。つまり、それらに対して正しい裁きを下すことなしに、接触を持たれることはできません。このように、被造物の罪と罪深さは、サタンの反乱の後、御父が第三の天に自発的に遠のかれたこと(原初の楽園は地上にありました¹¹⁶)、また、アダムの血筋に生まれた人間として、すべての者が引き継いでいる霊的な死の結果として、誰もが生まれながらに置かれている神からの分離が理由です¹¹⁷。十字架以前の罪に対する罰が保留されたのは、私たちに代わってメシヤが犠牲となることが約束され、予期されていたからに他ならず([ローマ 3 章 25 節](#); [使徒行伝 14 章 16-17 節](#), [17 章 30 節](#)参照)、私たちがその恵み深い犠牲を信仰によって受け入れるとき、霊的な死から霊的な命に生まれ変わることができるのは、カルバリーにおけるイエスの歴史的な罪の贖いのおかげに他なりません([エペソ 2 章 1-9 節](#))。

もちろん、私たちの主イエスは罪なく生まれ、罪を犯したことはありません。ですから、十字架にかかるまで、御父の愛と交わりから引き離されることはありませんでした。キリストが暗闇の中で、私たちの罪を背負って苦しまれたことの非常に重要な側面の

¹¹⁶ 「サタンの反乱」シリーズの第 1 部 II.6「7 つのエデンの園」を参照してください。父なる神の到来と再臨は、罪と罪深さが宇宙から完全に除去された後、そして新エルサレムが新地球に降り立った後(ヨハネの黙示録 21-22 章)にのみ起こります。

¹¹⁷ これらの問題については、このシリーズの第 3 部 B「ハマルセオロジー：聖書における罪の研究」参照。

一つは、キリストが(人間性において)神から疎外された状態で、そうされたという事実です。「私たちの代わりに罪ありとされた」([第二コリント 5 章 21 節](#))のです。つまり、罪がないにもかかわらず、罪の罰を受けるべき者として扱われたのです。このような場合、少なくともイエスが、私たちの罪のすべての裁きを受けておられる間、御父との交わりを続けることは不可能でした。

わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのですか。(詩篇 22 篇 1 節)
(参照: [マタイ 27 章 46-47 節](#); [マルコ 15 章 34-35 節](#))

これらの言葉は、十字架上の暗闇の中で、イエスの体において世の罪が裁かれた後に語られたものです。さらに先に述べたように、この言葉は私たちのために語られたのです。イエスは、御父がなぜイエスとの交わりを断ち切られたのか、十字架にかかる前からよく知っておられたからです。イエスは私たちの代わりに裁かれ、その裁きを受けるために、私たちのために見捨てられなければならなかったのです。

この見捨てられた叫び[すなわち、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」:[マタイ 27 章 46 節](#); [マルコ 15 章 34 節](#)]は、イエスの初降臨と死における目的の核心;すなわち、人類の罪を身に負われたこと([ヘブル 9 章 28 節](#))を反映しています。罪は聖なる神から引き離すものですから、イエスは死の瞬間にその引き離されることに耐えなければならなかったのです。そうでなければ、支払うことはできなかったのです¹¹⁸。

地獄の本質は、神のいない状態です。現世におけるどうしようのない苦しみの全ては、神から遠ざかっていることの一部であり、私たちの真の喜びはすべて、神との親密さと切り離せないものなのです。地上では、イエスの犠牲のこの特別な部分の大きさ、つまりこの分離がイエスに何を課したか、あるいは御父に課したものは、誰も理解できるようになるとは思えません。この点に関して私たちが言えることは、第一に、私たちの罪の裁きは闇が晴れた後に終わったということです。[詩篇 22 篇 1 節](#)では、私たちの主は、見捨てられたことはもはや過去のことであるとしています(すなわち、「なぜ私をお見捨てになったのですか<新改訳IV>」)。第二に、主が見捨てられたことは無駄であったどころか、主が遣わされた使命、すなわち、救いの障害となる世の罪を取り除くことを、成し遂げられるものだったのです:「[ヨハネ 19 章 30 節](#), [19 章 28 節](#); [詩篇 22 章 31 節](#)と比較)。第三に、私たちを罪から解放する死は、イエスの肉体的な死(この時

¹¹⁸ トマスとガンドリ著『A Harmony of the Gospel (福音書の調和)』(シカゴ、1978 年)p. 245 注釈 q.

点ではまだ将来のこと)ではなく、暗闇の中で罪のために死なれた死、すなわち、イエスの霊的な死、キリストの血、すなわち、私たちの愛する主イエスが、すべての人間の罪の刑罰を支払うために受けた苦しみでした。なぜなら、十字架上の暗闇の中で、イエスは「のろわれ」、罪とされ、私たちのためにのろわれ、私たちのために見捨てられ、父の愛から引き離され、私たちの代わりに父の怒りを受けさせられたのです。それによって、私たちが主に対する信仰によって、その怒りから救われるためです(参照:ホレブ山の「見捨てられて」打たれた岩:[出エジプト 17 章 5-7 節](#))。

キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった。聖書に、「木にかけられる者は、すべてのろわれる」([申命記 21 章 23 節](#))と書いてある。(ガラテヤ 3 章 13 節)

このように、イエスが十字架にかけられたこと、私たちのために呪われたこと([ローマ 9 章 3 節](#); [ヘブル 6 章 8 節](#)参照)、暗闇の中に追放されたこと([マタイ 8 章 12 節](#), [22 章 13 節](#), [25 章 30 節](#), [25 章 41 節](#))はすべて、イエスが私たちのために罪とされ、私たちの罪を負い、私たちの罪のために私たちの代わりに裁かれ、罰せられるために耐えなければならなかった、退けられることや見捨てられることを語っています。これらのことはすべて、イエスの霊的な死が必然的に伴う御父からの疎外を語っており、その恐ろしい犠牲の真の代償は、私たちが想像することさえ難しいものです。

f. キリストは私たちの罪の罰を支払われた: 簡単に説明すると、主が人の罪を償うためには肉体において、そして実際に、苦しむ事が必要でした。それは十字架に釘付けにされるまでの苦しみではなく、霊を捨てられる前のカルバリの丘での三時間の暗闇の中で、私たちの罪のために体罰を受ける苦しみです。十字架に至るまでに経験された苦難は、それ自体、私たちが真に理解する能力を超えた苦難と忍耐の物語ですが、この点での主な役割は、その直後の暗闇の中で行われる罪に対する真の裁きがどのようなものであったかを、私たちにほんの少し垣間見させてくれるものです: 十字架に至る苦難が想像を超えるものであったなら、世の罪のために耐え、苦しむという苦難はどれほどでしょうか?

この問題を扱っている最も広範で明確な箇所は、イザヤ書 53 章です。ですから、私たちの救いが、私たちの主イエスと天の父に何を課したかを考えるための出発点として、その該当箇所を全文引用することは適切であると思われます。イザヤ書の預言は、主の受難の多くの側面を説明する一方で、私たちの罪を負われたメシヤの苦しみを、生き生きと描写しているからです。主は「私たちの病を負い、私たちの弱さを担われ」(4 節)、私たちが「神に罰せられ、打たれ、苦しめられた」(4 節)と思ったお方であり、

彼は「私たちの背きのゆえに苦しみを受けた」(5 節)のです。彼は「私たち全体の罪悪感(原文では「罪責感」)のために砕かれ」(5 節)ました。「私たちに代わって(神と)和解するために(必要な)罰が、彼の上に下った」(5 節)、私たちは「彼の傷のゆえに」癒された(5 節)、父は「私たちすべての罪を彼に負わせ」(6 節)、「圧迫され、苦しめられ」(7 節)、「生ける者の地から断たれ」(8 節)、「わたしの民の罪過のために罰せられ」、わたしたちのために「その死(複数形)」を受け(9 節)、「彼を打ち砕き」(10 節)、「彼を苦しみに服させる」(10 節)ことが御父の御心であったからであり、「苦悩の生涯であり」(11 節)、「わたしたちの罪を負わされ」(11 節)、「死に至るまでその命をさらし」(12 節)、「背信者と同じように扱われ」(12 節)、「多くの人の罪を負い」(12 節)、「背信者の身代わり」(12 節)となりました：

(4) まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。(5)しかし[実際には]彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義(文字通りには「罪責」)のために砕かれたのだ。彼はみずから懲しめをうけて、われわれに[神との]平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。(6)われわれはみな羊のように迷って、おのこの自分の道に向かって行った。主はわれわれすべての者の不義を、彼の上におかれた。(7)彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかった。(8)彼は暴虐なさばきによって取り去られた。その代りの人のうち、だれが思ったであろうか、彼はわが民のとがのために打たれて、生けるものの地から断たれたのだと。(9)彼は暴虐を行わず、その口には偽りがなかったけれども、その墓は悪しき者と共に設けられ、その塚は悪をなす者と共にあった。(10)しかも彼を砕くことは主のみ旨であり、主は彼を悩まされた。彼が自分を、とがの供え物となすとき、その子孫を見ることができ、その命をながくすることができる。かつ主のみ旨が彼の手によって栄える。(11)彼は自分の魂の苦しみにより[命の]光を[再び]見て満足する。義なるわがしもべはその知識によって、多くの人を義とし、また彼らの不義を負う。(12)それゆえ、わたしは彼に大いなる者[多くの兄弟たち]と共に物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。(イザヤ 53 章 4-12 節)

私たちの罪の罰を受けるために、主が受けられた苦痛と苦悩の肉体的犠牲につい

て、聖句がこれほど明確であることは想像に難くないでしょう。その刑罰は、主の死を必要としました([ローマ 6 章 23 節](#); [創世記 2 章 16-17 節](#); [ローマ 5 章 12 節](#)参照)。主の肉体的な生涯の終わり(贖いが達成された後に主が自発的に放棄されました)ではなく、それまで続いていた御父との完全な交わりから引き離されるという「死」です。([ガラテヤ 3 章 13 節](#))、すなわち、主の霊的な死は、私たちの負債として課された罰を支払う闇の中での死であり、神から疎外された苦悩の死であり、その苦悩はあまりにも激しいため、聖霊の導きを受けていたイザヤは、他に呼び名がなかったため、「死」ではなく「死(複数)」と呼んだほど、私たちが救われるために、メシヤがどのような苦しみを受けなければならないかを少しでも表現するために、神からの疎外における強烈な苦しみの死の体験を、複数形にしているのです。そして実際、罪の罰は死ですから、私たちの主イエスが受けた「死」は、事実上、これから生まれてくるすべての人間の死の総体でした。主は私たちすべてのために死なれたのです。主は今まで犯された全ての罪のために死んでくださったのです。

(27)そして、一度だけ死ぬこと(すなわち、最初の、「肉体的な」死)と、死んだ後さばきを受けること(すなわち、「第二の死」、[黙示録 2 章 11 節](#), [20 章 6 節](#), [20 章 14-15 節](#)参照)とが、人間に定まっているように、(28)キリストもまた、**多くの人の罪を負うために**、一度だけご自身をささげられた後、彼を待ち望んでいる人々に、罪を負うためではなしに二度目に現れて、救を与えられるのである。(ヘブル 9 章 27-28 節)

上記の箇所では、キリストが十字架上で罪を負われた霊的な死と、キリストの罪のための犠牲を受け入れようとしない不信仰者の第二の死とが、並行していることがはっきりとわかります。キリストが彼らの身代わりとなり、私たちの身代わりとなって裁かれたのは、私たちや彼らが、火の池を終点とする最後の審判に臨まなくて済むようにするためです。私たちは、イエス・キリストを信じる信仰によって([ヨハネ 5 章 24 節](#); [コロサイ 1 章 13 節](#); [第一ヨハネ 3 章 14 節](#))贖われ、裁きからいのちへと移されます。しかし、火の池は、イエスが自分たちのためにしてくださったことに対して、ほんのわずかでも感謝してうなづくことさえできなかったすべての不信仰者のために用意されているのです([ヨハネ 3 章 36 節](#))。このような現実を目の当たりにすると気が重くなりますが、私たちが火の池、第二の死、暗闇、火から免れることができるのは、主が私たちの罪の罰を、代わりに受けてくださったからです。そしてキリストの血による恵みに与るのを故意に拒む人の最終的な結末は、私達の場合において何が身代わりとされたかを指し示しています：私達は永遠の火の池を免れるのは、ゴルゴタの十字架にかけられた私たちのために、主が暗闇の中で耐え忍ばれたことは、解放を拒む者にとっても、特にイエスと永遠の命を代わりに選んだ私たちにとっても、全人類の永遠の苦しみと同等のものとし

て受け入れられると、御父が見なされたからです。

主が私たちの罪を負われたことそのものを考える前に、キリストが私たちに代わって霊的な死を遂げられたことを説明するのに役立つ、三つの重要な類例を聖句から調べることは有益でしょう。もちろん、この三つの例えはすべてメシヤご自身の苦しみに関わるものですが、三位一体の各位格の役割を理解するのに役立ちます。

1) アブラハムのイサクの犠牲: 父の役割: すべての旧約聖書の犠牲は十字架を指し示しており、生贄はイエス・キリストを表し、流された血は私たちに代わって受けてくださった、イエス・キリストの霊的な死を表し、イエス・キリストが十字架上で罪の代価を払うために耐え忍ぶ苦しみによって、私たちの罪を「覆う」ことを表していました。創世記 22 章で、アブラハムは生涯待ち望んでいた約束の子を、生贄に捧げるように言われました。アブラハムはほとんど他の誰もができないような忠実さを神に示し、この不可能と思われた状況を回復する、神の忠実さと能力を完全に確信し([ヘブル 11 章 17-19 節](#))、ためらうことなくイサクをモリヤ山(後にイエスが私たちの罪のために、ご自身を犠牲にされる実際の場所; 参照 [歴代誌下 3 章 1 節](#)と[創世記 22 章 2 節](#))に連れて行きました。そして、神が最後の瞬間に介入しなければ、アブラハムは、たった一人の愛する息子を犠牲にしていたことでしょう。この特別な試練から、私たちは信仰の父であるアブラハムの伝説的な信仰を見るだけでなく、私たちのために御子を死なせられた御父の計り知れないほど大きな犠牲を理解できるように、その例えとしての行為が示されたのです。時空を超えた出来事とはいえ、私たちは皆、イサクを犠牲にしようとするアブラハムの耐え難い心の痛みを感じることができるのです。御父が、御自分の唯一の愛する御子を「私たちのために罪」([第二コリント 5 章 21 節](#))とされたのです。そして御子御自身の肉において世の罪を裁かれました。アブラハムはその試練を最後まで受けずに済みましたし、いずれにせよ、イサクの死は霊的なものではなく肉体的なものであり、一瞬で終わったことでしょう(その直後に奇跡的な蘇生が起こるであろうと信じたことは、アブラハムが神から認められた希望でした:[ヘブル 11 章 19 節](#))。しかし、御父は喜んで、従順な御子にこの世のすべての罪の罰をお与えになりました。

律法が[罪深い人間の]肉により[依存していたために]無力になっている
ためになし得なかった事(すなわち、罪の問題を解決すること)を、神はなし
遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の形で罪のためにつかわし、肉
において罪を罰せられたのである。(ローマ 8 章 3 節)

2) キリストのバプテスマ: 聖霊の役割: 水のバプテスマは常に何かを象徴するものですが、聖書のバプテスマの中には「乾いた」、つまり文字通りの(御霊のバプテスマのよ

うに、私たちは御霊を与えられ、御霊によってキリストと結ばれる)バプテスマがあります。そのような「本当の」バプテスマの一つは、十字架のバプテスマ、より具体的には、私たちの主イエス・キリストが世の罪と同一視された(または浸された)バプテスマです。

(49)わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。火がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか。(50)しかし、**わたしには受けねばならないバプテスマがある**。そして、それを受けてしまうまでは、わたしはどんなにか苦しい思いをすることであろう。(ルカ 12 章 49-50 節) ([マルコ 10 章 38 節](#)参照)

キリストが私たちの罪と同一視され、私たちの罪のために罰せられたこの文字通りの「バプテスマ」は、キリストの三年半の宣教の初めに行われた水のバプテスマによって予表され、説明されています。このバプテスマは象徴的なバプテスマであり、その意味はキリスト独自のものでした。ヨハネの水のバプテスマは、他の全ての者にとっては「罪の赦しのための悔い改めのバプテスマ」([マルコ 1 章 4 節](#); [ルカ 3 章 3 節](#))であり、罪のないメシヤが水のバプテスマを受けることにヨハネがそれほどまでに反対したのは、まさにこのためなのです。しかしイエスは、「すべての正しいことを成就するため」([マタイ 3 章 15 節](#))必要なことだとヨハネに答えました。実際、イエスの水のバプテスマは、イエスの十字架上の死、文字通りのバプテスマを非常に鮮明に描写しています。イエスが浸った水は、悔い改めたすべての人の罪を「洗い流す」ためのものでした。この罪にまみれた象徴的な水にメシヤが浸されたのは、メシヤ自身が清められる必要があったからではなく(メシヤには罪がないからです)、その水が象徴的に意味するすべての罪を、ご自身の完全な体によって、そしてご自身の死によって償うことを意味するためでした。さらに、霊的な死から成功裏に脱した姿として、水から上がったとき、霊的な死から成功裏に脱した姿として、御霊が目に見える形でイエスに下りました。イエスの人間性が世の罪のために苦しまれたとき、この点における御霊の役割と三位一体の関係について、私たちはここに何らかの示唆を与えられています。聖霊は「限りなく」、「生まれたときから」([イザヤ 11 章 2 節](#); [ヨハネ 3 章 34 節](#); 参照 [ルカ 1 章 14 節](#)) 与えられていましたが、私たちはこの象徴の中に、聖霊が「御霊の苦しみの後に」([イザヤ 53 章 11 節](#)) 戻ってこられたのを見るのです。このようにキリストの人間性は、ある意味で三位一体から隔離されていました。聖なる神は罪と直接接触することができないので、これは必然的なことであつたと思われます。問題は、どのようにしてこのようなことが可能だったのか、ということです。次の節にそのヒントがあります:

もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、**永遠の聖霊によって**、ご自身(すなわ

ち、御自分の体;参照.[第一ペテロ 3 章 18 節](#))を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないうであらうか。(ヘブル 9 章 14 節)

御霊は、十字架の前にキリストと共におられ、罪のためのキリストの霊的な死の後に戻ってこられたので、犠牲を可能にするための存在であったと思われます。つまり、イエスは「永遠の御霊によって」その人間の体を捧げられたのです。御父はご自身の愛する御子(アブラハムとイサクに象徴される)に、死の宣告を下す裁判官として行動されましたが、その裁きが行われるためには御霊の仲介が必要でした。御父が私たちの主の父であるように、イエスの受胎における御霊の役割は重要です([マタイ 1 章 18 節](#), [1 章 20 節](#); [ルカ 1 章 35 節](#); [ヨハネ 1 章 14 節](#)参照)。そして、私たちの主イエスが御霊によってのみ、神であると同時に人間となることができ、御父の人間としての子とされたように、十字架においても、御霊によってのみ、イエスの神性にもかかわらず、キリストの人間としての肉体が、御父によって裁かれることが可能となったのです(二つの性質<神性と人性>は御霊によって位格結合しています。) このように、御霊とキリストの人間の体との極めて重要な関係は、その受胎、犠牲、そして復活([ローマ 1 章 4 節](#); [第一ペテロ 3 章 18 節](#))において明らかです。聖書は多くの点で、私たちの理解を超えているこの過程のメカニズムを、これ以上ないほどに説明しています。私たちが言えることは、御霊が、父なる神がイエスの肉体における罪を裁くことを可能にし、キリストの神性にも影響されず、キリストの人間の肉体が裁かれたということです([ヘブル 9 章 14 節](#))。これには、促進と抑制(どちらも聖霊の他の知られた働きにおける重要な特徴)が必要でした。犠牲と裁きを可能にするための促進と、キリストの神性、完全な人間性、そしてその二つの間の複雑な結合が、犠牲と裁きを不可能にするのを防ぐための抑制です¹¹⁹。かなり乱暴な例えですが、鋼鉄を鍛造するにはそれを支える金床(かなとこ)が必要なように、聖霊は、私たちの主である人間の体が、この世の罪を浄化するために打ち鍛えられる「金床」であったのです。イエスが人間の犯したすべての罪の罰を受けるために、肉体的に十分長く生きているためには、超自然的な介入が必要でした。

…キリストは、ご自身を捧げられた 永遠の御霊を通して
(ヘブル 9 章 14 節後半)

¹¹⁹ 間もなく公開予定のパート5「聖書の基礎:聖霊論」に加えて、「来たる艱難期」の第2部B、III「聖霊の抑制の務め」も参照。

3) 聖餐式の意味:御子の役割: 聖餐式は教会にとって唯一聖書的に承認された儀式であり、その本質的な目的は非常に明確です。パンはイエスのからだを、ぶどう酒はイエスの血を表しています。私たちはすでに、キリストの血が肉体的な出血ではなく、キリストの霊的な死を表す象徴であることを見てきました。私たちが聖餐の杯を飲む時、私たちの罪のために死なれたキリストの犠牲を認め、私たちの代わりとなったキリストの死を信じ、受け入れることを行動によって表明するのです。一方パンは、彼が実際に誰であるかを、私たちの罪を肉体的に負い、私たちを永遠の責め苦から救うために、神が人となられた事を象徴しています。そして、パンによって表されるこの人間の体において、主は世の罪を負われたのです。聖体拝領のパンを食べるとき、私たちは、主が誰であり、私たちのために何をしてくださったかという奇跡と、主が受肉され、私たちを罪から救うために、霊的な死に至るまで命を捧げられ、私たちの罰をご自身の人間の肉において受けてくださったという現実を認めるのです。このように、血潮を表すぶどう酒は贖罪の業に焦点を当て、パンは贖罪を勝ち取るために多くの犠牲を払ったお方に焦点を当てます。この点で、主はご自分の体が「渡された」(「砕かれた」は[第一コリント 11 章 24 節](#)の誤訳、参照:[ルカ 22 章 19 節](#))、つまり、「私たちに代わって」死の刑罰を満たすために裁きに渡された([第一コリント 11 章 24 節](#))と述べていることに注目することは重要です。

わたしたちが祝福する祝福の杯、それは**キリストの血にあずかること**ではないか。わたしたちがさくパン、それは**キリストのからだにあずかること**ではないか。パンが一つであるから、わたしたちは多くいても、一つのからだなのである。みんなの者が一つのパンを共にいただくからである。(第一コリント 10 章 16-17 節)

キリストが神性において、最初の降臨のすべての出来事において、人間としての特質を制限を超えて補完することはなかったのと同様に(すなわち、ケノーシスの教理; 前述の I.5.e 参照)、私たちは、主が木の上で私たちの罪を人間の体で負われたときにも、同じ原則が適用されたと確信することができます。しかし、上記の聖句は、教会が思い、覚えておく最も重要なこととして、主が霊的な死に至るまでご自分の人間性を捨て、ご自分のからだですべての罪を負われ、私たちが主と一つのからだになるようにされたことを示しています。私たちのために捧げられた犠牲があまりにも偉大であったからこそ、私たちが食べるようにと御自分の体を捧げ、私たちが飲むようにと御自分の血を注がれたのです。主は私たちを贖うための代価として、ご自分の人間性を使い果たされたのです。

…「この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる[批准さ

れた]新しい契約である。(ルカ 22 章 20 節後半)

わたしは、主から受けたことを、また、あなたがたに伝えたのである。すなわち、主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、そして言われた、「これはあなたがたのための、[ささげられる]わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい」。食事ののち、杯をも同じようにして言われた、「この杯は、わたしの血による新しい契約である。飲むたびに、わたしの記念として、このように行いなさい」。(第一コリント 11 章 23-25 節)

またパンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「これは、あなたがたのために与える**わたしのからだ**である。わたしを記念するため、このように行いなさい」。(ルカ 22 章 19 節)(参照：[マタイ 26 章 26 節](#)；[マルコ 14 章 22 節](#)；[ヨハネ 6 章 51-59 節](#)；[第一コリント 11 章 23-25 節](#))

g. キリストが私たちの罪のために支払われた刑罰の性質：

最終的な神の裁きは、三つの本質的な要素によって特徴付けられます： 1) 神からの疎外と**分離**(霊的な死の定義そのもの：例：[創世記 2 章 17 節](#)；[イザヤ 59 章 2 節](#)；参照：[創世記 3 章 24 節](#)；[列王記下 17 章 18 節](#))；2) 手で触れるほどの完全な**暗闇**(例：[ヨエル 2 章 30-32 節](#)；参照：[創世記 1 章 2 節](#))、3) **火**(例：[イザヤ 66 章 15-16 節](#)；[黙示録 20 章 9-10 節](#))。例えば、キリストの罪のための犠牲を拒否し、代わりに自分の業に立脚することを選んだ人々の最終的な結末の場合、これら三つを受けることになります。究極の最終的な「地獄」は**火の池**ですが([イザヤ 66 章 15-24 節](#)；[ダニエル 7 章 9-11 節](#)；[マタイ 3 章 11-12 節](#)、[5 章 22 節](#)、[18 章 8-9 節](#)、[25 章 41 節](#)；[マルコ 9 章 43 節](#)、[9 章 48 節](#)；[ヤコブ 3 章 6 節](#)；[黙示録 19 章 20 節](#)、[20 章 10-15 節](#)、[21 章 8 節](#))、神から**離れた場所**である「外の暗闇」([マタイ 8 章 12 節](#)、[22 章 13 節](#)、[25 章 30 節](#))とも表現されています([第二テサロニケ 1 章 9 節](#)；[黙示録 21 章 8 節](#)、[22 章 15 節](#)参照)。

(5) その時わたしは言った、「わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」。(6) この時セラピムのひとりが火ばしをもって、祭壇の上から取った**燃えている炭**を手に携え、わたしのところに飛んできて、(7) わたしの口に触れて言った、「見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪

はゆるされた」。(イザヤ書 6 章 5-7 節)

裁きの火の祭壇で神の裁きの生きた炭火が、どうして人の唇を焼かないのでしょうか。他の誰かが、当然その人のものである火刑に耐えたときだけです。誰かが彼のために罪とされたときだけです。自分の代わりに呪いとなることで、その受くべき呪いのために誰かが罰を受けたときだけです([ガラテヤ 3 章 13 節](#))。そして、免れた者の場合のその「呪い」とは、火の池であり、暗闇での疎外であり、永遠に焼かれることだったので([ヘブル 6 章 8 節](#)参照)：

それから、左にいる人々にも言うであろう、『**のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいつてしまえ。**』(マタイ 25 章 41 節)

ヨハネのバプテスマとは対照的に、主は「御霊と火による」バプテスマをお授けになります([マタイ 3 章 11 節](#); [ルカ 3 章 16 節](#))。そして、その権利、すなわち、あらゆる名にまさる名の権威を勝ち得た勝利は、十字架上でのご自身のバプテスマ、すなわち、世の罪に「浸(つ)かること」でした([ルカ 12 章 49-50 節](#); 参照:[マルコ 10 章 38 節](#))。このように、主が世に下す火の裁きのバプテスマは、その最後の火のような終わり([第二ペテロ 3 章 7-13 節](#); [イザヤ 34 章 4 節](#); [黙示録 21 章 1 節](#)参照)において頂点に達するのですが、それは、主がその世の罪のために死に迫いやられた火のような裁きを、御自身が耐え忍ばれたことに基づいています(燃え尽きることなく燃え続ける藪の中のモーセへのキリスト顕現¹²⁰に象徴されるように、十字架上の裁きの火は三時間燃え続けました。：[出エジプト 3 章 2-3 節](#))：

また愛のうちに歩きなさい。キリストもあなたがたを愛して下さって、わたしたちのために、**ご自身を、神へのかんばしいかおりのささげ物、また、いけにえとしてささげられたのである。**(エペソ 5 章 2 節)

「かんばしい香り」は、祭壇の**火の中に**いけにえを捧げることによって生じます。私たちが救われるのは、キリストの霊的な死、キリストの血、私たちに代わって罪の罰を受けるイエスの苦しみによるのです。

あなたは(1-2 節参照)、わたしを死のちりの中で燃え立たされたからです。(英文訳:詩篇 22 篇 15 節)

¹²⁰ 「聖書の基礎」第一部の「神学: 第 II 部 c.3 項「旧約聖書におけるキリストの出現」を参照。

(11)彼は[与えられた]自分の魂の苦しみ[の解放]により[再びいのち]光を見て満足する。義なるわがしもべはその知識によって、多くの人(すなわち、信者たち)を義とし、また彼らの不義を負う。(12)それゆえ、わたしは彼に大いなる者と共に物を分かち取らせる。彼は強い者と共に獲物を分かち取る。これは**彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に**数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをした。(イザヤ 53 章 11-12 節)

(12) だから、イエスもまた、ご自分の血(すなわち、十字架上の死)で民をきよめるために、門の外で(すなわち、交わりから離れて) **苦難を受けられた**のである。(ヘブル 13 章 12 節)

(10)なぜなら、万物の帰すべきかた、万物を造られたかた[父なる神]が、多くの子らを栄光に導くのに、彼らの救の君[わたしたちの主イエス・キリスト]を、苦難をとおして全うされたのは、彼にふさわしいことであつたからである。(ヘブル 2 章 10 節)

上記の聖句では、キリストの霊的な死が、キリストの苦しみと直接的に同一視されています。そして、その苦しみは明らかに激しいものでした([ヘブル 2 章 10-18 節](#), [13 章 12-13 節](#))。罪の罰は死であり、火の池の第二の死なのです。¹²¹ 私たちが救われるために、キリストが人間の**すべての**罪のために死刑にされ、私たちの身代わりとなって罰を受け、苦しみを受けられたことは、神ご自身を観想するのと同じくらい、畏敬の念を抱かせる計り知れないことです。しかし、神がなさったこと、なしておられることから神がおられることを知るように、イエスが私たちのすべての罪の代価を、ご自身の血で支払われたことを私たちは知っています。なぜなら、私たちが救われたのは主のおかげであり、十字架上の暗闇の三時間に、主が私たちのためにしてくださったことのおかげだからです。

神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪(すなわち、罪の供え物)**とされた**。それは、わたしたちが、彼にあって神の義となるためなのである。(第二コリント 5 章 21 節)

¹²¹ 不義の死者が火の池で罪を「清算」することは決して**ない**という点に注目することが重要です。火の池は、キリストの贖罪を受け入れないことに対する罰そのものなのです。

このように、私たちの主の犠牲を、人間の手によって受けた罰という観点からだけ考えるのは間違っています。裏切られ、捨てられ、否定され、見捨てられ、逮捕され、濡れ衣を着せられ、断罪され、悪口を言われ、嘲笑され、唾を吐きかけられ、拷問され、最後の力を振り絞るまで殴られ、十字架に釘付けにされ、彼の所有物のすべての損失を見せつけられた**後**、主は私たちの罪のために死ぬために暗闇に入られたのです。裁きの時と場所に到達するためにイエスが経験された苦難は、私たちが救いを得るためにイエスが払われた代償について、ほんのわずかな見当をつける手掛かりを与えてくれるだけです。なぜなら、闇の中で耐え忍ばれた死の苦しみは、それらの前段階をはるかに上回るものだったからです。私たちの主にとって、この三時間の暗闇は一生以上続いたに違いありません。何しろ、主は一瞬にして宇宙を創造されたのですから。しかし、その三時間に、宇宙の真の歴史が書かれたのです。この三時間こそが、私たち、そして言葉では言い尽くせないイエス・キリストの賜物をありがたく受け入れ、喜んでいるすべての人々にとって、かつて、そしてこれから起こるであろうすべての善と祝福と栄光の基礎なのです。

私たちを死から救い出すために、私たち皆のために究極の刑罰を受けるという、私たちの主がなさった途方もない犠牲について、私たちが知ることはたくさんありますが、それが終わったとき、主が「テテレストアイ」、「それは今、完了した！」と宣言されたことは知っています。[\(ヨハネ 19 章 30 節\)](#); ギリシヤ語: **τετέλεσται**)。この言葉によって、神の計画はすべて完了したのです: 被造物の反逆に應えるために創造された人となられた方は守られ、(神を選ぶすべての人のために) 永遠に神と一つとなられ、悪者によってはるか昔に始まった宇宙の裂け目が、**キリストの血**という途方もない代価が払われて、原則的に完全かつ正当な状態に回復されたのです。イエスの死によって、私たちのために買い取られた恵みをありがたく受け入れた私たちは、万物がキリストの足下に置かれる神の良いタイミングを待つだけでよいのです。そして、神が「すべてにおいてすべて」となられるために、主が王国を父に渡されるとき、最終的な終わりが訪れるのです。[\(第一コリント 15 章 28 節\)](#)

キリストは、あなたと他のすべての人間のために、十字架上で死刑の罰を受けてくださいました。過去、現在、未来のすべての罪が十字架上で裁かれました。父なる神が宣告し、イエス・キリストがそれに従ったのです¹²²。

私たちの親愛なる主イエスの、私たちの罪のためになされた従順と死が、私たちすべてに救いの門を開いてくれたのです。さらに聖書は、キリストの血、すなわち私たち

¹²² R.B. Thieme Jr., A Matter of Life and Death (ヒューストン 1990) p. 7.

に代わってイエスが霊的に死なれたことの結果を、罪の問題を解決するその効力という観点から、四つの別々の方法で説明しています：すなわち、**償い**(罪に対する神の不興をキリストの血によって取り除くことによる救済の根本的条件の提供)；この基礎は罪深い人間にとって次の三つの即時的な結果をもたらします：**贖罪**(罪の支配からの人間の解放)と、**義認**(信じるすべての人に対する赦しの判決)と、**和解**(神と人との間の罪のための敵意が取り除かれ、祝福の関係が回復されること)です。

6. 償い：

父なる神は、すべての人間の罪のために死なれた御子の十字架上の御業に、完全に満足されています。その結果、神の正義に関して、罪はもはや救いの障害となる問題ではなくなりました。なぜなら、十字架にかけられる前は、神は完全な義において、罪深い人間を受け入れることなど決してできず、私たちの存在を許容することさえできなかったからです(この事実は、神が地上から第三の天へと一時的に自ら「亡命」されたことを説明しています)。十字架の後、神は、誰でもすべての人を、つまり神の御子の救いを信じるすべての人を、息子や娘として神の家族に温かく迎え入れてくださいます。つまり、神の御子の救いを信じるすべての人を、ということです。人類の墮落後、イエスが十字架にかけられる前の人間に対する神の恵みは、いわば「掛け売り」で与えられていました。それはイエスが私たちのために、カルバリ山でされるであろうことを期待してのものでした。[\(ローマ 3 章 26 節参照\)](#)。事実上、私たちが罪を犯していたために神が私たちを嫌い、私たちに距離を置かれていたのに対し、今ではキリストの十字架を通して、父なる神は私たちに微笑みかけておられます。なぜなら、イエスが私たちを救う上で問題となる罪を、永遠に取り除いてくれたからです。実際、これから見ていくとわかりますが、この聖書の教えを表現するギリシヤ語は、ほぼ正確にその内容を言い表しています。しかしこの教義は、ヘブル語やギリシヤ語以外の派生語で一般的に「なだめ/償い」、「償い」、「贖罪」などという言葉で呼ばれていますが、これらはそれぞれ、キリストが罪に対して成し遂げた業によって、神の正義の要求を満たすという概念の側面を、明らかにしているものです。

プロピティエーション(Propitiation 宥め/償い)とエクスピエーション(Expiation 償い)はラテン語で、アトーンメント(Atonement 贖罪)は英語です。プロピティエーション propitiation はプロ pro(「～の代わりに」)とペト peto(「求める」)から来ています。従って、プロピティエーションの語源は、キリストが私たちのために御父に赦しを求める(そして、そのような赦しは、キリストが私たちの罪のために死なれたことに基づいている)という考えを思い起こさせます。エクスピエーションの語源はエクス ex(「完全に」)と pio(「なだめるように正しいことをする」-英語の「ピオス pious」の語源である「ピウス pius-『信仰深い』の意」)です。このように、エクスピエーション(償い)という言葉の語源は、

キリストが受け入れ可能な行為や犠牲によって、御父の態度を効果的に変えるという考えを思い起こさせます(そして、その行為とは、私たちの罪を消し去ったキリストの死であると、私たちは理解しています)。最後に、アトーンメント atonement の語源は純粋に英語の構成語です:「アット・ワン・メント at one -ment」です。したがって、この語源は、私たちが神と「一つになる」という考えを表しています(そして私たちは、この和解のための手段が、私たちに代わって流されたキリストの血であると理解しています)。もちろん、最後の言葉、アトーンメントは特にそうですが、最初の二つの単語もある程度そうであるように、これらの単語の実際の用法は、一般的な英語でも、神学的な英語でも、しばしば解明よりも混乱を招くほど複雑になっています。というのも、ここで検討されている教え、すなわち、父なる神はキリストの業による義において満足しているという教えが表現されるには、元々語源的にはやや曖昧な言葉であるのに、頻繁に無理な解釈を施したり、時にはその本来の意味を、完全に無視した形で用いられているのが見られるからです:御子が罪のために死なれたこと、すなわちキリストの血は救いに関して、罪という障害に事実上終止符を打たれたのです。御父は、私たちのすべての罪は、キリストによって完全に償われたと考えておられるからです。

この概念(私たちの罪の代価の支払いとして、イエスの犠牲を喜んで受け入れる神の正義)を教えるために使われるギリシヤ語とヘブル語の語彙が、異なる方法でこの問題にアプローチしているのは事実です。この事実が、英語言語における用語の不一致を招いた理由かも知れません。ヘブル語では、「贖罪の日」である「ヨム・キプール」(כפר)に代表されるように、贖罪を表す動詞は「カプハル」(כפר)が主流です。この言葉の語源にある重要な考え方は、身代金です。従って、宥め、償い、贖罪とは、神の義の要求を満足させ、喜ばせ、なだめるのに十分な、受け入れ可能な身代金を支払うことであり、私たちの罪は支払う必要のある負債なのです。言い換えれば、文字どおりの動物の血が、儀式的な贖罪に必要な手段であるように、キリストの象徴的な血は、実際の贖罪に必要な手段なのです。前者<儀式における動物の犠牲>では、私たちの罪を償うための、私たちの命のための身代金の支払いは、(非常に生々しい方法で)単に表されるだけですが、後者<キリストの犠牲>においては、神の正義は私たちの死を、罪のため要求しますが、その罪は神の正義をなだめる適切な身代金、つまり私たちの代わりにキリストが死んでくださることと引き換えに、本当に取り除かれるのです。

(6)彼は[罪を犯した者は]その償いとして、あなたの値積りにしたが、雄羊の全きものを、群れの中から取り、これを祭司のもとに携えてきて、懲祭として主にささげなければならない。(7)こうして、祭司が主の前で彼のために**あがない**(כפרカプハル; 英語で「アトーンメント」;新共同訳は「代償のささげ物」)をするならば、彼はそのいずれを行ってとがを得てもゆるされ

るであろう」。(レビ記 6 章 6-7 節)

私たちの咎の行いが私たちを打ち負かしたとき、あなたは**そのあがない**
(כפרカプハル;英語で「アトーンメント」)をしてくださいました。(英文訳:詩篇
65 篇 3 節)

上記の箇所や贖罪の日の場合、英語の「アトーンメント atonement」という単語は、自分の責任に課された罪の罰を満たす、という意味を表しています。これらの場合にも、同様に「make propitiation for(〇〇をなだめるために)」、「make expiation for(〇〇を償うために)」、「pay ransom for(身代金を払う)」と訳すことができます。なぜなら、これらすべてのカプハル caphar の用法において、同じ中心的な考え方が存在するからです: 罪とその罰に対する満足のいく支払いは、赦しをもたらすということです。私たちの罪が贖われ、その罰から私たちを解放するために受け入れられる身代金の代価が支払われると、父なる神は、私たちの罪を理由に私たちに敵対心を持つことはもはやなく、私たちに対して慈悲深く接してくださるようになります。主は、愛する御子によって私たちの罪のために支払われた代価、すなわち私たちのための御子の死に、満足されているのですから。これを神学的に言えば、「償い」です。

(12)「あなたがイスラエルの子らの登録のためにその頭数を調べる時、各人はその登録にあたり、自分のたましいの**償い金**(ヘブル語では名詞の כפר)を主に納めなければならない。これは、彼らの登録にあたり、彼らにわざわいが起こらないようにするためである。(13)登録される者がそれぞれ納めるのは、これである。聖所のシェケルで半シェケル。一シェケルは二十ゲラで、半シェケルが主への奉納物である。(14)二十歳またそれ以上の者で、登録される者はみな、主にこの奉納物を納める。(15)あなたがたの**たましいのために宥めを行おう**(ヘブル語 כפר, 動詞)と、主に奉納物を納めるときには、富む人も半シェケルより多く払ってはならず、貧しい人もそれより少なく払ってはならない。(出エジプト 30 章 12-15 節)

ここでは、ヘブル語でさらに明確である事が伺えます。つまり、身代金の代価(copher、כפרの名詞形)を支払うことと、それが達成するアトーンメント／プロピティエーション／エキスピエーション(cipper、動詞 כפרのピエル形)との直接的な関係です。この最後の場合、すべての人に全く同じであると強調されている金銭の代価は、すべての罪の赦しという、神の完全な正義の要求を満たすのに十分な赦しの「＜代償＞硬貨」である、キリストの血を表しています。

償いの原則を教えるために用いられるギリシヤ語の語源は、罪を取り除くことよりも、むしろ、キリストの犠牲が父なる神の私たちに對する態度を変える上で、与えた影響に重点を置いています。つまり、ギリシヤ語の語彙は、神の義憤を私たちのために「宥める」または「和らげる」ことで、キリストの働きをより重視しているのです。とはいえ、この二つの考え方は、表裏一体で本当は一つであると断言できます。それはギリシヤ語の語彙が、ヘブル語のその対応する語彙と直接的かつ意図的に結びついているからです。契約の箱の上部にある金でできた堅固な部分は、しばしば、そしていささか誤解を招く「慈愛の座」と訳されますが、ヘブル語では「カポレト」(これもכפרから来ています)と呼ばれ、ギリシヤ語では「ヒラステリオン」(ἱλ α σ τ ῆ ρ ι ο ν; [ローマ 3 章 25 節](#); [ヘブル 9 章 5 節](#); [出エジプト 25 章 17-22 節](#); [レビ記 16 章 13 節](#)(ギリシヤ語七十人訳)参照)と訳されています。これは贖罪の日に、民全体の「罪の償うため」に犠牲の血が注がれた所です([レビ記 16 章 34 節](#); [ヘブル 9 章 7 節](#))。契約の箱はキリストの予型であり、蓋のケルビムは父とその父のおられる所を表し([出エジプト 25 章 22 節](#)参照)、契約の箱の蓋の上の血(民の罪の表象が含まれていた:[ヘブル 9 章 4 節](#))を見下ろし、そのいけにえに満足されたのです¹²³。ヒラステリオン hilasterion という単語は、その形成がヘブル語のカポレト capporet と類似しており、どちらの単語も、場所を表す(つまり「_ の場所」)とみなせる名詞の接尾辞が付いています。しかし、ギリシヤ語の語根、ヒラ hila- (ἱλ α -)は身代金ではなく、喜びと関係があり、特に人に帰属する場合は、喜びに満ちていること、または喜ぶ気質を持っていることを意味します(英語の「ヒラリティ hilarity」を参照)。言い換えれば、ギリシヤ語では、(ヘブル語の用語の場合のように)キリストの血の支払いによって帳消しにされた罪に焦点を当てるのではなく、身代金の支払いによってもたらされた結果、つまり、私たちの罪に對する以前の敵意の代わりに、私たちが今、御父から享受している好ましい恩恵に焦点を当てています。言い換えれば、ヘブル語のプロピティション(償い)の語源(כפר)が「身代金」という手段に注目するのに対して、ギリシヤ語のプロピティションの語源(ἱλ α -)は「宥め」という結果に注目しています(身代金が受け入れられると認められる場合)。この意味は、新約聖書に登場するこの概念に関連するすべてのギリシヤ語の語彙において明らかです:

『神様、罪人のわたしに寛大に(文字通りには「喜んで」[ヒラステイテ - ἱλ α σ θ ῆ τ ι])、耳を傾けて下さい』(英語訳:ルカ 18 章 13 節後半)

(25)神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがない [ヒラステリオン - ἱλ α σ τ ῆ ρ ι ο ν] の供え物とされた。それは

¹²³ 幕屋、その備品、その儀式的類型については、「来たる艱難期」第2部B、「天上の序曲」および「サタン」の反逆」パートI、II.5.b「幕屋の図解」で詳しく説明されています。

神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、(26)それは、今の時に、神の義を示すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである。(ローマ 3 章 25-26 節)

各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで[ヒラロン - ἱλ α ρ ό ν]施す人を愛して下さるのである。(第二コリント 9 章 7 節)

そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な大祭司となって、民の罪をあがなう(字義どおりには、「なだめすかす;ヒラスケスタイ - ἱλ α σ κ ε σ θ α ι)ために、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。(ヘブル 2 章 17 節)

わたしは、彼らの不義をあわれみ(字義どおりには、「なごむ」[ヒレオス - ἱλ ε ω ς])、もはや、彼らの罪を思い出すことはしない」。(ヘブル 8 章 12 節)([エレミヤ 31 章 34 節](#)後半の引用と翻訳)

彼は、わたしたちの罪のための、[神の]あがない(宥め;ヒラスモス - ἱλ α σ μ ό ς)の供え物である。ただ、わたしたちの罪のためばかりではなく、全世界の罪のためである。(第一ヨハネ 2 章 2 節)

(9)神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。(10)わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物(字義どおりには[神の義憤に対する]「なだめ」[ヒラスモン - ἱλ α σ μ ό ν])として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。(第一ヨハネ 4 章 9-10 節)

罪は、墮落以来、人類を苦しめてきた問題です。しかし、イエスの血の身代わりによる償い(プロピティション)によって、御父の義憤は永遠になだめられ、鎮められました。キリストの償い(アトーンメント)のおかげで、罪はもはや私たちを捕らえることができなくなりました(主の御業を受け入れる私たちは「贖われた」のです;以下の題 7.を参照)。私たちの主が贖いをしてくださったので、私たちの罪はもはや私たちに対して記録されることはなく、死の宣告を無情にも要求することはありません(主を信じる私たちは「義とされた」のです;以下の題 8.を参照)。イエスの償い(エクスピエーション)の御業

のゆえに、罪に対する聖なる神の怒りは、もはや私たちを霊的な死において、神から引き離す打ち破れない障壁ではありません（イエスのもとに来た私たちは、神と「和解」したのです；以下の題 9.を参照）

イエスがどのようなお方であり、十字架上で私たちのために何をしてくださったのか、私たちの信じるすべてのものの中心であり、私たちの中心であり、神がこの世界で行ってこられたこと、そしてこれからも行われることのすべての中心なのです。救い主イエス・キリストの尊い血、すなわち、私たちの罪のために霊的に死んでくださった十字架上の御業は、創世記の呪いにきっぱりと終止符を打ち、御声を聞こうとするすべての人に、天国への扉を開いてくださいました。私たちが無力で絶望的な運命にあった間（罪のための完全ないけにえが、罪を完全に裁く方に完全な効果を及ぼさなければ、赦されることはないからです）、御父と御父の聖なる義は、今や御父の唯一の愛する御子の死によって満たされました。カルバリの十字架の祭壇の上で、御子がいけにえとして捧げられたこの代償のかおりは、御父に対する甘い香りとなり、御父によって受け入れられ、私たちに代わって御父をなだめることができるのです（[第二コリント 2 章 14-15 節](#)；[ヘブル 7 章 27 節](#)；[創世記 8 章 21 節](#)；[出エジプト 29 章 18 節](#), [29 章 25 節](#)；[レビ記 1 章 9 節](#), [1 章 13 節](#), [1 章 17 節](#)参照）。

また愛のうちに歩きなさい。キリストもあなたがたを愛して下さって、わたしたちのために、ご自身を、神へのかんばしいかおりのささげ物、また、いけにえとしてささげられたのである。（エペソ 5 章 2 節）

7. 贖い:

贖いとは、キリストが十字架上で私たちの命の代価を払ってくださった結果、私たちが罪の束縛から解放されたことを表す教義です。アダムの血筋に生まれた私たちの共通の結果として、すべての人間は霊的に死んで生まれ、罪の性質を持っています。贖いの教えから見ると、人類はこの罪によって束縛されており、キリストが私たちに代わって働いてくださらなければ、逃れることも自由を得ることもできないとあります。

イエスは彼らに答えられた、「よくよくあなたがたに言うておく。**すべて罪を犯す者は罪の奴隷である**。そして、奴隷はいつまでも家にいる者ではない。しかし、子はいつまでもいる。だから、もし子があなたがたに自由を得させるならば、あなたがたは、ほんとうに自由な者となるのである。（ヨハネ 8 章 34-36 節）

すると、どうなるのか。わたしたちには何かまざったところがあるのか。絶対にない。ユダヤ人もギリシヤ人も、ことごとく**罪の下にある**ことを、わたしたちはすでに指摘した。(ローマ 3 章 9 節)

わたしたちは、律法は霊的なものであると知っている。しかし、わたしは肉につける者であって、**罪の[束縛の]下に売られている**のである。(ローマ 7 章 14 節)

贖いはラテン語で「買い戻す」(re-emo)という意味です。¹²⁴ 旧約聖書では、この考えを表す二つの語根(パダハ、פדה とガアル、גאל)があり、どちらも文字どおりの買い戻しに用いられます(ただし、罪からの贖いという象徴が常に根底にあると主張することもできます:[出エジプト 6 章 6 節](#), [13 章 13 節](#); [申命記 7 章 8 節](#); [レビ記 27 章 13 節](#); [詩篇 49 篇 7-8 節](#)参照)、また、罪からの明確な贖いにも使われます。後者の場合、私たちが神の救出なしに囚われている束縛から、神が信者を解放してくださることを表現するのに使われ、ほとんど前者と区別がつかないほど同義です:

(7)イスラエルよ、主によって望みをいだけ。主には、いつくしみがあり、また豊かな**あがない**(パダハ)があるからです。(8)主はイスラエルをそのもろもろの不義(すなわち、罪)から**あがなわれ**(パダハ)ます。(詩篇 130 篇 7-8 節)

わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した。わたしに立ち返れ、わたしはあなたを(罪から)**あがなった**(ガアル)から。(イザヤ 44 章 22 節)

新約聖書では、私たちが罪から解放するために向けられたキリストの働きには、概念的に密接に関連した二つの表現があり、それらはギリシヤ語の語彙に反映されています: 1) [より一般的な]比喩的な**身代金を払って**、他の容赦のない力[語源:lytr-, λυτρ-]から私たちを**取り戻すこと**。(例えば:[マタイ 20 章 28 節](#); [ルカ 1 章 68-69 節](#), [2 章 38 節](#); [ヨハネ 8 章 31-38 節](#); [ローマ 3 章 24 節](#); [第一コリント 1 章 30 節](#); [第一テモテ 2 章 6 節](#); 参照:[使徒行伝 7 章 35 節](#))¹²⁵、そして、2)奴隷状態から私たちを

¹²⁴ 「d」は語呂合わせのために加えられたもので、語根の一部ではありません。

¹²⁵ ここで重要なのは、贖いと、ヘブル語の「償い」という語彙が意味する「身代金」との違いです。身代金は、第一義的には神と神の正義(文字通り)に対して支払われるものですが、新約聖書の贖いの教えにおいては、ここでは比喩的に罪に対して支払われるものです。

買い取る[語源:-agoraz-, ἀγοράζω-]こと(例えば、[第二ペテロ 2 章 1 節](#); [ガラテヤ 4 章 5 節](#))。この二つの考え方は明らかに非常に似ており、実際に使われているギリシヤ語の語源に関係なく、この概念に関わるすべての単語を同じように訳す聖書も珍しくありません(つまり、英語の「redeem(取り戻す)」や「redemption(贖罪)」のような形で訳されています)。

キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいから**あがない出して下さった**(すなわち、私たちを「贖った」:エグザゴランゾ)。聖書に、「木にかけられる者は、すべてののろわれる」([申命記 21 章 23 節](#))と書いてある。(ガラテヤ書 3 章 13 節)

わたしたちは、この御子によってあがない、すなわち、罪のゆるし(すなわち、「贖い」:アポリュトロシス)を受けているのである。(コロサイ 1 章 14 節)

これらすべての場合において、身代金や贖いの代価を支払う貨幣は「キリストの血」([ローマ 3 章 24 節](#); [ガラテヤ 4 章 5 節](#); [第一コリント 6 章 20 節](#), [7 章 23 節](#); [ヘブル 9 章 15 節](#); [黙示録 5 章 9 節](#)参照)、すなわち、私たちの罪の刑罰を支払い、償いを成し遂げたイエスの霊的な死です。

わたしたちは、御子にあって、神の豊かな恵みのゆえに、その(キリストの)**血によるあがない**<英文:身代金を払う>、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである。(エペソ 1 章 7 節)

したがって、キリストの血は、贖罪に関する詳細な議論から切り離すことはできません。私たちを罪から贖うのはキリストの血だからです([ヘブル 9 章 12 節](#)参照)。私たちは「奴隷」であり、死と罪の宣告を受け、地獄の業火に向かい、差し迫った肉体の死も、必然的に続く永遠の死も、誰かが介入しない限り、防ぐ方法も手段もありません。神は正義であり、罪を見過ごすことはできません。しかし、神は憐れみ深いお方でもあり、その大いなる憐れみによって、私たちが罪人であるにもかかわらず、救われる道をお考えになりました。神は、そのひとり子を罪深い肉の姿で世に遣わし、肉において罪が裁きを受けるようにされたのです。それは、私たちが救われるためです。([ローマ 8 章 1-4 節](#))。このようにして、イエスは御自身の血をもって、私たちの贖いの代価を支払われたのです。この支払いがなければ、私たちは道に迷い、原理的にすでに断罪され、自分で支払うすべのない代価で束縛されていました。父なる神の正義は、完全な身代わり、すなわち、しみも傷もない小羊、私たちの愛する主であり救い主であるイエス・キリストによってでしか、和らげることができなかったからです。しかし、幸いなことに御父

の正義は、イエスが私たちのために十字架で支払ってくださった罪の身代金の代価によって満たされていて、イエスに信仰を置く者は皆、贖われたのです。

(18)あなたがたのよく知っているとおり、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活から**あがない**出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、(19)きずも、しみもない小羊のような**キリストの尊い血によった**のである。(第一ペテロ 1 章 18-19 節)

上記の箇所やすべての贖いの箇所が示唆するように、代価は全人類のために支払われましたが(すなわち、贖罪と償いはすべての人に共通するものです。なぜなら、キリストの血はすべての人間の罪の代価として有効だからです)、実際の贖いという行為は、それを求める人のためだけに成し遂げられます。贖いは罪に向けられたものであり、罪は信仰によってのみ、その支配を解かれるからです。つまり、神はイエス・キリストによる無償の贖いの提供を、すべての人に与えておられますが、贖われるのは信者だけなのです。このことは、贖罪の箇所が信者に向けて書かれている理由だけでなく、この教義が教えられているいくつかの箇所が、贖罪の結果として得られる、イエス・キリストと信者との特別な関係を強調している理由も説明しています。(第一コリント 1 章 30 節; 第二ペテロ 2 章 1 節参照):

あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。**あなたがたは、[尊い]代価を払って買いとられたのだ。**それから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい。(第一コリント 6 章 19-20 節)(第一コリント 7 章 23 節参照)

彼らは新しい歌を歌って言った、「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、**その血によって**、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々を**あがない**、わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう」。(黙示録 5 章 9-10 節)(参照:[黙示録 14 章 3-4 節](#))

したがって、贖罪の教義が、キリストにあつて罪から霊的に解放された私たちの現在の立場に言及している一方で、キリストの花嫁の一員としての私たちの究極的な地位、私たちが今住んでいるこの罪の体からの復活による肉体的解放、そしてそれに伴う永遠の報いについても**また**、時折言及していることは驚くべきことではありません:

これらの事(25-27 節のしるしと不思議)が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。**あなたがたの救が近づいているのだから**」。(ルカ 21 章 28 節)

(23)それだけではなく、[来るべき良いことの前触れとして]御霊の最初の実を持っているわたしたち自身も、心の内でうめきながら、子たる身分を授けられること、すなわち、**からだのあがなわれること**(=復活)を待ち望んでいる。(24)わたしたちは、この望みによって救われているのである。しかし、目に見える望みは望みではない。なぜなら、現に見ている事を、どうして、なお望む人があろうか。(ローマ 8 章 23-24 節前半)

この聖霊は、わたしたちが神の国をつぐこと(すなわち、わたしたちの復活と報い)の保証であって、やがて神につける者が全く**あがなわれ**、(永遠において)神の栄光をほめたたえるに至るためである。(エペソ 1 章 14 節)

神の聖霊を悲しませてはいけない。あなたがたは、**[将来の]あがないの日**(すなわち、復活の日)のために、聖霊の証印を受けたのである。(エペソ 4 章 30 節)

要するに贖いの概念では、キリストにあって神は、私たちが罪によって捕らえられている咎、罰、もつれの下から、私たちを買い取ってくださるということです。贖いは、苦難のしもべであるキリストの御業です。キリストは、私たちの命と引き換えにご自分の命を捧げることによって、私たちを罪と死の束縛から解放し、その使命を果たされました。この恩恵は、それを信仰によって受け入れなければ有効ではありません。

人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人の**あがない**として、自分の命を与えるためである」。(マルコ 10 章 45 節)(参照: [マタイ 20 章 28 節](#))

わたしたちを愛し、**その血によってわたしたちを罪から解放**し、わたしたちを、その父なる神のために、御国の民とし、祭司として下さったかたに、世々限りなく栄光と権力とがあるように、アメン。(黙示録 1 章 5 後半-6 節)

8. 義認：

義認は、神の私達との今の関わり方を教えています。もはや、罪に染まり、罪に溺れる者としてではなく、キリストの血によって真に義とされ、罪から清められ、永遠の命を信じて、キリストに信仰を置いた者としてです。

主は、わたしたちの罪過のために(すなわち、私たちを罪から贖うために)死に渡され、わたしたちが義とされるために(すなわち、彼の死によって義とされた私たちもよみがえるために)、よみがえらされたのである。(ローマ 4 章 25 節)

このように義認とは、信仰によって義とされ、イエスの犠牲によって与えられた贖いに応え、イエスの復活を共に待ち望む、私たち信仰者のためのものでもあるのです。ローマ人への手紙 8 章において、「義認」とは、キリストの血によって神のもとに戻ることを選び、キリストが与えてくださった贖いを受け入れるという私たちの決断が正当化される、個々の信仰者に対する、神の救いの計画における決断のステップのことです。

(28)神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。(29)神はあらかじめ知っておられる者たちを、更に御子のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ定めて下さった。それは、御子を多くの兄弟(姉妹)の中で長子とならせるためであった。(30)そして、あらかじめ定めた者たちを更に[救いに]召し、召した者たちを更に(キリストを信じる信仰によって:[ローマ 4 章 1-5 節](#), [4 章 25 節](#), [5 章 1 節](#)参照)義とし、義とした者たちには、更に(私たちの将来の復活と永遠のいのちの)栄光を与えて下さったのである。(ローマ 8 章 28-30 節)

義認の教理は、私たちが今持っている義、つまり、私たちがイエス・キリストと結ばれていることによって、私たち自身の偽りの汚れた義ではなく、私たちのためのイエスの贖いの御業を受け入れることによって、私たちが罪のすべての汚れから洗われたことによって、私たちに与えられる神ご自身の完全な義を、位置的に表現しています。

(23)すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、(24)彼らは、価なしに、神の恵みにより、**キリスト・イエスによるあがないによって**(字義どおりには:罪から「買い戻されて」)**義とされる**のである。(25)神はこのキリストを立てて、その血による[達成によって]、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。

すなわち、今までに犯された[すべての]罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが、(26)それは、今の時に、神の義を示すためであった。こうして、[この点において]神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである。(ローマ 3 章 23-26 節)

これらの聖句が示すように、すべての罪がキリストの犠牲によって贖われたからこそ、私たちがイエスを信じ、神と一体となった時、神は私たちを「義」と正当に宣告されることのできるのです。信じる私たちは、神の責め苦の下にいたるのではなく、キリストの御業を受け入れ、キリストと一つになることによって、神の目から見て「義とされ」、義とみなされるのです。

(1)こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない。(2)なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。(3)律法が[罪深い人間の]肉により[かかって]無力になっているためになし得なかった事(罪の問題を解決すること)を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の様で罪の[償いの]ためにつかわし、[神は]肉において[すべての]罪を[キリストにおいて]罰せられたのである。(4)これは律法[による完全な義]の要求が、[罪深い]肉によらず霊によって歩くわたしたち(すなわち、信者)において、満たされるためである。(ローマ 8 章 1-4 節)

この聖句の最後の節が示しているように、義認はまた、私たちが原理的に(すなわち、「位置的に」、つまり、「キリストのうちにいる」ことによって)今持っている完全な者としての立場にしたがって生きること、敬神的なクリスチャンとしての道を歩むこと([ローマ 8 章 4 節](#), [6 章 4 節](#), [6 章 13-20 節](#); [エペソ 5 章 8 節](#); [第一ヨハネ 2 章 6 節](#)を参照)、過ちを犯したときに、罪を告白して私たちの「義の」立場に伴う赦された者としての生き方をすること([第一ヨハネ 1 章 9 節](#); 参照 [ゼカリヤ 3 章 3-4 節](#); [第一ヨハネ 1 章 7 節](#); [黙示録 3 章 18 節](#)参照)、私たちの主への愛に満ちた応答によって、「義の実」を实らせることを([ピリピ 1 章 11 節](#); [ローマ 7 章 4 節](#); [エペソ 5 章 9 節](#); [コロサイ 1 章 10 節](#); [ヤコブ 3 章 17 節](#)参照)を、私たちに求めています。義認がなければ、「神のために」なされたと言われるすべてのことは、実際には罪に汚されており、それゆえ、神には全く受け入れられないのですが、私たちは今、イエス・キリストの義を分かち合うことによって、罪からきよめられ、許され、義とされたのです。そして今、主に受け入れられる、クリスチャンの務めの良いわざを生み出す自由があるのです([エペソ 2 章 10 節](#))。

このキリストが、わたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたし

たちをすべての不法(すなわち罪;[第一ヨハネ 3 章 4 節](#)参照)からあがない出して、**良いわざに熱心な**選びの民を、ご自身のものとして**聖別**するためにほかならない。(テトス 2 章 14 節)

このように義認とは、信じるすべての人に対する赦しの宣告です。神は私たちが以前は汚れていたにもかかわらず、今は私たちが「白い衣を着て」(私たちが最終的にいつもそうであるように:[黙示録 3 章 4-5 節](#), [4 章 4 節](#), [6 章 11 節](#), [19 章 14 節](#))、小羊の血によってきよめられたのを見ておられます([黙示録 7 章 14 節](#); 未信者とは対照的に:[マタイ 22 章 11-14 節](#))。

主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう(つまり、あなたを吟味して裁こう)。たといあなたがたの罪は緋のようであっても、**雪のように白くなる**のだ。紅のように赤くても、**羊の毛のようになる**のだ。(イザヤ 1 章 18 節)

王は客を迎えようとしてはいつてきたが、そこに礼服をつけていない(すなわち、キリストを信じる信仰によって得られる義をまもっていない)ひとりの人を見て、彼に言った、『友よ、どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいつてきたのですか』。しかし、彼は黙っていた。そこで、王はそばの者たちに言った、『この者の手足をしばって、外の暗やみにほうり出せ。そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』。招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない」。(マタイ 22 章 11-14 節)

(13)長老たちのひとりが、わたしにむかって言った、「この白い衣を身にまもっている人々は、だれか。また、どこからきたのか」。(14)わたしは彼に答えた、「わたしの主よ、それはあなたがご存じです」。すると、彼はわたしに言った、「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を**小羊の血で洗い、それを白くした**のである」。(黙示録 7 章 13-14 節)

私たちは生まれながらにして基本的に不義であり、罪によって死を宣告され、神から疎外されており、自らを清める手段を持っていませんでしたが、御自身の死によって私たちが罪から解放して下さったイエス・キリストを信じることによって、私たちは今、私たち自身の本質的な不義の代わりに、神の義を受けて「信仰によって義と認められた」のです([ローマ 1 章 17 節](#), [3 章 22-24 節](#), [3 章 28 節](#), [4 章 1-25 節](#), [5 章 1 節](#), [5 章 9 節](#), [5 章 16-21 節](#), [8 章 30 節](#), [9 章 30 節](#), [10 章 4-6 節](#); [第一コリント 1 章 30 節](#), [6 章 11 節](#); [第二コリント 5 章 21 節](#); [ガラテヤ 2 章 16 節](#), [3 章 24 節](#); [テトス 3 章 7 節](#))。私達の上に差し迫った死の宣告は打ち消されました。なぜなら、死の刑罰は、私たちの主

というお方に対してすでに執行され、私たちは主の死を、私たちの身代わりとして感謝して受け入れたからです。御父の義は、私たちに代わって御子が死刑を宣告されたことで完全に満たされたので、御父は私たちを義と認め、「私たちが行った義のわざ」([テトス 3 章 5 節](#))によってではなく、私たちのために罪となられた義なるお方への信仰によって義とされたのです。

(3)わたしたちも以前には、無分別で、不従順な、[むだに]迷っていた者であって、さまざまな情欲と快樂との奴隷になり、悪意とねたみとで日を過ごし、人に憎まれ、互に憎み合っていた。(4)ところが、[以前のわたしたちの罪深さにかかわらず]わたしたちの救主なる神の慈悲と博愛とが[肉において]現れたとき、(5)わたしたちの行った[いわゆる]義の[どんな]わざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて、わたしたちは救われたのである。(6)この聖霊は、わたしたちの救主イエス・キリストをとおして、わたしたちの上に豊かに注がれた。(7)これは、わたしたちが、キリストの恵みによって**義とされ**、永遠のいのちを望むことによって、御国をつぐ者となるためである。

(テトス 3 章 3-7 節)

ですから、償いがイエス・キリストによる私たちの罪のための支払いを表わし、贖いがキリストの死によって私たちに対する罪の束縛を断ち切られたことを表し、義認は私たちが罪からきよめられ、神の目から見えてきよくなったことを表しているのです。私たちの身代わりとなってキリストが死んでくださり、私たちがそれを受け入れることによって、私たちは神の正義の裁きにおいて義とみなされたのです。

(9)それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか。まちがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、(10)貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである。(11)あなたがたの中には、以前は[まさに]そんな人もいた。しかし、**あなたがたは**、主イエス・キリストの名によって、またわたしたちの神の霊によって、**[きれいに]洗われ**、きよめられ、**義とされた**のである。(第一コリント 6 章 9-11 節)

この「罪からのきよめ」という義認の側面は、キリストの犠牲のゆえに、私たちに対するすべての罪状が取り除かれるというもので、聖書のいたるところに見られます(例えば、[イザヤ 43 章 25 節](#); [第一コリント 6 章 11 節](#); [コロサイ 2 章 14 節](#); [第一ペテロ 1 章 2 節](#); [ヘブル 9 章 13-21 節](#); [ヘブル 12 章 24 節](#))。これは「ヨハネのバプテスマ」として

知られる水のバプテスマにおける主要なメッセージであり、神に立ち返る真の悔い改めによって罪を洗い流す象徴的なものでした([使徒行伝 19 章 4 節](#); [使徒行伝 1 章 5 節](#), [11 章 16 節](#)参照)。十字架の後、神がこれからなさることに基づく象徴的なきよめだけでなく、私たちは今、神が既にキリストにおいて私たちの罪をさばき、キリストの血のきよめの力に基づいて私たちを赦してくださった結果として、私たちは今、本物のきよめと赦しを得ているのです。

(1)神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、(2)この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界を造られた。(3)御子は[御父の]神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿であって、その力ある言葉をもって万物を保っておられる。そして**罪のきよめのわざをなし終えて**から、いと高き所にいます大能者の右に、座につかれたのである。(ヘブル 1 章 1-3 節)

(19)兄弟たちよ。こういうわけで、わたしたちはイエスの血によって、はばかりことなく[天の]聖所にはいることができ、(20)彼の肉体([ヘブル 10 章 10 節](#)参照)なる[天的隔ての]幕をとおり、[その犠牲によって]わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとおって、[祈るために恵みの御座に([ヘブル 4 章 16 節](#)参照)]はいって行くことができるのであり、(21)さらに、神の家を治める[この]大いなる祭司があるのだから、(22)**心はすすがれて良心のとがめを去り、からだは清い**[御言葉の([エペソ 5 章 26 節](#)参照)]**水で洗われ**、まごころをもって信仰の確信に満たされつつ、みまえに近づこうではないか。(ヘブル 10 章 19-22 節)

これは、神が私たちと「犠牲によって」([詩篇 50 篇 5 節](#))結ばれた「新しい契約」なのです。イエスが私たちのために死んでくださったこと(私たちがその業とそれに伴う赦しを受け入れるとき)によって、私たちを赦し、義とみなされるのです。

(12)わたしは、彼らの不義をあわれみ、もはや、彼らの罪を思い出すことはしない([エレミヤ 31 章 34 節](#))」。(13)神は、「新しい[契約]」と言われたことによって、初めの契約を古いとされたのである。年を経て古びたものは、やがて消えていく。(ヘブル 8 章 12-13 節)

要するに、義認とは、私たちが何をしたかに基づくのではなく、私たちに代わってキリストが成し遂げてくださったことに基づいて、神の視点からすれば、私達は神の義を

持つことを意味します。イエス・キリストを信じた時、私たちは義と認められ、イエス・キリストと一体となった者として義とみなされるのです。義認は、私たちがイエス・キリストを通して神のもとに行こうとすると、最初に求め、受ける祝福された恩恵です。私たちが神の正義によって義とみなされれば、イエスを通して天国のすべての祝福への扉が開かれるからです。

まず神の国と**神の義**とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。(マタイ 6 章 33 節)

(7)しかし、わたしにとって[以前の神のない生活において]益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。(8)わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失ったが、それらのもの[わたしが失ったすべてのもの]を、ふん土のように思っている。それは、わたしがキリストを得るためであり、(9)[モーセの]律法に[従うことによる]よる自分の義ではなく、**キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになる**ためである。(ピリピ 3 章 7-9 節)

9. 和解：

聖書の和解の教えは、救われることを神との関係の回復とみなしています。私たちは皆、「アダムにあって」霊的に死んで生まれてくるので、つまり、私たちは皆、肉体的な誕生によって罪の性質を持っているので、私たちが本来持っている罪深さに従って確実に罪を犯してしまうので、私たちは皆、私たちの霊の父である神([ヘブル 12 章 9 節](#))から引き離されて([コロサイ 1 章 21 節](#))生まれてくるのです。しかし、放蕩息子の父親が彼を心から愛し、彼が帰ってきたときに大喜びしたように([ルカ 15 章 11-32 節](#))、私たちの天の父も、私たちの理解を超えて私たちを愛しておられます。そして、私たちが主のもとに戻り、主の真の息子と娘のために用意された恵みと祝福に再びあずかることができるように、私たちのために最善を尽くしてくださったのです。私たちが神と和解するためには、私たちがこの世から離れ、へりくだって悔い改め、信仰を持って神のもとに戻ることを望まなければならないだけでなく、神はまず、罪の問題を解決しなければなりません。つまり、私たちが神と和解するのに**適した者**となる前に、私たちが義とされ、神に受け入れられるための手段が、提供されなければならなかったのです(すなわち、和解の前に義とされなければなりません)。

神は、わたしたちを責めて不利におとしいれる証書(すなわち、私たちの

個人的な罪の記録)を、その規定もろともぬり消し、これを取り除いて、十字架につけてしまわれた。(コロサイ 2 章 14 節)

この教えでは、罪はいわば障壁を形成し¹²⁶、神聖な神と私たちを隔てるものとなります。それは敵意と迫り来る怒りの壁であり、私たちの罪を完全に正しく裁くことによってのみ、取り除くことができます。

(14) **キリストはわたしたちの平和**であって、[ユダヤ人と異邦人の]二つのものを一つにし、**敵意**という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、(15)数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて[この]**平和をきたらせ**、(16)十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と**和解させ**、[神と人間との間の]**敵意**を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。(17)それから彼は、こられた上で(すなわち、初降臨のとき)、[神から]遠く離れているあなたがたに**平和を宣べ伝え**、また近くにいる者たちにも**平和を宣べ伝え**られたのである。(18)というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中であって、父のみもとに**近づく**ことができるからである。(エペソ 2 章 14-18 節)

このように父との和解の前提条件は、イエス・キリストの体において、言葉では言い尽くせないほどの祝福である、世界の罪に対する十分かつ完全に効力のある裁きによって、遂行されました。敵意と迫り来る怒りの壁を取り払い、恵みと平和の扉を開いたのは、私たちの救い主の血潮です。

(8)しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。(9)わたしたちは、キリストの血によって今は義とされているのだから、なおさら、彼によって[近づいている]神の**怒り**から救われるであろう。(10)もし、わたしたちが敵であった時でさえ、御子の死によって**神との和解を受けた**とすれば、**和解を受けている**今は、なおさら、彼のいのちによって救われるであろう。(11)そればかりではなく、わたしたちは、今や**和解**[をとおしての新しい関係]を得させて下さったわたしたちの主イエス・キリストによって、神を喜ぶのである。(ローマ 5 章 8-11 節)

¹²⁶ R.B. Thieme Jr. 著『The Barrier』(ヒューストン、1977 年)を参照。

和解の象徴においてイエスは、私たちの抱えている負債を支払うために、ご自身が死なれることによって、私たちに神との平和をもたらしました。そうすることによって、私たちは生まれながらにして神の敵であった存在から、神の家族の一員へと変えられ、私たちを創造された愛に満ちた父の寵愛の下に戻ることでできた息子や娘となったのです。

(19)神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、
(20)そして、その十字架の血によって**平和**をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と**和解**させて下さったのである。(21)あなたがたも、かつては悪い行いをして**神から離れ**、心の中で神に敵対していた。(22)しかし今では、御子はその肉のからだにより、その死をとおして、あなたがたを神と**和解**させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである。(23)ただし、あなたがたは、ゆるぐことがなく、しっかりと信仰にふみとどまり、すでに聞いている福音の望みから移り行くことのないようにすべきである[そうすれば-あなたがたはそのようになる]。この福音は、天の下にあるすべての造られたものに対して宣べ伝えられたものであって、それにこのパウロが奉仕しているのである。(コロサイ 1 章 19-23 節)

私たちは生まれながら罪人であり、かつては神の敵でしたが、イエス・キリストの血と、十字架上で私たちのために払われた犠牲を信じる信仰によって、神と和解しました。その結果、かつて私たちが恐れていた神の怒りは、今私達が保持している義認への確信に変わりました。今は、神との敵対関係に代わり、神ご自身に近づくことができ、
([ローマ 5 章 1-2 節](#); [エペソ 2 章 18 節](#), [3 章 12 節](#); [ヘブル 4 章 16 節](#); [第一ペテロ 3 章 18 節](#)) 御子のとりなしによって父なる神との平和を得ています。

(1)このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して**平和**を得ている。(2)わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって**導き入れ**られ、そして、神の栄光にあずかる希望(すなわち、復活の期待)をもって喜んでいる。(ローマ 5 章 1-2 節)

父なる神ご自身が、この和解のプロセスを開始されました。神は、ご自身がなし得る最大の犠牲を払って、迷える羊たちをすべてご自身のもとに引き戻そうと努力され、また、戻ってきた私たちに、福音を、かつて私たちを隔てていた怒りと敵意の障壁をキリストが取り除かれたので、イエス・キリストの賜物を受け入れ、キリストと和解する意思さ

えあれば、過去の罪に対する怒りの代わりに、神は私たちを愛をもって受け入れてくださるという、福音を広める力を与えてくださいました。

(18)しかし、すべてこれらの事は、神から出ている。神はキリストによって、**わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務をわたしたちに授けて下さった。**(19)すなわち、神はキリストにおいて世をご自分に**和解**させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、わたしたちに**和解**の福音(字義どおりには、「言葉」)をゆだねられたのである。(20)神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代って願う、神の**和解を受けなさい。**(第二コリント 5 章 18-20 節)

御子はまた、私たちと同じような真正の人間になられたという文脈の中で、和解の代理人であるとも言われています。さらに、和解を達成するために、次の節で暗示されているように、人間性を引き継ぐことが必要でした(私たちの罪のために死ぬために、神は人間にならなければならなかったからです)。

(5)しかし[実際には]彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義(字義どおりには、「罪過(複数)」)のために砕かれたのだ。彼はみずから[要求された]懲しめをうけて、**われわれに[神との]平安を与え、**その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。(イザヤ 53 章 5 節)

(14)このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているのです、イエスもまた同様に、それら[同じ要素]をそなえておられる(すなわち、処女から生まれ、罪を犯さなかったというだけではなく)。それは、死の力を持つ者、すなわち悪魔を、ご自分の死によって滅ぼし、(15)死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた者たちを、解き放つ[ご自身と**和解**させる]ためである。(ヘブル 2 章 14-15 節)

イエスは神と人類の仲介者です。なぜなら、彼だけがそうである資格があるからです。イエスは真の神であり、常にそうであっただけでなく、受肉以来、真の人間でもあります。そのため、両者を代表し、和解を実現することができるのです。主はこの和解を私たちに申し出、それを受け入れた私たちは主の申し出を世に宣べ伝えますが([第二コリント 5 章 18-20 節](#))、これが可能なのは、被害者の立場にある神が、私達が御父へ戻るためにイエスの自ら支払った身代金によって、具体的には私達の罪を十字架で負い、私達に代わって死に、その罰をすべて支払ってくださったことによって、完全になだめら

れたからです。

神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。神は唯一であり、神と人との間の**仲保者**もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。彼は、すべての人の**あがない**としてご自身を**ささげられた**…（第一テモテ 2 章 4-6 節前半）

これが、主が言われたように、私たちが神との回復された永遠の交わりの新しい契約、「わたしの血によって」（[ルカ 22 章 20 節](#)；[第一コリント 11 章 25 節](#)）に入る方法であり、すなわち、主が言われたように、私たちの身代わりとなられたイエスの死を基とした信仰によって、父と和解することです。

(11)しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司として[天に]こられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、(12)かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血(すなわち、主の霊的な死)によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠のあがないを全うされたのである。(13)もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、(14)永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないうでであろうか。(15)それだから、キリストは**新しい契約の仲保者**なのである。それは、彼が初めの契約のもとで犯した罪過をあがなうために死なれた結果、召された者たちが、約束された永遠の国を受け継ぐためにほかならない。（ヘブル 9 章 11-15 節）（参照：[ヘブル 12 章 24 節](#)）

10. 救いをもたらしたキリストの御業の要約：

人類は無力で希望もなく、永遠の断罪に直面していました。しかし、「私たちの救い主である神の善と慈愛が[肉において]現れた」（[テトスへ 3 章 4 節](#)）とき、すなわち、「神の恵み」を体現したイエスが「すべての人類に救いをもたらした」とき、人類は希望を取り戻したのです（[テトス 2 章 11 節](#)；[ヘブル 9 章 26 節](#)；[第一ヨハネ 1 章 2 節](#)；[3 章 5 節](#) 参照）。私たちがまだ罪人であったとき、キリストは私たちのために死んでくださったのです」（[ローマ 5 章 8 節](#)）。あなたと私、そしてすべての人々のために、これまでに犯された、あるいはこれから犯されるあらゆる罪のために、十字架上で死なれたのです。罪を贖うイエス・キリストの御業は、聖書の中で「キリストの血」と呼ばれています。この言葉は、私たちの主の文字どおりの血を指しているではありません。なぜなら、主は実

際に血を流して死なれたのではなく、救いの御業が成し遂げられた後、自らの意志で霊を捨てられて、「今、成し遂げられた！」と宣言されたからです([ヨハネ 19 章 30 節](#))。くしたがってキリストの血とは、私たちの罪のために死なれた十字架上の御業、つまり霊的な死のことです。イエスは、私たちの身代わりとなって裁かれ、私たちの身代わりとなって死刑を宣告され、カルバリの暗闇の中で、私たちのすべての罪のために刑罰を受け、そのすべてをご自分のからだをもって木の上で負われたのです。これは、謙遜と悔い改めによって、私たちに代わってなされたイエスの身代わりの死を、ありがたく信仰によって受け入れた私たち、今イエスを「主」と呼ぶ私たちのためだけでなく、イエスを拒んだ人々のためにも死なれたのであり、贖いは全人類のための普遍的なものです。

キリストの血は、イエスが十字架上でこの世のすべての罪のために死なれ、刑罰を支払われた霊的な死のことであり、罪が贖われるという父の義の要求を満たすために、完全に効果のあるものであったと宣言されています([エペソ 5 章 2 節](#); [マタイ 3 章 17 節](#), [17 章 5 節](#); [マルコ 1 章 11 節](#); [ルカ 3 章 22 節](#); [第二ペテロ 1 章 17 節](#)参照)。救いにおいてのキリストの血のこの側面を**償い**と呼びます。

(25) **神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがない**(または、償い; 字義どおりには「宥め」)の供え物とされた…(ローマ 3 章 25 節前半)

神の正義の要求を満たしたキリストの血は、罪深い人類を罪の束縛から救い出す償いとしての役割を果たし、私たちが行ったすべてのことに対する刑罰の全代価を支払うことによって、私たちを罪の奴隷状態から救い出してくださるのです; 救いのためのキリストの血のこの側面を、**贖い**(あがない)と呼びます。

わたしたちは、御子(すなわち、キリスト)にあって、神の豊かな恵みのゆえに、**その血による**[罪からの**買い戻し**、すなわち]あがない、すなわち、罪過のゆるしを受けたのである。(エペソ 1 章 7 節)

(18)あなたがたのよく知っているとおりに、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活から**あがない出された**のは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、(19)きずも、しみもない小羊のような**キリストの尊い血によった**のである。(第一ペテロ 1 章 18-19 節)

罪の束縛から贖われ、罪の支配下から買い取られ、信仰によって獄舎から出て行く

私たちは、キリストの血によって清く洗われ、自分の義の代わりにキリストの義を受けるので、神の義によって罪のない者とみなされます；私たちは、救いにおけるキリストの血のこの側面を、**義認**と呼びます。

わたしたちは、**キリストの血によって今は義とされているのだから**、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう。(ローマ 5 章 9 節)

今、罪の汚れを洗い清められ、信仰によって義とされた者として([ローマ 3 章 28 節](#), [4 章 1 節](#), [5 章 1 節](#); [ガラテヤ 2 章 16 節](#), [3 章 11 節](#), [3 章 24 節](#))、私たちは、私たちの仲介者、その血によって私たちを救ってくださった方、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストによって、神の前に差し出され、私たちの愛する父の御前に再び導かれるのにふさわしいのです；私たちは、救いにおけるキリストの血のこの側面を、**和解**と呼びます。

これは彼が死にいたるまで、自分の魂をそそぎだし、とがある者と共に数えられたからである。しかも彼は多くの人の罪を負い、とがある者のために[身代わりとなった、すなわち、]とりなしをした。(イザヤ 53 章 12 節後半)

(19)神は、＜喜びのうちに＞御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、(20)そして、その**十字架の血によって平和をつくり**、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである。(コロサイ 1 章 19-20 節)

イエスは私たちの**大祭司**であり、神の**償い**であり、ご自分の血によって全人類のために贖う手段となってくださいました。

そこで、イエスは、神のみまえにあわれみ深い忠実な**大祭司**となって、民の罪を**あがなう**＜英文: 償う＞ために(すなわち、ご自分の犠牲によって)、あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった。(ヘブル 2 章 17 節)

イエスは私たちの**贖い主**であり、ご自分の血によって、罪からの解放と、それを受けようとするすべての人の**贖い**を買い取られました。

主は言われる、「主は、**あがなう者**としてシオンにきたり、ヤコブのうちの、**とがを離れる者**＜英文: 自分の罪を悔い改める者＞に至る」と。(イザヤ 59 章

20 節)

彼らは新しい歌を歌って言った、「あなたこそは、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしいかたであります。あなたはほふられ、**その血によって**、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々を**あがない**、わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう」。(黙示録 5 章 9-10 節)(参照:[黙示録 14 章 3-4 節](#))

イエスは私たちの**救い主**であり、御自分の血にある**義**によって、私たちを罰から救い出してくださいました。

義なるわがしもべはその知識によって、多くの人<英文:大いなる[心の]人達>(すなわち、信者)>を**義とし**、また**彼らの不義**(字義どおりには、「罪」(複数))**を負う**。(イザヤ 53 章 11 節後半)

わたしたちは、**キリストの血によって今は義とされている**のだから、なおさら、彼によって[来たらんとする裁きの]神の怒りから救われるであろう。(ローマ人 5 章 9 節)

イエスは私たちの**仲介者**であり、私たちを神と**和解**させ、ご自身を信じるすべての人を、永遠の相続と復活という私たちの希望を待ち望む、いと高き神の息子や娘とされました。

しかしキリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によって、一度だけ聖所にはいられ、それによって永遠の**あがない**を全うされたのである。もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生ける神に仕える者としないうであろうか。それだから、キリストは新しい契約の**仲保者**なのである。それは、彼が初めの契約のもとで犯した罪過を**あがなう**ために**死なれた結果**、召された者たちが、約束された永遠の国を受け継ぐためにほかならない。(ヘブル 9 章 11-15 節)(参照:[ヘブル 12 章 24 節](#))

私たちの神は、本質的に善であり、愛に満ち溢れる神です。

この愛は、私たちを贖うという大きな恵みとして現れています。

私たちの神は、本質的に聖であり、正義に満ち溢れる神です。

この正義は、私たちを義とするという大きな慈悲として現れています。

私たちの神は、本質的に真実であり、命に満ち溢れる神です。

この命は、私たちを和解させるという神の大いなる平安として現れています。

なぜなら、私たちの神は、唯一の愛する御子を私たちのために死なせることで、神のご性質のすべての側面において御子の血潮によって私たちの罪を洗い流し、なだめられたからです。

それゆえ、私たちは奴隷ではなく、贖われ、信仰によって神に従う自由を得ました。

また、私たちは有罪宣告ではなく、義とされ、主の血によって洗い清められました。

そして、遠ざけられるのではなく、和解を得、神の子とされました。

主イエス・キリストをたたえましょう。主は私たちを愛し、この永遠の命を私たちに与えるために死んでくださいました。

結論： というのも、イエス様御自身が真理の御言葉であり([ヨハネ 1 章 1-5 節](#), [1 章 14 節](#); [第一ヨハネ 1 章 1-3 節](#); [黙示録 19 章 13 節](#))、聖書の全ての真理は、イエス様と複雑かつ表裏一体の関係にあるからです。

イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う。
(ヨハネ 21 章 25 節)

私たちの大祭司であり、贖い主であり、救い主であり、仲介者であるイエスが与えてくださった「大いなる救い」([ヘブル 2 章 3 節](#))以上に、イエスは私たちの造り主であり、模範であり、導き手であり、友であり、主であり、神です。主は私たちのすべてです¹²⁷。主こそ私たちがどんなものにもまして、愛する方です。なぜなら、主は最初に私たちを

¹²⁷ この救済の大きな利点とその仕組みについては、このシリーズの次の回、第 4 部 B「救済論：聖書における救済の研究」で取り上げます。

愛し、私たちに代わって御自身を死に渡されたからです。

「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。(第二コリント 4 章 6 節)

-- 「聖書の基本第 4 部 A 終わり」 --